

みんなのポジトリ

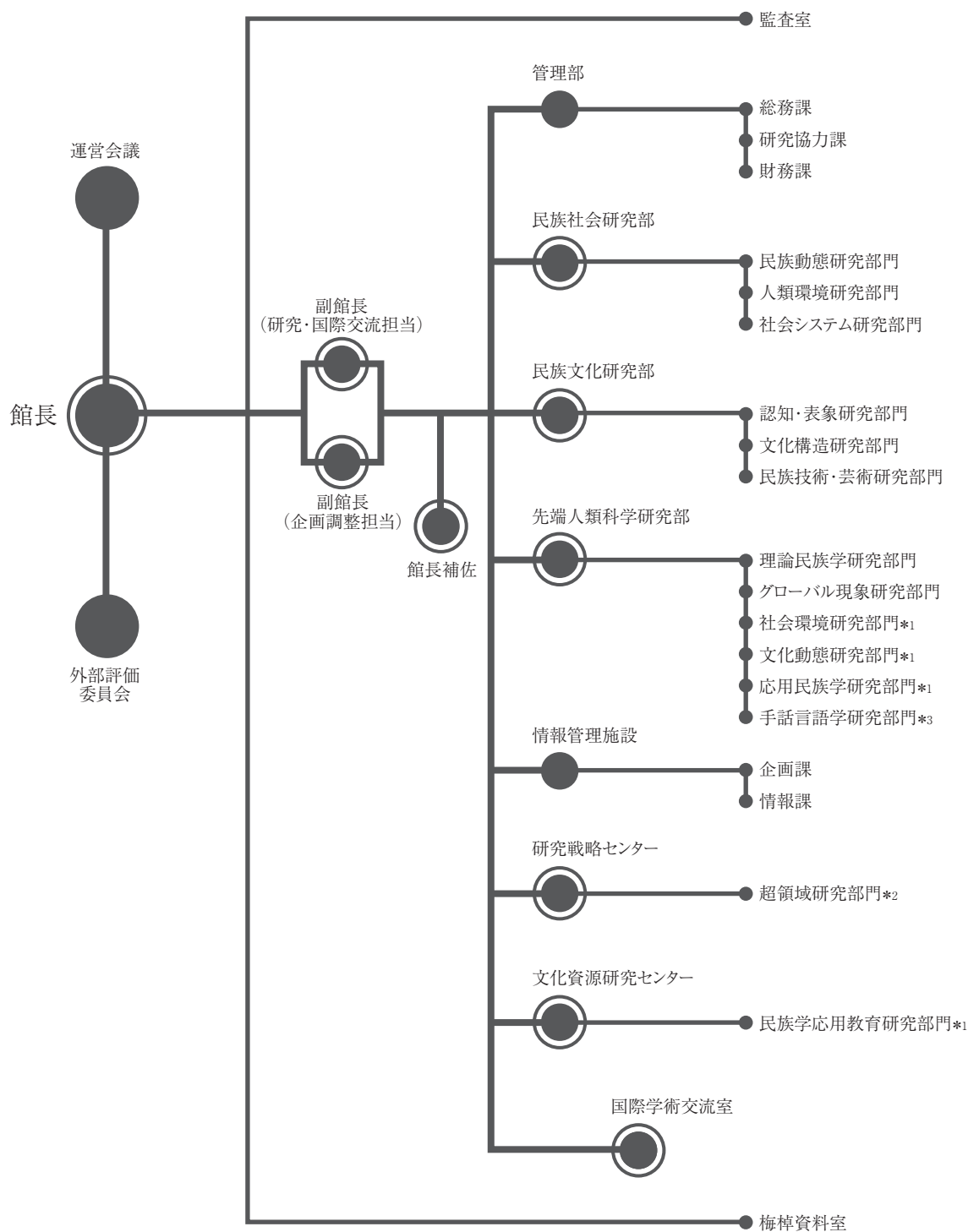
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

1.組織

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009012

1 組織

組織構成図 (2017年3月31日現在)



注) *1 客員研究部門
 *2 外国人客員研究部門
 *3 附置研究部門

運営組織 (2017年3月31日現在)

●運営会議

窪田幸子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授 *1
栗田博之	東京外国語大学総合国際学研究院教授 *2
栗本英世	大阪大学大学院人間科学研究科長*1 大阪大学人間科学部長
佐野千絵	東京文化財研究所文化財情報資料部長 *3
富沢寿勇	静岡県立大学国際関係学部教授*1
松田 凡	京都文教大学総合社会学部教授*3
松田素二	京都大学大学院文学研究科教授*2
山梨俊夫	国立国際美術館長
渡邊欣雄	國學院大學文学部教授*2
(館内)	
池谷和信	民族文化研究部長*1*2*3
鈴木七美	研究戦略センター長*1*2*3
關 雄二	先端人類科学研究部長*1*2*3
園田直子	民族社会研究部長*1*2*3
西尾哲夫	副館長(研究・国際交流担当)*1*2*3
野林厚志	文化資源研究センター長*1*2*3
横山廣子	総合研究大学院大学文化学研究科地域 文化学専攻長 民族社会研究部教授*1
吉田憲司	副館長(企画調整担当)*1*2*3 注)*1 人事委員会委員 *2 共同利用委員会委員 *3 研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達 淳	国立情報学研究所副所長
北野尚宏	独立行政法人国際協力機構 JICA 研究 所長
八村廣三郎	立命館大学情報理工学部特任教授
廣富靖以	公益財団法人りそなアジア・オセアニア 財団理事長
堀井良殷	公益財団法人関西・大阪21世紀協会理 事長
水沢 勉	神奈川県立近代美術館長
山極壽一	京都大学総長
山下晋司	帝京平成大学現代ライフ学部教授 東京大学名誉教授
山本真鳥	法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2017年3月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会	「人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト」
開館四十周年記念事業推進委員会	地域研究推進事業国立民族学博物館拠点運営委員会
福利厚生委員会	大学院委員会
安全衛生委員会	図書委員会
ハラスメント防止委員会	情報システム委員会(休止)
広報企画会議	情報運営会議
機関研究運営会議	文化資源運営会議
刊行物審査委員会	国際研修博物館学コース運営委員会
研究出版委員会	施設マネジメント委員会
知的財産委員会	危機管理委員会
科学研究費補助金管理体制検討委員会	大規模災害復興支援委員会
	フォーラム型情報ミュージアム委員会

現員 (2017年3月31日現在)

区 分	館長	教授	准教授	助教	事務職員・技術職員	計
館長	1					1
管理部					29	29
情報管理施設					19	19
監査室					1	1
研究部		15	17(1)	1(1)		33(2)
研究戦略センター		4	4	0		8
文化資源研究センター		3	6	2		11
客員 (国内)		11	6			17
客員 (国外) *		8	3			11
計	1	41	36(1)	3(1)	49	130(2)

注) () は特任研究員の人数を外数で示す

注) 客員 (国外) * は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2017年3月31日現在)

●歴代館長

初 代／梅棹忠夫 (故人) 1974年 6 月～1993年 3 月
 第 2 代／佐々木高明 (故人) 1993年 4 月～1997年 3 月
 第 3 代／石毛直道 1997年 4 月～2003年 3 月
 第 4 代／松園萬亀雄 2003年 4 月～2009年 3 月
 第 5 代／須藤健一 2009年 4 月～2017年 3 月

●名誉教授

祖父江孝男 (故人) 1984年 4 月 1 日	栗田靖之	2003年 4 月 1 日
岩田慶治 (故人) 1985年 4 月 1 日	杉田繁治	2003年 4 月 1 日
加藤九祚 (故人) 1986年 4 月 1 日	熊倉功夫	2004年 4 月 1 日
伊藤幹治 (故人) 1988年 4 月 1 日	立川武藏	2004年 4 月 1 日
中村俊亀智 (故人) 1988年 4 月 1 日	田邊繁治	2004年 4 月 1 日
君島久子 1989年 4 月 1 日	藤井龍彦	2004年 4 月 1 日
和田祐一 (故人) 1990年 4 月 1 日	山田睦男 (故人)	2004年 4 月 1 日
垂水 稔 (故人) 1991年 4 月 1 日	江口一久 (故人)	2005年 4 月 1 日
杉本尚次 1992年 4 月 1 日	大塚和義	2005年 4 月 1 日
梅棹忠夫 (故人) 1993年 4 月 1 日	松原正毅	2005年 4 月 1 日
大給近達 (故人) 1993年 4 月 1 日	石森秀三	2006年 4 月 1 日
片倉素子 (故人) 1993年 4 月 1 日	野村雅一 (故人)	2006年 4 月 1 日
竹村卓二 (故人) 1994年 4 月 1 日	大森康宏	2007年 4 月 1 日
周 達生 (故人) 1995年 4 月 1 日	山本紀夫	2007年 4 月 1 日
松澤員子 1995年 4 月 1 日	松園萬亀雄	2009年 4 月 1 日
大丸 弘 (故人) 1996年 4 月 1 日	松山利夫	2010年 4 月 1 日
友枝啓泰 (故人) 1996年 4 月 1 日	長野泰彦	2011年 4 月 1 日
藤井知昭 1996年 4 月 1 日	秋道智彌	2012年 4 月 1 日
佐々木高明 (故人) 1997年 4 月 1 日	中牧弘允	2012年 4 月 1 日
杉村 棟 1997年 4 月 1 日	小林繁樹	2014年 4 月 1 日
和田正平 1998年 4 月 1 日	田村克己	2014年 4 月 1 日
清水昭俊 2000年 4 月 1 日	吉本 忍	2014年 4 月 1 日
黒田悦子 2001年 4 月 1 日	久保正敏	2015年 4 月 1 日
崎山 理 2001年 4 月 1 日	庄司博司	2015年 4 月 1 日
端 信行 2001年 4 月 1 日	八杉佳穂	2015年 4 月 1 日
小山修三 2002年 4 月 1 日	朝倉敏夫	2016年 4 月 1 日
森田恒之 2002年 4 月 1 日	佐々木史郎	2016年 4 月 1 日
石毛直道 2003年 4 月 1 日	杉本良男	2016年 4 月 1 日

研究部教員の紹介 (2017年3月31日現在)

組織図に基づく現員一覧

館 長		須藤健一		
副館長 (企画調整担当)		吉田憲司		
副館長 (研究・国際交流担当)		西尾哲夫		
研究部	職名・研究部門	教 授	准教授	助 教
民族社会研究部	研究部長	園田直子		
	民族動態	塚田誠之 平井京之介 横山廣子 小長谷有紀 (併)		
	人類環境	印東道子 MATTHEWS, Peter J.		
	社会システム	韓 敏	佐藤浩司 宇田川妙子 太田心平	吉岡 乾
民族文化研究部	研究部長	池谷和信		
	認知・表象	森 明子	山中由里子 齋藤玲子	
	文化構造	寺田吉孝 笹原亮二	新免光比呂 廣瀬浩二郎 藤本透子	
	民族技術・芸術	竹沢尚一郎 出口正之	鈴木 紀	
先端人類科学研究部	研究部長	關 雄二		
	理論民族学	齋藤 晃	菊澤律子 飯田 卓 三尾 稔	
	グローバル現象		丸川雄三 松尾瑞穂 卯田宗平 相島葉月	
附 置	日本財団助成 手話言語学		※飯泉菜穂子 (併) 菊澤律子	※相良啓子
研究戦略センター		鈴木七美 (センター長) 岸上伸啓 西尾哲夫 (副館長) 樫永真佐夫	丹羽典生 南 真木人 菅瀬晶子 河合洋尚	
文化資源研究センター		野林厚志 (センター長) 吉田憲司 (副館長) 信田敏宏	福岡正太 山本泰則 林 勲男 日高真吾 上羽陽子 伊藤敦規	川瀬 慈 寺村裕史
国際学術交流室		西尾哲夫 (室長) (併) 印東道子 (兼務) 韓 敏 (兼務) 齋藤 晃 (兼務) MATTHEWS, Peter J. (兼務)	山中由里子 (兼務)	

※は特任研究員を示す。

須藤健一 [すどう けんいち] ————— 館長

1946年生。【学歴】埼玉大学教養学部卒（1969）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）修士課程修了（1972）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）博士課程単位取得満期退学（1975）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1975）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1986）、神戸大学国際文化学部教授（1993）、神戸大学国際文化学部長（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科長（2002）、神戸大学附属図書館長（2005）、神戸大学大学院国際文化学研究科教授（2007）、国立民族学博物館館長（2009）【学位】文学博士（東京都立大学 1986）、文学修士（東京都立大学 1972）【専攻・専門】社会人類学、オセアニアの社会と文化、海外移住、伝統政治と民主主義【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、太平洋諸島学会

【主要業績】

[単著]

須藤健一

2008 『オセアニアの人類学——海外移住、民主化、伝統の政治』東京：風響社。

1989 『母系社会の構造——サンゴ礁の島々の民族誌』東京：紀伊国屋書店。

[編著]

須藤健一編

2012 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第2回石川榮吉賞

1985 第16回澁澤賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

伝統的航海術における呪術・宗教的世界に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

星と波と風をたよりの伝統的航海術とカヌーを駆使して島間を行き来する人びとが今でもミクロネシアのサタワル島とその周辺の島じまに暮らしている。星の出没位置を利用するスターコンパスと西流する海流や北東からの貿易風など自然現象に規則性を見抜いて航海を実践する。乗り物は10m足らずのシングルアウトリガー・カヌー。科学的には不正確な方位と洋上の位置の割り出し技術、そして脆弱な舟による航海は常に危険を伴う。この危険性を除去する主要な方法が呪文と儀礼からなる呪術の力である。サタワルの航海者が航海において依拠してきた呪術的世界を明らかにすることが本年度の研究目的である。

・成果

ミクロネシア・サタワル島の航海者が航海において依拠してきた呪術的世界についての研究を進めると同時に、伝統的航海術に関する研究については、今までの調査結果をもとに講演会などで発表を行った。

◎出版物による業績

[論文]

須藤健一

2017 「心のなかの島——オセアニアの伝統航海術」『獅子ヶ城』（創立120周年記念特集号）61, pp.15-25, 新潟：新潟県立佐渡高等学校生徒会編集部。

[監修]

須藤健一

2017 『それ日本と逆!? 文化のちがひ 習慣のちがひ』東京：学研プラス。

[その他]

須藤健一

2016 「悼む 伊藤幹治さん」『毎日新聞』5月9日朝刊。

2016 「考える舌 みんなく食の民族誌 39 オセアニアの「石蒸し料理」」『京都新聞』5月25日朝刊。

2016 「国立民族学博物館の収蔵資料と今後の活用——挨拶にかえて」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、

イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（国立民族学博物館調査報告137）pp.5-10、大阪：国立民族学博物館。

2016 「Brief overview of Minpaku Collection and Foresight: Greetings」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（国立民族学博物館調査報告137）pp.11-14、大阪：国立民族学博物館。

2016 「国立民族学博物館の収蔵品⑤ ミクロネシアの外洋航海カヌー」『文部科学通信』399：表紙裏。

2017 「本館展示の新構築とその心——40年ぶりの改変をおえて」『国立民族学博物館研究報告』41（4）：393-450。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月3日 「Cultural Anthropology Research and Museology at the National Museum of Ethnology, Japan」東アジア人類学会国際大会、神戸大学

2016年5月14日 「みんなの現在」堺市・国立文化財機構主催、東京シンポジウム2016「文化遺産を考える——文化遺産と博物館」東京国立博物館

2016年10月29日 「沖縄国際海洋博覧会（1978）とオセアニアの文化復興」海洋博公園40周年記念海洋文化シンポジウム「太平洋を越えた人類のグレートジャーニー」第1部、海洋博公園海洋文化館、沖縄

・広報・社会連携活動

2016年4月9日 「みんなの今昔物語」2016年度佐渡高校同窓会関西支部講演会、国立民族学博物館

2016年10月4日 「みんなの展示刷新とその心」神戸市シルバーカレッジ校外学習、国立民族学博物館

2016年10月22日 「心のなかの島——オセアニアの伝統航海術」佐渡高等学校創立120周年記念講演、アミューズメント佐渡

2016年11月1日 「心のなかの島——海を越える知と技」第44回産経適塾講演、産経新聞大阪本社

2016年11月24日 「展示キュレーションの誘惑——新しいオセアニア展示ができるまで」連続講座「みんなのナレッジキャピタル」CAFE Lab. グランフロント大阪ナレッジキャピタル

・みんなのウィークエンド・サロン

2017年3月12日 「新構築展示のこころとカタチ」第458回みんなのウィークエンド・サロン研究者と話そう

・館内研修

2016年5月11日 「みんなの今と昔」2016年度民博新任職員講習会、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年6月29日～7月8日—アメリカ（アメリカの博物館視察）

2016年7月21日～7月23日—台湾（企画展「台湾原住民族をめぐるイメージ」の事前記者会見出席のため）

2017年2月2日～2月10日—ハワイ（ハワイにおけるトンガ系移住者の動向調査）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人大阪府文化財センター評議員、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、金沢大学大学院人間社会環境研究科文化資源マネージャー養成プログラムアドバイザー、関西サイエンス・フォーラム理事、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員、独立行政法人国立美術館 国際美術館評議員、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、日本ニュージーランドセンター理事、公益財団法人日本博物館協会参与、NPO法人 パシフィカ・ルネサンス顧問、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員、第25回山片蟠桃賞審査委員、公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団助成事業選考委員長

吉田憲司 [よしだ けんじ]——副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

1955年生。【学歴】京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）【職歴】ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教

授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター長（2006）、放送大学客員教授（2010）、国立民族学博物館副館長（2015）【学位】学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族藝術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

【主要業績】

[単著]

吉田憲司

2014 『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。

1999 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。

1992 『仮面の森——アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

2004 第1回木村重信民族藝術学会賞

2000 第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）

1993 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。本研究は、文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を実践的に考究することを目的としている。

本年度は、科学研究費補助金・基盤研究（A）「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」の一環として、南部アフリカ、チェワ社会における文化の伝統とその創造的継承の実態についての現地調査を継続し、とくに博物館建設を介した伝統的首長制度の再構築のプロセスを検証する。あわせて、博物館による文化の表象のあり方について、2000年以降の世界の博物館の動向を踏まえて、実践を通じて新たな提言をおこなう。

・成果

南部アフリカ、チェワ社会における文化の伝統とその創造的継承に関する研究について、2016年8月に現地調査を実施した。

1984年の最初の訪問以来、調査を継続してきたチェワ社会の秘密結社の仮面舞踊が、2005年に「人類の無形遺産に関する傑作リスト」（現在のユネスコの無形文化遺産）に記載されたことが契機になり、あらたな現象が生起している。現在、チェワの人びとはザンビア、モザンビーク、マラウイにまたがって居住しているが、ザンビアでおこなわれたチェワの祭りに、2007年、三国の大統領がそれぞれの国のチェワのチーフたちとともに参列した。さらに、祭りのなかで、ザンビアのチェワの王ガワ・ウンディに対して、それぞれの国のチェワのチーフが、自分の地域のニャウの仮面舞踊を奉納した。この祭りは、もともとはザンビアに暮らすチェワが「伝統を始めよう」というスローガンのもとに、民族全体の祭りとして1984年に始めたものである。これまで、モザンビークに住むチェワもマラウイのチェワも、それぞれにチーフをいただき、ザンビアにおけるチェワの王がチェワという民族全体の王であるという認識をもってはいなかった。しかし、このできごとを契機に、チェワの人びとの思いに変化が起き始めている。今回の滞在中、マラウイやモザンビークからザンビアの村への来訪者たちに、ザンビアのチェワの王を、3国のチェワ全体の王とみなすかどうかについてインタビューをおこなったが、その大半が「チェワという民族集団全体の王とみなす」という肯定的な回答をしている。20年前には、ありえなかった回答である。今後も継続的に、この集団のアイデンティティの変化のプロセスを追いかけていくことになる。

また、博物館による文化の表象のあり方については、民博と国立新美術館の共同企画による特別展「イメー

ジの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」を、瀬戸内国際芸術祭2016の連携企画として香川県高松の香川県立ミュージアムで巡回開催した（会期：2016年10月～11月）。同展の開催に当たっては、同時に、瀬戸内海歴史民俗資料館（香川県立ミュージアム分館）の収蔵する民俗資料を用いて、東京藝術大学の教員が制作したインスタレーションの展示「れきみん×東京藝大セレクション展『瀬戸内のくらし——ハレとケ』」が開催され、いわば、博物館の所蔵資料と美術館の所蔵作品の区別を乗り越えたふたつの展示の連携が実現した。後者の「ハレとケ」展が、前者、すなわち民博の「イメージの力」展の試みに触発されたものであることは言うまでもない。報告者がこれまで継続してきた、博物館と美術館の間にある区別を問い直し、その問題点と可能性を検証するという作業が、国内の文化的・芸術的諸実践に確かな影響を及ぼしつつあることが確認された事例といつてよい。

◎出版物による業績

[論文]

Yoshida, K.

2016 Masks and Secrecy among the Chewa. *African masks and Masquerades Part One: A Batch from African Arts*, pp.840-1211. Cambridge: The MIT Press (Kindle Edition).

2016 Museums and Community Development: With Special Reference to Zambian Cases. In N. Sonoda (ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology*, pp.187-200. Singapore: Springer.

[その他]

吉田憲司

2016 「生き続ける仮面」『EPTA』（特集 仮面大国）Vol.76, pp.17-22, 東京：ヒノキ新薬株式会社。

2016 「考える舌42 ザンビアの仮面舞踊 飢饉に備え果実の重み共有」『京都新聞』6月15日朝刊。

2016 「この一年 関西の文芸・論壇 & 書店 民博常設展示刷新が終了」『毎日新聞』12月13日朝刊。

2016 「海外博物館の担い手育成 研修通じ文化支援」『中日新聞』12月21日朝刊。

2016 「国立民族学博物館の収蔵品8 武器をアートに」『文部科学 教育通信』402：裏表紙。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月4日～5月9日 Chair 'Ethnographic Museums: Approaches and perspectives in the contemporaneity' IUAES "The International union of Anthropological and ethnological Sciences) Inter-Congress 2016" Dubrovnik, Croatia.

2016年5月28日 「災害ミュージアムの役割と可能性」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学名古屋キャンパス

2016年6月13日 「写真が開く地域研究」京都大学稲盛財団記念館

・共同研究会での報告

2017年2月13日 「武器をアートに——モザンビーク内戦後の平和構築」『地域文化の継承と創造』国立民族学博物館

・研究講演

2016年10月8日 「イメージの力をさぐる——国立民族学博物館コレクションから」香川県立ミュージアム

・展示

2016年10月8日～11月27日 「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」香川県立ミュージアム

・広報・社会連携活動

2016年6月22日 「仮面の世界をさぐる——アフリカとミュージアムの往還」カレッジシアター「地球探検紀行」あべのハルカス近鉄本店

2016年12月10日 「遠山霜月祭見学——神と人が集う夜」国立民族学博物館友の会第74回体験セミナー（千里文化財団）、長野県飯田市

◎調査活動

・国内調査

2016年4月23日～4月24日—お茶の水女子大学（民族芸術学会理事会・大会参加による、文化遺産の表象に関する比較研究）

2016年6月4日～6月5日—日本大学生物資源科学部（日本アフリカ学会学術大会参加による、アフリカの文化遺産の表象に関する比較研究）

2016年6月8日—東京（平成28年度全国博物館長会議へ出席）

- 2016年6月18日—浦浜民俗芸能伝承館（復興支援現地公開フォーラム準備委員会に出席）
- 2016年9月28日～9月30日—お茶の水女子大学（情報メディアとしての博物館のあり方に関する調査・研究）
- 2016年10月1日～10月4日—香川県立ミュージアム（巡回展「イメージの力」の設営と民族造形の受容に関する調査）
- 2016年10月6日～10月8日—香川県立ミュージアム（巡回展「イメージの力」の設営と民族造形の受容に関する調査）
- 2016年10月22日～10月23日—野外民族博物館リトルワールド（民族芸術学会第143回研究例会参加、南アフリカ・ンデベレの壁絵文化の表象に関する研究）
- 2016年10月29日—戸隠神社中社（戸隠神社蔵のアフリカ象の象牙製「通天牙笏」の調査）
- 2016年10月30日—信州大学（同上調査結果の分析と、次年度ガーナでの科研調査計画の打ち合わせ）
- 2016年11月10日—中部大学高等学術研究所（地域研究画像デジタルライブラリにかかわる資料調査）
- 2016年11月11日—片倉もとこ記念沙漠文化財団（地域研究画像デジタルライブラリにかかわる資料調査）
- 2016年11月17日～11月18日—群馬県立歴史博物館（第64回全国博物館大会「博物館と地域をつなぐ」に出席）
- 2016年11月27日～11月28日—香川県立ミュージアム（巡回展「イメージの力」の設営と民族造形の受容に関する調査）
- 2016年12月18日—神奈川県立近代美術館・葉山館（アフリカ美術の創造と表象に関する資料調査）
- 2017年1月26日～1月27日—一般財団法人片倉もとこ記念沙漠文化財団（地域研究画像デジタルライブラリーに関する資料調査）
- 2017年2月16日～2月20日—沖縄県立芸術大学（民族藝述の受容と表象に関する動向調査）
- 2017年3月11日～3月12日—長崎歴史文化博物館（シーボルト収集の日本関連コレクションの調査）
- 2017年3月25日～3月26日—石川県立歴史博物館（巡回展開催による博物館ネットワーク構築にむけての現地調査）
- 2017年3月3日～3月4日—戸隠神社中社（戸隠神社蔵のアフリカ象の象牙製「通天牙笏」の調査）
- 2017年3月5日—信州大学教育学部（同上調査結果の分析と、次年度ガーナでの科研調査計画の打ち合わせ）
- ・海外調査
- 2016年5月4日～5月13日—クロアチア（IUAES（国際人類学民族学科学連合）2016中間会議（博物館・文化遺産委員会の組織運営）に参加及びクロアチア国内博物館とのネットワーク構築・関連資料調査）
- 2016年7月1日～7月11日—イタリア（ICOM（国際博物館会議）ミラノ大会参加による世界の博物館とのネットワーク形成及びフィレンツェ、ピサにおける博物館を介した世界文化遺産管理に関する実態調査）
- 2016年8月3日～9月2日—ザンビア（ザンビアにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成についての調査）
- 2017年1月5日～1月9日—ドイツ（ドイツ国内の民族学博物館とのネットワーク形成と、所蔵資料調査）
- 2017年1月9日～1月16日—イギリス（イギリスにおいて開催された日本古美術展にみる日本観に関する基礎的研究）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（5人）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会運営委員

・非常勤講師

放送大学「博物館概論（11）」

◎学会の開催

2016年11月13日 国立民族学博物館主催「郷土芸能復興支援メッセ」大船渡市立三陸公民館

西尾哲夫 [にしお てつお] ————— 副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

1958年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程言語学専攻修了（1984）、京都大学大学院文学研究科博士後期課程言語学専攻満期退学（1987）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2011）、国立民族学博物館副館長（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2015）、国立民族学博物館副館長（2016）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）【専攻・専門】言語学・アラブ研究 1）アラブ遊牧民の言語人類学的研究、2）アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究【所属学会】日本言語学会、日本中東学会、日本オリエンタ学会

【主要業績】

[単著]

西尾哲夫

2013 『ヴェニス商人の異人論——人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。

2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。

2007 『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2011 第28回田邊尚雄賞（東洋音楽学会）

1992 オリエンタ学会奨励賞

1992 新村出記念財団研究助成賞

1992 流沙海西奨学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アラブ世界の言語社会的位相と文学伝統の変容

・研究の目的、内容

2010年、エジプト検察当局は、イスラーム系弁護士団体による「アラビアンナイト発禁処分申し立て」を「古くから読まれており芸術家にも影響を与えてきた」という理由で却下した。近世エジプトでは、都市部中流層の台頭などによる中間アラビア語の誕生にともない、中世シリアの伝承物語集に民間説話が付加されて現在のアラビアンナイトが成立した。この過程ではキリスト教徒も関与しており、挿絵入りエジプト系写本が新たに発見された。近世エジプト系写本の物語および言語分析を通し、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また、中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられるアラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

・成果

①著書として、*Complete Texts of Umm Kulthūm's Lyrics*（現代中東地域研究民博拠点、2017）を刊行した。

②共編著として、『中東世界の音楽文化——うまれかわる伝統』（水野信男と共編著、スタイルノート、2016）を刊行した。また同書中の論文「ベリーダンサーは何を表現しようとしているのか？——舞踊における意味の深みへ」では、中東世界の民衆文化について社会的位相の観点から考察した。

③研究発表として、人間文化研究機構が包括的学術協定を締結しているフランス社会科学高等研究院（EHESS）とネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究推進事業」との共催による国際シンポジウム「La culture populaire au Moyen Orient: Approches franco-japonaises croisées」（パリで平成29年3月27～28日に実施）にて、*L'Histoire de Sindbad le Marin est-elle de la littérature populaire?: Une nouvelle démarche entre tradition littéraire et culture populaire au Moyen Orient*と題して口頭発表をした。

④一般向けの研究広報として、みんぱくウィークエンド・サロン、現代中東地域研究推進事業設置関連の企画による民博友の会講演会ならびに東京講演会で講演した。大阪府高齢者大学校や産経新聞「カレッジシアター、

地球探究紀行」で講演した。聖教新聞文化欄、毎日小学生新聞、朝日小学生新聞で中東文化の紹介をした。『名著により世界史120』（山川出版社、2016）に「千夜一夜物語」の小論を寄稿した。

⑤科学研究費補助金・基盤研究（A）「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」（代表・西尾哲夫）による国内調査ならびに文献調査をおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

Nishio, T. and N. Mizuno

2017 *Complete Texts of Umm Kulthūm's Lyrics* (Resources for Modern Middle Studies 1). Osaka: Center for Modern Middle East Studies, National Museum of Ethnology. (国立民族学博物館・現代中東地域研究拠点)。

[編著]

西尾哲夫・水野信男編

2016 『中東世界の音楽文化——うまれかわる伝統』府中：スタイルノート。[書評有：『音楽の友』（2016年12月号）、『図書新聞』（2017年1月）、『東洋音楽研究』（第82号、2017年）]

[論文]

西尾哲夫

2016 「ベリーダンサーは何を表現しようとしているのか？——舞踊における意味の深みへ」西尾哲夫・水野信男編『中東世界の音楽文化——うまれかわる伝統』pp.74-95, 府中：スタイルノート。

[その他]

西尾哲夫

2016 「ネフェルティティの墓 エジプト美女列伝第2回」『ベリーダンス・ジャパン』36：100-101。

2016 「世界の文字を集めた中西亮」（文化欄）『聖教新聞』5月11日。

2016 「終わりのない物語——アラビアンナイトの世界」新国立劇場バレエ公演『アラジン』（公演パンフレット）pp.26-27。

2016 「みんなく世界の旅 エジプト① 近代化すすむ砂漠の暮らし」『毎日小学生新聞』7月2日。

2016 「みんなく世界の旅 エジプト② コーヒーでお客さまをおもてなし」『毎日小学生新聞』7月9日。

2016 「みんなく世界の旅 エジプト③ 恵みの木 ナツメヤシ」『毎日小学生新聞』7月16日。

2016 「みんなく世界の旅 エジプト④ 1000年前から伝わる物語集」『毎日小学生新聞』7月23日。

2016 「ハトシェプスト女王の船団 エジプト美女列伝第3回」『ベリーダンス・ジャパン』37：100-101。

2016 「新たな民博の研究に向けて」（池谷和信、野林厚志と共著）『民博通信』154：4-9。

2016 「先住民族を知ろう⑤ コプト」『朝日小学生新聞』10月10日。

2016 「愛と美の王妃、ネフェルタリ エジプト美女列伝第4回」『ベリーダンス・ジャパン』38：92-93。

2016 「中東のおとぎ話 千夜一夜物語」池田嘉郎・上野慎也・村上 衛・森本一夫編『名著で読む世界史120』pp.135-137, 東京：山川出版社。

2017 「キスワ 国立民族学博物館の収蔵品⑨」『文部科学教育通信』403：2。

2017 「お茶を飲む 紅茶と緑茶」野林厚志監修『日本と世界の暮らし どこが同じ？ どこがちがう——教科書に出てくる「暮らしの中の和と洋」食』pp.26-29, 東京：汐文社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年3月27日～28日 「L'Histoire de *Sindbad le Marin* est-elle de la littérature populaire?: Une nouvelle démarche entre tradition littéraire et culture populaire au Moyen Orient」国際シンポジウム『La culture populaire au Moyen Orient: Approches franco-japonaises croisées』人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究推進事業」、フランス社会科学高等研究院（EHESS）主催、フランス社会科学高等研究院（EHESS）、パリ

・広報・社会連携活動

2016年5月25日 「言葉から文化を読む——アラビアンナイトの言語世界」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

2016年6月4日 「シンドバード航海記の成立の謎を追って——中東地域の民衆文化研究への新視点」第455回国立民族学博物館友の会講演会（現代中東地域研究推進事業関連）国立民族学博物館

2016年10月15日 「言葉から文化を考える——『アラブ的思考様式』再考」第461回みんなくゼミナール、国立

民族学博物館

2016年11月11日 「アラブ・イスラーム社会の民衆文化——アラビアンナイトからみたイスラームの世界観」大阪高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

2016年11月25日 「アラブ・イスラーム社会の民衆文化——アラブ遊牧民（ベドウィン）の生活世界」大阪高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

2017年2月25日 「異文化が交差する物語——アラビアンナイトからのぞく中東世界」第117回国立民族学博物館友の会東京講演会、モンベル御徒町支店4Fサロン

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年5月8日 「グローバル化の中のアラビア語と中東地域の人びと」第424回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（B・特設分野））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」研究代表者、科学研究費助成事業（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員、国立大学教育評価委員会専門委員

・非常勤講師

京都大学文学部「アラブ語」

民族社会研究部

園田直子 [そのだ なおこ] ————— 部長（併）教授

【学歴】パリ第1大学文学部卒（1980）、パリ第1大学科学技術修士課程修了（1982）、エコール・ド・ルーブル卒（1983）、パリ第1大学博士課程修了（1987）【職歴】フランス博物館科学研究所研究員（1987）、国立美術館絵画修復研究所（フランス）研究員（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第5研究部助手（1993）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1999）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館情報管理施設長（2009）、館長補佐（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2016）【学位】Doctorat de 3ème cycle (Histoire de l'art) 博士（美術史）（Université de Paris I, 1987）、Maîtrise des Sciences et Techniques (Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques) 科学技術修士（Université de Paris I, 1982）【専攻・専門】保存科学【所属学会】ICOM（国際博物館会議）、IIC（国際文化財保存学会）、文化財保存修復学会、IIC-Japan（国際文化財保存学会日本支部）

【主要業績】

[編著]

Sonoda, N. (ed.)

2016 *New Horizons for Asian Museums and Museology*. Singapore: Springer.

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学（第2版）』東京：岩田書店。

[学位論文]

Sonoda, N.

1987 *Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée*

avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3ème cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

【2016年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

大型民族資料を対象とした環境に「やさしい」殺虫処理法の使い分け ③

・研究の目的、内容

国立民族学博物館では、民族資料の防虫・殺虫処理法を選択するにあたっては、ひと、資料、環境に配慮してきた。2004年度以降は、海外からの新着資料には化学薬剤を用いた殺虫・殺カビ処理を行い、国内で加害された資料に関しては化学薬剤を用いない手法として二酸化炭素処理を中心に、高温処理や低温処理、あるいは低酸素濃度処理を必要に応じて併用している。この方針に沿いながら、2016年度は、高温処理の殺虫条件精査と、虫害にあいやすい材質でできた資料の低酸素濃度環境下での保管システムの基礎実験に取り組む。

・成果

高温処理においては、日本の気候条件下で太陽光を利用した手法を確立することを目的にしている。具体的には、恒温恒湿槽の中で処理温度と処理時間を変えながら、100%の殺虫効果が得られるよう条件を絞り込む実験が進行中である。材質的に虫害にあいやすい資料を安定した状態で保管する手法としては、事例としてアシ舟を選択した。アシ舟を低酸素濃度環境下で密封保管したところ、空調制御のない収蔵施設内でも現在まで虫菌等の発生はなく、安定した状態にある。さらに経過観察を続け、長期的視点での効果を検証する。

本館の殺虫処理方針とその実践、具体的な総合的有害生物管理（IPM）の活動について、国内においては文化財保存修復学会と九州国立博物館 IPM セミナー、国外ではパリ国際 IPM コンファレンス（3rd International conference IPM 2016）と国際文化財保存学会（IIC, International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）ロスアンゼレス大会、それぞれで成果発表をおこなった。

◎出版物による業績

〔編著〕

Sonoda, N. (ed.)

2016 *New Horizons for Asian Museums and Museology*. Singapore: Springer. [査読有]

〔論文〕

Sonoda, N.

2016 Introduction: Twenty-Year of International Cooperation for Museums and Museology. In N. Sonoda (ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology*, pp.1-15. Singapore: Springer. [査読有]

2016 Managing and Analyzing Museum Environmental Data. In N. Sonoda (ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology*, pp.97-109. Singapore: Springer. [査読有]

〔その他〕

岡山隆之・門屋智恵美・関正純・殿山真央・園田直子

2016 「セルロースナノファイバーコーティングによる劣化紙の強化処理」『文化財保存修復学会第38回大会於神奈川研究発表要旨集』 pp.110-111。[査読有]

殿山真央・関正純・園田直子・木村優季・岡山隆之

2016 「セルロースナノファイバーを用いたエレクトロンスピニング法による紙資料の強化処理」『文化財保存修復学会第38回大会於神奈川研究発表要旨集』 pp.112-113。[査読有]

園田直子・日高真吾・末森薫・村田忠繁・奥村泰之・河村友佳子・橋本沙知・和高智美

2016 「国立民族学博物館における展示照明のLED化——民族資料の展示を想定した照明実験」『文化財保存修復学会第38回大会於神奈川研究発表要旨集』 pp.114-115。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森薫・西澤昌樹・松田万緒・河村友佳子・橋本沙知・和高智美・木川りか・川越和四

2016 「太陽光を利用した高温処理システム開発——殺虫条件を満たすための処理空間の創出を目指した試験について」『文化財保存修復学会第38回大会於神奈川研究発表要旨集』 pp.134-135。[査読有]

園田直子

- 2016 「18. 民俗・民族資料」公益財団法人日本博物館協会編『改訂版 博物館資料取扱いガイドブック』pp.197-209, 東京：日本博物館協会。
- 2016 「対談特集 国立民族学博物館のIPMの歩みと課題」(対談：須藤健一・黒澤真次, 陪席者：園田直子・日高真吾・本田光子・和高智美, 進行役：森田稔・川越和四)『クリンライフ 2016 ミュージアムIPM編Ⅳ』pp.2-16, 千葉：環境文化創造研究所。
- 2017 「フランス国立映画センターのアーカイブス」『月刊みんぱく』41(1)：10-11。
- 2017 「絵画をかたちづくるもの——絵具の科学」『平成27年度関西大学文化財保存修復セミナー講義録』関西大学。
- 2017 「書く、伝える——和紙と洋紙」上羽陽子監修『日本と世界の暮らし どこが同じ？どこがちがう？——衣 教科書に出てくる「暮らしの中の和と洋」』pp.34-37, 東京：汐文社。
- 2017 「あかり——日本のあかりとヨーロッパのあかり」日高真吾監修『本と世界の暮らし どこが同じ？どこがちがう？——住 教科書に出てくる「暮らしの中の和と洋」』pp.42-45, 東京：汐文社。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 パリの近代建築① モンパルナスタワー」『毎日新聞』1月12日。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 パリの近代建築② ボンピドー・センター」『毎日新聞』1月19日。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 パリの近代建築③ ガラスのピラミッド」『毎日新聞』1月26日。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 パリの近代建築④ フィルハーモニー・ド・パリ」『毎日新聞』2月2日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年10月26日 「パリ国際IPMコンファレンス2016報告（世界のIPMの動向）と国立民族学博物館における取り組み」平成28年度九州国立博物館IPMセミナー、九州国立博物館
- 2016年9月12日～9月16日 'Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control for large and complex objects containing new materials' (ポスター発表) Saving the Now: Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works, IIC 2016 Los Angeles Congress, Millennium Biltmore Hotel Los Angeles, US
- 2016年9月13日～9月15日 '25 years of implementation and development of IPM at the National Museum of Ethnology, Japan' (ポスター発表), IPM 2016, 3rd international IPM Conference in Museums, Archives, Libraries and Historic Buildings, Auditorium du Louvre, France

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

- 2016年10月4日～10月6日 総合研究大学院大学『資料保存学』、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2016年7月1日～7月11日—イタリア（ICOM（国際博物館会議）ミラノ大会参加による世界の博物館とのネットワーク形成及びフィレンツェ、ピサにおける博物館を介した世界文化遺産管理に関する実態調査）
- 2016年9月10日～9月21日—フランス（IPM国際会議（博物館・アーカイブ・図書館等における総合的有害生物管理）参加と発表、映像使用の保存に関する実態調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

- 科学研究費補助金（基盤研究（B）（一般）（2015-2017））「セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用」（研究代表者）、科学研究費補助金（基盤研究（A）（一般）（2015-2019））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究分担者）、科学研究費補助金（基盤研究（B）（一般）（2015-2017））「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（研究分担者）、科学研究費補助金（基盤研究（B）（一般）（2015-2017））「文化人類学における映像制作とアーカイブズ活用の新展開」（研究分担者）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

- 国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、舞鶴市ユネスコ世界記憶遺産有識者会議委員、知覧特攻平

和会館保存討委員会委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学国際文化財・文化研究センター2015年度文化財保存修復セミナー「文化財各論・美術工芸品（I）絵画」

印東道子 [いんとう みちこ] ————— 教授

【学歴】東京女子大学文理学部史学科卒（1976）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部修士課程修了（1982）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部大学院博士課程修了（1988）【職歴】東京女子大学文理学部史学科研究助手（1976）、北海道東海大学国際文化学部助教授（1988）、北海道東海大学国際文化学部教授（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2004）、放送大学客員教授（2006）【学位】Ph.D.（オタゴ大学人類学部大学院博士課程1989）、M.A.（オタゴ大学人類学部大学院修士課程1982）【専攻・専門】オセアニア先史学・民族学 1）オセアニアの土器文化、2）島嶼環境における人間居住【所属学会】日本オセアニア学会、日本人類学会、日本考古学協会、New Zealand Archaeological Society、Indo-Pacific Prehistory Association

【主要業績】

[単著]

印東道子

2014 『南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き』（フィールドワーク選書4）京都：臨川書店。

2002 『オセアニア 暮らしの考古学』（朝日選書715）東京：朝日新聞社。

[編著]

印東道子編著

2013 『人類の移動誌』京都：臨川書店。

【受賞歴】

2006 大同生命地域研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

島嶼環境への人類の移動と適応

・研究の目的、内容

1. ファイス島で行ってきた発掘調査と化学分析、骨類分析などの総合報告書の作成を引き続き行う。
2. 科研費基盤研究B「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表：小野林太郎）の研究分担者として、主としてインドネシア多島海地域とオセアニアの物質文化の比較研究を行う。

・成果

1. 2016年3月に終了した科研費基盤研究A「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表者：松村博文）の成果報告が、オーストラリア国立大学より刊行された
Intoh, M., Colonization and/or Cultural Contacts: A Discussion of the Western Micronesian Case. In, P. Piper, H. Matsumura and D. Bulbeck (eds.), *New Perspectives in Southeast Asian and Pacific Prehistory*, pp.233-241. Canberra: Australian National University Press (March, 2017)。
2. 共同研究会「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究：資源利用と物質文化の時空間比較」（研究代表：小野林太郎）の成果を共同編者としてまとめ、単行本として出版する（民博の出版助成を受け、昭和堂出版から2018年3月刊行予定）。
3. 共同研究会「世界のビーズ」に関連した特別展の図録を執筆。「ウミギクガイは権力の象徴」民博特別展図録『ビーズ——つなぐ かざる みせる』（池谷和信編）pp.60-61, 国立民族学博物館（2017年3月）。

◎出版物による業績

[論文]

Intoh, M.

2017 Colonization and/or Cultural Contacts: A Discussion of the Western Micronesian Case. In P. Piper, H. Matsumura and D. Bulbeck (eds.) *New Perspectives in Southeast Asian and Pacific Prehistory*, pp.233-241. Canberra: Australian National University Press.

[その他]

印東道子

2017 「ウミギクガイは権力の象徴」『ピース——つなぐ かざる みせる』pp.60-61, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2016年5月20日 鼎談「フィールドワークの楽しさ」(印東道子・關 雄二・白川千尋)、ジュンク堂書店大阪本店

2016年6月10日 南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き」千里文化財団×モンベル連続講座『素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク』モンベル渋谷店

2017年2月22日 「ブタを連れて海を渡った人たち——ミクロネシアの発掘調査から」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員(3人)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金(基盤研究(B)(海外))「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」(研究代表：小野林太郎)研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本学術会議第23期連携会員、日本オセアニア学会評議員、日本人類学会評議員、大同生命地域研究賞審査委員、りそなアジア・オセアニア財団環境事業選考委員

韓 敏 [ハン ミン]—————教授

【学歴】中国吉林大学外国語学部日本語科卒(1983)、中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科日本文学専攻修士課程修了(1986)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了(1989)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了(1993)【職歴】武蔵大学人文学部非常勤講師(1992)、東京大学教養学部客員研究員(1994)、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師(1995)、東洋英和女学院大学社会科学部助教授(1998)、国立民族学博物館民族学研究部助教授(2000)、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(2001)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授(2004)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2011)、国立民族学博物館民族社会研究部長(2012)【学位】学術博士(文化人類学)(東京大学大学院総合文化研究科1993)、学術修士(文化人類学)(東京大学大学院総合文化研究科1989)、文学修士(中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科1986)【専攻・専門】文化人類学、現代中国の漢族研究【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

韓 敏

2015 『大地の民に学ぶ 激動する故郷、中国』(フィールドワーク選書18)京都：臨川書店。

Han, M.

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology. 313p.

2007 『回応革命与改革——皖北李村的社会変遷与延続』（陸益龍・徐新玉訳）南京：江蘇人民出版社。

[編著]

韓 敏編

2009 『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』東京：風響社。

【2016年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

中国の社会と文化の再構築に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、中国における聖地作りと英雄崇拝に焦点を当てることにより、国家と社会の多様な関係性を考察し、文化の連続性と非連続性のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

①共同研究「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」（代表者 杉本良男）の分担者として、近代中国の聖地作りのプロセスとメカニズムを明らかにする。

②科研「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（代表者 塚田誠之）の分担者として、中国における英雄崇拝の変遷と歴史の資源化の関連性を調べる。

③終了した機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の成果を執筆し、代表者として論文集を編集する。

・成果

①共同研究「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」（代表者 杉本良男）の分担者として、近代指導者ゆかりの聖地作りのプロセスとメカニズムについて論文を執筆している。

②2016年8月12～13日、中国食文化研究会と北京師範大学が共催した「第二回国際食文化発展大会」において、「日本における食文化の展示と研究——国立民族学博物館を事例に」を発表した。

③8月17日～21日に科研「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（基盤研究A 代表者：塚田誠之）の分担者として、少数民族であるシボ族の集中している瀋陽市で文献調査と参与観察を行った。具体的にシボ族の聖地とされる家廟、文化行政機関である瀋北新区文教局及び黄家郷八家村の村で聞き取り調査を行い、民族文化の資源化の実態を考察した。

④9月8～14日に浙江省杭州市で、南宋の英雄岳飛の墓と廟に焦点をあて、文献調査のほかに、当廟の運営にあたる行政部門、岳廟管理委員会、岳氏一族、岳飛研究会、観光客などを対象に聞き取り調査をおこなった。その成果の一部をまとめ、10月22日に開催された国際シンポジウムにおいて、「岳飛の社会記憶とその資源化——杭州岳廟を中心に」というタイトルの発表を行った。

⑤岳飛という歴史人物がだれにどのように記憶されてきたのか、すなわち記憶の主体性と記憶の形に注目し、南宋、元、明、清、民国と中華人民共和国の時代変化とともに、岳飛記憶とその意味の変化を分析した論文を執筆し、本館のSERに投稿した。

⑥終了した機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の成果について、代表者として論文集『当代人类学的理论探索——中国和日本的人类学田野、民族志与文化研究』（韓敏&色音）を編集し、本館のSESとして出版申請を行った。

また、中国文化の連続性・非連続性について、以下の論文も刊行した。

2016a 「出産と死亡——人間と霊魂にかかわる文化的営み」武田雅哉、加部勇一郎、田村容子（編著）『中国文化 55のキーワード』pp.80-83, 京都：ミネルヴァ書房（2016.04.10）

2016b 「面子と交際——名誉と人間関係の原動力」武田雅哉、加部勇一郎、田村容子（編著）『中国文化 55のキーワード』pp.72-75, 京都：ミネルヴァ書房（2016.04.10）

◎出版物による業績

[その他]

韓 敏

2016 「面子と交際——名誉と人間関係の原動力」武田雅哉・加部勇一郎・田村容子編『中国文化55のキーワード』pp.72-75, 東京：ミネルヴァ書房。

2016 「出産と死亡——人間と霊魂にかかわる文化的営み」武田雅哉・加部勇一郎・田村容子編『中国文化 55のキーワード』pp.80-83, 東京：ミネルヴァ書房。

2016 「『すごろく』のゲームで東アジアを往来する」『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ

ブ』（国立民族学博物館調査報告138）p.143、大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年7月24日 「北東アジア研究の可能性——中国シボ族を事例に」人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業北東アジア地域研究センター第3回月例会、国立民族学博物館拠点

2016年10月22日 「岳飛の社会記憶とその資源化——杭州岳廟を中心に」国際シンポジウム『中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年8月13日 「日本の食文化的展示と研究——以日本国立民族学博物館为例」第2回中国食文化研究会、中国北京前門ホリディ・イン・エクスプレスホテル〔招聘基調講演〕

・みんなくウィークエンド・サロン

2016年10月30日 「食からみる中国文化および世界とのつながり」第443回みんなくウィーク・エンドサロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2016年9月28日 「大地の民に学ぶ——激動する故郷、中国」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・海外調査

2016年8月11日～8月12日—中国（第二回国際食文化発展大会の参加と発表）

2016年8月17日～8月21日—中国（シボ族の歴史と文化の資源化に関する調査）

2016年9月8日～9月14日—中国（中国における歴史の資源化に関する人類学的研究）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（5人）、副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究期間の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業北東アジア地域研究（国立民族学博物館拠点）共同研究員、科学研究費助成事業（基盤研究A）「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（研究代表者：塚田誠之）研究分担者

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

公益財団法人三島海雲記念財団平成28年度学術研究奨励金「総合的な『食文化データベース』構築へ向けた基礎的研究」（立命館大学国際食文化研究センター）分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

独立行政法人日本学術振興会、特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員・書面評価員

小長谷有紀 [こながや ゆき]—————教授（併）

1957年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第1研究部助手（1987）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009–2011）、人間文化研究機構理事（2014）【学位】文学修士（京都大学大学院文学研究科1983）【専攻・専門】人文学【所属学会】国際モンゴル学会、日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

〔単著〕

小長谷有紀

2014 『人類学者は草原に育つ——変貌するモンゴルとともに』（フィールドワーク選書9）京都：臨川書店。

〔編著〕

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』京都：昭和堂。

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人びとの証言』（中公叢書）東京：中央公論新社。

【受賞歴】

2016 第3回ゆとろぎ賞

2015 モンゴル国科学アカデミー 名誉博士

2013 紫綬褒章

2013 教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章（モンゴル国教育文化科学省）

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴルにおける社会主義的近代化

・研究の目的、内容

〈目的〉これまで、「モンゴルにとって20世紀とはなんであったか？」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化」とはなんであったか？」という問いへと問題を鋭角に転換し、各個研究ではモンゴルおよび中国内モンゴル自治区についての事例研究を目的とする。

〈内容〉社会主義的近代化を体現した当事者たちによるナラティブ（語り）を収集し、それらを多声的に構成して近代化という時空間に関するモノグラフ（民族誌的歴史）を描くことによって、公式的な歴史記述とは異なるテキストをナラティブから構成する。

・成果

- 1）モンゴルの口述資料について、モンゴル語、邦訳、英訳を見直した。
- 2）モンゴルの社会主義プロパガンダ・ポスター集の英訳を準備した。
- 3）ロシア人地理学者 A. シムコフ著作集の続編を準備した。

◎出版物による業績

〔編著〕

小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子編

2016 『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』東京：勉誠出版。

〔分担執筆〕

小長谷有紀

2016 「オアシスプロジェクト調査記録——砂漠に生きるモンゴル人の水利用を探る」秋道智爾・赤阪憲雄編『人間の営みを探る——フィールド科学入門』pp.66-113, 東京：玉川大学出版部。

2017 「『役に立つ』とはどういうことか？——モンゴルで見つけた『スローサイエンス』の力」国立研究開発法人科学技術振興機構研究開発戦略センター編『科学をめざす君たちへ——変革と越境のための新たな教養』pp.140-162, 東京：国立研究開発法人科学技術振興機構。

〔論文〕

小長谷有紀・秋山知宏

2017 「緑州項目調査記録——探索生活在大漠の蒙古族人的水資源利用」『日本当代中国研究』2017(1)：57-79。

[その他]

小長谷有紀

2016 「ポスト移行期モンゴルのゆくえ」『学士会会報』920：27-30。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

小長谷有紀監修

2016 『南シベリアに住むトゥバの人びと』（みんぱく映像民族誌第20集）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2016年6月18日 「ポスト移行期モンゴルの文化変容」第457回みんぱくゼミナール

・研究講演

2016年6月4日 「ミルクの価値とその伝え方」牛乳の日記念学術フォーラム、東京大学伊藤国際学術研究センター謝恩ホール

・広報・社会連携活動

2016年6月25日 みんぱく映画会「モンゴル」

◎上記以外の研究活動

2017年3月1日 千葉大学日本・ユーラシア言語文化コースにてゼミナール

◎社会活動・館外活動等

文部科学省科学技術・学術審議会委員、中央環境審議会自然環境部会臨時委員、日本学術会議連携会員、国立大学法人京都大学経営協議会委員、JRA 馬事文化賞選考委員、三島海雲記念財団学術委員、Jミルク乳の学術連合幹事

塚田誠之 [つかだ しげゆき] ————— 教授

1952年生。【学歴】北海道大学文学部史学科東洋史学専攻卒（1978）、北海道大学大学院文学研究科修士課程東洋史学専攻修了（1980）、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程東洋史学専攻単位取得（1987）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1988）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長（2011）国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）、総合研究大学院大学学長特別補佐（2013）【学位】文学博士（北海道大学 2001）、文学修士（北海道大学大学院文学研究科 1980）【専攻・専門】歴史学 中国南部地域（広西・貴州等）のチワン（壮）族をはじめとする諸民族の歴史民族学的研究【所属学会】日本文化人類学会、史学会、宋代史研究会、北海道大学東洋史談話会、北大史学会、漢民族研究学会（中国）、壮学学会（中国）

【主要業績】

[単著]

塚田誠之

2000 『壮族文化史研究——明代以降を中心として』東京：第一書房。

[編著]

塚田誠之編

2016 『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』東京：風響社。

[論文]

塚田誠之

2016 「壮族の『民族英雄』儂智高に関する研究の動向と問題点」『国立民族学博物館研究報告』40(3)：411-453。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国南部・広西におけるチワン族の歴史の資源化に関する研究

・研究の目的、内容

中国の急速な経済発展にともない、歴史が資源化されている。それは、中華民族の一体性の構築に活用され、観光開発による実利の獲得など多様な目的と形態で進行している。歴史の資源化は、政府・知識人・企業・一般民衆など諸主体が対立、交渉、妥協しあいながら進行している。

本年度は、中国南部・広西におけるチワン族の歴史の資源化を対象として調査研究を進める。まず、チワン族の土着の権力者「土司」に関する史跡が、いかなる主体によってどのように資源化されているのかについて、調査研究を行う。さらに、チワン族の「民族英雄」として扱われている儂智高をめぐる史跡や記念活動の調査を行い、儂智高が誰によってどのように資源化されているのか検討を行う。くわえて、漢族の地域集団「六甲人」の歴史と現状についても調査を行う。外部資金として、科学研究費補助金「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（基盤研究A、課題番号15H02615、平成27-29年度）により調査を行う。

・成果

10月22日に公開国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」を開催し、中国において歴史がいかに資源化されているのかについて、政府・知識人・民衆等の諸主体の役割に留意しながら、民族英雄、史跡・景観・文物、記録・記憶・伝承といった問題領域に分けて、研究の最前線から最新の事例に基づいて掘り下げた検討を行い今後の課題を確認した。同シンポジウムは、館長リーダーシップ経費成果公開プログラム、科学研究費補助金「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（基盤研究A、課題番号15H02615、平成27-29年度、代表者塚田誠之）、国立民族学博物館共同研究「資源化される『歴史』——中国南部諸民族の分析から」（代表者長谷川清）とのマッチングで行われた。

11月に中国雲南省文山州で、上記科研費による調査を行い、儂智高を記念する祭祀活動に関する情報を収集した。とともに儂智高が村落単位での地域社会の守護神、豊作をもたらす神として、住民のアイデンティティの核心になっていることを把握した。

さらに、6月に広西壮族自治区三江県で、漢族の地域集団「六甲人」の歴史と現状について調査を行い、彼らの一部が移住先でトン族の文化的影響を受容し民族成分の上でトン族になったが、同時に六甲人としての移住史・自己意識を維持していることを把握した。なお、以上のほか、6月15日に中国広西師範大学歴史文化与旅游学院にて招待講演「我的壮族研究——兼論日本壮族研究動向」を行った。

◎出版物による業績

〔その他〕

Tsukada, S.

2016 Looking Back at my Zhuang Research. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 43: 1-5.

塚田誠之

2017 「中国の鉄道の今むかし」『月刊みんぱく』41(3): 10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年10月22日 「主旨説明」国際シンポジウム『中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月15日 招待講演「我的壮族研究——兼論日本壮族研究動向」中国広西師範大学歴史文化与旅游学院

2016年10月24日 廖国一報告「キン族伝統文化の保護及び開発」のコメントーター、第281回北海道大学東洋史談話会、北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟

・広報・社会連携活動

2017年1月13日 「チワン（壮）族の暮らしと文化資源」大阪府高齢大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館

2017年1月20日 「チワン（壮）族とベトナム民族との交流」大阪府高齢大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館

・研究講演

2017年3月15日 退職記念講演「私の民族研究をふり返って」国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年6月19日～7月2日—中国（広西におけるチワン族・漢族の歴史・文化の資源化の調査）

2016年11月20日～12月1日—中国（雲南文山州におけるチワン族の歴史・文化の資源化の調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（基盤研究（A））研究代表者

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]———教授

1959年生。【学歴】オークランド大学卒（1981）、オークランド大学大学院修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院博士課程修了（1990）【職歴】科学技術庁特別研究員（農水省野菜茶業試験場）（1990）、日本学術振興会特別研究員（京都大学理学部）（1993）、国立民族学博物館第4研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）【学位】Ph.D.（オーストラリア国立大学 1990）、M. Sc.（オークランド大学 1984）【専攻・専門】先史学、民族植物学【所属学会】Society for Economic Botany, Indo-Pacific Prehistory Association, Society of Writers, Editors and Translators, International Aroid Society, European Association of Science Editors, World Archaeology Congress, Royal Society of New Zealand

【主要業績】

[単著]

Matthews, P. J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History* (Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

Spriggs, M., D. Addison and P. J. Matthews (eds.)

2012 *Irrigated Taro (*Colocasia esculenta*) in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Ahmed, I, P. J. Matthews, P. J. Biggs, M. Naeem, P. A. McLenachan, and P. J. Lockhart.

2013 Identification of chloroplast genome loci suitable for high-resolution phylogeographic studies of *Colocasia esculenta* (L.) Schott (Araceae) and closely related taxa. *Molecular Ecology Resources* 13(5): 929-937.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1. Wild Taro Research Project (Matthews project)
2. Conservation of Traditional Plant Knowledge Among Ethnic Minorities in Marginal Areas, and Assessment of the Impacts of Local and Global Development. Collaborative research project led by Kazuo Watanabe, Tsukuba University.
3. Natural and Cultural History of the Paper Mulberry (*Broussonetia papyrifera*) in Asia and the Pacific (Matthews project).
4. George Brown Collection Info-Forum Project (2014-15). Project leader: Isao Hayashi, National Museum of Ethnology.
5. The 8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th Aug.-2nd Sept. 2016. Art & Archaeology Theme Co-organiser.

・研究の目的、内容

The main focus for 2016 was writing and publishing, further studies of taro and its relatives (Araceae), and participation in the 8th World Archaeology Congress, Kyoto 28th Aug. – 2nd Sept. 2016.

・成果

1. Wild Taro Research Project: Investigation of the natural and cultural history of taro and other edible aroids in Asia and the Pacific.

A new application to JSPS for Kaken B funding was submitted in October 2016. Field samples of *C. formosana* from Taiwan have been accessioned catalogued, and mapped at the Field Sciences Laboratory, after further discussion with co-collector Mr Kun-Chan Tsai.

2. Conservation of Traditional Plant Knowledge.

(a) In collaboration with Tsukuba University, I was able to attend the 1st International Agrobiodiversity Congress, Nov. 6–9, 2016, New Delhi, India, and then join a conference field trip to Kerala, southern India and make further observations on the distribution and uses of wild taro in India.

3. Natural and Cultural History of the Paper Mulberry.

(a) A report on this subject was presented in poster form as part of the exhibition, Garden of Fragments, held at the satellite venue of Ryosokuin Temple, Kenninji, Kyoto (8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th August 28 – 2nd September).

(b) Collaboration with colleagues in Chile and Taiwan resulted in the following journal publication: 2016 Peñailillo, J, G Olivares, X Moncada, C Payacán, C-S Chang, K-F Chung, PJ Matthews, A Seelenfreund, and D Seelenfreund, Sex distribution of paper mulberry (*Broussonetia papyrifera*) in the Pacific. PLoS ONE 11(8) e0161148.

4. George Brown Collection Info-Forum Project.

(a) Further content was developed for the George Brown Collection database at Minpaku, based on information provided by project research visitors, and based on my own study at museums in the United Kingdom, in FY 2015.

(b) The following spoken presentation introduced issues arising from the Project: PJ Matthews, Integrating local plant knowledge into wider knowledge systems: an example of work-in-progress for the George Brown Collection Info-forum Project. Spoken presentation for: Environmental Knowledge and Material Culture (Minpaku/RIHN Pre-workshop), National Museum of Ethnology, Osaka, 14th Feb. 2017.

(c) Correspondence with colleagues involved in Pacific research continued with the aim of developing the research network needed to support development of the Project.

5. The 8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th Aug.-2nd Sept. 2016. As co-organiser for Art & Archaeology Theme of this conference, I was responsible for administration and coordination of 11 academic sessions and the Garden of Fragments exhibition held in Kyoto during the Congress.

Collaboration

For research, writing and conference purposes, collaboration will continue with the following persons.

Dr E. Maribel Agoo, De La Salle University, Taft, Manila.

Dr Nicole Boivin, Research Laboratory for Archaeology & the History of Art, University of Oxford, Oxford.

Dr Ibrar Ahmed, Quaid-i-Azam University, Islamabad.

Dr Kuo-fang Chung, Academia Sinica, Taipei.

Dr John Ertl, Kanazawa University

Dr Ilaria M. Grimaldi, Rome.

Dr Robin Hide, Australian National University, Canberra.

Dr Danny Hunter, Bioversity International, Rome.

Dr Lila Janik, Cambridge University.

Dr Peter Lockhart, Massey University, Palmerston North.

Dr Chun-Lin Long, Minzu University of China, Beijing.

Dr Domingo A. Madulid, De La Salle University, Taft, Manila.

Dr Melanie P. Medecilo, De La Salle University-Dasmariñas, Manila.
 Dr Dilip K. Medhi, Guwahati University, Assam.
 Dr Nguyen Van Dzu, Institute for Ecology and Biological Resources, Hanoi.
 Mr Rhys Richards, Paremata Press, Wellington.
 Ms Aki Sahoko, Illustrator, Osaka.
 Mr Isamu Sakamoto, paper conservator, Tokyo.
 Dr Andrea Seelenfreund, Universidad Academia Humanismo Cristiano Santiago.
 Dr Daniela Seelenfreund, Universidad de Chile, Santiago.
 Dr Glenn Summerhayes, Otago University.
 Mr Danny Tandang, National Museum of the Philippines, Manila.
 Dr Craig Volker, University of Bern.
 Dr Kazuo Watanabe, Tsukuba University.
 Dr Yasuyuki Yoshida, Kanazawa University.

Publication in press:

PJ Matthews "Evolution and domestication of clonal crops" In: D. Hunter et al. (eds) Handbook of Agricultural Biodiversity, Earthscan.

Conference presentations.

PJ Matthews (with Ibrar Ahmed and Nguyen Van Dzu). 'Sympatry of *Colocasia esculenta* (taro) and its wild relatives in Southeast Asia: Implications for a commensal model of domestication For: What is Different About Early Agriculture in the Wet Tropics? (Session), 8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th August - 2nd Sept., 2016 (Talk).

PJ Matthews, 'The cat-tail reed (*Typha latifolia*): a wetland icon of abundance, beauty, and danger?' For: Art and Archaeology (Theme), 8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th August - 2nd Sept., 2016 (Poster).

Public outreach & exhibition

Website creation and administration:

- (1) The Research Cooperative (<http://researchcooperative.org>, an international, open-access social network and meeting place for researchers, students, editors, translators, illustrators and educational publishers).
- (2) "Wild Taro Research Project" (public website for recording progress of the project). The site was transferred to: <https://researchcooperative.org/wild-taro-research-project>
- (3) A new website was created on behalf of the New Zealand Studies Society-Japan: <http://nzstudies.org>
- (4) Exhibition: *Garden of Fragments*, Ryosokuin Temple, Kenninji, Kyoto (8th World Archaeology Congress, Kyoto, 28th August 28 - 2nd September) (Co-organiser with S. Aki and O. Nakamura).

Publications

- 2017 Matthews, PJ, PJ Lockhart and I Ahmed, Phylogeography, ethnobotany, and linguistics: Issues arising from research on the natural and cultural history of taro *Colocasia esculenta* (L) Schott. Man in India 97(1): 353-380.
- 2016 Nguyen, VD, PJ Matthews, I Ahmed, CS Nguyen, *Colocasia yunnanensis* (Araceae), a new record for the flora of Vietnam. The Journal of Japanese Botany 91: 223-229.
- 2016 Peñailillo, J, G Olivares, X Moncada, C Payacán, C-S Chang, K-F Chung, PJ Matthews, A Seelenfreund, and D Seelenfreund, Sex distribution of paper mulberry (*Broussonetia papyrifera*) in the Pacific. PLoS ONE 11(8) e0161148.

◎出版物による業績

[論文]

- Nguyen, V. D., P. J. Matthews, I. Ahmed, C. S. Nguyen, *Colocasia yunnanensis* (Araceae)
 2016 A new record for the flora of Vietnam. *The Journal of Japanese Botany* 91: 223-229.
- Peñailillo, J., G. Olivares, X. Moncada, C. Payacán, C-S Chang, K-F Chung, P. J. Matthews
 2016 Sex distribution of paper mulberry (*Broussonetia papyrifera*) in the Pacific. *PLoS ONE* 11: 8.

Matthews, P. J., P. J. Lockhart and I. Ahmed

2017 Phylogeography, ethnobotany, and linguistics: Issues arising from research on the natural and cultural history of taro *Colocasia esculenta* (L) Schott. *Man in India* 97(1): 353-380.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年1月28日 Building a house without walls and roof: archaeological reconstruction from the perspective of plant domestication and crop history. Ethnography of Archaeology (Workshop), National Museum of Ethnology.

2017年2月14日 Integrating local plant knowledge into wider knowledge systems: an example of work-in-progress for the George Brown Collection Info-forum Project. Environmental Knowledge and Material Culture (Minpaku/RIHN Pre-workshop), National Museum of Ethnology.

2017年3月26日 Perception gaps that may explain the status of taro as an 'orphan crop', despite its global distribution and utilization. 《Symposium by the Special Research Project of Minpaku》Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology, National Museum of Ethnology.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年8月28日 (with I. Ahmed and V.D. Nguyen) Sympatry of taro (*Colocasia esculenta*) and its wild relatives in Southeast Asia. 8th World Archaeology Congress, Kyoto.

2016年8月28日 The cat-tail reed (*Typha latifolia*): a wetland icon of abundance, beauty, and danger? 8th World Archaeology Congress, Kyoto.

◎調査活動

・海外調査

2016年11月3日～11月15日—インド (1st International Agrobiodiversity Congress への参加及び Kerala での野外調査)

2017年2月28日～3月5日—ベトナム (ベトナムの Institute of Ecology and Biological Resources と民博の間で学術協定を締結するための事前調査)

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ「比較技術研究演習Ⅰ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「辺境少数民族地帯での植物利用および伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価」（研究代表者：渡邊和男）研究分担者

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]——教授

【学歴】東北大学文学部社会学科社会学専攻卒（1988）、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了（1992）、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了（1998）【職歴】花王株式会社本社チェーンストア部（1988）、国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）【学位】Ph.D.（ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998）、M.Sc.（ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992）【専攻・専門】社会人類学 1）水俣病被害者支援運動の人類学的研究、2）タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute

【主要業績】

[単著]

平井京之介

2011 『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT 出版。

[編著]

平井京之介編

2012 『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』 京都：京都大学学術出版会。

Hirai, K. (ed.)

2015 *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

水俣病支援運動の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人びとが水俣病被害者を支援する運動を通じて新たにコミュニティを形成し、国家や社会との関係をつくりかえようとする過程を、人類学的アプローチを用いて明らかにする試みである。本研究では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援 NPO をコミュニティという観点から調査研究することによって、1970年代半ばから現在までのあいだに、この運動の活動や組織、関係性、資源と、そこに参加する人びとの志向する社会のイメージがいかに変化してきたか、またその過程において、国家統治や資本主義との関係をどのように変化させてきたかを解明することを目的とする。

・成果

平成25年から27年度にかけて実施した科学研究費助成事業プロジェクト（基盤研究C）「水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究」のなかで収集した民族誌的データの整理をするとともに、新たに文献研究を遂行し、成果刊行のための準備を進めた。また、主な調査対象である NPO の歴史的変容過程を明らかにするための補足調査とともに、新たにリニューアルオープンした水俣市立水俣病資料館の水俣病事件に関する展示について調査研究を実施した。

◎出版物による業績

[論文]

Hirai, K.

2016 Preserving the community: the rise of museum movements in rural Thailand. In S. Tanabe (ed.) *Communities of Potential: Social Assemblages in Thailand and Beyond*, pp.165-184. Chiang Mai: Silkworm Books. [共同研究成果]

[その他]

平井京之介

2016 「水俣病資料館の展示リニューアル」『月刊みんぱく』40(8)：4-5。

2016 「東南アジアの仏教（1）」『毎日小学生新聞』8月27日。

2016 「東南アジアの仏教（2）」『毎日小学生新聞』9月3日。

2016 「東南アジアの仏教（3）」『毎日小学生新聞』9月10日。

2016 「東南アジアの仏教（4）」『毎日小学生新聞』9月17日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月25日 コメンテーター、セッション3「地域文化を活用する」国際フォーラム『地域文化の発見、保存、活用』台湾大溪多目的文化体育館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月18日 'Storytelling as Political Practice: An Anthropological Study of the Minamata Disease Movement.' Roundtable on Democracy and Social Movements in East Asia, 台湾交通大学

2016年4月20日 'Museum as Sites of Contestation: The Representation of the Minamata Disease Incident.' デパートメントセミナー、台湾交通大学人文社会科学部

・広報・社会連携活動

2016年8月7日 「僕のフィールドワーク論——微笑みの国の工場から」三省堂書店神保町本店

◎調査活動

・国内調査

2016年5月25日～5月30日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2016年9月21日～9月25日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2017年1月21日～1月22日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2017年2月21日～2月23日—熊本県熊本市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2017年3月11日～3月14日—熊本県熊本市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

・海外調査

2016年4月16日～4月24日—台湾（国立交通大学においてワークショップ、講演会に参加及び中央研究院民族学研究所において東アジアの社会運動についての人類学的研究）
2016年11月24日～11月27日—台湾（国際フォーラム「地域文化の発見、保存と活用」への参加と発表）

◎上記以外の研究活動

・他の機関から委嘱された委員など

「水俣病資料館資料整理等に係る業務・専門家会議委員」（熊本大学文学部）

横山廣子 [よこやま ひろこ] ————— 教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1977）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1981）

【職歴】 東京大学教養学部助手（1981）、東洋英和女学院短期大学国際教養科専任講師（1986）、東洋英和女学院大学人文学部社会科学科助教授（1989）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2015）【学位】 社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1981）【専攻・専門】 文化人類学 1）雲南省大理白族社会の研究、2）中国における国家とエスニシティに関する研究、3）中国西南部から東南アジア大陸部における民族集団の移動と包摂に関する研究【所属学会】 日本文化人類学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

横山廣子編

2004 『少数民族の文化と社会の動態——東アジアからの視点』（国立民族学博物館調査報告50）大阪：国立民族学博物館。
2001 『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告20）大阪：国立民族学博物館。

[共編]

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

2001 『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

An Anthropological Study on the Dynamics of Culture and Society in East Asia

・研究の目的、内容

中国や日本など東アジアにおいては近年、政治・経済・科学技術・環境の変化などにもともない、人々の生活のあり方が大きく変化してきている。現地調査や民族誌的データに基づき文化や社会がどのように変化し、どのような社会的課題が生じているのかを実証的に明らかにし、それらを比較考察することにより、東アジアの文化と社会の動態を分析・解明する視座を提供する。

・成果

日本の盆行事のような、東アジア地域に広範に見られる夏の死者儀礼について、中国と日本を中心にその歴史的起源や背景に関する研究や関連資料を整理すると同時に、地域事例の比較考察をおこなった。東アジアにおける共通性の基盤として、盂蘭盆経典を根拠とする仏教的思想と儀礼、太陰太陽暦、道教における7月15日の

中元節が相互影響しながら旧暦7月15日の死者儀礼が中国大陸で形成され、周辺に普及した歴史的過程を明らかにした。また、それが東アジア各地の儀礼として継承されていく過程において、それぞれ宗教儀礼のみならず、演劇や娯楽性を備えた多様な展開を見せていることが明らかになった。一般に中国東南部や海外華人地域においては、祖先祭祀と並んで、孤魂の救済の要素の比重が大きい。漢族の影響を大きく受けた少数民族であるペー族の場合、祖霊の迎えと送りが中心をなす、日本の盆行事に似た様相を示す。以上の研究成果は、2017年3月4日～5日に民博で開催した国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼——」において「お盆、中元、鬼節、百種——東アジアの7月の儀礼」と題した研究報告で発表した。今後、日本語と中国語で刊行する予定である。

中国文化を継承するムスリムという特徴を有する回族について、雲南省の大理盆地において取材した映像素材をもとに、民博ビデオテーク番組、「新築祝い 雲南省回族の家屋落成式典」(24分16秒)、「回族の村の生活 雲南省大理盆地のイスラム教徒」(12分8秒)、「アラビア書道家 雲南省大理市南五里橋村の回族」(27分28秒)」の3本を編集し、完成させた。

◎出版物による業績

[その他]

横山廣子

2016 「フィールドワーク①身体化された文化」『毎日新聞』11月10日。

2016 「フィールドワーク②調査への身支度」『毎日新聞』11月17日。

2016 「フィールドワーク③参与観察」『毎日新聞』11月24日。

2016 「フィールドワーク④当惑は発見の母」『毎日新聞』12月1日。

2016 「他人のための行動、当たり前」(先住民族を知ろう8)『朝日小学生新聞』11月20日。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

ビデオテーク番組

2017 『新築祝い 雲南省回族の家屋落成式典』国立民族学博物館海外映像音響資料(24分16秒、2012年撮影、2017年製作)

2017 『回族の村の生活 雲南省大理盆地のイスラム教徒』国立民族学博物館海外映像音響資料(12分8秒、2010、2012年撮影、2016年製作)

2017 『アラビア書道家 雲南省大理市南五里橋村の回族』国立民族学博物館海外映像音響資料(27分28秒、2012年撮影、2016年製作)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

2016年10月22日 「総合討論コメント」国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」国立民族学博物館

2017年3月4日 「お盆、中元、鬼節、百種——東アジアの7月の儀礼」『現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼』国立民族学博物館

◎大学院教育

地域文化学専攻長

・指導教員

主任指導教員(2人)、副指導教員(1人)

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会「学会賞検討委員会」委員、総合研究大学院大学全学入試委員会委員

宇田川妙子 [うだがわ たえこ] ————— 准教授

1960年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒(1982)、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了(1984)、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退(1990)【職歴】東京大学教養学部助手(1990)、中部大学国際関係学部講師(1992)、中部大学国際関係学部助教授(1995)、国立民族学博物館第3研究部併任助教(1997)、金沢大学文学部助教授(1998)、国立民族学博物館先端民族学研究部併任助教授(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(2002)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2002)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教

授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2010）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科1984）【専攻・専門】文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究・ジェンダーとセクシャリティ研究・ヨーロッパ近代をめぐる問題群【所属学会】日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

[単著]

宇田川妙子

2015 『城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す』京都：臨川書店。

[共編]

宇田川妙子、中谷文美編

2007 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レビュー』京都：世界思想社。

2016 『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性（私性）という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、まずは、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。今年度は、昨年度に引き続き、特に地域性との関わりから考察をしていく。

・成果

地域性の問題については、すでに科学研究費基盤研究C「現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究」（2014-2017）を取得し、本年度はその3年目として、昨年度同様に9月後半から約3週間ローマ近郊での現地調査を行い、地域性をめぐる人々の意識の変容に関する具体的な資料収集をおこなった。

また、イタリアの地域性を考えるためには、食という観点も有効である。そのため今年度は、その出発点として、イタリアにおける食研究の動向調査を始めると同時に、自身のこれまでの調査地における知見をまとめ、論点整理を行った。その成果の一端は、以下の発表および報告書で公表されている。

〈研究発表〉

2016年6月25日 関西学院大学EU情報センター主催 ミニ・シンポジウム「食文化・食生活の日欧比較」、「イタリアにおける食の多様な意味」（大阪茶屋町アブローズ）。

〈報告書〉

2016年 「イタリアにおける食の多様な意味」、『関西学院大学EU情報センター（EUi）主催 ミニ・シンポジウム 食文化・食生活の日欧比較 報告書』、5-17頁、http://www.kwansei.ac.jp/i_industrial/attached/0000103294.pdf（最終アクセス2016年11月4日）

◎出版物による業績

[編著]

信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編

2017 『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』京都：昭和堂。[査読有、共同研究成果]

[論文]

宇田川妙子

2017 「市場を変える、地域から変える——イタリアの社会的協同組合の模索」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』pp.271-292, 京都：昭和堂。[査読有、共同研究成果]

[その他]

宇田川妙子

- 2016 「海と大陸——移民とは誰のことか」小長谷有紀ほか編『ワールドシネマ・スタディーズ』pp.229-236, 東京:勉誠出版。
- 2016 「人生ここにあり!——イタリアの社会的協同組合という挑戦」小長谷有紀ほか編『ワールドシネマ・スタディーズ』pp.237-244, 東京:勉誠出版。
- 2016 「パールという名のサロン——イタリアの喫茶店」『Vesta』103:20-21, 東京:味の素の文化センター。
- 2016 「ニョッキ」『月刊みんぱく』40(7):14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2017年3月5日 「イタリアの『地産地消』——食のローカリティを問い直す」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト民博ユニット「文明社会における食の布置」成果公開一般講演会『人間と食との関係をとらえなおす』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2016年12月17日 「サブスタンスのリアリティ?——サブスタンス概念の有効性を検討するために」共同研究『グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究』秋田大学

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年6月25日 「イタリアにおける食の多様な意味」関西学院大学EU情報センター主催ミニ・シンポジウム『食文化・食生活の日欧比較』大阪茶屋町アブローズ
- 2016年12月10日 「『労働(仕事)』をつくる人たち——現代イタリア社会における『労働』」京都人類学研究会12月季節例会『「仕事」への人類学的アプローチ——家事、労働、手仕事から考える』京都大学
- 2017年3月3日 「ジェンダー人類学(研究)の軌跡からみるジェンダーの複雑さ」I-URIC フロンティアコロキウム分科会3、ホテルアソシア静岡

・広報・社会連携活動

- 2016年7月27日 「城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店
- 2016年11月22日 「イタリアの町からグローバル社会を見直す」阪神シニアカレッジ国際理解学科、尼崎市中小企業センター

◎調査活動

・海外調査

- 2016年9月21日～10月16日—イタリア(現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究に関わる調査研究)
- 2017年3月6日～3月19日—イタリア(イタリアにおける食研究の動向調査)

◎大学院教育

・指導教員

副指導 1名

・大学院ゼミでの活動

地域文化学基礎演習(1年生ゼミ)

太田心平 [おおた しんぺい]——准教授

1975年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒(1998)、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了(2000)、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得(2003)、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了(2007)【職歴】日本学術振興会特別研究員(PD)(2004)、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手(2005)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教(2007)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2010)、アメリカ自然史博物館上級研究員(2011)、国立民族学博物館民族社会研究部助教(2012)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授(2013)、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻併任准教授(2014)【学位】博士(人間科学)(大阪大学2007)、修士(人間科学)(大阪大学2000)【専攻・専門】社会文化人類

学、北東アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、Association for Asian Studies（米国）、韓国・朝鮮文化研究会

【主要業績】

[論文]

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304-336, 京都：昭和堂。

Ota, S.

2015 Collection or Plunder: the Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement. *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91) pp.179-193. Osaka: National Museum of Ethnology.

2006 Ryohan: Anthropology of Knowledge and the Japanese Representation of Korean Yangban under Colonialization. *Korean Cultural Anthropology* 39(2): 85-128 (韓国語)。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に2つの柱を立て、それらを中心として研究を推進した。

第1の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ-ミクロ双対性をもっていたのかを明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとした。援用したのは、20世紀後半の社会科学がイデオロギーに着目する反面で、軽視してきたユートピアという概念である。対象化したのは、先行研究が民衆に寄り添うあまり、蔑ろにしてきた知識人社会である。

第2の柱は、現在進行形の事象を研究対象とするものであり、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、科学研究費（若手研究（B））（課題番号：25871066、平成25～28年度）を研究代表者として受諾している。また、研究者はアメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業しているが、この兼業の研究課題はこの分野である。日米韓の3ヶ国においてフィールドワークをはじめるとともに、並行して文献研究を進め、欧州諸国における比較調査も進めることで、研究の効率化をはかった。

・成果

第1の柱、韓国・朝鮮の社会文化の「民主化」前後のマクロ-ミクロ双対性の研究に関しては、国際学会に3本の学術発表を申請した。そのうち、採択され、かつ予算措置が可能だった1本、ソウル大学人類学科の「BK+」事業（日本のGPないしCOEにあたる国家戦略的な研究教育イニシアティブのひとつ）による国際会議で発表した。ここでのコメントをふまえ、英文の論文を作成し、学術雑誌に投稿中である。

第2の柱、韓国・朝鮮の社会文化の現在進行形の編成メカニズムに関しても、これまで国際ワークショップでおこなった2本の学術発表の内容をとりまとめ、英文の論文2編を作成し、公刊を待っている。なお、この研究につき受託している科学研究費（若手研究（B））（課題番号：25871066、平成25～28年度）は、海外研究協力者側の事情により予定していた補足調査がおこなえなかったため、平成29年度まで延長を申請し、許可された。

この他、日本の中堅研究者とともに、初学者むけの文化人類学および東アジア文化論の教科書を、上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大（編）『東アジアで学ぶ文化人類学』（昭和堂、2017年）として共同編集した。現在、刊行準備中である。

◎出版物による業績

[論文]

Ota, S.

- 2016 「이민동기의 비합리성 : 2000년대 절망 이민과 2010년대 탈-헬-조선 이민과의 비교를 바탕으로」
(Irrationality of Migration Motives: Comparison of Emigrants with No Hope in the 2000s and
Escapees from Hell-Chosun in the 2010s) 『글로벌 한국학과 이주·이산의 인류학』 pp.221-230。

[その他]

太田心平

- 2016 「カフェとは」『Vesta (食の文化誌ヴェスタ)』103 : 6-11, 東京 : 味の素食の文化センター。
2016 「つねに何かが起きている場所——米国ニューヨークの猫カフェから」『Vesta (食の文化誌ヴェスタ)』103 : 36-37, 東京 : 味の素食の文化センター。
2016 「ソウルの巨大デモ」『月刊みんぱく』40(8) : 10-11。
2017 「韓国人観覧者の視点から学んだマトリックス展示法」『文部科学教育通信』408 : 2。

◎映像音響メディアによる業績

・展示場内の映像

[朝鮮半島の文化展示]

太田心平監修・出演

- 2016 「展示概要」(日本語、英語、韓国語、中国語)
2016 「精神世界」(英語、中国語)
2016 「住の文化」(英語、中国語)
2016 「食の文化」(英語、中国語)
2016 「衣の文化」(英語、中国語)
2016 「知の文化」(英語、中国語)
2016 「遊びの文化」(英語、中国語)
2016 「これまでの展示」(英語、中国語)
2016 「電子ガイド」(英語、中国語)
2016 「ビデオテーク」(英語、中国語)
2016 「みんぱく」(英語、中国語)

・電子ガイドの制作・監修

[中央・北アジアの文化展示]

太田心平監修

- 2017 「550 カザフの天幕」(韓国語)
2017 「551 カザフの定住家屋の室内」(韓国語)
2017 「552 ウズベキスタンの民家の台所」(韓国語)
2017 「554 織機」(韓国語)
2017 「556 中央アジアのイスラーム」(韓国語)
2017 「557 女性の装い」(韓国語)
2017 「558 ゆりかご」(韓国語)
2017 「559 カザフの結婚」(韓国語)
2017 「560 社会主義の時代」(韓国語)
2017 「561 モンゴルが経験した社会主義」(韓国語)
2017 「564 エンフパト家のゲル」(韓国語)
2017 「565 エンフパト家の家財道具 (夫の語り)」(韓国語)
2017 「566 エンフパト家の家財道具 (妻の語り)」(韓国語)
2017 「574 チュクチの暮らし (トナカイ飼育)」(韓国語)
2017 「575 チュクチの暮らし (海岸)」(韓国語)
2017 「576 樹皮製カヌー」(韓国語)
2017 「577 ワナ」(韓国語)
2017 「579 シャマニズムの世界」(韓国語)

[アイヌの文化展示]

- 2017 「600 アイヌ文化の成り立ち」(韓国語)
- 2017 「601 交易」(韓国語)
- 2017 「602 衣文化」(韓国語)
- 2017 「603 伝統的な住まい」(韓国語)
- 2017 「604 食文化」(韓国語)
- 2017 「605 狩猟と漁労」(韓国語)
- 2017 「606 イナウ」(韓国語)
- 2017 「607 まじない」(韓国語)
- 2017 「608 祭壇模型の複製」(韓国語)
- 2017 「609 アイヌ文化と観光」(韓国語)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年10月22日 “이민동기의 비합리성 : 2000년대 절망 이민과 2010년대 탈-헬-조선 이민과의 비교를 바탕으로,” 서울대학교 인류학과・BK21플러스사업단 “글로벌 한국학과 이주・이산의 인류학,” Seoul: 서울대학교 아시아연구소. (“Irrationality of Migration Motives: Comparison of Emigrants with No Hope in the 2000s and Escapees from Hell-Chosun in the 2010s,” Department of Anthropology at Seoul National University & BK21Plus Group, “Global Korean Studies and Anthropology of Migration and Diaspora: Outbound Migration of Koreans and Korean Diaspora,” Seoul: Seoul National University Asia Center.

・研究講演

- 2016年4月28日 ‘The Enigmatic Legend of Feminized Men: A Sociocultural History of a Scholar-Bureaucrat Family in Gyeonggi Province’, Colloquium Series on Korean Cultural Studies. New York, Columbia University.
- 2016年12月3日 「『キムジャン』にみる韓国のご近所づきあい」堺市博物館第15回無形文化遺産理解セミナー、堺市博物館

・展示

- 本館展示「朝鮮半島の文化」部分改修
- 堺市博物館「コーナー展示 食がつかげる絆——韓国の『キムジャン』にみる分かちあいの文化」(無形文化遺産理解事業2016) 監修
- 開館40周年記念特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」ワーキング

・広報・社会連携活動

- 2016年4月13日 視察団受入：国立釜慶大学（大韓民国）「東南アジア文化体験博物館」
- 2016年1月12日 視察団受入：亜州大学（大韓民国）社会学科海外踏査団
- 2017年3月31日 視察団受入：観光文化体育省（大韓民国）

・みんなくウィークエンド・サロン

- 2016年10月16日 「人間にとってカフェとは何か？」第441回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

- 2016年4月20日～5月28日—アメリカ（コロンビア大学ウェザーヘッド東アジア研究所において歴史的エリート層についてのコロキウム・シリーズに参加及び調査）
- 2016年7月12日～10月13日—アメリカ（博物館展示の再編過程に関する研究成果の現地還元及び補足調査）
- 2016年12月9日～2017年1月9日—アメリカ（博物館展示の再編過程に関する研究成果の現地還元と補足調査）

◎大学院教育

・指導教員

- 主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

・総研大の開講科目

- 博物館研究演習Ⅰ（前期）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究（B））「博物館展示の再編過程の国際比較による『真正な文化』の生成メカニズムの解明」研究代表者、機関研究「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（研究代表者：飯田 卓）研究分担者、人間文化研究機構地域研究ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア」ワーキングメンバー

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

アメリカ自然史博物館人類学部門（アメリカ合衆国）上級研究員、味の素の文化研究所編集企画委員、堺市博物館無形文化遺産理解事業2016アドバイザー

- ・非常勤講師

大阪大学大学院人間科学研究科「政治経済の人類学」

佐藤浩司 [さとう こうじ] ————— 准教授

【学歴】 東京大学工学部卒（1977）、東京大学大学院修士課程修了（1983）、東京大学大学院博士課程単位取得（1989）

【職歴】 国立民族学博物館助手（1989）、国立民族学博物館助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）

【学位】 工学修士（東京大学工学部 1989）【専攻・専門】 建築史学、民族建築学【所属学会】 建築史学会、民俗建築学会、家具道具室内史学会

【主要業績】

[編著]

佐藤浩司編

1998～1999 『シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1～4』 京都：学芸出版社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

東南アジア木造建築史の再構築

- ・研究の目的、内容

東南アジアの木造建築史を概観するための資料の作成と東南アジア史の再構築（継続）

- ・成果

科研「伝統的生産システムによる保存手法の研究——熱帯地域木造建造物保存の国際共同研究」（代表：上北恭史・筑波大学）により、インドネシアのニマス島、スマトラ島、スンバ島、バリ島、ジャワ島で調査に従事。成果はホームページにて逐次公開。

<http://www.sumai.org/index.html>

文化資源プロジェクト「三次元CGを利用した民族建築デジタルアーカイブの構築」によりデータベース「3次元CGで見せる建築データベース「東南アジア島嶼部の木造民家」」を作成、公開。

<http://htq.idc.minpaku.ac.jp/databases/3dcgl/>

<http://www.sumai.org/3dcg/>（もっか上記は館内公開のためmirrorサイト）

◎映像音響メディアによる業績

3次元CGで見せる建築データベース「東南アジア島嶼部の木造民家」

◎調査活動

- ・海外調査

2016年7月17日～8月6日—インドネシア（インドネシアにおける木造建築物の保存手法にかかる調査研究）

2017年3月18日～3月25日—インドネシア（インドネシアにおける木造建築物の保存手法にかんする調査研究）

1963年生。【学歴】セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、津田塾大学大学院国際関係学研究科博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第2課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第3課程修了（1993）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）【学位】D. E. A. Sci. Soc（パリ第5大学大学院社会科学研究科 1993）、M. Soc.（パリ第5大学大学院社会科学研究科 1992）、国際関係学修士（津田塾大学大学院国際関係学研究科 1992）【専攻・専門】文化人類学（西アフリカ研究）【所属学会】アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

Charbit, Y. et T. Mishima (éds.)

2014 *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

[論文]

Mishima, T.

2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké : Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima (éds.) *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

三島禎子

2011 「民族の離散と回帰——ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井 洋監修・編，小川充夫編『グローバル・ディアスポラ』pp.105-130，東京：明石書店。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカ商業民の財の形成と継承に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

アフリカ商業民によるアジア・アフリカ間貿易は、中国経済の拡大とともに今日のアフリカ経済の主要な現象のひとつになっている。西アフリカに故地をもつソニンケ民族は、地球規模の民族ネットワークでつながり、他の集団に先駆けてこの新しい経済機会をとらえた。その経済倫理には民族文化の伝統が受け継がれていると考えている。

10世紀以上前から商業民として知られるソニンケ民族は、民族文化とともにある種の「財」を継承してきたと考えられる。この有形・無形の「財」の本質と、継承の形態について調査し、移動と商業を生業とするソニンケの民族文化について考察を深めるのが本研究の目的である。

他方、アフリカ商業民によるアジア・アフリカ間貿易はさきわめて日常的経済活動でもあり、多くのさまざまな人が参入している。このような今日的な現象を理解するためには、あらたな視点が必要である。個別の研究に並行して、移動先でアフリカ商業民が集住できる条件や、宗教や民族の違い、故地での動向などの視点を取り入れた大きな枠組みについても考察してゆく。

・成果

科学研究費・基盤研究B『日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア——アフリカ関係の都市人類学的研究』（H26-H28:代表・和崎春日）において、韓国におけるアフリカ系移民の実態について調査をおこなった。アフリカ系移民はもっぱら工場労働者として滞在しており、アジア・アフリカ間貿易の第一段階として資本金を作ることを目的としている。ソニンケ民族はすでにその段階を終えているので、韓国では存在が認められなかったが、多くのアフリカ系移民がソウル郊外の工業地帯で賃金労働に従事している。これらの知見から、アジア各国でのアフリカ系移民の身分や経済活動の差異が明らかになった。

◎出版物による業績

[その他]

三島禎子

2016 「サハラの交易商人から移民へ——世界を移動するソニンケ商人」『季刊民族学』157：93-103。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2016年6月22日 「セネガルの食事情——クスクスとご飯」 みんなく×ナレッジキャピタル『世界の台所第4回』、グランフロント大阪

2016年7月11日 「移民について考える——アフリカから世界へ広がる商人たち」 大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

・みんなくウィークエンド・サロン

2016年4月3日 「創られた『アフリカの』なもの——アフリカプリント」第419回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2016年10月17日～10月21日—韓国（韓国におけるアフリカ系商人の集住に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア——アフリカ関係の都市人類学的研究」（研究代表：和崎春日）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

『Revue Européenne des Migrations Internationales』編集委員（アジア担当）、『アフリカ研究』編集委員

吉岡 乾 [よしおか のぼる]————— 助教

1979年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程（アジア第三専攻）修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了（2012）【職歴】国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員PD（2013）、東京外国語大学世界教養プログラム非常勤講師（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）【学位】博士（学術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）【専攻・専門】言語学、記述言語学、ブルシャスキー語、ドマーキ語、シナー語、南アジア（パキスタン）研究【所属学会】日本言語学会、関西言語学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[博士論文]

Yoshioka, N.

2012 A Reference Grammar of Eastern Burushaski. 東京外国語大学大学院地域文化研究科。

[論文]

Yoshioka, N.

2017 Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 41(2) : 109-125. [査読有]

吉岡 乾

2014 「格配列パターンを決める動詞的要素と名詞的要素——パキスタンの言語を対照して」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』10：159-202。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、北パキスタンのギルギット・バルティスタン自治州フンザ・ナゲル県モミナバード村などで話されている、消滅の危機にある言語であるドマーキ語を中心にしつつ、ブルシャスキー語、シナー語といった周辺

言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。この研究は主に、科学研究費補助金（若手研究（A））「北パキスタン諸言語の記述言語学的研究」により進める。

・成果

2016年度は夏にインドのカシミール地方（ジャンムー・カシミール州スリナガル市）へ現地調査に行き、ブルシャスキー語スリナガル方言の実際の使用を確認、インフォーマントを得て調査を開始した。カシミーリー語についての調査も始めた。秋にはパキスタン北西部のカラーシャの谷へ8年振りに行き、カラーシャ語とカティ語の調査を再開した。初春にパキスタン北東部へ行く予定だった調査は、一時的なテロの多発を受けて見送った。

研究の成果は、論文、国際学会、国内学会での発表という形で公表した。カティ語に関して、2017年5月に国際学会で発表する予定も入っている。予定していたブルシャスキー語の参照文法（博論の直し）、ドマーキ語の文法スケッチ（参照文法の骨組みとなる、簡易な文法解説）が遅延しているので、今後集中的に取り組んでいく。

◎出版物による業績

[論文]

Yoshioka, N.

- 2016 Domaaki as a language of northern Pakistan: from a geolinguistic point of view. *Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics* (Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series 1), pp.38-45. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.
- 2016 Sun: South Asia (IE (Indic, Iranian, Nuristani), Dravidian, Andamanese, Nihali, Burushaski). *Studies in Asian Geolinguistics I*, pp.22-23. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.
- 2016 Rice: South Asia (IE (Indic, Iranian, Nuristani), Dravidian, Andamanese, Nihali, Burushaski). *Studies in Asian Geolinguistics, II*, pp.19-20. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.
- 2016 Milk: South Asia (IE (Aryan, Iranian, Nuristani), Dravidian, Andamanese, Nihali, Burushaski). *Studies in Asian Geolinguistics, III*, pp.24-25. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.
- 2017 Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 41(2): 109-125. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年4月28日 ‘Spatial expressions in Burushaski’ 32nd South Asian Languages Analysis Roundtable, Universidade de Lisboa, Portugal.
- 2016年5月8日 「32nd South Asian Languages Analysis Roundtableの報告」言語記述研究会第72回例会、京都大学
- 2016年5月24日 ‘Domaaki as a language of northern Pakistan: from a geolinguistic point of view.’ The 3rd International Conference on Asian Geolinguistics, Royal University of Phnom Penh, Cambodia.
- 2016年9月26日 ‘Using of Urdu numerals in languages of northern Pakistan’ 日本南アジア学会 第29回大会、神戸市外国語大学
- 2016年11月20日 「悲喜交々だよフィールド調査——但し、意見には個人差があります」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催「世界の言語で読む Le Petit Prince」講演企画、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 2016年11月26日 「ブルシャスキー語の文法書について」共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第2回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 2017年2月11日 「ブルシャスキー語の節連結」共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」第6回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

・研究講演

- 2016年5月14日 「言語学とは何か」（みんぱくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」①）日本財団助成

手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館

2016年6月4日 「音のつくり」（みんぱくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」②）日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館

2016年6月18日 「語のつくり」（みんぱくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」③）日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館

2016年7月8日 「言語学の研究発表・講演でこんな風に地図を使ってみた」総合研究大学院大学主催「遺伝研メソッド」によるプレゼンテーション・ワークショップ、国立民族学博物館

2016年7月9日 「文のつくり」（みんぱくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」④）日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館

2016年7月23日 「言語で伝えるもの」（みんぱくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」⑤）日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館

2016年8月6日 「色々な言語学」（みんぱくで言語学を学ぼう「楽しい言語学を学ぶ会」⑥）日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト主催、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2017年3月4日 「パキスタン北西部の“異教徒”カラーシャ人」第464回 みんぱく友の会講演会、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年7月3日 「言語と文化と翻訳：なぜ漱石は“I love you”を訳さなかったのか」第428回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2016年4月25日～5月3日—ポルトガル（第32回南アジア言語分析学会に参加、及び、ロマニー語調査）

2016年5月22日～5月26日—カンボジア（第3回アジア地理言語学会に参加）

2016年8月13日～9月13日—インド（ブルシャスキー語、カシミーリー語の調査）

2016年10月21日～11月11日—パキスタン（科研費によるカティ語、カラーシャ語、コワール語の調査、及び、文化資源研究プロジェクト経費による資料収集）

2017年1月23日～1月28日—パキスタン（南アジア地域研究経費によるパキスタン都市部の言語動態の調査、及び、文化資源研究プロジェクト経費による資料収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（代表者：三尾稔）拠点構成員、国立民族学博物館共同研究課題「高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究」（代表者：呉屋淳子）共同研究員、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法：名詞修飾表現」（代表者：ブラシャント・パルデシ）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「[アルタイ型]言語に関する類型的研究」（代表者：山越康裕）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（代表者：渡辺己）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」（代表者：遠藤光暁）研究協力者

民族文化研究部

池谷和信 [いけや かずのぶ] ————— 部長（併）教授

1958年生。【学歴】東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手（1990）、国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2009～2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2014）【学位】理学博士（東

北大学大学院理学研究科 2003)【専攻・専門】環境人類学・人文地理学・地球学・生き物文化誌学 1) 世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、2) 植民地時代における民族社会の変容に関する研究、3) 地球環境問題および地球環境史に関する研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合 (IUAES)、アメリカ人類学会 (American Anthropological Association)、日本生態学会、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会

【主要業績】

[単著]

池谷和信

- 2014 『人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える』(フィールドワーク選書5) 京都: 臨川書店。
- 2003 『山菜採りの社会誌——資源利用とテリトリー』 仙台: 東北大学出版会。
- 2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』(国立民族学博物館研究叢書4) 大阪: 国立民族学博物館。

【受賞歴】

- 2007 日本地理学会優秀賞
- 1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

狩猟採集民の移動と定住に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

現存する狩猟採集民は、もともとノマッドであるといわれてきた。しかし現在、世界的視野からみてノマッドはほとんど存在しない。彼らは、何らかの理由によって定住化を余儀なくされて本拠地をもつようになっている。本研究では、アフリカの狩猟採集民を主な対象にして、人類にとっての移動と定住の実態を把握して、それらの意味について考えることをねらいとする。

・成果

2015年5月の国際人類学民族学会・中間会議(クロアチア)のなかで、「牧畜民やノマッドの現在」“Pastoralists and Nomads Today”というパネルをもうけた(米国のエリオット・フラトキン教授との連名)。そこでは、世界の狩猟採集民、牧畜民、漁撈民などを対象にして移動と定住の議論を深めることができた。

また、Senri Ethnological Studiesの1冊として、Sedentarization among nomadic peoples in Asia and Africaが、印刷中になっている。この論文集は、オランダ、ノルウェー、インドネシア、エリトリアの4名以外は、日本からの執筆者から構成されている(合計で14名)。

◎出版物による業績

[編著]

池谷和信編

- 2017 『ピース——つなぐ・かざる・みせる』 大阪: 国立民族学博物館。
- 2017 『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 東京: 東京大学出版会。

Ikeya, K. and R. K. Hitchcock (eds.)

- 2016 *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America* (Senri Ethnological Studies 94). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

池谷和信

- 2016 「近年における歴史生態学の展開——世界最大の熱帯林アマゾンと人」水島司編『環境に挑む歴史学』pp.43-54, 東京: 勉誠出版。
- 2017 「狩猟採集民からみた地球環境史」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』pp.1-21, 東京: 東京大学出版会。

- 2017 「地球の先住者から学ぶこと」『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』pp.297-302, 東京：東京大学出版会。
- 2017 「北東アジア地域研究の新しい地平——人やものの移動からみた自然・文化・文明」『民博通信』156：4-9, 大阪：国立民族学博物館。
- Ikeya, K.
- 2016 Interaction of the San, NGOs, Companies, and the State. In K. Ikeya and Robert K. Hitchcock (eds.) *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America* (Senri Ethnological Studies 94), pp.255-267. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2016 Introduction. In K. Ikeya and Robert K. Hitchcock (eds.) *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America* (Senri Ethnological Studies 94), pp.1-15. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Ikeya, K. and S. Nakai
- 2016 Structure and Social Composition of Hunter-Gatherer Camps: Have the Mlabri Settled Permanently? In K. Ikeya and Robert K. Hitchcock (eds.) *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America* (Senri Ethnological Studies 94), pp.123-138. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Endo, H., N. Tsunekawa, K. Kudo, Y. Hayashi, K. Ikeya, N. T. Son and F. Akishinonmiya
- 2017 Musculoskeletal System of Huge Tarsometatarsal Region in the Dong Tao Fowls from North Vietnam. *The Journal of Poultry Science* 54(1): 58-65.
- [その他]
- 池谷和信
- 2016 「人と家畜のエピソード49 カンボジアの牛車 その2」『JVM 獣医畜産新報』69(4)：245。
- 2016 「人と家畜のエピソード50 バングラデシュのガヤル」『JVM 獣医畜産新報』69(5)：325。
- 2016 「アフリカとグローバル・ヒストリー（3）アフリカの環境史とグローバル・ヒストリー——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」『日本アフリカ学会第53学術大会大会プログラム・研究発表要旨集』p.135。
- 2016 「人と家畜のエピソード51 野生からペットへ——アマゾンで動物を飼う」『JVM 獣医畜産新報』69(6)：479。
- 2016 「考える舌41 バングラデシュの黒ブタ」『京都新聞』6月8日。
- 2016 「極北の民チュクチのふたつの顔」『月刊みんぱく』40(7)：9。
- 2016 「人と家畜のエピソード52 生き物文化と博物館」『JVM 獣医畜産新報』69(7)：559。
- 2016 「人と家畜のエピソード53 バングラデシュの丘陵地での豚飼育」『JVM 獣医畜産新報』69(8)：639。
- 2016 「はるかなる豚 豚のルーツと未来 第1回 イノシシから豚へ」『月刊養豚界』51(9)：42-45。
- 2016 「人と家畜のエピソード54 ライオンと人とのかわり——アフリカの獣害問題」『JVM 獣医畜産新報』69(9)：719。
- 2016 「はるかなる豚 豚のルーツと未来 第2回 世界の豚飼い——もう1つの養豚の形」『月刊養豚界』51(10)：37-40。
- 2016 「新たな民博の研究に向けて」(西尾哲夫・池谷和信・野林厚志)『民博通信』154：4-9。
- 2016 「スイカのふるさとカラハリ」『日本農業新聞』9月2日。
- 2016 「はるかなる豚 豚のルーツと未来 最終回 都市の豚」『月刊養豚界』51(11)：46-50。
- 2016 「人と家畜のエピソード55 見世物としてのゾウ」『JVM 獣医畜産新報』69(10)：799。
- 2016 「熱帯におけるイノシシ類と人——三大陸の比較から」『海外の森林と林業』97：25-29。
- 2016 「総合討論」『海外の森林と林業』97：32-37。
- 2016 「人と家畜のエピソード56 ワニと人のかかわり」『JVM 獣医畜産新報』69(11)：879。
- 2016 「人と家畜のエピソード57 ウミガメと人」『JVM 獣医畜産新報』69(12)：959。
- 2016 「生き物からみえる人の世界」『バイオストーリー』26：107。
- 2016 「History of Food Culture Exchanges in Eurasia Continent.」(Session Abstract)『The History of Japan-China Relations in respect to the Marine Resource: Abalones in Japan』(Abstract)『立命館大学×国立民族学博物館 学術交流協定締結記念第2回国際シンポジウム 第6回アジア食文化会議 食文化の交流——過去・現在・未来—— アジアにおける食文化のダイナミズムを交流という視

- 点から説明する』 pp.26-27, 大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「先住民族を知ろう11 チュクチ」『朝日小学生新聞』12月11日。
- 2017 「人と家畜のエピソード58 鶏と人のかかわり」『JVM 獣医畜産新報』70(1)：79。
- 2017 「人と家畜のエピソード59 ボツワナの牛と人」『JVM 獣医畜産新報』70(2)：159。
- 2017 「世界はビーズでつながっている」『月刊みんぱく』41(3)：2-3。
- 2017 「人と家畜のエピソード60 生き物からつくられるビーズ」『JVM 獣医畜産新報』70(3)：239。
- 2017 「はじめに——世界はビーズでつながっている」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.6-7, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ビーズとは何か」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.14, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「色・形・大きさ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.15, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「多様な素材」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.16-17, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「人の歯」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.21, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ファイアンス」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.23, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ダチョウの卵殻」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.28, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「鉄」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.30, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「貝の道」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.40-41, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「琥珀の道」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.46, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ガラスの道——ヴェネチアのガラスビーズ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.47-49, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ビーズを身にまとった花嫁」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.64-65, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「ディンカのホルセットは富の象徴」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.66-67, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「モノを飾る」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.84, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「祈りとビーズ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.85, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「分業でつくるヨルバのビーズ人像」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 pp.86-87, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「グローバル時代の多様な美意識」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.124, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「スワロフスキー・クリスタル」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.129, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「大阪から世界へ……マツノビーズ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.130, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「パキスタンから日本へ……ペーパービーズ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.131, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「あとがき」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』 p.134, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「I 先史狩猟採集民の定住化と自然資源利用 導入部」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 pp.24-25, 東京：東京大学出版会。
- 2017 「II 農耕民との共生、農耕民・家畜飼養民への変化導入部」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 pp.96-97, 東京：東京大学出版会。
- 2017 「III 王国・帝国・植民地と狩猟採集民導入部」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 pp.176-177, 東京：東京大学出版会。
- 2017 「IV 近代化と狩猟採集民 導入部」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 pp.224-225, 東京：東京大学出版会。
- 2017 「あとがき」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』 p.303, 東京：東京大学出版会。

Nakai, S. and K. Ikeya

- 2016 Structure and Social Composition of Hunter-gatherer Camps: Have the Mlabri Settled Permanently? *Abstract of the eighth World Archaeological Congress (WAC8)*, Book of Abstracts, p.389. Kyoto: WAC-8 Kyoto Local Organizing Committee.

Ikeya, K.

- 2016 Reviews of Studies Examining Interaction between Hunter-gatherers and Farmers in Asia. *Abstract of the eighth World Archaeological Congress (WAC8)*, Book of Abstracts, p.389. Kyoto: WAC-8 Kyoto Local Organizing Committee.

◎映像音響メディアによる業績

・DVD

池谷和信

- 2017 「ラクダを飼う」「ラクダミルク」「ラクダの解体場」「ラクダ肉を美味しく食べる方法」解説、『ラクダと人のかかわり——飼う、売る、食べる』（みんぱく映像民族誌第25集、大阪：国立民族学博物館）。

・ラジオ

- 2016年7月16日 『久米宏・ラジオなんですけど』TBSラジオ放送
2017年3月3日 「世界はビーズでつながっている」『NHK ラジオ深夜便』NHK 大阪ラジオ第一
2017年3月9日 『関西ラジオワイド』NHK 大阪ラジオ第一
2017年3月17日 「世界はビーズでつながっている」『NHK ラジオ深夜便』NHK 大阪ラジオ第一

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2016年12月23日 「趣旨説明」「極北の自然とチュクチの人びと——民博展示場と映画『ツンドラブック』をつなぐ」人間文化研究機構・北東アジア地域研究推進事業国立民族学博物館拠点国際公開セミナー、国立民族学博物館
2017年2月18日 「趣旨説明」「モンスーンアジアにおける家畜と人」研究会 国立民族学博物館
2017年3月26日 「趣旨説明」特別研究シンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」国立民族学博物館
2017年3月26日 「アフリカにおける環境史——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」特別研究シンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」国立民族学博物館

・共同研究会

- 2016年10月10日 「ビーズをめぐる人類学的研究——『ビーズ学』の可能性を求めて」『世界のビーズをめぐる人類学的研究』
2016年12月11日 「趣旨説明」『世界のビーズをめぐる人類学的研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年4月24日 「東北の狩猟文化について」AJJ 会議、東北大学。
2016年5月6日 Nomadism and sedentism among contemporary African hunter-gatherers. Panel 324 Pastoralists and nomads today, クロアチア
2016年5月26日 「日本からみた北東アジア——クマと人との関係に注目して」北東アジア地域研究
2016年5月28日 「コメント」分科会（脱生業化時代における生業論の再検討にむけて）日本文化人類学会、南山大学
2016年6月5日 「アフリカの環境史とグローバル・ヒストリー——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」日本アフリカ学会、日本大学農学部
2016年6月19日 「熱帯のイノシシ類と人——3大陸の比較から」日本熱帯生態学会、筑波大学
2016年8月19日 'Human-Chicken multiple interactions from human science approaches.' Meeting of The Human-Chicken Multi-Relationships Research Project. Swissotel Nai Lert Park Hotel Bangkok
2016年8月29日 'Introduction: Reviews of Studies Examining Interaction between Hunter-gatherers and Farmers in Asia. Interactions between Prehistoric Hunter-Gatherers and Neighbors in Asia.' The eighth World Archaeological Congress (WAC8), Doshisha University, Imadegawa Campus, Kyoto
2016年8月29日 (S. Nakai and K. Ikeya) 'Structure and Social Composition of Hunter-gatherer Camps: Have the Mlabri Settled Permanently?' The eighth World Archaeological Congress (WAC8), Doshisha University, Imadegawa Campus, Kyoto
2016年9月2日 Risk and A Small-scale Community-Social, Economic, Ritual Adaptation and Resilience in

- East Japan Great Earthquake. 総合地球環境学研究所
- 2016年10月19日 「コメント」現代中東地域研究 外来移入種ミスキート、秋田大学
- 2016年11月6日 「狩猟採集民と隣人との相互関係について Interaction between hunter-gatherers and their Neighbors」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第1回研究大会』東京大学
- 2016年12月3日 「The History of Japan-China Relations in respect to the Marine Resource: Abalones in Japan」[Panel: History of Food Culture Exchanges in Eurasia Continent] 第6回アジア食文化会議『食文化の交流——過去・現在・未来』立命館大学草津キャンパス
- 2017年1月18日 Access and Management of Natural Resources in Northeast Asia: From Viewpoints of Non-Timber Forest Products (NTFP), 富山大学
- 2017年2月12日 「狩猟採集民と農耕民との相互関係の動態」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第2回研究大会』（ポスター発表）名古屋大学野依記念学術交流館
- 2017年3月27日 「イノシシ、ブタの文化人類学的研究」在来家畜研究会・日本動物遺伝育種学会合同シンポジウム「アジアの在来家畜研究最前線——イノシシ・ブタを例にして、分子系統、古代DNA、文化人類学的視点から」神戸大学
- ・研究講演
- 2016年10月2日 「クマの生態と狩猟文化」結とびあ（有終会館）、福井県大野市
- 2016年10月13日 「世界のビーズをめぐる人類学的研究」平成28年度第4回来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座、国立民族学博物館
- 2016年11月10日 「野生と文化からみた生き物——栽培化や家畜化が変えた野生の風景」みんなく公開講演会『私たち人類はどこへ行くのか？——スイカで踊る、クジラを祭る——生き物と人 共生の風景』日本経済新聞社ホール
- 2016年12月10日 「世界のビーズ——美しさに秘められた人類の知恵」金沢星稜大学人文学部開設記念講演、金沢星稜大学
- 2017年1月18日 「Access and Management of Natural Resources in Northeast Asia: From Points of View in the Non-Timber Forest Products (NTFP)」富山大学・研究推進機構・極東地域研究センター人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」北東アジアにおける資源の持続可能な利用、富山大学
- 2017年1月20日 「コメント」2016年度学術潮流サロン「人と動物——つながりとその変化」国立民族学博物館
- 2017年1月21日 「アジアの森から世界の台所に——鶏と人の文化誌」西宮自然保護協会・特別講演会、西宮市立中央公民館
- 2017年3月11日 「プレスレットをつくろう——植物ビーズの魅力」自然文化公園内・自然観察学習館
- 2017年3月18日 「人間にとってビーズとは何か？——特別展『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』から」第466回みんなくゼミナール、国立民族学博物館
- 2017年3月21日 「概要説明」みんなく公開講演会『恵（めぐ）みの水、災（わざわ）いの水——川、湖、海』毎日新聞社オーバルホール
- 2017年3月25日 「趣旨説明」開館40周年記念特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」関連公開研究会『北東アジアのガラス玉の道——アイヌのタマサイを中心に』国立民族学博物館
- ・展示活動
- 特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」実行委員長（2017.3.9～2017.6.6）
- ・広報・社会連携活動
- 2016年4月15日 「総論およびアフリカの都市に暮らす」高齢者大学校
- 2016年5月20日 「ラクダの文化誌」阪神シニアカレッジ
- 2016年5月20日 「ブタの文化誌——ブタと人との絆」阪神シニアカレッジ
- 2016年6月8日 「人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店
- 2016年9月10日 「人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える」モンベル渋谷
- 2016年11月18日 「白熱教室——生き物と人がつくりだす現代文明」高齢者大学
- 2016年12月5日 「世界の飲食文化と日本」（ギャラリートーク）第6回アジア食文化会議 国立民族学博物館

2016年12月23日 「極北の自然とチュクチの人びと——民博展示場と映画『ツンドラブック』をつなぐ——」（ギャラリートーク）人間文化研究機構・北東アジア地域研究推進事業 国立民族学博物館拠点国際公開セミナー 国立民族学博物館

2017年3月29日 「小さなビーズがつくりだす世界——アフリカ、アジア、そしてアメリカ」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年7月10日 「極北の民チュクチの暮らし」第429回ウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2016年7月21日～7月24日一岩手県大船戸市・大槌町（アワビの生産と流通に関する研究）

2016年7月26日一岡山市オリент美術館（ガラスビーズに関する研究）

2016年7月28日一神戸市（KOBE とんぼ玉ミュージアム）

2016年8月6日一札幌市（先住民運動に関する資料収集）

2016年8月10日一三重県鳥羽市（真珠の首飾りに関する研究）

2016年11月18日一神戸市（デザイン・クリエイティブセンター神戸）

2016年12月28日一大阪市平野区（ガラス玉に関する資料収集）

・海外調査

2016年5月2日～5月10日一クロアチア、トルコ（国際人類学・民族学会議に参加及び生き物文化に関する資料収集）

2016年6月8日～6月15日一バングラディシュ（熱帯の家畜飼育に関する調査研究）

2016年8月16日～8月22日一タイ（熱帯の狩猟採集民に関する資料収集）

2016年10月27日～11月1日一アメリカ（歴史生態学的研究に関する資料収集）

2017年1月6日～1月14日一ボツワナ共和国、南アフリカ共和国、エチオピア（熱帯の家畜利用に関する研究）

2017年3月11日～3月15日一ラオス（狩猟採集民と隣人との関係に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（3人）、副指導教員（4人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「森林生態資源の地域固有性とグローバルドメスティケーション化に関する研究」（研究代表者：小林繁男）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「乳文化の視座からの牧畜論考——全地球的地域間比較による新しい牧畜論の創生」（研究代表者：平田昌弘）、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「多起源的家畜化モデルの構築と学融合型資料収蔵システムの確立」（研究代表者：遠藤秀紀）研究分担者、科学研究費補助金（特定領域研究・新学術領域研究）「パレオアジア文化史（B01：人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築）研究分担者、家畜資源研究会（HCMR）研究分担者、牛車研究会（代表者：池内克史）研究分担者、味の素食の文化センター食のフォーラムメンバー

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

Nomadic Peoples 編集委員、Museum Anthropology (USA) 編集委員、Tribes and Tribals (India) 編集委員、日本アフリカ学会評議員、人文地理学会理事、生き物文化誌学会副会長、ヒトと動物の関係学会評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所 運営会議員、バイオストーリー編集委員（編集長）

・非常勤講師

広島大学大学院国際協力研究科「途上国農村地域研究」（集中講義）、東北大学大学院環境学研究科「環境文明論1」（集中講義）

1959年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒（1982）、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士課程前期修了（1995）、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士課程後期退学（1995）【職歴】相模原市立博物館学芸員（1982）、国立民族学博物館第1研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）【学位】博士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 2001）、修士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 1995）【専攻・専門】民俗学、民俗芸能研究 1）日本の獅子舞の民俗学的研究、2）日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、3）民俗学における資料論【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

〔単著〕

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

〔編著〕

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化——文字の民俗学 声の歴史学』京都：思文閣出版。

〔論文〕

笹原亮二

2005 「用と美——柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』pp.273-294, 京都：思文閣出版。

【2016年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

日本の祭と民俗芸能における装飾性の諸相

・研究の目的、内容

我々の生活の場には、衣類や食器や家具など様々なモノが存在し、我々はそれらを所有し、用いて生活を営んできた。そうしたモノに対し、我々は道具としての利便性や実用性に関心を向けがちである。しかし、現実の生活の場には、道具としての利便性や実用性が必ずしも問題とされないモノも存在する。それは、祭や民俗芸能において見られる御幣・仮面・笠・曳山などの品々である。それらは、形態や色彩などに殊更に趣向が凝らされ、日々の生活の場のモノとは大いに趣を異にする。また、こうしたモノを使用して行う儀礼や芸能といった身体行為も、家庭内の日々の労働や生産生業の際に実用的な道具類を用いて行う身体行為とは、大いに趣を異にしている。そうしたモノや身体行為の最たるものが、祭や年中行事の際に人々が趣向を凝らして作り、見物客の観覧に供する造形物、「造り物」であり、非日常的な身体技術を駆使して見物客を魅了する芸能、「軽業」や「曲芸」である。こうした各地の祭や民俗芸能における、モノと身体技術の両面で見られる装飾性に富んだ多種多様な趣向を、人々の願いや喜びや晴れがましさとといったハレの機会における闊達な精神活動の所産として捉え、実態の把握を試みる。そして、それを通じ、各地でさまざまな祭や民俗芸能を脈々と営んできた人びとの心性や感覚、即ち「ハレのころ」のありようやその歴史的な形成過程について、見世物興行を初めとした専業芸能者の影響に注目しつつ考える。

本研究の実施にあたっては、申請者が研究代表者の科学研究費（基盤研究（C））「本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究」も活用するほか、申請者が平成28年9月から開催を予定している特別展「見世物大博覧会」の準備及び開催と連携して進める。

・成果

装飾性が顕著なモノに関しては、江戸時代以来、寺社の祭が主要な興行の機会の1つとなっていた見世物の興行において人々の観覧に供された、籠細工・貝細工等の細工物、生人形・菊人形等の人形、人体模型・博物標本等の理化学的機器類等について、錦絵・墨摺等の印刷物や遺品等の様々な資料について調査を行った。こうした多種多様なモノを展覧に供した見世物の興行が、見世物が最も盛行した時代とされる江戸時代後期には、興行全体のほぼ半分を占めて人気を博したことは、装飾性に富んだモノが、祭の神賑として、参集した老若男女の祭ならではの興奮や昂揚感といったハレの気分の醸成に強く作用したことを示している。そして、そうし

たモノと人々のハレの気分との関係が、明治以降も、毎年多くの見世物小屋が立つことで評判の各地の社寺の祭や縁日で新奇な人体模型を初め理化学機器類の興行が行われ、話題になる場合があったようにある程度継続していたことは、明治以降、近代的な知識や技術を一般庶民がどのように受容したかを考える際にも示唆的である。

また、同種同類の器物のみを用いて意外性のある造形を作り上げる一式細工が、鳥根県出雲市平田町の平田天満宮祭の「一式飾」や鳥取県南部町法勝寺宿の春祭の一式飾として、生人形の系譜に繋がる山車人形が各地の祭の山車の装飾品として、からくり細工の系譜に繋がるからくり人形が中京地方を中心とした祭の山車の装飾品としてというように、細工見世物に由来する装飾性に富んだ様々なモノが各地の祭において現在も見られることは、そうしたモノと人々のハレの気分との結び付きが、相当程度広がりをもって持続してきたことの現れと考えることができ興味深い。

装飾性が顕著な身体技術に関しては、秋田県潟上市・男鹿市の蜘蛛舞、茨城県龍ヶ崎市の撞舞、神奈川県川崎市の囃子曲持、愛媛県今治市の継ぎ獅子、岩手県大船渡市の梯子虎舞等、軽業・曲芸的な芸態が特徴的な民俗芸能について、映像資料や文献資料等を基に調査を行った。その結果、こうした民俗芸能は、今治市の継ぎ獅子や京都府京都市の六斎念仏の獅子、兵庫県南あわじ市の梯子獅子、岐阜県飛騨市の数河獅子等、獅子舞系統に多く見られることが判明した。これらは、二人立の獅子舞と、舞手の肩上にもう1人の舞手が立ち上がる軽業的な演目の「魁曲」を持ち芸とし、江戸時代に專業芸能者集団として全国を巡って各地の民俗芸能に多大な影響を及ぼした伊勢大神楽に由来すると考えられてきた。しかし、現行の各地の獅子舞の軽業・曲芸的な芸態は伊勢大神楽とは必ずしも共通せず、むしろ、同じく江戸時代に全国を巡って人気を博した角兵衛獅子との類似を感じさせるものも少なくない。角兵衛獅子と各地の軽業・曲芸的な芸態を有する獅子舞との関係について、改めて検討してみる必要があるのではないだろうか。

また、伊勢大神楽の本拠地に近い伊勢志摩地方には多くの獅子舞が伝来している。これらの獅子舞は、獅子頭の形態や芸態等への伊勢大神楽の影響がそれほど認められず、各地で行われる年頭の歩射等の予祝儀礼や火祭、地域の当屋組織等との結び付きが顕著で、「御頭神事」と呼ばれるものも多く、一般的に芸態における装飾性は希薄である。軽業・曲芸を見せ場とする芸態として全国各地の獅子舞に多大な影響を及ぼした伊勢大神楽の影響が、この地方の獅子舞にそれほど認められないのはどういう理由によるものか、更なる資料の集積を行い、検討を加えることが望まれる。

軽業・曲芸的な芸態が特徴的な民俗芸能は、獅子舞系統にとどまらず、そうした芸態が最大の見所として見物客に人気を博した一方で、あくまでも地域の祭や年中行事の一環として行われていた。そのことは、それらの芸態が地域社会の人々に、単に、装飾性に富む身体技術に魅了され、その魅力によって地域社会に受容されたに止まらず、地域社会の信仰・社会生活の維持等、多様な意味合いを持つものとして受容されてきたことを示している。こうした装飾性を主たる眼目としつつも多義性を備えた身体技術が、各地の人々の生活の一部として埋め込まれるに至った経緯を、それぞれの地域社会の実態に即して考えてみる必要があろう。

以上の内容を初め、本研究の成果は、昨年9月から11月にかけて開催した民博の特別展「見世物大博覧会」の実施、『月刊みんぱく』の特別展の特集や同展図録等の出版物の刊行、民博ゼミナールや伊勢大神楽の公演等の特別展開連催し物の実施、映像番組「東湖八坂神社の続人行事——秋田県潟上市天王・男鹿市船越」「今治の継ぎ獅子——春祭りの獅子舞奉納」「龍ヶ崎の撞舞——茨城県龍ヶ崎市」「新城の囃子曲持——神奈川県川崎市中原区新城」「平組梯子虎舞——岩手県大船渡市末崎町」製作・公開等を通して公表した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

笹原亮二

2016 「獅子の軽業」『特別展 見世物大博覧会』pp.188-189, 大阪：千里文化財団。

2016 「道心者」pp.138-139, 「六部」p.166, p.175, 「神道者」pp.170-171, 「チョンガレ語り」p.182, 「獅子舞い」p.207, 「越後獅子・角兵衛獅子」p.210, 小林淳一編『江戸時代人物画帳 シーボルトのお抱え絵師・川原慶賀の描いた庶民の姿』東京：朝日新聞出版局。

[その他]

笹原亮二

2016 「見世物と人びと」『月刊みんぱく』40(9)：2-3。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

笹原亮二監修

2016 『平組梯子虎舞——岩手県大船渡市末崎町』

2016 『新城の囃子曲持——神奈川県川崎市中原区新城』

2017 『龍ヶ崎の撞舞——茨城県龍ヶ崎市』

2017 『東湖八坂神社の統人行事——秋田県潟上市天王・男鹿市船越』

2017 『今治の継ぎ獅子——春祭りの獅子舞奉納』

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2016年9月17日 「軽業の系譜と民俗芸能——特別展『見世物大博覧会』から」第460回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

2016年9月10日 みんぱく×MBSラジオ presents トークイベント「浜村淳がせまる！驚きと幻想の見世物大博覧会」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年10月9日 「魅せるモノ・魅せられるモノ 見世物のおもしろさを巡って」第440回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・展示

『特別展 見世物大博覧会』実行委員長

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

鳥根県古代文化センター資料評価委員・同客員研究員、鳥取県文化財保護審議会専門委員

・非常勤講師

関西学院大学文学部「地理学地域文化学特殊講義」

竹沢尚一郎 [たけざわ しょういちろう]——教授

1951年生。【学歴】東京大学文学部宗教学専攻卒（1976）、東京大学大学院人文科学研究科宗教学専攻修士課程修了（1978）、フランス社会科学高等研究院社会人類学専攻博士課程修了（1985）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1985）、九州大学文学部助教授（1988）、国立民族学博物館併任助教授（1996）、九州大学大学院人間環境学研究院教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究部教授（2001）、九州大学大学院併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2007）【学位】民族学博士（フランス社会科学高等研究院 1985）、文学修士（東京大学 1978）【専攻・専門】宗教人類学、アフリカ史、人類学学説史【所属学会】日本宗教学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会

【主要業績】

[単著]

竹沢尚一郎

2013 『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』東京：中央公論社。

2010 『社会とは何か——システムからプロセスへ』（中公新書）東京：中央公論社。

2007 『人類学的思考の歴史』京都：世界思想社。

【受賞歴】

1988 日本宗教学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

(1) アフリカ史研究

(2) 被災のコミュニティ研究

・研究の目的、内容

- ①考古学発掘を実施し、その成果を通じてアフリカ史を書き直すことをめざす。
- ②東日本大震災の被災地で、被災後何が起こったかを現地調査を踏まえて記録・分析する。

・成果

アフリカ史関係（日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「世界の中のアフリカ史の再構築」平成25-29年）。

Shoichiro Takezawa et Mamadou Cissé, éd.,

2016 *Sur la trace des grands empires : Recherches archéologiques au Mali, Etudes maliennes, numero special*

Shoichiro Takezawa et Mamadou Cissé, éd.,

2017 *Sur la trace des grands empires : Recherches archéologiques au Mali, L'Harmattan.* (再版)

被災社会の研究（三井物産環境基金補助金、平成23-26年）

Shoichiro Takezawa, 2016, *The Aftermath of the East Japan Earthquake and Tsunami: Living among the Rubble*, Lexington Books.

Takezawa Shoichiro, 2016, « Par-dela du trauma: Iwate (Japon), après le 11 mars 2011 », *Techniques & Culture*, 65/66 : 48-59 (査読あり)

その他関連論文

竹沢尚一郎

2016 「真島一郎・川村伸秀編『山口昌男——人類学的思考の沃野』の書評」『アフリカ研究』89:73-76.

2017 「東日本大震災の経験に学ぶ」『月刊みんぱく』2月号

翻訳

スクリブナー思想史大事典翻訳編集委員会訳

2016 『スクリブナー思想史大事典』丸善出版（共同監訳）。

口頭発表

2016 「アフリカとグローバルヒストリー：アフリカとアジアの関係を歴史化する、10-11世紀のガオ（西アフリカ）で出土した中国製磁器」アフリカ学会、6月4日

2017 「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」みんぱくゼミナール、2月18日

2017 「東日本大震災から学ぶ——豊かな暮らしのために——」みんぱく公開講演会「恵（めぐ）みの水、災（わざわ）いの水」毎日新聞社、3月21日

◎出版物による業績

[単著]

Takezawa, S.

2016 *The Aftermath of the East Japan Earthquake and Tsunami: Living among the Rubble*. Lanham: Lexington Books.

[編著]

Takezawa, S. et Mamadou Cissé (eds.)

2016 *Sur la trace des grands empires : Recherches archéologiques au Mali*. Etudes maliennes, numero special. [査読有]

2017 *Sur la trace des grands empires: Recherches archéologiques au Mali*. L'Harmattan.

[論文]

Takezawa, S.

2016 Par-dela du trauma: Iwate (Japon), après le 11 mars 2011. *Techniques & Culture* 65/66: 48-59. [査読有]

[その他]

竹沢尚一郎

2016 「真島一郎・川村伸秀編『山口昌男——人類学的思考の沃野』の書評」『アフリカ研究』89: 73-76.

2017 「東日本大震災の経験に学ぶ」『月刊みんぱく』41(2): 2-3.

[翻訳]

スクリブナー思想史大事典翻訳編集委員会訳

2016 『スクリブナー思想史大事典』東京：丸善出版（共同監訳）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月5日 「アフリカとグローバルヒストリー——アフリカとアジアの関係を歴史化する、10-11世紀のガオ（西アフリカ）で出土した中国製磁器」日本アフリカ学会第53回学術大会、日本大学

・研究講演

2017年3月21日 「東日本大震災から学ぶ——豊かな暮らしのために」みんなく公開講演会『恵（めぐ）の水、災（わざわ）いの水』毎日新聞社オーバルホール

・みんなくゼミナール

2017年2月18日 「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」第465回みんなくゼミナール

◎調査活動

・海外調査

2016年6月27日～7月11日—フランス（トゥールーズ大学において開催されるアフリカ考古学会で発表、ボルドー大学アフリカ研究所において資料収集及びパリ大学アフリカ研究所において著書にかかる評価会に参加）

2016年12月10日～12月23日—フランス（パリ第1大学で講演と資料収集・社会科学高等研究院で講演と資料収集）

◎大学院教育

・論文審査

審査委員（1件）

・指導教員

主任指導教員（1名）、副指導教員（1名）

出口正之 [でぐち まさゆき]——教授

1955年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）【職歴】ジョーンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教授（1995）、総合研究大学院大学学長補佐（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）【専攻・専門】NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学【所属学会】国際NPO・NGO学会（ISTR = International Society for Third Sector Research）、米国NPO学会（ARNOVA = The Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action）、非営利法人研究学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[著書]

出口正之

1993 『フィランソロピー』東京：丸善出版。

[共編著]

Vinken, H., Y. Nishimura, B. L. J. White, and M. Deguchi (eds.)

2010 Civic Engagement in Contemporary Japan Civic Engagement in Contemporary Japan. New York/Dordrecht/Heidelberg/London: Springer.

本間正明・出口正之編著

1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

[分担執筆]

Deguchi, M.

2001 The Distortion between Institutionalized and Noninstitutionalized NPO: New Policy Initiative and the Nonprofit Organizations in Japan. In H. K. Anheier, J. Kendall (eds.) *Third Sector Policy at the Crossroads: An International Nonprofit Analysis*, pp.277-301. London and New York: Routledge.

【受賞歴】

1988 東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

- 1988 日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞
1995 ESP 大来佐武郎賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公益法人その他の組織とフィランソロピーの総合的研究

・研究の目的、内容

科学研究費挑戦的萌芽研究「法・会計・文化融合型の公共政策国際比較研究 チャリティ制度を事例に」に基づき、公益認定等委員会制度及び 公益法人その他の民間非営利公益団体（＝チャリティ）の国際比較研究を実施する。また、みんぱく内の共同研究に研究代表者として（「会計学と人類学の融合」）を運営した。

・成果

雑誌論文・報告書等

- 2017 「法人形態から見た『チャリティ・公益法人制度』の国際比較：非営利の法人制度と会計を巡っての政策人類学的比較研究」非営利法人研究学会誌
- 2016 「クリープ現象」としての収支相償論」非営利法人研究学会誌、非営利法人研究学会 Vol.18, pp.29-38（査読あり）
- 2016 GLOBALIZATION, GLOCALIZATION, AND GALÁPAGOS SYNDROME: PUBLIC INTEREST CORPORATIONS IN JAPAN. *International Journal of Not-for-Profit Law*, w / vol.18, no.1, May 2016 pp.5-14（査読あり）
- 2017 「代議員制と理事の定足数」『公益・一般法人』2017年3月1日号（936）pp.66-73（査読なし）
- 2017 「任意の役職・機関」『公益・一般法人』2017年2月1日号（934）pp.44-48（査読なし）
- 2017 「『自主公演』と『主催公演』の違いは？」『公益・一般法人』2017年1月1日号（932）pp.44-46
- 2016 「公正さの公表が求められる表彰・コンクール、競技会」『公益・一般法人』2016年12月1日号（930）pp.39-43（査読なし）
- 2016 「公募助成と非公募助成」『公益・一般法人』2016年11月1日号（928）pp.79-85（査読なし）
- 2016 「資金貸付の認定基準を巡る複雑な関係」『公益・一般法人』2016年10月1日号（926）pp.32-34（査読なし）
- 2016 「議論があった博物館等の展示と施設の貸与」『公益・一般法人』2016年9月1日号（924）pp.41-45（査読なし）
- 2016 「『内閣府研究会報告』が示す会計と制度を巡る課題」『公益・一般法』2016年8月1日号（922）pp.34-39（査読なし）
- 2016 「相談、調査、キャンペーンの公益性」『公益・一般法人』2016年8月1日号（922）pp.10-16（査読なし）
- 2016 「講座や体験活動の公益性判断」『公益・一般法人』2016年7月1日号（920）pp.40-44（査読なし）
- 2016 「公益性とは？公益目的事業のチェックポイント」『公益・一般法人』2016年6月1日号（918）pp.57-63（査読なし）
- 2016 「『公益目的事業財産』の意義」『公益・一般法人』（916）2016年5月1日号（査読なし）pp.80-89
- 2016 「シ・プレ原則と他の団体の意思決定に関与することができる財産」『公益・一般法人』（914）pp.58-62（査読なし）

口頭発表等

- 2016 Charity Regulation: Drivers for Differences and Similarities in Accountability and Transparency (Carolyn Cordery と共著) Presenting paper for the 12th ISTR International Conference Ersta Sköndal University College Stockholm, Sweden 28 June – 1 July 2016
- 2016 A Sectorial Labyrinth: Legal and Accounting Frameworks of the Third Sector Organizations in Japan for 120 Years presenting paper for the 12th ISTR International Conference Ersta Sköndal University College Stockholm, Sweden, 28 June – 1 July 2016
- 2016 「日本・英国・ニュージーランドの100年：法人格とチャリティ資格」非営利法人研究学会関西部会、平成28年4月23日、京都市市民活動総合センター会議室
- 2016 「法人形態から見たチャリティ資格の国際比較：法人制度と会計を巡って 政策人類学的比較研究」

- 第20回非営利法人研究学会全国大会、平成28年9月16日～18日、成蹊大学
- 2016 共同研究会 会計学と人類学はどこで繋がるのか、平成28年10月29日
- 2016 「これからの公益活動と大阪の役割～「民」が主導する社会づくり～」大阪コミュニティ財団、平成28年11月7日
- 2016 「NPO 法人を領域とした領域設定総合化法によるトラスフォーマティブ・リサーチ」非営利法人研究学会 NPO 法人部会
- 2017 Civil Society in Asia: International Conference in Melbourne、平成29年2月2日、メルボルン大学 philanthropy
- 2017 「非公募助成の多様な取り組みとその意義」助成財団フォーラム『アクティブな助成事業へのチャレンジ～公募によらない助成の意義と課題～』主催：公益財団法人助成財団センター、場所：大手町ファースト スクエア カンファレンス「イーストタワー」、2017年2月16日
- 2017 「『民間公益』の本質的視点とは何か？」安立研究室日本の非営利／米国の非営利レクター・サラモンの非営利セクター論を読み直す 研究会、平成29年2月19日
- 2017 「クレオ活動がつくるこれからの未来」北浜サロン 私学会館、平成29年2月22日

◎出版物による業績

〔論文〕

出口正之

- 2016 「シ・ブレ原則と他の団体の意思決定に関与することができる財産」『公益・一般法人』914：58-63。
- 2016 「『公益目的事業財産』の意義」『公益・一般法人』916：80-89。
- 2016 「公益性とは？公益目的事業のチェックポイント」『公益・一般法人』918：57-63。
- 2016 「講座や体験活動の公益性判断」『公益・一般法人』920：40-45。
- 2016 「相談、調査、キャンペーンの公益性」『公益・一般法人』922：34-39。
- 2016 「「クリーブ現象」としての収支相償論」『非営利法人研究学会誌』18：29-38。〔査読有〕
- 2016 「最新版『内閣府研究会報告』が示す会計と制度を巡る課題」『公益・一般法人』922：10-17。
- 2016 「二つのフィランソロピー元年」『フィランソロピー』374：8-11。
- 2016 「議論があった博物館等の展示と施設の貸与」『公益・一般法人』924：41-45。
- 2016 「資金貸付の認定基準を巡る複雑な関係」『公益・一般法人』926：32-34。
- 2016 「公募助成と非公募助成」『公益・一般法人』928：79-85。
- 2016 「公正さの公表が求められる表彰・コンクール、競技会」『公益・一般法人』930：39-43。
- 2017 「『自主公演』と『主催公演』の違いは？」『公益・一般法人』932：44-46。
- 2017 「任意の役職・機関」『公益・一般法人』934：44-48。
- 2017 「代議員制と理事の定足数」『公益・一般法人』936：66-73。

Deguchi, M.

- 2016 GLOBALIZATION, GLOCALIZATION, AND GALÁPAGOS SYNDROME: PUBLIC INTEREST CORPORATIONS IN JAPAN. *International Journal of Not-for-Profit Law* 18(1): 5-14. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2016年10月29日 「文化人類学と会計学はどこで繋がるのか」『会計学と人類学の融合』国立民族学博物館
- 2016年11月26日 「『会計』及び『会計基準』等の定義について」『会計学と人類学の融合』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年4月23日 「日本・英国・ニュージーランドの100年——法人格とチャリティ資格」非営利法人研究学会 関西部会、京都市市民活動総合センター
- 2016年6月28日～7月1日 'A Sectorial Labyrinth: Legal and Accounting Frameworks of the Third Sector Organizations in Japan for 120 Years' The 12th International Society for Third Sector Research International Conference, Ersta Sköndal University College Stockholm, Sweden
- 'Charity Regulation: Drivers for Differences and Similarities in Accountability and Transparency' The 12th International Society for Third Sector Research International Conference, Ersta Sköndal University College Stockholm, Sweden
- 2016年9月18日 「法人格から見たチャリティ資格の国際比較」非営利法人研究学会第20回大会、成蹊大学

2016年10月22日 「英米における小規模チャリティの現金主義と比例原則」非営利法人研究学会関西部会、関西学院大学大阪梅田キャンパス K. G. ハブ スクエア大阪

2016年11月3日 「NPO 法人を領域とした領域設定総合化法によるトラスフォーマティブ・リサーチ」非営利法人研究学会 NPO 法人部会、国立民族学博物館

2017年2月2日～2月3日 'Philanthropy' Civil Society in Asia: International Conference in Melbourne, University of Melbourne, Australia [招待講演]

◎調査活動

・海外調査

2016年6月27日～7月3日—スウェーデン（国際NPO・NGO学会に参加）

2016年12月12日～12月17日—ニュージーランド（ニュージーランドにおけるチャリティ制度の調査）

2017年1月30日～2月10日—オーストラリア（メルボルン大学での Asian Civil Society Conference 2017への招待出席及びオーストラリアにおけるチャリティ制度の科研費調査）

◎大学院教育

・担当授業

1年ゼミ（比較文化学基礎演習Ⅰ、Ⅱ、地域文化学基礎演習Ⅰ、Ⅱ）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人助成財団センター評議員、茨木市文化振興施策推進委員会委員長、大阪府特別参与、大阪市特別参与、公益社団法人日本フィランソロピー協会まちかどのフィランソロピスト選考委員長、公益財団法人助成財団センター評議員

・非常勤講師

放送大学（集中講義）「ボランティアと社会」

◎学会の開催

2016年11月3日 非営利法人研究学会 NPO 法人部会、国立民族学博物館

寺田吉孝 [てらだ よしたか] ————— 教授

【学歴】ワシントン大学総合学部学士課程修了（1979）、ワシントン大学音楽部修士課程修了（1983）、ワシントン大学音楽部博士課程修了（1992）【職歴】ワシントン大学音楽部講師（1994）、ピッツバーグ大学船上大学プログラム講師（1995）、国立民族学博物館第2研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2008）【学位】Ph. D.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1992）、M. A.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1983）【専攻・専門】民族音楽学【所属学会】東洋音楽学会、Society for Ethnomusicology、International Council for Traditional Music、British Forum for Ethnomusicology

【主要業績】

[編著]

Terada, Y. (ed.)

2008 *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.

2001 *Transcending Boundaries: Asian Musics in North America* (Senri Ethnological Reports 22). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Terada, Y.

2000 T. N. Rajaratnam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460-490.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

音楽・芸能の伝承における映像音響メディアの活用

・研究の目的、内容

民博が映像音響メディアを用いて蓄積してきた音楽・芸能の情報は膨大な量に達しており、その資料的価値は高い。しかし、活発な収集・制作活動に比べ、映像音響資料の活用に関する議論はこれまで十分に行われておらず、館外での利用、特に取材対象国・地域においての利用は極めて限定的である。本研究は、これまでの番組作成と活用のプロセス（事前調査、取材、編集、上映など）を見直し、音楽・芸能の伝承に寄与することができる映像音響番組の制作方法を検討することを目的とする。特に今年度は、国際伝統音楽学会の「映像音響民族音楽学」研究グループの第1回シンポジウムに参加し、国際的なネットワークの強化を図りたい。

・成果

映像音響メディアが音楽・芸能の伝承や活性化に貢献しうる条件について考察を深めるために、複数のプロジェクトを並行して進めた。

1. スロヴェニア・リュブリャナ市で開催された国際伝統音楽学会の「映像音響民族音楽学」研究グループの第1回国際シンポジウムに参加して研究発表を行うとともに、民博製作の映像番組を上映したうえで制作に関する議論を行った。
2. 平成26年度にスペイン・ヴァリャドリッド市で開催された映像関連のシンポジウムの報告論集を共編で刊行した。
3. 平成27年度から開始した在日コリアンの音楽文化に関する映像取材を終了した。取材素材に基づく映像番組の制作を行うために平成29年度の情報プロジェクトを申請し、すでに実施が承認されている。
4. 民博が収集した映像音響資料の高次活用に関して、トルクメニスタンとインドにおいて研究発表を行った。
5. 平成27年度に開催した研究公演『時を超える南インドの踊り』にもとづくマルチメディア番組の編集を完了した。

◎出版物による業績

[共編書]

Terada, Y., L. D'Amico, E. Camara de Landa and M. Isolabella (eds.)

2016 *Ethnomusicology and Audiovisual Communication: Selected Papers from MusiCam 2014 Symposium*. Valladolid: Universidad de Valladolid.

[論文]

Terada, Y.

2016 On Making *Drumming out a Message*: Filmmaking and Marginalized Communities. In E. Camara de Landa, L. D'Amico, M. Isolabella and Y. Terada (eds.) *Ethnomusicology and Audiovisual Communication: Selected Papers from MusiCam 2014 Symposium*, pp.71-83. Valladolid: Universidad de Valladolid.

[その他]

寺田吉孝

2016 「民博スタイルの民族誌映画」『月刊みんぱく』40(12):6-7。

Terada, Y.

2017 Danny Kalanduyan was a Kind and Caring Friend. *International Examiner* 44(1):13.

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[DVD]

南 真木人・寺田吉孝制作監修

2017 『ネパールの結婚式』（みんぱく映像民族誌 第22集）。

[マルチメディア番組]

寺田吉孝制作監修

2017 『時を超える南インドの踊り』（日本語版、英語版）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年6月24日 'Beyond the Sulu Zone: Presenting gong music to an East Asian museum public.' AAS-in-ASIA Conference "Horizon of Hope" 同志社大学
- 2016年8月25日 'Practicing audiovisual ethnomusicology with marginalized communities.' 国際伝統音楽学会 (ICTM) 「映像音響民族音楽学」研究グループ 第1回国際大会、リュブリャナ市立博物館 (スロヴェニア、リュブリャナ)
- 2016年11月3日 'Safeguarding the shadow puppet theater of Cambodia.' 国際学術会議 The Role of the Gorogly Epos in the World Culture、国立トルクメニスタン博物館 (トルクメニスタン、アシガバート)
- 2016年12月26日 'Safeguarding Cambodian shadow puppet theater through audiovisual media.' マドラス音楽院 第90回音楽会議 (インド、チェンナイ)

・研究講演

- 2016年9月1日 'Audiovisual media and safeguarding endangered performing arts.' 民族学・フォークロア研究所、ザグレブ、クロアチア
- 2016年9月14日 「音楽からインド社会を知る——弟子と調査者のはざま」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店スペース9
- 2016年9月24日 「音楽からインド社会を知る」NHK文化センター梅田教室
- 2017年1月2日 'Challenges for traditional art forms in changing times: A look at shadow puppetry in Cambodia.' Indian National Trust for Art and Cultural Heritage、チェンナイ、インド
- 2017年1月7日 「The making of Angry Drummers」マドラス大学「メディアと社会」セミナーシリーズ、マドラス大学、チェンナイ、インド

・みんなくウィークエンド・サロン

- 2016年12月11日 「民族音楽学の考え方」第447回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

[映像番組上映]

- 2016年8月27日 *Samir Kurtov: A Zurna Player from Bulgaria* (英語、2008年制作) 国際伝統音楽学会 (ICTM) 「映像音響民族音楽学」研究グループ、第1回国際大会、リュブリャナ市立博物館 (スロヴェニア、リュブリャナ)
- 2016年11月13日 「怒——大阪浪速の太鼓集団」台湾文化光点計画上映会・シンポジウム『民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピア』国立民族学博物館
- 2016年11月24日 *Sbaek Thomm: The Large Shadow Puppet Theater of Cambodia* (英語版、2009年) 第6回ネパール国際民俗音楽映画祭 (ネパール、カトマンズ)
- 2016年12月26日 *Sbaek Thomm: The Large Shadow Puppet Theater of Cambodia* (英語版、2009年) マドラス音楽院 第90回音楽会議 (インド、チェンナイ)
- 2017年1月2日 *Sbaek Thomm: The Large Shadow Puppet Theater of Cambodia* (英語版、2009年) Indian National Trust for Arts and Cultural Heritage (インド、チェンナイ)

◎調査活動

・国内調査

- 2016年11月27日 大阪市中央区 (大槻能楽堂における公演の記録)
- 2016年12月9日 埼玉県桶川市 (李政美インタビュー記録)
- 2017年2月6日 大阪市生野区 (安聖民他インタビュー記録)
- 2017年3月23日 大阪市浪速区、生野区 (大阪人権博物館、コリア NGO センターでのインタビュー記録)

・海外調査

- 2016年8月22日～9月7日 イタリア、スロヴェニア、クロアチア (スロヴェニアにおいて国際伝統音楽学会「映像音響民族音楽学」研究グループの第1回国際シンポジウムに参加及びクロアチアにおいてチャルメラ系楽器の予備調査)
- 2016年10月31日～11月6日 トルクメニスタン (国際会議「叙情詩キョロールと世界文化における役割」の参加と発表)
- 2016年12月18日～2017年1月9日 インド (南インド古典音楽・舞踊における在外タミル人の活動に関する実

態調査)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点拠点副代表、科学研究費補助金（基盤研究（C））「スリランカ系タミル人によるインド舞踊の発展と再々構築化に関する全体関連的研究」（研究代表者：竹村嘉晃）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

国際伝統音楽学会 International Council for Traditional Music 理事、学会誌 *Yearbook for Tracitional Music* 映画・ビデオレビュー編集委員、「音楽とマイノリティ」研究グループ書記長、*Ethnomusicology Forum* 誌（イギリス）編集助言委員、*Asian Music* 誌（アメリカ合衆国）編集助言委員、国際民俗音楽映画祭（ネパール）国際運営委員、京都市立芸術大学博士論文審査委員

森 明子 [もり あきこ] ————— 教授

【学歴】筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学（1989）【職歴】筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1997）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2009）、民族文化研究部教授（2011）【学位】文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）【専攻・専門】文化人類学 1）ヨーロッパ人類学、2）ドイツ、オーストリアの民族誌研究、3）民族学・民俗学の歴史的展開【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族——オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

[編著]

森 明子編

2014 『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』京都：世界思想社。

2004 『ヨーロッパ人類学——近代再編の現場（フィールド）から』東京：新曜社。

2002 『歴史叙述の現在——歴史学と人類学の対話』京都：人文書院。

Mori, A. (ed.)

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学的比較の再考

・研究の目的、内容

比較は、文化人類学研究を、基底的に性格づけている。ポストモダン人類学は、比較のための単位を実体的・硬直的にとらえる文化の理解を批判したが、これに対して近年、超越的な比較ではない水平的な比較という議論が起こっている。全体を見通すのではない部分的なヴィジョンに着目して、人類学的な比較を説明しようとするものである。本研究は、こうした議論を参照しながら、ヨーロッパ人類学の実践において、民族誌記述と

人類学的比較が、いかに照射しあっているのか、検討するものである。

研究は、民族誌研究と、ディシプリンの方向性の検討との2方向から、以下に述べるように、複数のプロジェクトのもとにすすめる。第一の民族誌研究については、進行中の科研「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」（研究代表者 森）を基盤として海外学術調査を継続し、科研メンバーとの共同研究と連動して進めていく。さらに、本館共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」（研究代表者 森）とも連動して、議論を深化させる。第二のディシプリンに焦点をあてる研究は、文化人類学をめぐる国内および海外の研究動向を明らかにしていくことから接近する。研究分担者として参加している科研「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて：日中韓と独との研究協業網の形成」（研究代表者 岩本-東京大学）において、ドイツと日中韓の民俗学・民族学の比較という見地から人類学的比較を再考し、また、神戸大学において本年度よりスタートする研究拠点形成事業「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」において、学際的・国際的な共同研究のなかでディシプリンの研究方向を検討する。

・成果

- ① ケアをめぐる民族誌研究として、科研費研究「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」（研究代表者・森明子）の資金によって、ベルリンにおいて調査研究を行った。さまざまな保育園を対象とし、保育をめぐるケアのあり方、歴史的展開、現在の実態について、関連する資料を収集し、保育士や父兄にインタビュー調査を行うとともに、参与観察を行った。また、ベルリンの研究者ネットワークの構築・強化・拡大をはかった。
- ② ケアをめぐる民族誌研究の一環として、共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」を主催した。この共同研究の拡大的展開として、科研費研究「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」（研究代表者・森明子）の資金により、オーストリア・ウィーン大学とタイ・チェンマイ大学よりふたりの研究者を招聘し、コロキウム（Colloquium “Thinking about care as social organization: A Discussion with T. Thelen and K. Bua-daeng” 2017年2月19日、於民博）を開催し、国内の共同研究者を招集して、英語による集中的な議論をおこなった。
- ③ ケアをめぐる民族誌研究の成果公開のひとつとして、日本文化人類学会研究大会（2016年5月29日、於南山大学）で口頭発表した。
- ④ 学術研究動向調査（受託研究）の資金により、ブリュッセル、アントワープ、ビーレフェルト、ケルンにおいて、学術研究動向を調査した。ヨーロッパでもっとも先進的な展示を展開している専門博物館と、大学研究所を訪問し、研究者にインタビュー調査した。また、ビーレフェルト大学の学際研究センターで合宿形式にて開催されている国際ワークショップ・シリーズのひとつに、ディスカッサントとして参加した。
- ⑤ ディシプリンの方向性の検討として、学術研究動向調査（受託研究）の一環として、欧米の主要な専門ジャーナルの掲載論文のキーワードについて、近年の傾向を分析した。

◎出版物による業績

[エッセイなど]

森 明子

2016 「シンセキのオバサンのような立ち位置」『月刊みんぱく』40(10)：10-11。

2016 「そして、私たちは愛に帰る——ドイツとトルコを結ぶ第二世代の物語」小長谷有紀ほか編『ワールド・シネマ・スタディーズ』pp.23-30, 東京：勉誠出版。

2017 「季節の行事——お正月とクリスマス」野林厚志監修『日本と世界のくらし』pp.42-45, 東京：汐文社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月28日～5月29日 「ケア概念の可能性——社会的なものの民族誌のために」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学

・共同研究会での報告

2016年5月14日 「幼少期への介入——ベルリン調査から考える」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に』国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年8月27日～9月2日—タイ（研究集会準備のための調査研究及びタイ・チェンマイにおける流民の社会的包摂に関する現地調査）

2016年10月12日～11月11日—ドイツ（ベルリンにおける保育・養育制度の編成に関する調査研究）

2017年3月15日～3月30日—ベルギー、ドイツ（ベルギー、ドイツにおける研究動向調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ（現代人類学とソーシャルなるものの意味）、論文ゼミで論文指導

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて——日中韓と独との研究協業網の形成」（研究代表者：岩本通弥）研究分担者、日本学術振興会委託研究「文化人類学・民俗学分野に関する学術研究動向——文化人類学における理論的研究の新しい展開」

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

独立行政法人日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員、京都大学人文科学研究所 共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員、日本民俗学会国際交流特別委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von Historische anthropologie: Kultur-Gesellschaft-Alltag (Köln, Weimar, Wien)（ドイツ・オーストリアで刊行されている学術雑誌の研究顧問）

◎学会・研究集会の開催

2017年2月19日 Colloquium “Thinking about care as social organization: A Discussion with T. Thelen and K. Buadaeng” National Museum of Ethnology, Osaka.

齋藤玲子 [さいとう れいこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1989）【職歴】北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）【専攻・専門】文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

齋藤玲子編

2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイトおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとらえて』（国立民族学博物館調査報告131）大阪：国立民族学博物館。

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイトと北西海岸インディアン版画』京都：昭和堂。

[論文]

齋藤玲子

2012 「アイヌ工芸の200年——その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート（先住民アート・プロジェクト報告書）』pp.45-60, 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化の継承と社会的背景の研究

・研究の目的、内容

アイヌ民族は、江戸時代中ごろから徐々に和人の支配下におかれ、明治・大正・昭和と時代を経るにつれて独

自の文化の継承は次第に困難になり、アイヌ文化は途絶えた、とまで言われるような状態になった。しかし、実際は形を変えながらも多くの文化要素が受け継がれている。こうしたアイヌ文化の継承と当時の社会状況との関係について、物質文化と芸能に注目し、研究を続けている。最終的に、物質文化や芸能が、記録の多く残る江戸時代後期からどう変化してきたかを明らかにし、現代のアイヌ文化の位置づけを示すことを目指す。

まず、前年度に終了した共同研究「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」の報告書をまとめるなかで、アイヌの物質文化の変化を示す。また、科学研究費補助金B「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（代表：佐々木史郎 H26～28）の研究分担者として、アイヌの織物の技術継承についても引き続き調査をすすめる。

・成果

アイヌ文化の継承に関しては、「民族文化の振興と工芸——北海道二風谷の木彫盆・イタから考える」飯田卓編『文明史のなかの文化遺産 下巻』に寄稿したほか、第464回みんぱくゼミナール「アイヌ文化と観光」をはじめ、多数の講演等をおこなった。また、儀礼用のガラス玉製の首飾り（タマサイ）について、北東アジア地域研究拠点の例会での研究発表と特別展「ビーズ」図録への寄稿をした。

科研費「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」に関しては、共著で「釧路市立博物館所蔵アイヌ木綿衣について」『釧路市立博物館紀要』第37輯 pp.17-28を寄稿した。

共同研究「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」の報告書は編集中である。

◎出版物による業績

〔論文〕

佐々木史郎・吉本 忍・齋藤玲子・津田命子・日高真吾・和高智美・右代啓視・戸田恭司

2017 「釧路市立博物館所蔵アイヌ木綿衣について」『釧路市立博物館紀要』37：17-28。

〔監修〕

齋藤玲子

2016 「極北のフォークアート」（アイヌの部分）『季刊 TRANSIT』34：112-117。

〔その他〕

齋藤玲子

2016 「『アイヌ刺しゅう』の担い手たち」（手芸考）『月刊みんぱく』40(8)：18-19。

2016 「国立民族学博物館の収蔵品① 二つの祭壇」『文部科学教育通信』395：2。

2016 「国立民族学博物館の収蔵品② 現代のアイヌ・アート」『文部科学教育通信』396：2。

2016 「先住民族を知ろう アイヌ」『朝日小学生新聞』10月2日。

2016 「伝統に基づくあらたな文化の創造」『月刊みんぱく』40(11)：2-3。

2016 「伝統家屋『チセ』の再生」『月刊みんぱく』40(11)：7。

2016 「新『アイヌの文化』展示への思い——同時代を生きる者として博物館で何ができるのか」（インタビュー記事）『国立民族学博物館友の会ニュース』235：1-2。

2016 「アイヌの世界観を人形劇で」『みんぱく e-news』186：巻頭コラム。

2016 「アイヌ民族資料の活用のために」『民博通信』155：10-11。

2017 「北米先住民のビーズ装飾——ヤマアラシのとげからガラスビーズへ」『月刊みんぱく』41(3)：6。

2017 「ガラスビーズ以前の装飾技術」池谷和信編『ビーズ——つなぐ かざる みせる』pp.62-63, 大阪：国立民族学博物館。

2017 「母から娘へ受け継がれるアイヌのタマサイ」池谷和信編『ビーズ——つなぐ かざる みせる』pp.80-81, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・人間文化研究機構のシンポジウムなどでの報告

2016年10月15日 「アイヌの食と交易」およびパネルディスカッション、第29回人文機構シンポジウム『和食文化の多様性——日本列島の食文化を考える』、味の素グループ高輪研修センター

2017年1月27日 「アイヌにとってのタマサイ（玉の首飾り）——物質文化研究の可能性」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「北東アジア地域研究拠点」第8回月例会

2017年3月25日 「北東アジアのガラス玉の道——アイヌのタマサイを中心に」オーガナイザー・司会、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「北東アジア地域研究拠点」第10回月例会（特別展「ビーズ」関連公開研究会）

・みんぱくゼミナール

2016年12月17日 齋藤玲子・中川裕（千葉大学教授）「アイヌ語はどこから来たのか。そして、どこへ行くのか。」第463回みんぱくゼミナール

2017年1月21日 「アイヌ文化と観光」第464回みんぱくゼミナール

・研究公演

2016年12月3日 司会・座談会、みんぱく公演「アイヌ民話人形劇 ふんだりけったりクマ神さま」（アイヌ展示チアシリカラ！——冬のみんぱくフォーラム2017関連）、国立民族学博物館

2017年1月29日 司会・解説、みんぱく公演「トンコリ×ウポポ——アイヌ音楽ライブ by OKI / MAREWREW」（アイヌ展示チアシリカラ！——冬のみんぱくフォーラム2017関連）、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2016年6月25日 「アイヌの工芸と観光」追手門学院大学地域創造学2年生向け講義、国立民族学博物館

2016年7月15日 「アイヌ文化と博物館①民族の歴史と文化」大阪府高齢者大学、大阪府社会福祉会館

2016年7月22日 「アイヌ文化と博物館②コレクションの成り立ち」大阪府高齢者大学、大阪府社会福祉会館

2016年7月27日 「アイヌ民族の歴史と文化」尼崎市立中央公民館講座（市民大学）

2016年9月14日 「アイヌの文化・新展示について」MMP ステップアップ講座、国立民族学博物館

2016年10月3日 「日本の先住民族アイヌ」JICA 博物館学コース、国立民族学博物館

2016年11月28日 「アイヌの文化展示のリニューアルについて」（電話出演）、ハニーFM「ハニー・モーニング・トレイン」

2016年12月1日 「ミンパク オッタ カムイノミ」司会・解説、国立民族学博物館

2016年12月8日 「展示キュレーションの誘惑 ——新しいアイヌの文化展示ができるまで」連続講座みんぱく×ナレッジキャピタル、グランフロント大阪北館1階「カフェラボ」

2017年1月7日 齋藤玲子・藤戸ひろ子「アイヌ文化を楽しく学ぶ 関西での活動を例に」第462回みんぱく友の会講演会、国立民族学博物館

2017年1月9日 齋藤玲子・小笠原小夜「『アイヌ・アート』をもっと身近に イラストレーションから踊りまで」第116回みんぱく友の会東京講演会、アイヌ文化交流センター

2017年2月7日 「アイヌ民族の歴史と文化」大阪聖母女学院高校1年生向け講義、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年2月5日 「アイヌの衣文化」第453回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・展示

『アイヌの文化』展示新構築プロジェクトリーダー

◎調査活動

・国内調査

2016年8月26～29日—釧路市（釧路アイヌ協会カムイノミ（第45回春採コタン祭）の参与調査ならびに新構築フォーラム関連行事の打ち合わせ）

2016年11月13日—松阪市（松浦武四郎収集のアイヌ民具調査およびアイヌ文化伝承者からの聞き取り）

2017年3月13日～3月15日—平取町・苫小牧市（アイヌの衣類ならびにアットゥシ織りの技術に関する調査）

2017年3月19日～3月20日—水戸市（茨城県立歴史館）（水戸藩ゆかりの蝦夷地関連資料の調査ならびに特別展「イカラカラ——アイヌ刺繍の世界」展の視察）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）連携研究者

◎社会活動・館外活動等

北海道立北方民族博物館研究協力員、（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構平成29年度アイヌ工芸品展企画委員

新免光比呂 [しんめん みつひろ] ————— 准教授

1959年生。【学歴】早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学（1992）【職歴】東方研究会専任研究員（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、帝京大学非常勤講師（1992）、国立民族学博物館第3研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2004）【学位】文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）【専攻・専門】宗教学・東欧研究【所属学会】宗教学会

【主要業績】

[単著]

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国——ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

[共著]

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途3 人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

[論文]

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教——民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1-42。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ルーマニアの社会主義体制下での知識人について

・研究の目的、内容

ルーマニアの社会主義体制下における知識人のありようを、その思想と体制との関わりの中で考察する。

・成果

ルーマニアの社会主義体制は、戦間期の右翼急進主義運動（レジオナル運動）に関与した知識人を徹底的に迫害し、そのイデオロギーを抑圧することで体制に従順な新たな知識人集団を生み出した。しかし、周辺化させられながらもコンスタンティン・ノイカは、知識人としてソクラテス的な教育によって民主革命後のルーマニア社会をリードする知識人を生み出した。昨年度は、そうした知識人の形成をコンスタンティン・ノイカのテキストを読み解きながら考察した。また、民主革命後のルーマニア大衆音楽に対する知識人層の反応に関する考察をもとに、国際フォーラム「東欧演歌と東アジアのポップフォーク：ユーラシア両端の音楽的平行現象」International Forum “Pop-folk genres in East Europe and East Asia: Parallel Phenomena on Both Sides of Eurasia”に参加して「西欧化のジレンマとマネーレ——ゆらぐルーマニア人のアイデンティティ」というテーマで発表を行った。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月14日 「アルフォンス・ミュシャの生きた東欧世界——宗教と民族を中心として」堺市アルフォンス・ミュシャ館

2017年2月15日 「西欧化とマネーレ——ゆらぐルーマニアのアイデンティティ」国際フォーラム『東欧演歌と東アジアのポップフォーク』大阪大学21世紀懐徳堂スタジオ

・広報・社会連携活動

2016年6月8日 「人生は明るく楽しく——ルーマニアの食文化」ナレッジ・キャピタル超学校みんなく×ナレッジ・キャピタル——世界の『台所』、グランフロント大阪

◎調査活動

・国内調査

2016年9月23日—岡山県立博物館（現在の岡山県域に中心があり、古代に繁栄した吉備国をはじめとした原始・古代からの文化遺産の収集・保存について実地調査）

2016年10月14日—オリエン特美術館（国内唯一の古代オリエントを専門とする公立美術館であると同時に西日本における研究拠点としても機能している美術館の展示見学）

2016年11月11日—兵庫県朝来（展示イベント「ハチュカル——アルメニアの十字架石碑をめぐる物語」において借用した資料の返却と展示の評価に関する討論）

2016年12月10日～12月11日—大川周明の碑・石原莞爾墓所（戦前の右翼思想家である大川周明の碑、大川家本家を訪問して、その意義を考察するための資料収集。戦前の国家主義者であった石原莞爾の墓所を訪れ、その意義を考察するための資料収集）

2017年1月10日～1月11日—林原美術館・大原美術館（企業が設立した美術館の展示と運営に関する調査）

2017年1月22日～1月23日—国学院大学（科研「ファシズム期の古代理解に関する総合的研究」研究会参加。シルヴィオ・ヴィータ教授（京都外国語大学）による発表「昭和前期イタリア人宣教師の『古事記』——マリオ・マレガ（1902-1978）のイタリア語訳とその背景」を踏まえ日本における古代理解の問題について討議）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「ファシズム期の古代理解に関する総合的研究」（研究代表者：平藤喜久子）
研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「旧東欧地域における「演歌型」大衆音楽の比較研究」（研究代表者：伊東信宏）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

平成28年度 JICA 課題別研修「博物館とコミュニティ開発コース」委員長

鈴木 紀 [すぎき もとい]——准教授

1959年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）【職歴】ニューヨーク州立大学ビンガムトン校人類学科教務助手（1992）、千葉大学文学部助教授（1996）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1985）【専攻・専門】開発人類学・ラテンアメリカ文化論 1）開発援助プロジェクト評価、2）フェアトレード、3）マヤ・ユカテコ民族の社会変化、4）先住民族文化の比較展示学【所属学会】日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for Applied Anthropology、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGO の役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ8）東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84, 東京：東京大学出版会。

2011 「開発人類学の展開」佐藤 寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学：冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp.45-66, 東京：明石書店。

【2016年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

国際開発のための実践人類学

・研究の目的、内容

本研究の目的は、社会問題の解決に寄与するための文化人類学である実践人類学を、国際開発活動の分野で推進することにある。とくに開発プロジェクトが、その対象社会で持続、発展していくための条件を、プロジェクトのインパクト（事前に予期された影響および予期されていなかった影響）に関する民族誌的調査を通じて明らかにしていく。

今年度は、メキシコの農村開発に関する研究成果の取りまとめ、およびフェアトレード研究を行う。後者では、フェアトレードのインパクトを調査するため、中央アメリカのカカオ栽培を事例に、カカオ栽培に起因する地域振興としての観光業の展開について現地調査をおこなう。この調査には、科学研究費基盤研究B「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の資金を充当する。

・成果

以下の形で研究成果を発表した。

1) NGO による国際支援活動に関する理論的研究

鈴木 紀、2017「グローバルな互酬を構想する」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編『グローバル支援の人類学：変貌する NGO・市民活動の現場から』pp.61-77, 京都：昭和堂。

2) フェアトレードに関する研究発表

鈴木 紀「フェアトレードの拡大か卒業か：ベリーズのカカオ栽培の動向」オルタナティブ研究会、2016年7月2日、京都大学（科学研究費基盤研究B「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の研究成果）

Suzuki, Motoi "Transformation of Ethical Sourcing and its impact on Producers: a Case of Cacao Production in Belize", International Symposium on Impacts of Fair Trade, 4-5 February 2017, Campus Plaza Kyoto, Kyoto, Japan（科学研究費基盤研究B「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の研究成果）

3) フェアトレードに関する研究論文

Suzuki, Motoi 2017 "Ethical Sourcing and its Impact on Decommodification: A Case of Cacao Production in Belize", In Koichi Ikegami ed. *Impacts of Fair Trade: Considering Economy of Virtue*, pp.53-65, Nara: Faculty of Agriculture, Kindai University.（科学研究費補助金基盤研究B「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の研究成果）

4) フェアトレードに関する新聞記事

鈴木 紀「フェアトレードタウン：イングランドの町から」毎日新聞 2016年6月9日夕刊

鈴木 紀「フェアトレードタウン：ガーナのカカオ栽培の町」毎日新聞 2016年6月16日夕刊

鈴木 紀「フェアトレードタウン：コーヒー協同組合の町」毎日新聞 2016年6月23日夕刊

鈴木 紀「フェアトレードタウン：熊本、そして名古屋」毎日新聞 2016年6月30日夕刊

◎出版物による業績

[編著]

小長谷有紀・鈴木 紀・旦 匡子編

2016 『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』東京：勉誠出版。[機関研究「支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて」の成果]

[論文]

鈴木 紀

2016 「互恵の美德と循環移民」小長谷有紀・鈴木 紀・旦 匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』pp.220-225, 東京：勉誠出版。[機関研究「支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて」の成果]

2017 「グローバルな互酬を構想する」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編『グローバル支援の人類学——変貌する NGO・市民活動の現場から』pp.61-77, 京都：昭和堂。[共同研究「NGO 活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」の成果]

Suzuki, M.

2017 Ethical Sourcing and Its Impact on Decommodification: a Case of Cacao Production in Belize. In K. Ikegami (ed.) *Impacts of Fair Trade: Considering Economy of Virtue*, pp.53-65. Nara: Faculty of Agriculture, Kinki University.

[その他]

鈴木 紀

- 2016 「フェアトレードタウン（１）イングランドの町から」『毎日新聞』 6月9日夕刊。（共同研究「フェアトレードの思想と実践」の成果）
- 2016 「フェアトレードタウン（２）ガーナのカカオ栽培の町」『毎日新聞』 6月16日夕刊。（共同研究「フェアトレードの思想と実践」の成果）
- 2016 「フェアトレードタウン（３）コーヒー共同組合の町」『毎日新聞』 6月23日夕刊。（共同研究「フェアトレードの思想と実践」の成果）
- 2016 「フェアトレードタウン（４）熊本、そして名古屋」『毎日新聞』 6月30日夕刊。（共同研究「フェアトレードの思想と実践」の成果）
- 2016 「みんなくワールドシネマ」『社会科NAVI』 13：14。
- 2016 「『国境の壁』に対峙する博物館——メキシコ」『みんなく E-News』 184。
- 2016 「先住民族を知ろう⑦マヤ」『朝日小学生新聞』 11月13日。
- 2016 「コメント」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138）pp.67-68, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「映画から読み解く『メキシコ国境の壁』」『読売オンライン深読みチャンネル』（1月8日公開）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年5月28日 「分科会〈過去に学ぶ／過去を活かす：資源としてのメソアメリカ文明〉趣旨説明」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学
- 2016年5月28日 「美術館の中のメソアメリカ文明：展示の詩学と政治学」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学
- 2016年6月18日 「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」科学研究費助成事業新学術領域研究（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」公開講演会「マヤ文明とアンデス文明の最新調査～過去から現代まで～」キャンパス・イノベーションセンター東京
- 2016年6月19日 「古代アメリカ文明の博物館展示の比較研究」科学研究費助成事業新学術領域研究（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」第3回研究者全体集会、キャンパス・イノベーションセンター東京
- 2016年7月2日 「フェアトレードの拡大か卒業か：ベリーズのカカオ栽培の動向」オルタナティブ研究会、京都大学
- 2016年10月30日 “Entre Arqueología y Etnografía: un Estudio Museográfico de la Representación de Mesoamérica en el Museo Nacional de Antropología, México”. Primer Congreso Internacional de Mesoamericanistas en Tokyo 2016, キャンパス・イノベーションセンター東京
- 2017年2月4日 “Transformation of Ethical Sourcing and its impact on Producers: a Case of Cacao Production in Belize”. International Symposium on Impacts of Fair Trade, キャンパスプラザ京都

・広報・社会連携活動

- 2016年4月22日 「マヤ文明を見る——メキシコ、グアテマラの博物館展示から」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館
- 2016年5月6日 「マヤ文明を知る——メキシコ、グアテマラの博物館展示から」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館
- 2016年5月22日 「グアテマラ先住民——スクリーンの中と外」映画『火の山のマリア』解説、元町映画館
- 2016年11月19日 「博物館の中の古代アメリカ文明」第462回みんなくゼミナール、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

- 2017年3月9日～10日—東京（東京国立博物館で考古学と歴史学展示に関する資料収集）
- 2017年3月17日—東京（国文学資料館で古典文学展示に関する資料収集）

・海外調査

- 2016年7月17日～7月25日—メキシコ（アステカに関する博物館展示の比較研究）
- 2016年11月3日～11月10日—ドイツ、オーストリア、イギリス（倫理的貿易のマーケティング戦略に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

比較社会演習Ⅲ「社会と経済に関する人類学的アプローチ」担当

比較文化学基礎演習Ⅰ（1年生ゼミ）、比較文化学基礎演習Ⅱ（1年生ゼミ）担当

・博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業・新学術領域（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」A04計画研究「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」研究代表者、科学研究費助成事業・新学術領域（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」総括班、研究分担者、科学研究費助成事業・国際共同研究加速基金（国際活動支援班）「古代アメリカの比較文明論」研究分担者、科学研究費助成事業・基盤研究B「フェアトレードによるインパクトの地域間比較——徳の経済を念頭に」研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・委嘱された委員

文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員

廣瀬浩二郎 [ひろせ こうじろう] ————— 准教授

【学歴】京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校留学（1995）、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学（1997）【職歴】京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2000）、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）【専攻・専門】日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）【所属学会】日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすゝめ』京都：世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論——出口王仁三郎と近代日本』大阪：解放出版社。

[学位論文]

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」京都大学大学院文学研究科。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

28年4月の「障害者差別解消法」の施行後、各方面で障害者に対する「合理的配慮」のあり方が模索されている。民博着任以来、私が取り組んできたユニバーサル・ミュージアムの実践的研究は、博物館における「合理的配慮」を考える上で重要な意義を有しているといえよう。今年度はユニバーサル・ミュージアムの理論を観光・まちづくり分野に応用する研究に力を入れたい。オリンピック・パラリンピックの東京開催に向けて、ユニバーサル・ツーリズムへの関心が高まっている。しかし、「誰もが楽しめる観光・まちづくり」といっても、障害者の移動手段の確保など、バリアフリー的な施策にとどまっているのが現状である。今年度は「被災地ツーリズムのユニバーサル化」に関する調査を福島県いわき市で行い、その成果を論文にまとめる。ユニバーサル・ミュージアム論に基づく観光プランを具体的に提案するのが、28年度の新たな目標である。

その他、教育現場、博物館などでの“さわる”体験プログラムは、内容を充実させつつ継続実施する。兵庫県立美術館の企画展「美術の中のかたち」（7月～11月）にも全面的に協力する予定である。

・成果

28年度は館内外での講演（研究会等における報告を含む）を43回、触覚をテーマとするワークショップを13回担当した。また展示関係で13回、著作関係で12回、点字や視覚障害関連の話題で4回、新聞（学会誌の書評を含む）に取り上げられた。テレビ、ラジオへの出演は4回である。このように、私が提唱する「ユニバーサル・ミュージアム」「触文化」が確実に各方面に広がっていく手応えを感じる一年となった。今年度の成果の中で特筆に値するのは、28年7月～11月の兵庫県立美術館の企画展「つなぐ×つつむ×つかむ」に、29年2月の奈良県文化会館の「さわって楽しむ体感展示」（国民文化祭、障害者芸術・文化祭のプレイベント）に、それぞれアドバイザーとして全面協力した経験である。これらの実績については、29年度以降の新たな展開に向けて取り組みを継続している。28年8月には拙編著『ひとが優しい博物館』（青弓社）も刊行された。本書は27年11月に民博で開催したシンポジウムの報告書である。さらに、点字の考案者ルイ・ブライユに関する2冊の書籍、すなわち学習まんが、ジュニア文庫（いずれも小学館）にストーリー協力、あるいは監修という形で関わり、教育現場との連携を深めることができたのも有意義だった。

◎出版物による業績

[監修]

山本徳造著・廣瀬浩二郎監修

2017 『ルイ・ブライユ』東京：小学館ジュニア文庫。

[編著]

廣瀬浩二郎編

2016 『ひとが優しい博物館』東京：青弓社。

[論文]

廣瀬浩二郎

2016 「触角人間になろう！」『教育美術』77(9)：46-49, 教育美術振興会。

2017 「『障害の宇宙モデル』の提案に向けて」『天文教育』29(1)：39-46, 天文教育普及研究会。

2017 「『触識』のすすめ」『シンポジウム「彫刻とエロス」報告書』pp.5-14, 神奈川：東海大学課程資格教育センター。

立岩真也・廣瀬浩二郎

2016 「障害と創造をめぐる」『REAR』38号, pp.6-23, 名古屋：リア制作室。

[その他]

新井隆広著・廣瀬浩二郎（ストーリー協力）・大内進監修

2016 『学習まんが人物館 ルイ・ブライユ』東京：小学館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2016年11月28日 「共同研究の意義と目標」『「障害」概念の再検討』

2017年2月12日 「身体でみる美術鑑賞法」『テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年9月24日 「宇宙人の顔を作ろう」ユニバーサルデザイン天文教育研究会主催ワークショップ、国立天文台

2016年9月25日 「『障害の宇宙モデル』の提案に向けて」ユニバーサルデザイン天文教育研究会主催講演会、国立天文台

2016年12月3日 「触識のすすめ」東海大学主催シンポジウム「彫刻とエロス」、東海大学

・研究講演

2016年5月13日 「さわって楽しむ世界」都立八王子盲学校主催講演会、国立民族学博物館

2016年5月21日 「障害とは何か」京都大学ポケットゼミ、国立民族学博物館

2016年5月22日 「さわって楽しむ世界」わんぱく文庫主催ワークショップ、吹田市立山田駅前図書館

2016年6月7日 「触文化とは何か」兵庫県立大学主催特別講義、国立民族学博物館

2016年6月16日 「無視覚流コミュニケーション」キッズプラザ大阪主催研修会、キッズプラザ大阪

2016年6月18日 「触感展示の新たな可能性」国文学研究資料館主催講演会、千代田区立千代田図書館

2016年6月20日 「視覚障害者誘導法の新解釈」キッズプラザ大阪主催研修会、キッズプラザ大阪

2016年7月1日 「無視覚流鑑賞の意義」兵庫県立美術館主催研修会、兵庫県立美術館

- 2016年7月3日 「視覚障害者の文化と人権」摂津市人権協会主催講演会、千里丘公民館
- 2016年7月8日 「視覚障害教育と触文化」兵庫県立盲学校主催講演会、兵庫県立盲学校
- 2016年7月23日 「触角人間になろう！」兵庫県立美術館主催ワークショップ、兵庫県立美術館
- 2016年8月4日 「無視覚流鑑賞の極意」芦屋美術会主催講演会、兵庫県立美術館
- 2016年8月6日 「アタマでさわる、カラダがさわる、ココロにさわる」兵庫県立美術館主催ワークショップ、兵庫県立美術館
- 2016年8月20日 「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題」高雄市立歴史博物館主催講演会、台湾・高雄市立歴史博物館
- 2016年9月16日 「さわって楽しむ世界」愛知県立名古屋盲学校主催講演会、国立民族学博物館
- 2016年9月18日 「盲人史研究と触文化」同志社大学主催講演会、同志社大学
- 2016年9月19日 「人生の触り方」兵庫県立美術館主催講演会、兵庫県立美術館
- 2016年9月27日 「点字と触文化」大阪女学院中学部主催特別授業、大阪女学院
- 2016年9月28日 「ユニバーサル・ツーリズムの可能性」近畿日本ツーリスト主催研修会、TKPガーデンシティ永田町
- 2016年9月30日 「視覚障害者の社会参加と点字の歴史」大阪女学院中学部主催特別授業、大阪女学院
- 2016年10月15日 「さわって楽しむ考古学」ひたちなか市主催「ふるさと考古学講座」、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
- 2016年10月19日 「触文化を通じて新たな気づきを！」枚方市立中央図書館主催講演会、枚方市立中央図書館
- 2016年10月24日 「触文化を楽しもう」豊中市立第七中学校主催講演会、豊中市立第七中学校
- 2016年10月27日 「情報保障と情報変換」西宮市視覚障害者図書館主催講演会、国立民族学博物館
- 2016年10月29日 「瞽女文化とバリアフリー」両国門天ホール主催講演会、両国門天ホール
- 2016年10月30日 「触る感動、動く触感」両国門天ホール主催ワークショップ、両国門天ホール
- 2016年11月1日 「触文化とは何か」京都府南丹教育局主催講演会、亀岡市立育親中学校
- 2016年11月2日 「視覚障害教育と触文化」都立八王子盲学校主催講演会、八王子盲学校
- 2016年11月3日 「瞽女文化にさわる」瞽女ミュージアム高田主催ワークショップ、新潟・瞽女ミュージアム高田
- 2016年11月8日 「博物館とバリアフリー」平成28年度博物館学集中コース、国立民族学博物館
- 2016年11月10日 「博物館で異文化体験」山陽女子高校主催講演会、国立民族学博物館
- 2016年11月12日 「和紙の触感を楽しもう」わらべ館主催ワークショップ、鳥取・わらべ館
- 2016年11月15日 「視覚障害教育と博物館利用」宮城県立盲学校主催講演会、国立民族学博物館
- 2016年11月17日 「無視覚流の極意を求めて」大阪府立大手前高校主催講演会、大手前高校
- 2016年11月18日 「バリアフリー映画の魅力」日本ライトハウス主催講演会、大阪・玉水記念館
- 2016年12月1日 「ひとが優しい博物館」国立教育政策研究所主催「博物館学芸員専門講座」、社会教育実践研究センター
- 2016年12月5日 「ユニバーサル・ミュージアムとは何か」芦屋美術会主催講演会、国立民族学博物館
- 2016年12月17日 「触文化を体験しよう」関西ステューデント・ライブラリー主催ワークショップ、国立民族学博物館
- 2017年1月12日 「無視覚流鑑賞の極意」九州産業大学主催「九州地区学芸員技術研修会」、宮崎県立美術館
- 2017年1月13日 「『障害』の意味を問い直す」宮崎県立視覚障害者センター主催講演会、宮崎県立視覚障害者センター
- 2017年1月22日 「見立て涅槃図にチャレンジ！」岡山県立美術館主催ワークショップ、岡山県立美術館
- 2017年2月5日 「くらやみ魔法使いになろう！」キッズプラザ大阪主催ワークショップ、キッズプラザ大阪
- 2017年2月8日 「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」鳥取県ミュージアム・ネットワーク主催講演会、倉吉博物館
- 2017年2月19日 「さわる世界旅行」江戸東京博物館主催ワークショップ、江戸東京博物館
- 2017年2月23日 「視覚障害教育と触文化」和歌山県立盲学校主催講演会、和歌山県立盲学校
- 2017年3月3日 「さわる文化と視覚障害者の歴史」大阪府視覚障害者協会主催講演会、大阪府視覚障害者協会
- 2017年3月11日 「触文化を体験しよう」大阪市立中央図書館主催ワークショップ、大阪市立中央図書館
- 2017年3月26日 「さわって楽しむ博物館」クラブツーリズム主催講演会、国立民族学博物館
- ・広報・社会連携活動
- 2016年4月24日 NHK テレビ「こころの時代」出演

2016年6月11日 NHK ラジオ「明日へのことば」出演

2016年8月22日 ラジオ大阪「話の目薬ミュージックソン」出演

2016年10月12日 「身体でみる異文化」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

2016年12月23日 RCC ラジオ（中国放送）「おはようフォーカス」出演

・みんなくウィークエンド・サロン

2016年8月7日 「『無視覚流』の極意を求めて」みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2016年7月18日—東京都・東京藝術大学（「さわる絵画」に関する最新の動向調査、意見交換）

2016年9月4日—静岡県・浜松市楽器博物館（ユニバーサル・ツーリズムに関する実地調査）

2017年3月2日—東京都・ユニバーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ」（映画上映のユニバーサル化に関する調査、意見交換）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

吹田市立博物館協議会委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西学院大学・非常勤講師「障害と人権」、筑波大学理療科教員養成施設・非常勤講師（集中）「視覚障害教育」、東海大学・非常勤講師（集中）「博物館実習」

山中由里子 [やまなか ゆりこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】カラマズー大学フランス語／美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退（1993）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1992）、東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）【学位】学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）【専攻・専門】比較文学比較文化 西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究、「驚異」の文化史【所属学会】日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会、International Society for Iranian Studies

【主要業績】

[単著]

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

山中由里子

2015 『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Yamanaka, Y. and T. Nishio (eds.)

2006 *The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*. London: I. B. Tauris.

【受賞歴】

2011 第7回日本学士院学術奨励賞

2011 第7回日本学術振興会賞

2010 第15回日本比較文学会賞

2010 島田謹二記念学藝賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

・研究の目的、内容

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で mirabilia、アラビア語・ペルシア語で 'ajā'ib と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。本研究で明らかにしようとする問題点は、次の三つの主要な軸にまとめることができる。

- 1) ジャンルの枠組とモチーフの分類：驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手（あるいは編纂者）によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通する主なモチーフや逸話を関連作品から抽出し、「異民族の驚異」、「異境の驚異」、「太古の驚異」といった分類を試みる。
- 2) 知識の伝播と世界観の変遷：権力の移行、人間の移動、書物・視覚イメージの普及など、知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的な文脈を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。さらに、世界地図や挿絵・装飾などの視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。
- 3) 宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性：上記1)と2)のような比較研究を通して、宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力」と語りの力を明らかにする。

・成果

科学研究費新学術領域研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（代表：野林厚志）の分担金を得て、下記の成果を発表した。

論文：

- ・山中由里子「捏造された人魚——イカサマ商売とその源泉をさぐる」稲賀繁美編、『海賊史観からみた世界史の再構築——公益と情報流通の現在を問い直す』京都：思文閣、2017、pp.170-195
- ・山中由里子「心の進化から驚異・怪異を捉える」『民博通信』156、2017、pp.20-21
- ・山中由里子「スエズの商人・南部憲一」橋本順光・鈴木禎宏編、『欧州航路の文化誌 寄港地を読み解く』東京：青弓社、2017、pp.139-158

口頭発表：

- ・Yuriko Yamanaka “At the Crossroads of Global Cultural History: from a ‘Far Eastern’ Perspective”, International Comparative Literature Association 2016, University of Vienna, Vienna, 2016. 7. 23
- ・Yuriko Yamanaka “Incredible India, the Land of Wonders in Persian ‘Ajā’ib Literature”, International Conference on Indo-Persian Studies at the Academy of Persian Language and Literature, Tehran, 2017. 2. 20
- ・「想像界の生物相：生態系と人間の想像力の相関関係の比較文化的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第1回研究大会』東京大学小柴ホール、2016.11.6

ポスター発表：

- ・山中由里子「想像界の生物相——マンティコーラにみる名付けと形象化」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第2回研究大会』名古屋大学、2017.2.10-11

◎出版物による業績

〔論文〕

山中由里子

- 2016 「イスラームの世界史観——アレクサンドロスは『大王』か？」秋田 茂・永原陽子・羽田正・南塚信吾・三宅明正・桃木至朗編『「世界史」の世界史』pp.1-24、京都：ミネルヴァ書房。
- 2017 「スエズの商人・南部憲一」橋本順光・鈴木禎宏編『欧州航路の文化誌 寄港地を読み解く』pp.139-158、東京：青弓社。〔書評：日経新聞2017年2月12日〕
- 2017 「捏造された人魚——イカサマ商売とその源泉をさぐる」稲賀繁美編『海賊史観からみた世界史の再構築——公益と情報流通の現在を問い直す』pp.170-195、京都：思文閣。

〔その他〕

山中由里子

- 2016 「人魚のミイラ——『リアルなニセモノ』と対面する驚き」国立民族学博物館編『見世物大博覧会』pp.194-195、大阪：国立民族学博物館。

- 2016 「ドイツのポップカルチャー市場調査——1日目」『月刊みんぱく』40(11):10-11。
- 2016 「ドイツのポップカルチャー市場調査——2日目」『月刊みんぱく』40(12):10-11。
- 2016 「オフサイド・ガールズ したたかな異性装——イラン版『とりかへばや』物語」小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ世界の「いま」を映画から考えよう』pp.31-36, 東京:勉誠出版。
- 2016 「解説——大世界史の先駆者」平川祐弘著『西欧の衝撃と日本』(平川祐弘決定版著作集5) pp.393-396, 東京:勉誠出版。
- 2017 「みんぱく世界の旅 博物館の怪物たち (1) ——古代から人間に共通する『博物学的思考』」『毎日小学生新聞』1月14日。
- 2017 「みんぱく世界の旅 博物館の怪物たち (2) ——生物図鑑にのった怪物」『毎日小学生新聞』1月21日。
- 2017 「みんぱく世界の旅 博物館の怪物たち (3) ——日本産人魚のミイラ」『毎日小学生新聞』1月28日。
- 2017 「和菓子と洋菓子」野林厚志監修『日本と世界のくらしどこが同じ?どこがちがう? 食——教科書に出てくる「くらしの中の和と洋」』pp.38-41, 東京:汐文社。
- 2017 「障子とカーテン」日高真吾監修『日本と世界のくらしどこが同じ?どこがちがう? 住——教科書に出てくる「くらしの中の和と洋」』pp.18-21, 東京:汐文社。
- 2017 「『心の進化』から驚異・怪異を捉える」『民博通信』156:20-21。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2016年12月18日～12月19日 'Europe seen through Japanese Animation: A Case Study of the Reception of "Heidi, Girl of the Alps" in Iran.' The Global Flow of Cultural Knowledge and their Afterlives: Between Japan and the Middle East. 国立民族学博物館

・共同研究会での報告

- 2016年8月2日 「人魚のミイラ——驚異と怪異の接点」『驚異と怪異——想像界の比較研究』国立民族学博物館
- 2016年12月3日 「『心の進化』から驚異・怪異を考える人類の自然理解に関する認知科学的研究の紹介」『驚異と怪異——想像界の比較研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年7月23日 'At the Crossroads of Global Cultural History: from a "Far Eastern" Perspective.' 21st World Congress of the International Comparative Literature Association, University of Vienna
- 2016年11月5日～11月6日 「想像界の生物相——生態系と人間の想像力の相関関係の比較文化的研究」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020:パレオアジア文化史学第1回研究大会、東京大学小柴ホール
- 2017年2月12日 「想像界の生物相——マンティコーラにみる名付けと形象化」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020:パレオアジア文化史学第2回研究大会、名古屋大学野依記念学術交流館
- 2017年2月19日 'Incredible India, the Land of Wonders in Persian 'Aja'ib Literature.' International Conference on Indo-Persian Studies, Academy of Persian Language and Literature, Tehran

・展示

- 『国立民族学博物館展示案内』編集長
特別展示「見世物大博覧会」実行委員

・広報・社会連携活動

- 2017年2月4日 「世界各地のイスラーム——みんぱくでその広がりを考える」第463回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2016年11月27日 「博物学と見世物——珍獣幻獣大集合」第446回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・その他

- みんぱくワークシート「みんぱく探検! イスラーム編」監修

◎調査活動

・海外調査

2016年4月8日～5月22日—ドイツ、イラン（ペルシア語博物学関連資料調査及び博物館調査）

2016年6月22日～6月28日—ドイツ（映像上映にかかる調査研究及びみんぱく「世界のイスラーム」関連調査）

2016年7月15日～8月15日—オーストリア、ドイツ（国際比較文学学会大会、国際イラン学会大会参加、日本ポップカルチャー受容に関する調査）

2016年9月26日～10月19日—オランダ、ドイツ（博物学標本に関する調査）

2017年1月4日～1月11日—フランス、ドイツ（コーヒー・喫茶文化に関する調査）

2017年2月17日～2月28日—イラン（インド・ペルシア学会議参加・発表、ブーカーン調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

「西アジア文化研究特論」担当

論文ゼミ

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト現代中東地域研究拠点拠点構成員、科学研究費助成事業（新学術領域研究（研究領域提案型））「パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」（B01班：人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築）分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「日本現代文学・文化の世界展開の比較文学的研究——〈ポップ〉なテキストを中心に」（代表：平石典子）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本比較文学会国際活動委員会、Advisory Board *Persian Literary Studies Journal*、Academic Advisory Board *interlitteraria*

・他大学の客員、非常勤講師

東京大学「グローバル教養特別演習Ⅴ」集中講義、関西学院大学総合A「あやかしの日本文化」（ゲスト講師、2016年7月5日）

藤本透子 [ふじもと とうこ] ————— 准教授

1975年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1998）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修了（2002）、京都大学大学院人間・環境学研究科環境相關研究専攻博士課程研究指導認定退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（2006）、京都大学大学院人間・環境学研究科研修員（2008）、国立民族学博物館機関研究員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2012）立命館大学国際関係学部「ロシア・ユーラシア研究Ⅱ」非常勤講師（2015）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2010）修士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2002）【専攻・専門】文化人類学、中央アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、日本イスラーム協会

【主要業績】

[単著]

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』東京：風響社。

[編著]

藤本透子

2015 『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』横浜：春風社。

【論文】

Fujimoto, T.

- 2011 Kazakh Memorial Services in the Post-Soviet Period: A Case Study of Northern Kazakhstan Villages.
In T. Yamada and T. Irimoto (eds.) *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*, pp.117-132. Sapporo: Hokkaido University Press.

【受賞歴】

- 2013 人間文化研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中央アジアにおける移動と宗教動態に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、中央アジアのカザフスタンを中心に、昨年度から引き続き移動と宗教動態に着目して、社会再編に際して何が共同性の核となるのかを明らかにすることを第1の目的とする。具体的には、人間文化研究機構の北東アジア地域研究の一環として、在外カザフ人の移動に関する調査研究を行う。第2の目的として、科学研究費補助金基盤C「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」に基づき、現代中央アジアにおける宗教・社会・身体・関係性を考察する。中央アジアでは、1990年代の体制移行に伴うイスラーム復興と社会変容のなかで伝統医療に携わる治療師が急増し、ある程度まで社会が安定し経済発展を遂げている現在も人々の関心をひきつけて存続している。地域社会の人々が身体を近代医療の対象としてのみ見ず、むしろ宗教的観念が作用する場と捉えてきたことをふまえて、治療師の活動が活発なカザフスタンを中心に、1) 中央アジアにおける伝統医療の歴史的背景、2) 伝統医療の再活性化メカニズム、3) 社会主義を経験した社会の近代医療と伝統医療の関係、4) イスラームおよびシャマニズムと伝統医療の布置を、今年度から5年間の研究において明らかにする。

・成果

1) 移動と共同性の再構築

在外カザフ人のカザフスタンへの移住に関して、論文“Migration to the ‘Historical Homeland.’ Remaking Connectedness in Kazakh Society beyond National Borders”を執筆し、①中国・ロシア・モンゴル国境を跨いだカザフ社会形成の歴史的背景、②旧ソ連からカザフスタンが独立した後の在外カザフ人呼び寄せ政策と移動の実態、③カザフスタンへの移動後における共同性の再構築過程において宗教実践と祝祭の復興が重要な役割を担ったことを指摘した。また、この論文を含む論集 *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93) を共編し、移動と共同性の再構築に関してアジアを中心にヨーロッパ、アメリカの事例と比較検討を行った。この論集は、科学研究費補助金 (JP24310181) の分担者としての成果の一部である。また、北東アジア地域研究プロジェクトの一環としてカザフ社会の形成と移動に関する調査を行い、同プロジェクト月例会で口頭発表した。

2) 伝統医療とイスラーム

カザフ社会のイスラーム動態について、「カザフスタンにおける喜捨の展開——アッラー・死者・生者の関係に着目して」(岸上伸啓編『贈与論再考——人間はなぜ他者に与えるのか』京都：臨川書店、pp.161-182.) を執筆した。本論文では、サダカと呼ばれる任意の喜捨が、アッラー・死者・生者の関係のもとで行われ、地域社会における通常の贈与の範囲を超えて共に生きる関係を確認する意義をもつことを指摘した。また、科学研究費補助金基盤C (JP16K02028) に基づき、カザフスタンのパヴロダル州バヤナウル地区とアルマトゥ市で伝統医療に関する調査を行い、治療者になる経緯、治療法などに関するデータを収集し分析した。

3) カザフ村落社会の形成と居住形態

7月以降、科学研究費補助金新学術領域 (16H06411) の分担者として、遊牧民の定住化にともなう村落形成と居住形態の変化に関して、カザフスタン及びモンゴルで現地調査を行った。その成果として、「中央アジアにおける遊牧民の定住化——居住形態の変化を中心に」(共同でのポスター発表)、「定住化にともなうカザフ村落社会の形成と変容」(単独でのポスター発表)を行い、報告書「集団間の接触にともなう居住形態の変化——中央アジアのカザフスタンの事例を中心に」を執筆した。これらの発表と報告書では、①前近代における定住化が遊牧民のオアシスへの移動によるものであったのに対し、19～20世紀における定住

化は農耕民の進出と遊牧民の草原への定住という特徴をもつこと、②定住化にともなって住居は天幕から、木造家屋、日干しレンガ作りの家屋へと変遷したこと、③住居としては使われなくなった天幕が、祝祭などで社会関係の結節点として象徴的な意味をもつことを指摘した。

◎出版物による業績

[編著]

Yamada, T. and T. Fujimoto (eds.)

2016 *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[論文]

藤本透子

2016 「カザフスタンにおける喜捨の展開——アッラー・死者・生者の関係に着目して」岸上伸啓編『贈与論再考——人間はなぜ他者に与えるのか』pp.161-182, 京都：臨川書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年10月25日 「カザフ社会の再編と『祖先の土地』——北東アジア地域研究へ向けて」北東アジア地域研究月例会、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月28日 「カザフスタンにおける喜捨の展開——神・死者・生者の関係に着目して」第50回日本文化人類学会研究大会、南山大学

2016年8月23日 'Qazaqstanda jürgizilgen ekspeditsiya boiınsha Japoniyada jasalghan etnografiyalık körme (Central Asian Exhibition in Japan)', Research Meeting of R. B. Suleimenov Institute of Oriental Studies, Ministry of Education and Sciences, Republic of Kazakhstan

2016年10月15日 'Ancestral Land and Networking in the Course of Privatization after Socialism: A Case Study in Kazakhstan', East Asian Anthropological Association 2016 Meeting, 北海道大学

2016年11月5日 「中央アジアにおける遊牧民の定住化——居住形態の変化を中心に」(吉田世津子との共同発表)パレオアジア文化史学第1回研究大会、東京大学

2017年2月11日 「定住化にともなうカザフ村落社会の形成と変容」パレオアジア文化史学第2回研究大会、名古屋大学

◎調査活動

・海外調査

2016年8月5日～8月27日—カザフスタン（カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究に関わる調査）

2016年9月5日～9月19日—モンゴル（モンゴル国におけるカザフの宗教・社会動態に関する調査（イスラームと伝統医療を中心に））

2017年1月23日～2月9日—モンゴル（イスラームと伝統医療に関する調査ならびにカザフの定住化に関する調査）

2017年2月28日～3月29日—カザフスタン（カザフの移動と定住化およびイスラームに関する調査）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

立命館大学国際関係学部「ロシア・ユーラシア研究Ⅱ」非常勤講師（2015年10月～2016年3月）。

名古屋大学大学院 PhD 博士課程教育リーディングプログラム「プロフェッショナル登龍門」の「イスラム文化論」（“Islam in Asia: An Anthropological Perspective”）を担当（2016年1月18日）。

先端人類科学研究部

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 部長（併）教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1983）【職歴】東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1982）【専攻・専門】アンデス考古学、文化人類学 1）古代アンデス文明の形成過程、2）現代ペルーの文化行政、3）考古学と国民国家形成、4）世界遺産と国別の文化遺産との相互関係【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology、Institute of Andean Studies

【主要業績】

[単著]

関 雄二

2010 『アンデスの考古学 改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス——権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

[共編]

大貫良夫・加藤泰建・関 雄二編

2010 『古代アンデス——神殿から始まる文明』（朝日選書863）東京：朝日新聞出版。

【受賞歴】

2008 濱田青陵賞

2008 科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008 クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

2015 ペルー文化功労者表彰

2016 外務大臣表彰

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈を行う。具体的には、ペルー北部山中パコパンバ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C.2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費補助金基盤研究（A）をあてた。

・成果

平成28（2016）年度から科学研究費補助金基盤研究（A）を取得し、フィールドワークを含め、研究を推進した。成果としては、『アンデス文明 神殿から読み取る権力の世界』（臨川書店）を編集し出版したほか、論文を6本出版した。このほか内外の国際学会、研究集会、シンポジウムにおいて8本の研究発表をおこなった。

◎出版物による業績

[編著]

関 雄二編

2017 『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』京都：臨川書店。

古谷嘉章・関 雄二・佐々木重洋編

2017 『「物質性」の人類学——世界は物質の流れの中にある』東京：同成社。

〔論文〕

関 雄二

- 2017 「古代アンデス文明における酒の利用」『酒史研究』32：1-16。
- 2017 「アンデス文明における権力生成過程の探求」関 雄二編『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』pp.1-23, 京都：臨川書店。
- 2017 「パコパンパ遺跡の埋葬からみた権力生成」関 雄二編『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』pp.267-289, 京都：臨川書店。
- 2017 「アンデスの神殿に刻まれた人間とモノの関係」古屋嘉章・関 雄二・佐々木重洋編『「物質性」の人類学——世界は物質の流れの中にある』pp.35-58, 東京：同成社。
- 2017 「物質性の人類学の可能性」古屋嘉章・関 雄二・佐々木重洋編『「物質性」の人類学——世界は物質の流れの中にある』pp.237-242, 東京：同成社。

中川 渚・関 雄二・ダニエル モラーレス

- 2016 「補修される土器／補修されない土器——アンデス形成期パコパンパ遺跡、カピーヤ遺跡の事例」『古代アメリカ』19：63-75。

関 雄二・フアン パブロ・ビジャヌエバ ディアナ アレマン・マウロ オルドーニェス・ダニエル モラーレス

- 2017 「建築からみた権力形成」関 雄二編『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』pp.27-52, 京都：臨川書店。

〔その他〕

関 雄二

- 2016 「『人類と家畜の世界史』ブライアン・フェイガン著 動物と共同で生み出した文明」(書評)『日本経済新聞』4月3日朝刊。
- 2016 「バーチャルな文化遺産」『チャスキ (アンデス文明研究会会報)』53：1, 東京：アムプロモーション。
- 2016 「巨大建造物は最初から巨大であったのか——アンデス・マヤ・西アジアからの視点」『歴博』197：15-17。
- 2016 「パチャママの贈り物の勝手な受け取り方」小長谷有紀・鈴木 紀・旦匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ 世界の「いま」を映画から考えよう』pp.116-120, 東京：勉誠出版。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 文化遺産のいま① 仮想世界を求めて」『毎日新聞』12月8日夕刊。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 文化遺産のいま② 発掘の記憶」『毎日新聞』12月15日夕刊。
- 2016 「アンデス研究の先駆者、増田義郎先生を偲ぶ」『チャスキ (アンデス文明研究会会報)』54：1, 東京：アムプロモーション。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 文化遺産のいま③ 負の記憶をめぐる葛藤」『毎日新聞』12月22日夕刊。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 文化遺産のいま④ 二つのマチュ・ピチュ博物館」『毎日新聞』1月5日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2016年11月5日 「バレーの小村における考古学的プロジェクトから発生した社会的記憶」『考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年4月6日～4月10日 'Sealing Ritual Spaces of a Formative Site by the Early Cajamarca Culture.' (Yuji Seki, Diana Alemán, Percy Santiago, Nagisa Nakagawa and Megumi Arata) "Society for American Archaeology 81st Annual Meeting", Orlando, Florida, USA
- 2016年8月8日 'Descubrimiento de la tumba (Sacerdotes de Serpiente-Jaguar) en Pacopampa 2015.' (Yuji Seki, Juan Pablo Villanueva y Daniel Morales Chocano) "II Simposio Internacional: Arqueología, Arquitectura y Museos", Auditorio del Colegio Nacional San José, Chiclayo, Perú
- 2016年9月16日 'La disposición arquitectónica como memoria social de los sitios arqueológicos formativos en la sierra norte del Perú: Una perspectiva de los estudios de Pacopampa y Kuntur Wasi.' (Yuji Seki) "III Congreso Nacional de Arqueología", Ministerio de Cultura del Perú, Lima, Perú

- 2016年 9 月25日 「コンソーシアムの課題と展望」文化遺産国際協力コンソーシアム設立10周年記念『文化遺産からつながる未来』、TKP ガーデンシティ 品川
- 2016年12月 3 日 「パコパンバ遺跡カハマルカ期ミニチュア土器の分析」(中川 渚、関 雄二、ダニエル・モラーレス) 古代アメリカ学会第21回研究大会、国立民族学博物館
- 2016年12月 3 日 「ペルー、パコパンバ遺跡から出土した人骨の生物考古学的研究——2016年度調査報告」(長岡朋人、関 雄二、鶴澤和宏、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、ダニエル・モラーレス) 古代アメリカ学会第21回研究大会、国立民族学博物館
- 2016年12月 3 日 「パコパンバ遺跡の儀礼的コンテクストから出土した動物骨資料：饗宴との関係を中心として」(鶴澤和宏、ディアナ・アレマン、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、関 雄二) 古代アメリカ学会第21回研究大会、国立民族学博物館
- 2016年12月 3 日 「ペルー北部高地パコパンバ遺跡における形成期後期のC4 資源利用」(瀧上 舞、関 雄二、長岡朋人、鶴澤和宏、ダニエル・モラーレス、米田 穰) 古代アメリカ学会第21回研究大会、国立民族学博物館
- 2016年12月16日 討論「2016エクアドル地震」による文化財被害状況報告会、東京国立博物館平成館小講堂
- 2017年 1 月29日 基調講演「アンデス文明の文化遺産の保護と活用」金沢大学・みんぱく共催シンポジウム「世界遺産と共に生きる 地域と人々の視点から」金沢市文化ホール・大会議室
- 2017年 2 月17日 「考古学からみた社会的差異の登場：アンデス文明を中心に」(関 雄二) 東北大学学際科学フロンティア研究所主催、社会動態セミナー「人類社会における不平等の生成と発達」東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育棟 6F 大ホール
- 2017年 3 月18日 「パコパンバ遺跡とクントゥル・ワシ遺跡における埋葬の比較と考察」基盤研究 (A)「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」基盤研究 (B)「生物考古学資料にもとづく古代アンデス社会の複雑化過程の解明」2016年度合同研究会、国立民族学博物館
- ・ 広報・社会連携活動
- 2016年 4 月16日 「アンデス文明における“過去”の成立と利用」アンデス文明研究会
- 2016年 7 月15日 「南米マチュ・ピチュ発見物語」池田市中央公民館特別講座
- 2016年10月25日 「アンデスの文化遺産を活かす 考古学者と盗掘者の対話」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店
- 2016年12月17日 「パコパンバ遺跡発掘速報2016」アンデス文明研究会
- 2016年12月23日 「インカ帝国からつづくアンデスの暮らし (南米・ペルー)」(京都で世界を旅しよう！2016 Winter school 地球たんけんたい 5) 環境と平和の学びデザインマナラボ (京都府受託事業) 同志社大学大学院総合政策科学研究科京町屋キャンパス「江湖館」
- 2017年 2 月 5 日 「日本人によるアンデス考古学調査——鳥居龍蔵の思いを受けて」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- ◎調査活動
- ・ 海外調査
- 2016年 7 月27日～9 月24日—ペルー (中央アンデス地帯における発掘調査及び研究集会に参加)
- 2017年 3 月 1 日～3 月13日—ペルー (パコパンバ発掘調査出土遺物の分析および保存遺構のモニタリング)
- ◎大学院教育
- ・ 指導教員
- 主任指導教員 (3 人)
- ◎上記以外の研究活動
- ・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 科学研究費補助金基盤研究 (A)「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」(16H02729) 研究代表者、科学研究費補助金基盤研究 (B)「生物考古学資料にもとづく古代アンデス社会の複雑化過程の解明」(16H05639) 研究分担者
- ◎社会活動・館外活動
- ・ 他機関から委嘱された委員など
- ペルー全国学長会議編集局理事、ペルーカトリカ大学 PUCP 編集委員、ペルー・チャビン・デ・ワントル国際研究センター・Chavin 編集委員、ペルー国クントゥル・ワシ文化協会 (NGO) クントゥル・ワシ博物館監査役、金沢大学国際文化資源学研究センターアドバイザー、東京外国語大学 AA 研海外学術調査専門委員、文化

遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、日本文化人類学会評議員、古代アメリカ学会会長、(公財)高梨学術奨励基金選考委員、アンデス文明研究会顧問

◎学会の開催

2016年12月3日～12月4日 第21回古代アメリカ学会研究大会・総会、国立民族学博物館。

齋藤 晃 [さいとう あきら] ————— 教授

【学歴】京都大学文学部文学科フランス語学フランス文学専攻卒(1988)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了(1991)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学(1994)【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手(1996)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手(1998)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授(2003)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授(2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2006)、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授(2014)【学位】学術修士(東京大学大学院総合文化研究科1991)【専攻・専門】文化人類学、ラテンアメリカ研究【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

齋藤 晃

1993 『魂の征服——アンデスにおける改宗の政治学』東京：平凡社。

[共著]

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Saito, A. y C. Rosas Lauro (eds.)

2017 *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究

・研究の目的、内容

1570年代、スペイン統治下のアンデスにおいて、世界史上希有な社会工学実験が実施された。第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの命令により、かつてのインカ帝国の中核地域で約150万の先住民が基盤目状に整然と区画された1千以上の町に強制移住させられた。総集住化と呼ばれるこの政策は、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれているが、その内実には不明な点が多い。本研究では、地理情報システム等を活用して、副王トレドの総集住化の全体像の解明を目指す。なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究(A)「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」(平成27～31年度、代表者：齋藤晃)の一環として実施される。

・成果

平成28年12月9日から10日にかけて、南米ボリビアの首都ラパスにおいて、科研費による国際共同研究「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」の一環として、『Las reducciones toledanas en perspectiva comparativa y multidisciplinaria』と題する国際シンポジウムを開催した。このシンポでは、共同研究のメンバーがこれまでの研究の暫定的成果を発表した。齋藤はシンポの冒頭で趣旨説明をおこなったほか、地理情報システムを活用した史料分析の成果を提示した。

本年度はまた、民博の機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」の最終成果として、教皇庁立ペルーカトリカ大学出版会から、スペイン語の論文集『Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú』を刊行した。この書物は、副王トレドの総集住化を含め、スペイン領南米各地の集住政策の実施形態、直接的帰

結、波及効果などを実証的に解明したものである。

◎出版物による業績

[共編]

Saito, A. y C. Rosas Lauro (eds.)

2017 *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú. [査読有、機関研究成果]

[論文]

Saito, A. y C. Rosas Lauro

2017 Introducción. Reduciendo lo irreducible. En A. Saito y C. Rosas Lauro (eds.) *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*, pp.11-64. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú. [査読有、機関研究成果]

Saito, A.

2017 Consolidación y reproducción de las parcialidades tras la implantación de las reducciones en el Moxos jesuítico. En A. Saito y C. Rosas Lauro (eds.) *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*, pp.509-552. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú. [査読有、機関研究成果]

[その他]

齋藤 晃

2016 「宣教師の異文化適応を再考する」『民博通信』153：14-15。[共同研究成果]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年12月9日～10日 Simposio internacional “Las reducciones toledanas en perspectiva comparativa y multidisciplinaria” (国際シンポジウムの実行委員長：C. López Beltránと共同). La Paz, Bolivia: Museo Nacional de Etnografía y Folklore

2016年12月9日 ‘La modernidad colonial en los Andes: un estudio comprensivo de la reducción general del virrey Toledo’ (趣旨説明). Simposio internacional “Las reducciones toledanas en perspectiva comparativa y multidisciplinaria” La Paz, Bolivia: Museo Nacional de Etnografía y Folklore

2016年12月9日 ‘Análisis preliminar de los datos de la tasa de Toledo sobre las reducciones’ (研究報告：Y. Kondo、N. Mizota、T. Koyamaと共同). Simposio internacional “Las reducciones toledanas en perspectiva comparativa y multidisciplinaria” La Paz, Bolivia: Museo Nacional de Etnografía y Folklore



・共同研究会での報告

2016年7月23日 「集住化と奴隷狩り——南米熱帯低地におけるイエズス会ミッシェンの建設」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』国立民族学博物館

2017年2月18日 「宗教と適応」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年8月4日～9月8日—ペルー（植民地期アンデスの集住政策についての調査研究）

2016年12月5日～12月15日—ボリビア（1. 国際シンポジウム『トレドの集住化——学際的比較研究』の開催、
2. 今後の研究計画の策定）

2017年3月1日～3月9日—フランス（スペイン領アメリカの集住政策に関する研究打合せ）

相島葉月 [あいしま はつき] ————— 准教授

【学歴】上智大学比較文化学部卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫性博士課程修士号取得退学（2002）、オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科修士課程修了（2005）、オクスフォード大学大学院東洋学研究科博士課程修了（2011）【職歴】有限会社美誠社（2002）、現代東洋学研究所客員研究員（2009）、現代東洋学研究所研究員及びベルリン自由大学ムスリム文化・社会研究科ポスドク研究員（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、マンチェスター大学人文学部講師（2012）、国立民族学博物館准教授（2016）【学位】博士（東洋学）（オクスフォード大学大学院東洋学研究科・セントアントニーズカレッジ 2011）、科学修士（社会人類学）（オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科・グリーンカレッジ 2005）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2002）【専攻・専門】社会人類学、イスラーム学、中東研究【所属学会】日本中東学会、アメリカ人類学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

Aishima, H.

2016 *Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society*. London: IB Tauris.

[編著]

Aishima, H.

2016 Are We All Amr Khaled? Islam and the Facebook Generation of Egypt. In A. Masquelier and B. Soares (eds.) *Muslim Youth and the 9/11 Generation*, pp.105-122. Santa Fe: School for Advanced Research Press.

[論文]

Aishima, H.

2016 Between 'Public' Islam and 'Private' Sufism: Producing a National Icon through Mass Mediated Hagiography. *Die Welt des Islams* 56(1): 34-54.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代エジプトにおける美と身体文化に関する社会人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、空手家コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、現代エジプトの都市中流層的な倫理観と美的感覚の関係を再考することにある。本研究の出発点は、なぜエジプト中流層の少年・少女にとって、空手道が「ハラール（イスラーム法的に合法、倫理的）」な習い事であるのに対し、同様の身体動作を行うクラシック・バレエが「ハラーム（イスラーム法的に違法、非倫理的）」なのかという問いにある。ハラール／ハラームと言ったイスラーム法的な語彙を援用しているとはいえ、エジプトの空手人気を支える言説を分析するに際し、中流層的な倫理観になぞられたモダニティとの関係性において論じる必要がある。空手道に取り組む意義を「目的」と「効果」で説明し、バレエを享乐的な行為と批判する言説は、国際政治経済の周縁に置かれたエジプトの中流層的な倫理観を如実に反映しているからである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、空手道の稽古を、都市中流層的な倫理観と美的感覚が実践される場として考察する。

・成果

今年度は2016年5月にイギリスで出版された単著『エジプトにおける公共文化とイスラーム：知識人、メディアそして社会』を宣伝するためのBook Launchイベントをオクスフォード大学、カイロ・アメリカン大学およびオリエント・インスティテュート・バイルート（ドイツ系研究機関）で行った。どの回も平日にも関わらず非常に盛況で、40名程度の参加者があった。場所によって聴衆のタイプは異なったものの、アブドゥルハリーム・マフムードに関するエジプト人教養層の関心の高さが明らかになった。オクスフォード大学はポッドキャスト、カイロ・アメリカン大学での発表はYouTubeで視聴できることから、研究成果を社会還元する上で非常に効果的であった。

昨年度終了した若手研究Bの成果発表のために民博とパリで開催された国際ワークショップで研究発表を行った。こちらは研究者向けの集会であった。民博では現代エジプトにおける「伝統」の定義の変遷と問題性、パリではスポーツ実践と社会階層について論じた。

（原稿の英文校閲料を科研費若手研究B「エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究（研究代表者：相島葉月）」から捻出。オクスフォードへの出張費は、科研費基盤研究A「アラブ世界の都市中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承の謎を解く（研究代表者：西尾哲夫）」より捻出。カイロとパリへの出張費は人間文化機構地域研究推進事業現代中東地域研究拠点より捻出。）

研究発表

Aishima, Hatsuki, "Locating the Popular: Sporting and Social Class in Neoliberal Egypt." Colloque la culture populaire au moyen-orient: Approaches franco-japonaises croisée, EHESS, Paris, France (March 27-28, 2017)

Aishima, Hatsuki, "Book Presentation: Public Culture and Islam in Modern Egypt." Orient-Institut Beirut Cairo Office, Egypt (February 20, 2017)

Aishima, Hatsuki, "Book Presentation: Public Culture and Islam in Modern Egypt." Kamal Adham Center for Television and Digital Journalism, the American University in Cairo, Egypt (February 8, 2017)

Aishima, Hatsuki, "A Salafi School of Karate? Debating Tradition/Modern in Post-2011 Egypt." Global Flow of Cultural Knowledge: Between Japan and the Middle East, the National Museum of Ethnology, Suita, Japan (December 17-18, 2016)

Aishima, Hatsuki, "Book Launch: Public Culture and Islam in Modern Egypt." St Antony's College, Oxford, UK (November 21, 2016)

その他

相島葉月「空手の先生をしました」『月刊みんぱく』41. 2, 2017, pp.10-11.

◎出版物による業績

[単著]

Aishima, H.

2016 *Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society*. London: IB Tauris. [査読有]

[編著]

Aishima, H.

2016 Are We All Amr Khaled? Islam and the Facebook Generation of Egypt. In A. Masquelier and B. Soares (eds.) *Muslim Youth and the 9/11 Generation*, pp.105-122. Santa Fe: School for Advanced Research Press. [査読有]

[論文]

Aishima, H.

2016 Between 'Public' Islam and 'Private' Sufism: Producing a National Icon through Mass Mediated Hagiography. *Die Welt des Islams* 56(1): 34-54. [査読有]

[その他]

相島葉月

2016 「書評 Surak, Kristin, Making Tea, Making Japan: Cultural Nationalism in Practice, Stanford: Stanford University Press, 2013.」『文化人類学』81(3): 553-555。

2017 「空手の先生をしました」『月刊みんぱく』41(2): 10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年12月17日～12月18日 「A Salafi School of Karate? Debating Tradition/Modern in Post-2011 Egypt」
現代中東地域研究国立民族学博物館拠点国際ワークショップ Global Flow of Cul-
tural Knowledge: Between Japan and the Middle East, 国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年11月21日 'Book Launch: Public Culture and Islam in Modern Egypt.' St Antony's College, Oxford,
UK

2017年2月8日 'Book Presentation: Public Culture and Islam in Modern Egypt.' Kamal Adham Center for
Television and Digital Journalism, the American University in Cairo, Egypt

2017年2月20日 'Book Presentation: Public Culture and Islam in Modern Egypt.' Orient-Institut Beirut
Cairo Office, Egypt

2017年3月27日～3月28日 'Locating the Popular: Sporting and Social Class in Neoliberal Egypt.' Colloque
la culture populaire au moyen-orient: Approaches franco-japonaises croisée, EHESS, Paris,
France

・広報・社会連携活動

2016年11月5日 「エジプトにおける空手道の新地平——大衆文化に探る中東のいま」第460回国立民族学博物
館友の会講演会、国立民族学博物館

2017年3月3日 「エジプトの大衆文化と空手道」けやきの森市民大学・国立民族学博物館提携講座、高槻市生
涯学習センター

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年3月5日 「イスラームとムスリムの関係性」第457回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2016年11月19日～11月29日—イギリス（オクスフォード大学で開催される新刊紹介イベントにおける研究発表）

2017年1月15日～2月28日—エジプト、レバノン（空手家コミュニティに関する調査）

2017年3月25日～3月31日—フランス（現代中東地域研究民博拠点・EHESS等共催の国際シンポジウムでの発
表および今後の研究計画の打合せ）

◎学会の開催

2016年12月17日～12月18日 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト現代中東地域研究・国立民族学博物館拠
点主催国際ワークショップ Global Flow of Cultural Knowledge: Between Japan
and the Middle East, 国立民族学博物館

飯田 卓 [いいだ たく] ————— 准教授

1969年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻
修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）

【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館
民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館文化資源研究セ
ンター准教授（2008）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2000）、修士（人間・環境学）（京都大学 1994）【専
攻・専門】生態人類学、視覚メディアの人類学、文化遺産の人類学【所属学会】生態人類学会、日本アフリカ学会、
日本文化人類学会

【主要業績】

〔単著〕

飯田 卓

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。

2014 『身をもって知る技法——マダガスカルの漁師に学ぶ』京都：臨川書店。

【編著書】

飯田 卓・朝倉敏夫編

2017 『日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告139）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2010 日本アフリカ学会学術研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化遺産の人類学に関する理論的研究

・研究の目的、内容

1990年代以降、日本では世界遺産が脚光を浴びて指定文化財の観光資源化が進んでいるが、いっぽうで、ユネスコが先導する国際文化行政の場では、担い手との結びつきを視野に入れたあらたな文化遺産概念がたち現れつつある。本研究は、これらの情勢に目を配りつつ、文化や文化財、文化資源、観光資源、国立公園、自然保護区、自然遺産などとの関連をふまえて、文化遺産概念の歴史的形成と現代的意義を考察する。

この研究は、平成25～27年度に民博の機関研究「マテリアリティの人間学」の一環としておこなわれたプロジェクト「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」の延長として遂行する。外部資金に申請する予定はないが、3年間の成果出版を進める作業は研究の一環に位置づけられる。

・成果

日本語論文集2冊と英語論文集2冊の刊行を進めたが、年度内に刊行するには至らなかった。日本語論文集2冊については、商業出版のかたちで平成29年5月に刊行する目途が立っている。英語論文集2冊についても引き続き準備を進めていく予定である。

◎出版物による業績

【編著】

飯田 卓・朝倉敏夫編

2017 『日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告139）大阪：国立民族学博物館。[査読有]

【論文】

飯田 卓

2016 「家屋の堅牢さと手軽さ——マダガスカルのくらし」藤木庸介編『住まいが果たえる世界のくらし——今日の居住文化誌』pp.101-114, 京都：世界思想社。

2017 「本書の成立と保谷民博資料の来歴について」飯田 卓・朝倉敏夫編『日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告139）pp.3-13, 大阪：国立民族学博物館。

2017 「戦後戦後期南西諸島における爆薬漁——八重山諸島の事例」『島嶼研究』18(1)：1-14。

【その他】

Iida, T.

2016 Authentic Change in the Transmission of Intangible Cultural Heritage. *Minpaku Anthropology Newsletter* 42: 1-3.

2016 「無形文化遺産の継承における『オーセンティックな変更・変容』」『民博通信』153：4-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2016年7月4日 「日本民族学会の共同事業——博物館とエクスペディション」神奈川大学共同研究『日本常民文化研究所蔵史料からみるフィールド・サイエンスの史的展開』第1回研究会、神奈川大学、横浜

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月22日 Malagasy peasant fishermen's participation in coral reef management: Local life encounters global movement. A lecture for Yagi Nobuyuki Laboratory, University of Tokyo

- 2016年5月5日 Swinging between German Romanticism and French Enlightenment: Zafimaniry Cultural Heritage in Madagascar. *Inter-Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences*. Hotel Dubrovnik Palace, Dubrovnik, Croatia
- 2016年5月28日 「担い手としての文化遺産の価値と、観光客としての文化遺産の価値——マダガスカル中央高地ザフィマニリの木彫り工芸と木造建築」日本文化人類学会第50回研究大会分科会『黒船としての文化遺産』南山大学、名古屋
- 2016年9月26日 「離島地域の漁業発展——マダガスカル島南西部の事例をふまえて」第172回鹿児島大学国際島嶼教育研究センター研究会、鹿児島大学
- 2016年12月11日 Traveling and In-Dwelling Knowledge: Learning and Technological Exchange among Vezo Fishers in Madagascar. *Conference "The World Multiple: Everyday Politics of Knowing and Generating"* National Museum of Ethnology, Suita, Japan

・広報・社会連携活動

- 2016年11月30日 「時間の文脈と空間的文脈——テキストとイメージの使いわけについて」第8回みんぱく若手研究者奨励セミナー『人類学的営みにおける映像』国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

- 2016年7月21日～7月26日—北海道函館市（コンブ養殖およびコンブ採取についての調査）
- 2016年9月26日～10月1日—鹿児島県鹿児島市・奄美市・大島郡大和村（戦後の漁業についての聞きとり調査）
- 2016年10月10日～10月15日—鹿児島県大島郡知名町・大和村（戦後の漁業についての聞きとり調査）

・海外調査

- 2016年5月4日～5月11日—クロアチア、フランス（国際民族人類科学連合に参加及びフランス国立科学研究センターにおいて資料調査）
- 2016年8月16日～8月20日—韓国（韓国の水産資源利用についての調査）
- 2016年10月18日～11月26日—マダガスカル（マダガスカルの無形文化遺産に関する調査と研究打ち合わせ及びマダガスカル南西部における生業－信仰体系の調査）

◎大学院教育

・指導教員

- 主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）
特別共同利用研究員（4人）

・大学院ゼミでの活動

- 論文ゼミ

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容」（研究代表者：飯田卓）研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「アフリカ漁民文化の比較研究——水域環境保全レジームの構築に向けて」（研究代表者：今井一郎）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」（研究代表者：吉田憲司）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「近代都市形成における多文化混住状況と出身地域社会への影響に関する研究」（研究代表者：岡田浩樹）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「「在来知」と「近代知」の比較研究——知識と技術の共有プロセスの民族誌的分析」（研究代表者：大村敬一）研究分担者、科学研究費補助金（新学術領域研究『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

京都大学地域研究情報統合センター共同研究課題選考委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス・コロキウム運営委員、日本アフリカ学会評議員、文化遺産国際協力コンソーシアム委員、梅棹忠夫山と探検文学賞選考委員

1975年生。【学歴】立命館大学産業社会学部卒（1998）、立命館大学大学院 理工学研究科修士課程修了（2000）、総合研究大学院大学 文化科学研究科博士課程修了（2003）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC 1・2000）、日本学術振興会海外特別研究員（海外PD・2005）、中央民族大学民族学社会学学院訪問学者（2005-2010）、日本学術振興会 特別研究員（PD・2008）、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク機構／東洋文化研究所汎アジア研究部門特任講師（2011）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2015）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2016）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学、2003）【専攻・専門】環境民俗学・東アジア地域研究【所属学会】日本民俗学会、文化人類学会、生態人類学会、The Society for Human Ecology (SHE)、生き物文化誌学会、日本現代中国学会

【主要業績】

[論文]

卯田宗平

- 2015 「ポスト「北方の三位一体」時代の中国エヴェンキ族の生業適応——大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性——フィールドからのサステナビリティ論』（研究双書）616：73-108, 千葉：アジア経済研究所。

[単著]

- 2014 『鵜飼いと現代中国——人と動物、国家のエスノグラフィ』東京：東京大学出版会。

[編著]

卯田宗平編

- 2014 『アジアの環境研究入門——東京大学で学ぶ15講』（古田元夫監修）東京：東京大学出版会。

【受賞歴】

- 2010年 第5回日本文化人類学会奨励賞
1998年 学部長コース賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

鵜飼文化の比較研究

・研究の目的、内容

本研究は、日本列島と中国大陆の鵜飼文化を対象に、鵜飼に関わる技術や知識、鵜飼がなりわいとして成立する背景、観光産業とのかかわり、ウミウやカワウへの働きかけ、人工繁殖の技術などをフィールド調査と文献調査により明らかにする。なお、本研究は科学研究費・基盤研究（C）「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・卯田宗平）」に基づいておこなう。

・成果

本年度は、まず日本の鵜飼で利用される野生ウミウの捕獲から馴化にいたる技術を明らかにした。そのうえで、人間からの介入を受けたウミウの反応にかかわる観察結果を手がかりに鵜飼い漁誕生の初期条件について検討した。具体的には、野生ウミウの捕獲技術に関して茨城県日立市十王町の事例を、ウミウの飼育と訓練に関して岐阜県長良川鵜飼の事例をまとめた。この結果、野生ウミウを飼い馴らす過程では、①捕獲直後のウミウを特定の姿勢にすることでおとなしくさせる、②ウミウに頻繁に触れることで接近や接触をする人間を恐れない個体をつくる、③新たに捕獲したウミウをすでに飼育しているほかのウミウに馴れさせる、という三つの技術が重要であることを明らかにした。つぎに、人間からの介入を受けたウミウの反応を観察し、野生ウミウの行動特性に関して「新たに置かれた環境に対する若い個体の馴れやすさ」という特徴を指摘した。この特徴は人間が野生ウミウを漁の手段として利用できる条件のひとつであると結論づけた。これらの一連の研究成果は、卯田宗平（2016）「鵜飼い漁誕生の初期条件——野生ウミウを飼い馴らす技術の事例から」『日本民俗学』286号にまとめた。また、本年度は中国雲南省大理白族自治州における鵜飼を対象に、岐阜市との連携のもと、カワウの人工繁殖技術や観光事業とのかかわりに関する予備調査をおこなった。なお、以上の本研究は科学研究費・基盤研究（C）「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・

卯田宗平)」に基づいておこなった。

◎出版物による業績

〔論文〕

卯田宗平

2016 「鵜飼い漁誕生の初期条件——野生ウミウを飼い馴らす技術の事例から」『日本民俗学』286：35-65。
〔査読有〕

2016 「中国における環境史研究再考——鵜飼技術からみた自然と人間とのかかわり」水島司編『環境に挑む歴史学』pp.68-80, 東京：勉誠出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年12月1日 「去勢なき家畜飼育のこれから——中国大興安嶺のエヴェンキ族らとトナカイ」大学共同利用機関法人人間文化研究機構北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点月例会、国立民族学博物館

・特別研究

2017年3月26日 「内水面漁場へのヒューマンインパクトと鵜飼い漁師たちの対応——中国江西省鄱陽湖の事例から」特別研究プレシンポジウム『歴史生態学から見た人と生き物の関係』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2016年12月17日 「『もうひとつのドメスティケーション』にかかわる問題意識と趣旨説明」『もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究』国立民族学博物館

2017年1月28日 「ウミウ——『手段』としての動物と人とのかかわり」『もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究』国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2016年8月20日 「飛ばねえカワウはただのカワウだ——鵜飼研究の魅力を語る」第459回みんぱくゼミナール

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月28日 「トナカイ角の商品化と馴化技術の展開——中国大興安嶺のエヴェンキ族らの事例から」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学名古屋キャンパス、名古屋

2016年7月9日 「概念を規定し、事例を読みとく——鵜飼研究、中国から日本、そしてマケドニアへ」2016年度海外学術調査フォーラム・ワークショップ『フィールドサイエンスにおけるドキュメンテーション——あつめる・はかる・かぞえる』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京

2016年10月23日 「『手段』としての動物と人間とのかかわり」環境社会学会研究委員会、追手門学院大学梅田サテライト、大阪

2016年11月27日 「生業を裏打ちする文化を探る」大学共同利用機関主催大学共同利用機関シンポジウム2016『研究者に会いに行こう 大学共同利用機関博覧会』秋葉原UDX、東京

2016年12月4日 「リバランス論の射程——『手段』としての動物と人間とのかかわりの事例から」第54回環境社会学会大会シンポジウム『人と自然のインタラクション——動植物の共存から考える』環境社会学会、関西大学第三学舎1号棟、大阪

・広報・社会連携活動

2016年7月14日 「鵜飼の世界——日本・中国・ヨーロッパ」国立民族学博物館友の会第72回国内体験セミナー『長良川鵜飼漁見学——鳥と語らい、川とともに生きる』長良川うかいミュージアム、岐阜市

2016年9月3日 「『反馴化』という働きかけ——中国と日本の鵜飼い漁の事例から」総合研究「自然観」（前近代を中心とした琵琶湖周辺地域における自然および自然観の通時的変遷に関する研究）研究会、滋賀県立琵琶湖博物館会議室

2016年10月21日 「日本の鵜飼文化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

2016年10月28日 「中国の鵜飼文化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年1月15日 「日本の鵜飼文化を誰が守るのか」第451回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2017年2月12日～2月22日—中国（雲南省ジ海の鵜飼文化の地域間比較調査および大理市長と文化遺産登録に

向けた交渉)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究（民博拠点）」メンバー、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究（東北大学拠点）」メンバー、科研・基盤研究（C）「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開」（代表）

◎社会活動・館外活動等

- ・他機関から委嘱された委員など

岐阜県岐阜市 長良川鵜飼習俗総合調査専門委員会・委員、岐阜県関市 小瀬鵜飼習俗総合調査委員会委員・委員、日本文化人類学会 学会誌編集委員、生態人類学会 理事

- ・他大学の客員、非常勤講師

京都市立芸術大学「日本文化史」非常勤講師

菊澤律子 [きくさわ りつこ] ————— 准教授

1967年生。【学歴】東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程言語学専攻修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退（1995）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2006）【学位】Ph. D. (Linguistics)（ハワイ大学 2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）【専攻・専門】言語学、比較（歴史）言語学、オーストロネシア諸語、記述言語学、オセアニア先史研究【所属学会】日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society (UK)、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics

【主要業績】

[単著]

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*. Canberra: Pacific Linguistics.

[編著]

Kikusawa, R. and L. A. Reid (eds.)

2013 *Historical Linguistics, 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011* (Current Issues in Linguistic Theory 326). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

[論文]

Kikusawa, R. and K. A. Adelaar

2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480-516.

【受賞歴】

- 2015 2014年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞
- 2014 2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞
- 2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀奨学生賞
- 2008 第4回日本学術振興会賞
- 2005 第4回日本オセアニア学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

オーストロネシア諸語の比較形態統語論的研究——動詞の形態法の発達史を探る

・研究の目的、内容

昨年度に引き続き、オーストロネシア諸語の発達史における「名詞化接辞の動詞接辞化」の具体的なメカニズムと、その発達史の解明を目標に研究をすすめる。加えて、「格構造の変化に伴う主語のプロパティの分布の変化」に関するプロジェクト始動のための準備をすすめる。

オーストロネシア諸語においては、早い時期に分岐した言語ほど動詞の形態法が複雑であり、オーストロネシア祖語の動詞のシステムは、これをほぼ直接反映させて再建される傾向にある。これに対し菊澤は、これまで、形態統語論的な特徴の変遷はシステムの変遷として捉えるべきであり、音韻や語彙の再建におけるものとは異なる視点および手法が必要であることを示した。

平成28年度は、これまでのマクロレベルでの研究内容をさらに発展させると同時に、ミクロレベルでの変化との関連を探索。具体的には、平成27年度にクラウドファンディングで得た菊澤律子研究奨学金により、南太平洋大学のポール・ギャラティ博士との共同研究としてフィジー語諸方言データのデジタル資料化を行い、研究資料の整理と手法の検討をすすめる。

・成果

平成27年度にクラウドファンディングで得た菊澤律子研究奨学金により、南太平洋大学のポール・ギャラティ博士との共同研究として、フィジー語諸方言データに関する研究資料を整理すると同時に、今後、これらを活かすための研究手法について検討した。1,000近い地点を網羅するフィジー語諸方言の貴重なデータをデジタル化したもので、来年度以降、研究分析をすすめ、活用してゆく予定である。なお、来年度から二年間、りそなアジア・オセアニア財団の助成金を得ることができたため、本資料のうち一部をGIS処理し、地図データ化を進めて公開する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

Kikusawa, R., M. Okumoto, T. Kubo and L. Rodrigo

2016 Developing eLecture Materials for Hearing Impaired Students and Researchers: Designing Multiple-Video Programs and Usability Assessment. *Computers Helping People with Special Needs. ICCHP 2016. Lecture Notes in Computer Science*, volume 9759, pp.415-418. Springer.

[査読有]

[その他]

菊澤律子

2016 「評論・展望 手話言語学が拓くコトバの研究の未来」『民博通信』155：4-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月17日 'Taro Plants and Turmeric in the Pacific in the Past: Identifying the Relationship between People and Plants Based on Linguistic Data.' Guest Lecture at the School of Language, Arts & Media, the University of the South Pacific. University of the South Pacific, Fiji

2017年1月7日～8日 「書評 松本克己著『世界言語の中の日本語——日本語系統論の新たな地平』（三省堂）」国際日本文化研究センター『日本語の起源はどのように論じられてきたか——日本言語学史の光と影』第5回共同研究会、国際日本文化研究センター

2017年1月25日 'Conserving Linguists' Fieldnotes: Why It Matters.' Linguistics workshop / Minpaku Seminar "On the Digitization and Conservation of Field Data" 国立民族学博物館

2017年1月31日 'Minpaku's Sign Language Linguistics Activities An update.' Guest Lecture at the Centre for Sign Linguistics and Deaf Culture, Chinese University of Hong Kong 香港中文大学

◎調査活動

・海外調査

2016年5月3日～5月16日—フィジー（南太平洋大学においてフィジー語諸方言にかかるフィールドノートのデジタル化の調査研究）

2017年2月9日～2月20日—フィリピン（フィリピンにおけるイシナイ語辞書プロジェクトの視察）

2017年3月8日～3月18日—ハワイ（ハワイ大学における文献調査）

2017年3月30日～4月1日—香港（香港中文大学手話言語学・ろう文化研究センターにおける研究打ち合わせ）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

テーマシリーズ講義「言語を科学する——コトバの調査とヒトの社会」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

日本財団助成金「手話言語学研究部門の設置および手話言語学事業の推進」研究代表者、国立民族学博物館科研費研究分担者

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

菊澤律子研究奨学資金

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本歴史言語学会副会長、Association for Linguistic Typology 評議員、国際オーストロネシア言語学会運営委員、Journal of Historical Syntax 編集顧問委員、Brill's Studies in Historical Linguistics 編集顧問委員、Journal of Historical Linguistics 編集顧問委員、2016年度東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」コーディネーター、2016年度手話言語学講師派遣事業コーディネーター

◎学会の開催

2016年9月23日～9月25日 国際研究集会「The 5th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics (手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2016)」国立民族学博物館

松尾瑞穂 [まつお みずほ] ————— 准教授

【学歴】 南山大学文学部人類学科卒業（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2007）【職歴】 日本学術振興会特別研究員（PD）（2007）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科講師（2010）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科准教授（2013）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2014）【学位】 文学博士（総合研究大学院大学文化科学研究科 2008）、学術修士（名古屋大学大学院国際開発研究科 2002）【専攻・専門】 文化人類学、ジェンダー医療人類学、南アジア研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本宗教学会

【主要業績】

[単著]

松尾瑞穂

2013 『ジェンダーとリプロダクションの人類学——インド農村社会の不妊を生きる女性たち』京都：昭和堂。

2013 『インドにおける代理出産の文化論——出産の商品化のゆくえ』東京：風響社。

[論文]

松尾瑞穂

2009 「『回復』を希求する——インド農村社会における不妊と『流産』経験」『文化人類学』74(3)：423-440。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インドにおけるつながりとサブスタンスに関する研究

・研究の目的、内容

インド社会における遺伝子というサブスタンスとそれに関わる諸実践を検討することを通して、ヒト、家族、親族、カーストといった自他のカテゴリーの生成や圍繞、他者とのつながり（relatedness）の様態の変容について明らかにする。特に、サブスタンス（身体構成要素）の共有がいかに個と集団のカテゴリーの同定や差異を形成するののかについて、血液、母乳、精液といった、南アジア社会における伝統的なサブスタンス概念と、卵子、精子のような配偶子や遺伝子といった新しいサブスタンス概念との比較に注目し、上述の課題にアプローチする。

1) 現地調査：個からみるサブスタンスや親子・親族関係の変容——遺伝子を中心に

リプロダクションの変容をとくに生殖医療技術との関わりにおいて考察するうえで、南アジア地域におけるサブスタンスの概念は重要な出発点となる。ヒトの形成に関しては、南アジアの文脈でいえば、子どもの形成における種と大地という象徴的な民俗生殖理論がよく知られている。また、血液や体液のような身体部品や、食、環境の共有を通して身体が構成され、つながりが生み出されるということも議論されてきた。生殖医療がもたらす遺伝子のつながりと、身体の子スタンスを介したつながりはどのように接合、あるいは断絶しているのか。今年度は、インドにおける遺伝と遺伝子に関する社会的認識を把握するため、医療人類学を主とする先行研究を検討するとともに、インド国内において、学校での科学教育と科学の教科書の検討、インド政府が進めるゲノムプロジェクトに関する聞き取りと資料収集、親子の遺伝に関する民俗生殖論の聞き取り調査を実施する。

2) 文献調査：集団の同定と自他の区別について——アーリア人説と優生学を中心に

サブスタンスは個から派生するつながりを越え、より集合的な集団形成にも関わっている。インドでは20世紀初頭にインド＝アーリア人を標榜し、社会の浄化を求める優生学運動が、産児制限や社会改革との関わりのなかで繰り広げられてきた。植民地官僚やインド学の学者によって古代インドの輝かしい遺産（とその反転としての墮落したインド）として喧伝されたアーリア人説は、インドのエリート層にとっては、植民地経験のなかで古代と近代的科学性が接合しながら、自他の区別と自己アイデンティティの確立に寄与する思想として受容された。19世紀末から20世紀にかけての優生学については、ヨーロッパ、アメリカ合衆国、日本に関しては膨大な蓄積があるが、インドを含む第三世界での波及と展開に関する研究は、きわめて限定的である。広大な領野である同分野に分け入るのは容易ではないが、今年度はその基礎的作業として、インドにおけるアーリア人説と優生学の接合に関する先行研究の検討と分析、18世紀から近代にかけてのパラモン・カーストの社会形成とアーリア人説（渡来人説）の検討を行う。

・成果

上記のテーマに関し、文献収集と文献読解、共同研究会の組織、運営、インドでの国際ワークショップ、インド現地調査を実施した。これらを通して、母乳がインド社会で有する文化的な特徴と、生殖医療（代理出産や配偶子提供など）による、卵子のような新たなサブスタンスの可視化、顕在化について検討するとともに、カーストや階層といった社会区分とサブスタンスとのかわりについて、考察を深めた。今年度から科研費若手B「現代インドにおける遺伝子の社会的配置に関する人類学的研究」（松尾瑞穂代表）が採択されたため、本研究を本格的に実施することが可能となった。7月には同科研の予算でヨーロッパ社会人類学者学会（EASA）に参加し、ヨーロッパにおける親族研究の研究動向調査を行うとともに、研究交流を行った。また、エディンバラ大学のJacob Copeman准教授を2016年9月1日～12月28日の4か月間、民博の客員外国人研究員として受け入れ、インドにおける血液とサブスタンスに関する共同研究を実施した。

さらに、受託研究・日本学術振興会二国間交流事業に採択され、サヴィトリ・バーイー・フレー・ブネー大学（インド）南アジア研究センターおよび歴史学部をカウンターパートとして、「近代マハーラーシュトラにおけるカースト観の構築」（松尾瑞穂代表）を開始した。この事業の一環として国内会議を開催し、3月にブネー大学にて予備的な研究交流を目的としたワークショップ「Caste formation in Modern Maharashtra」を開催した。また、そのなかで「From Caste to Class: Formation of Social identity in Birth Control Movements in Modern Maharashtra」と題する研究報告を行った。

また、民博の共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的配置の比較研究」を研究代表として組織し、複数回の研究会（うち1回は秋田大学での公開ワークショップ）を開催、運営、発表するとともに、そのほかの共同研究会のメンバー、および人間文化研究機構地域研究推進事業「現代南アジア地域研究」（MIN-DAS）の拠点構成員として、年間を通じた研究会の運営、参加、発表を行った。

研究成果公開としては、インド農村社会における不妊の治療選択肢の複ゲーム状況をジェンダーポリティクスの観点から分析した論文を、論集『ジェンダーと宗教のポリティクス』（川橋範子・小松加代子編、昭和堂）として刊行した。また、丸善出版『現代インド文化事典』の編集幹事として、第三章「家族とジェンダー」の編集を行うとともに、執筆および全体の取りまとめ作業を行った。成果は平成29年度中に刊行される予定である。そのほか、毎日子ども新聞の連載、エッセイ、小論を執筆、刊行するとともに、インドでの国際ワークショップ1回を含む、学会等での研究報告を9回、一般向け講演会を1回実施した。

◎出版物による業績

[論文]

松尾瑞穂

2016 「信じること、あてにすること——インドにおける不妊女性の宗教実践の選択」川橋範子・小松加代

子編『ジェンダーと宗教のポリティクス——フェミニスト人類学のまなざし』pp.159-190, 京都：昭和堂。[書評有：『週刊仏教タイムス』（2017年2月23日付）、『中外日報』（2017年1月27日付）、『文化人類学』（82(3)号、2017年12月）]

[その他]

松尾瑞穂

- 2016 「サブスタンスから個と集団の関係性と範疇化を考える」『民博通信』153：12-13。
- 2016 「みんなく世界の旅 インド（1）」『毎日小学生新聞』7月30日刊。
- 2016 「みんなく世界の旅 インド（2）」『毎日小学生新聞』8月6日刊。
- 2016 「みんなく世界の旅 インド（3）」『毎日小学生新聞』8月13日刊。
- 2016 「みんなく世界の旅 インド（4）」『毎日小学生新聞』8月20日刊。
- 2017 「資料と通信 第14回ヨーロッパ社会人類学会議（EASA）に参加して」『文化人類学』41(4)：719-722。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会

- 2016年7月30日 「インドのサブスタンスにみる個と集団のつながりの動態」現代南アジア地域研究2016年度第1回合同研究会、国立民族学博物館

・共同研究会

- 2016年6月4日 「文献解説 Janet Carsten 2001 “Substantivism, Antisubstantivism, and Anti-antisubstantivism”について」『グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究』（研究代表：松尾瑞穂）国立民族学博物館
- 2016年12月17日 「インドにおける血の隠喩——カーストと優生学の交差」『グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究』（研究代表：松尾瑞穂）秋田大学
- 2017年1月21日 「インド・マハーラーシュトラ州における反迷信邪術運動とその法制化」『呪術的实践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して』（研究代表：川田牧人）国立民族学博物館
- 2017年2月18日 「ヒンドゥー聖地の資源——祖先祭祀の隆盛と在地社会の変容」『聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国の比較研究』（研究代表：杉本良男）国立民族学博物館。

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年9月25日 「女学生、良妻賢母、『意義ある仕事』——高カースト女性にとっての家族と公的世界」日本南アジア学会第29回全国大会、神戸市外国語大学 [査読有]
- 2016年10月10日 「人の誕生をめぐる科学の社会文化論」人類学関連学会協議会第11回合同シンポジウム、NSG学生総合プラザSTEP、新潟
- 2017年1月28日 「チットパーヴァン・バラモン始祖伝説とカースト団体」日本学術振興会・二国間交流事業『近代マハーラーシュトラにおける近代カースト観の形成』（研究代表：松尾瑞穂）国内研究会、金沢大学
- 2017年3月8日 'From Caste to Class: Formation of Social identity in Birth Control Movements in Modern Maharashtra' JSPS bilateral seminar on "Caste formation in Modern India", Sabitribai Phule Pune University, Pune, India

・研究講演

- 2016年12月3日 「インドにおける出産をめぐる信仰と産後ケア」第461回みんなく友の会講演会、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2016年7月18日～7月25日—イタリア（ヨーロッパ社会人類学会（EASA）大会へ参加）
- 2016年8月6日～8月20日—インド（現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究にかかる現代インドのカーストとサブスタンス調査）
- 2017年2月28日～3月17日—インド（インド、サヴィトリバーイー・フレー・プネ——大学との二国間交流事業にかかるワークショップ開催および科研プロジェクトにかかる資料調査）

◎大学院教育

・担当科目

共通科目 比較文化学特論Ⅱ「家族とつながりの人類学」担当

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（若手B）「現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究」研究代表者、受託研究・日本学術振興会二国間交流事業「近代マハーラーシュトラにおけるカースト観の構築」研究代表者、科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「インド・マハーラーシュトラにおける集団意識とカースト・ダイナミクスの学際的研究」（代表者：足立享佑）研究分担者、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代南アジア地域研究」（国立民族博物館拠点 MINDAS）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

京都外国語大学「地域文化研究Ⅱ」、南山大学「地域の文化と歴史（南アジア）」（集中講義）、新潟国際情報大学「現代南アジア論」（集中講義）

丸川雄三 [まるかわ ゆうぞう] ————— 准教授

【学歴】東京工業大学理学部応用物理学科卒（1996）、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了（1998）、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学（2001）【職歴】東京工業大学精密工学研究所助手（2001）、科学技術振興機構 CREST 研究員（国立情報学研究所高野明彦研究室）（2003）、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手（2004）、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任助手（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授（2007）、国際日本文化研究センター文化資料情報企画室准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）【学位】博士（工学）（東京工業大学大学院 2003）、修士（理学）（東京工業大学大学院 1998）【専攻・専門】1）連想情報学、2）文化財情報発信【所属学会】アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

[論文]

丸川雄三

2008 「文化財情報発信の実践——文化遺産オンラインの取り組みについて」『画像ラボ』19(4)：26-29。

水谷長志・川口雅子・丸川雄三

2014 「アジアからの美術書誌情報の発信——東京国立近代美術館・国立西洋美術館 OPAC の artlibraries.net における公開の経緯とその意義」『東京国立近代美術館研究紀要』18：6-31。

丸川雄三・阿辺川 武

2010 「横断的連想検索サービス『想-IMAGINE』——データベース連携が拓く新たな可能性」『情報管理』53(4)：198-204。

【受賞歴】

2011 文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムを、データと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。

平成28年度は、近代日本の身装（身体と装い）関係資料を対象とする情報サービスの研究開発を実施する。

この研究は、これまで JSPS 科研費基盤 B「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」(代表：高橋晴子、平成24年度～平成26年度)の助成を受け実施されてきたものであるが、研究成果をふまえ今年度も継続して研究を進める。さらに美術情報分野を中心とする制作者データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は、JSPS 科研費基盤 B「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」(代表：丸川雄三、平成26年度～平成28年度)の助成を受けて実施するものである。

・成果

画像アーカイブズの活用研究として、近代日本の身装(身体と装い)を発信するウェブサイトの研究開発を実施した。明治から昭和期(1868～1945年)における身装に関する画像(身装画像デジタルアーカイブ)のデータベースの試験運用を行い、連想検索技術によって検索・閲覧が可能なウェブサイト「近代日本の身装文化」を5月25日に一般公開した。またこれまでの研究成果を平成28年6月に「アート・ドキュメンテーション研究大会2016」で発表した。この研究は、JSPS 科研費基盤 B「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」(代表：高橋晴子、平成24年度～平成26年度)の研究成果をふまえ実施されたものである。また、文化財情報の活用基盤の研究として、制作者典拠データベースの研究開発を実施した。平成28年度は、東京文化財研究所および国立美術館と協働で作家データの調査と収集を行うとともに、試作したデータベースと文化遺産オンラインとの連携実験を実施し、その成果の一部を平成28年11月に「アート・ドキュメンテーション学会秋季研究会」で発表した。この研究は、JSPS 科研費基盤 B「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」(代表：丸川雄三、平成26年度～平成28年度)の助成を受けて実施されたものである。

◎出版物による業績

[分担執筆]

丸川雄三

- 2017 「ものとの対話をもっと豊かに『キュッパのびじゅつかん・デジタル』」『アート・コミュニケーション事業ドキュメント——「キュッパのびじゅつかん」展から』pp.142-145, 東京：東京都美術館。

[その他]

丸川雄三

- 2016 「展示におけるデジタルビューアの導入と活用」『季刊民族学』40(4)：77-80。
2016 「文化遺産オンラインにおける制作者情報の統合研究」『アート・ドキュメンテーション学会第9回秋季研究集会 予稿集』pp.14-15, アート・ドキュメンテーション学会。
2017 「連想技術によるデータベース間の関連性の発見と活用」『映画におけるデジタル保存と活用のためのシンポジウム 予稿集』p.71, 東京：東京国立近代美術館。
2017 「身装画像データベース『近代日本の身装文化』——研究資源データベースの発信と展開」『人間文化研究情報資源共有化研究会報告集』7：13-17。

高橋晴子・丸川雄三

- 2016 「身装画像データベース〈近代日本の身装文化〉——画像データの特性と検索システムの構築」『2016年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会 予稿集』pp.49-52。

野林厚志・丸川雄三

- 2016 「生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究」『パレオアジア文化史学 第1回研究大会 予稿集』pp.86-87, 東京：東京大学総合研究博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年6月11日 「身装画像データベース〈近代日本の身装文化〉——画像データの特性と検索システムの構築」『2016年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会』奈良国立博物館
2016年11月3日 「文化遺産オンラインにおける制作者情報の統合研究」『アート・ドキュメンテーション学会第9回秋季研究集会』東京都写真美術館
2016年11月5日 「生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究」『パレオアジア文化史学 第1回研究大会』東京大学
2017年1月27日 「連想技術によるデータベース間の関連性の発見と活用」『映画におけるデジタル保存と活用のためのシンポジウム』東京国立近代美術館フィルムセンター

・研究講演

- 2017年1月11日 「連想による文化財デジタル・アーカイブズの活用」(招待講演)立命館大学大学院文学研究科・行動文化情報学専攻「情報人文学の最前線」立命館大学アート・リサーチセンター

2016年11月10日 「文化財情報におけるデジタル・アーカイブズの活用」立命館大学映像学部「デジタル・アーカイブ」立命館大学充光館（衣笠キャンパス）

2017年2月8日 「写真原板データベースの価値について——所蔵資料の情報化と活用」（招待講演）page2017「日本写真保存センター」セミナー、池袋サンシャイン文化会館

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

国立情報学研究所客員准教授、東京国立近代美術館客員研究員、東京文化財研究所「近現代美術資料の収集、整理、公開に関する調査研究」客員研究員、奈良国立博物館「仏教美術に関する共同調査研究」調査員、立命館大学アート・リサーチセンター「歌舞伎・浄瑠璃データベースの活用に関する研究」客員協力研究員

三尾 稔 [みお みのる] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1986）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学（1992）【職歴】東京大学教養学部助手（1992）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1999）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2008）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1988）【専攻・専門】社会人類学・インドの宗教と社会【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[共編]

Mio, M., Bates, C. (eds.)

2015 *Cities in South Asia*. London: Routledge. [査読有・書評有・民博共同研究の成果] (http://choiceconnect.org/webclipping/194400/e0bubfitramyrf7jwbc8s12r_hb62uv6swnu3wbhxn7ct2md3o)

三尾 稔・杉本良男編

2015 『現代インド6 環流する文化と宗教』東京：東京大学出版会。

[論文]

三尾 稔

2017 「モノを通じた信仰——インド・メーワール地方の神霊信仰における身体美学的な宗教実践とその変容」『国立民族学博物館研究報告』41(3)：215-281, 大阪：国立民族学博物館。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

- ・研究の目的、内容

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が25年あまりにわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。本年度は昨年度に引き続き、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践をどのように変容させているかという点に注目し、フィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。

人間文化研究機構地域研究推進事業の一環として継続してきた「現代インド地域研究」は、今年度から人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」としてさらに6年間継続実施されることとなった。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点構成員や研

究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。各個研究のテーマは、この地域研究プロジェクトの内容に密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマのもとでの1つの実証的研究として各個研究を遂行する。

また、文化資源プロジェクトとして行ってきた『「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、上記「現代インド地域研究」プロジェクト経費も活用して、昨年度中に館内公開を行ったが、今年度は一般公開を目指すとともに、英語での検索も可能となるように改良を加え、世界の研究者コミュニティや関心のある人びとにも活用してもらえるようにする。

・成果

インドの経済発展による中間層の増大やローカルな社会への情報テクノロジーの浸透が、人びとの伝統的な宗教実践にどのような影響を及ぼしつつあるのかという問題に関する調査・研究の成果は『国立民族学博物館研究報告』41巻3号に「モノを通じた信仰——インド・メーワール地方の神霊信仰における身体感応的な宗教実践とその変容」（215-281頁。査読つき）として発表した。

また、この問題に関して、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」経費を活用して平成29年2月末から3月上旬にかけてインドに赴き、追加の現地調査を行った。

『「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、上記「南アジア地域研究」プロジェクト経費も活用し、目標どおり平成28年4月に日本語版で「沖守弘インド写真データベース」として一般公開し、その後英語での検索も可能となるように改良を加えた英語版を平成29年3月末に公開した。

◎出版物による業績

〔論文〕

三尾 稔

2017 「モノを通じた信仰——インド・メーワール地方の神霊信仰における身体美学的な宗教実践とその変容」『国立民族学博物館研究報告』41(3)：215-281，大阪：国立民族学博物館。〔査読有〕

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

〔データベース〕

三尾 稔制作・監修

2017 「沖守弘インド写真データベース」(国立民族学博物館データベース。一般公開用)

2017 「Database of Morihiro Oki's Photographs of India」(一般公開用)

◎調査活動

・海外調査

2017年2月28日～3月11日 インド(地域研究推進経費による現地調査及び文化資源研究プロジェクト経費による資料収集)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点 拠点代表

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

京都大学地域研究統合情報センター運営委員、日本南アジア学会理事

飯泉菜穂子 [いいずみ なおこ]———特任准教授

【学歴】早稲田大学法学部卒(1985)、お茶の水女子大学家政学研究科修士課程修了(1989)【職歴】日本アイビーエム株式会社入社(本社人事部)(1989)、NHK 手話ニュースキャスター(1990)、フリーランス手話通訳、手話講師(1993)、学校法人大東学園・世田谷福祉専門学校手話通訳学科および手話通訳専攻学科学科長(2002)【学位】家政学修士(お茶の水女子大学、1989)【専攻・専門】手話通訳論、手話通訳養成【所属学会】、日本通訳翻訳学会、日本手話通訳士協会、全国手話通訳問題研究会

【主要業績】

〔映像教材〕

飯泉菜穂子

1995 『DVDで学ぶ手話入門講座』 <http://www.hj.sanno.ac.jp/ps/course/4092>（構成、テキスト・スクリプト執筆、演出、ナビゲーターとしての出演）産業能率大学通信教育講座。

〔共著〕

小谷眞男・下城史江・飯泉菜穂子

2011 「新しいリベラルアーツとしての日本手話 お茶の水女子大学における『手話学入門』導入の経験から」『手話学研究』20：19-38。

〔著書〕

飯泉菜穂子

2013 「手話通訳士専門養成機関（世田谷福祉専門学校）における養成について」『手話通訳士試験の在り方等に関する検討会』pp.64-72。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

学術手話通訳者養成の実践とカリキュラムの検討および検証

・研究の目的、内容

昨年度まで客員教員として取り組んできた「学術手話通訳養成の実践とカリキュラムの検討および検証」を日本財団の助成によって設置された手話言語学研究部門の一員として、継続しつつ内容を拡大しながら進めている。拡大の一環として、高等教育機関・学術機関等に於ける学術手話通訳ニーズの調査と当事業からのパイロット派遣、言語学的な知識を一般の手話通訳者に提供する通訳クリニック、将来の学術通訳者となりうる候補者を発掘し養成につなげていく方法の模索等を計画している。

・成果

学術分野における日本手話通訳による情報保障環境を構築するために、スクリーニングにより選考した現役手話通訳者数名を対象とした、学術分野に特化した手話通訳研究（研修）事業を通年で（計7回・9日間）行った。研修内容としては、運営メンバーおよび外部講師による通訳実技検証・通訳者の事前学習についてのレクチャーと課題実践・一線で活躍中の日英（音声）学術通訳者からのレクチャー・日英同時通訳を介してのリレー通訳体験・民博主催の国際手話言語学フェスタにおける日英同時通訳を介した日本手話通訳OJTおよびその振り返り（検証）などを実施した。また、成果物として、今後（来年度以降）の研修時の教材として広く活用することが出来るリレー通訳時のタイムラグについてまとめた教材DVDを作成した。

研修2年目以降の協力者には、民博関連事業（『楽しい言語学を学ぶ会』）や部門ミーティング・言語関連メンバーミーティング・館内学術発表（研究懇談会等）での手話通訳OJTの機会を多数提供し、通訳終了後、毎回飯泉からの検証フィードバックを行った。

高等教育機関における手話通訳ニーズ調査プロセスの中で、大阪教育大学からの依頼を受け、当大学の『手話言語学特別講座』（2クール：各クール7回・計14回、各クール5名の講師によるリレー講座）の全体コーディネーターおよび講師を務めた。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年5月14日～8月6日 連続講座『楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）』全体コーディネーター・手話通訳コーディネーター、国立民族学博物館

2016年10月22日～11月19日 連続講座『みんなくで手話言語学を学ぼう！』全体コーディネーター・手話通訳コーディネーター・講師『手話通訳者と手話言語学』、国立民族学博物館

・研究講演

2016年11月8日～2017年3月3日 大阪教育大学主催、連続講座『手話言語学特別講座』全体コーディネーター・講師（講義『実感・体感の手話言語案内』、実技講座『日本手話・日本語翻訳技術入門Ⅰ』『日本手話・日本語翻訳技術入門Ⅱ』）、大阪教育大学

2017年2月12日 シンポジスト、手話教師センター主催「ろう通訳シンポジウム」『ろう通訳の優位性を活かすために』、AP西新宿

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

NPO 法人シアターアクセシビリティネットワーク (TA-net) 「演劇・舞台における手話通訳養成カリキュラム研究会」委員 (公益財団法人セゾン文化財団助成事業)

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

名古屋市登録手話通訳者選考委員、社会福祉法人聴力障害者情報文化センター評議員、NPO 法人バリアフリー映画研究会理事、お茶の水女子大学リベラルアーツ科目「手話学入門」聴者ゲストスピーカー：『正しく知ろう、手話の世界』、関西学院大学「手話学入門」リレー講座非常勤講師：『手話通訳論』、地域聴覚障害者団体等での講演講師 (調布市聴覚障害者協会『手話通訳者の守秘義務について』、西宮市聴覚障害者協会『手話の魅力と出会い』、姫路市デフカフェ『手話との出会いで広がる世界』、東京都聴覚障害者連盟ろう通訳研究グループ『聴通訳からみたらう通訳』)、手話通訳者・士技術研修講師 (NPO 法人デフネットかごしま登録手話通訳者現任研修、手話通訳士協会鹿児島支部現任研修、徳島県登録手話通訳者スキルアップ研修、三重県四日市市登録手話通訳者現任研修)、その他講座講師 (NPO 法人手話教師センター：翻訳通訳講師養成講座／通訳理論講座『通訳に対する評価方法』、NPO 法人 TA-net：演劇・舞台における手話通訳養成講座『良い手話通訳とは?』)

相良啓子 [さがら けいこ] ————— 特任助教

【学歴】筑波大学大学院修士課程教育研究科障害児教育専攻修了 (1999)、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所大学院 MPhil 課程修了 (2014) 【職歴】株式会社 JTB 本社 IT 企画部 (1999)、株式会社 JTB 首都圏新橋支店営業三課バリアフリーツアー推進担当 (2002)、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所研究官 (2010)、国立民族学博物館プロジェクト研究員 (2014) 【学位】修士 (教育研究科障害児教育専攻) (筑波大学大学院 1999)、手話言語学修士 (M. Phil.) (セントラル・ランカシャー大学国際手話言語学・ろう者学研究所 (iSLanDS) 2014) 【専攻・専門】手話言語学類型論・聴覚障害児教育 【所属学会】日本手話学会、日本言語学会、日本歴史言語学会、社会言語科学会

【主要業績】

[編著書]

Zeshan, Ulrike and Keiko Sagara (eds.)

2016 *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

[論文]

Sagara, Keiko and Ulrike Zeshan

2016 A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara (eds.) *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*, pp.3-37. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

Nonaka, Angela, Kate Mesh, and Keiko Sagara

2015 Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses, *Sign Languages Studies* 16(1): 57-85.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

日本手話と台湾手話における歴史変化の解明：歴史社会言語学の方法論の確立に向けて

- ・研究の目的・内容

本研究の目的は、日本手話と台湾手話の歴史変遷の解明に取り組み、具体的な分析を通して、手話言語学においても科学的な比較研究を行うことである。本研究は、科研費による3年度計画の1年目である。まず、台北では東京の教師、台南では大阪の聾学校の教師により手話が普及したことが報告されているが、台湾手話はその後中国手話からの借用もなされるようになったため、こうした歴史的背景を含めて文献を収集する。次に、

日本国内におけるバリエーションの実態も把握し、台湾手話におけるバリエーションとの比較を行う。サンプリングは、社会言語学的調査にも適応できるようにするため年齢差・性差・地域差などバランスの取れたデータ収集を行うことを目指す。科研費が得られたため、秋頃に台湾で第一回目のフィールドワークを約一ヶ月間の予定で実施する。

・成果

本年は、日本手話と台湾手話の史的研究に必要な資料収集及び、国内と台湾で、フィールドワークを行った（科研費、16K13229）。松永（1937）の『聾啞会』の中で書かれた「聾啞手まね事典」（5回シリーズ）には、手話表現の説明文と、イラストによる手型が書かれてあり、これによりその当時に使用されていた手話を知ることができた。また、約80年前の表現と現在使用されている表現を比較することにより、言語学的観点から手話表現の変化をたどることができた。フィールドワークは、東京、台北、台南でそれぞれ20名ずつ、大阪では15名の情報提供者からデータを収集し、20代から80代までの幅広い年齢層からのデータが得られた。これらのデータの中で、特に数の表現においては、現在日本の多くのろう者が使用していない表現が、80才以上のろう者から確認され、また、その表現は聾啞会に掲載されているデータとも一致するため、資料と収集データの両方から実在した表現形であることが確認できた。同時に、台湾においては、日本で古くから使用されている表現がそのまま変化せず使用されている語彙が多いという印象を受けた。今後はこの点について実証的な研究を進めていく。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年12月3日～12月4日 「日本手話と台湾手話にみられる変種と言語変化——東京と大阪における数詞・色彩・親族・生活基本語彙を対象に」第42回日本手話学会、タワーホール船堀

2016年12月6日 「世界の手話における数のしくみ、日本手話系言語における数表現の変化」東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」東北大学

2017年2月25日 「日本手話と台湾手話の比較を通して——数詞・色彩・親族・生活基本語彙を対象に」第16回手話研究セミナー、横浜ラポール

◎調査活動

・国内調査

2016年7月10日—大阪（大阪で使用する手話語彙の調査）

2016年7月17日—東京（東京で使用する手話語彙の調査）

2016年7月19日—大阪（大阪で使用する手話語彙の調査）

2016年9月9日—京都（京都で使用する手話語彙の調査）

2016年11月27日—東京（東京で使用する手話語彙の調査）

2017年2月27日—東京（東京で使用する手話語彙の調査）

・海外調査

2016年4月27日～4月30日—台湾（台湾手話の調査研究）

2016年10月16日～11月12日—台湾（台北、台南両地域における手話データ収集）

2017年1月2日～1月7日—台湾（台北、台南両地域における手話データ収集に関するフィールドワーク）

2017年3月8日～3月17日—韓国（韓国における手話データ収集に関するフィールドワーク）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（B））海外学術調査「アジア太平洋諸国における手話の対照言語学的研究：外国手話事典の編集をめざして」（研究代表：加藤三保子）研究分担者

研究戦略センター

鈴木七美 [すずき ななみ] センター長（併）教授

【学歴】東北大学薬学部薬学科卒（1981）、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1992）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了（1996）【職歴】財団法人仙台複素環化学研究所研究員（1981）、中外製薬株式会社国際開発部（1982）、財団法人相模中央化学研究所第4研究班研究員（1983）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任講師（1997）、京都文教大学人間学部助教授（2000）、京都文教大学大学院文化人類学研究科助教授（2002）、マギル大学人類学部客員助教授（2003）、放送大学文化人類学 04分担任協力講師（2004）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任教授（2005）、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2007）、放送大学客員教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2009）国立民族学博物館研究戦略センター教授（2014）【学位】博士（学術）（お茶の水女子大学 1996）、修士（人文科学）（お茶の水女子大学 1992）、学士（薬学）（東北大学1981）【専攻・専門】文化人類学、エイジング研究、医療社会史【所属学会】日本文化人類学会、アメリカ学会、Association for Anthropology and Gerontology (AAGE)、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)

【主要業績】

【単著】

鈴木七美

2002 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』 京都：世界思想社。

1997 『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』 東京：新曜社。

【編著】

Suzuki, N. (ed.)

2013 *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

【受賞歴】

1998 第13回女性史青山なを賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」とコモンズ

・研究の目的、内容

高齢化する社会において、人々の生活の充実に関わる公助、共助、互助、自助などのバランスや設計が課題として注目されている。高齢者のニーズに応える環境形成はすべての世代の人々が暮らしやすい環境に繋がるという「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想に関わる調査研究を進め、成果を公開する（外部資金 基盤研究B 特設分野研究「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」研究代表者：鈴木七美）。各地域の特徴を生かし、様々なアクターが参加し情報交換できるコモンズ（共有地）について検討する。また、多世代が参加し新たな活動を生み出すモノづくりに関わるコモンズについて、キルトの収集活動を通して考察を深める（平成28年度文化資源プロジェクト「現代アメリカのパッチワークキルトおよび関連資料の収集——アーミッシュキルトを中心に」）。

・成果

I 外部資金：基盤研究B 特設分野研究「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（研究代表者：鈴木七美）に基づく成果公開として、以下を実施した。

- 1) 応用人類学会76回年次大会のラウンドテーブル「応用人類学とエイジング」（Roundtable: Applied Anthropology and Aging, SfAA 2016: Society for Applied Anthropology 76th Annual Meeting）において、Aging in Place in Japan: The Roles of Anthropologists and Caregivers（日本におけるエイジング・イン・プレイス——文化人類学者とケア者の役割）を発表し議論に参加した（2016年4月2日 The

- Westin Bayshore, Vancouver)。
- 2) 国際共同研究者とともに、国際メイキング・シティ・リヴァブル会議 (53rd IMCL: International Making Cities Livable Conference 2016) のプレナリー・シンポジウム The Age-Friendly Community Movement: Inclusion, Small Change, and the Right to The City (エイジフレンドリー・コミュニティ運動——包摂、小さな変化、そして都市における権利) を企画し、発表 Creating an Age-friendly Community in Japan: A Search for Enduring Ways to Nurture New Commons in a Depopulated Town (日本におけるエイジフレンドリー・コミュニティの創出——人口減少市町村にける新しいコモンズの持続的開発) を行い、欧州における高齢者が暮らす安全な住居と活動しやすい都市環境に関し情報を蓄積し、日本の現状と比較しつつ議論を深めた (2016年6月15日、The Pontifical Urbaniana University, Rome)。
 - 3) 科研の成果を、国立民族学博物館において研究者・一般参加者と共有する目的で、公開国際シンポジウム Exploring Age-friendly Communities: Diverse People Aging in Place (エイジフレンドリー・コミュニティ——変わりゆく人生を包み込むまち) を開催し、趣旨説明を行った (国立民族学博物館第4セミナー室 2017年2月25日)。
 - 4) 「高齢認知症者のエイジング・イン・プレイスに向けた包摂的活動——アメリカ合衆国における『ブリッジ』のメモリーケアを中心に」『国立民族学博物館研究報告』41-1: 79-101、国立民族学博物館 (2016.9) を出版した。
 - 5) 公開研究セミナーの内容について、「公開研究セミナー 高齢者たちと共に考えるウェルビーイング——宮城県の在宅高齢者生活支援の現場から」『民博通信』No.153, p.26 (2016年6月) に発表した。
- Ⅱ 各地域の特徴を生かし、様々なアクターが参加し情報交換できるコモンズ (共有地) が形成・活用されてきたケースに関する調査研究として下記を行った。
- 1) 外部資金：基盤研究C「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」(研究代表者：鈴木七美) に基づく成果を、国際研究集会とウェブサイトなどを通して、広く医療従事者・研究者および一般に向けて発信した。
 - ・公開国際シンポジウム「エイジフレンドリー・コミュニティ——変わりゆく人生を包み込むまち」において発表 Age Friendly Communities in Switzerland: Focusing on the Narrative on the Rhythm of Life and Aging-in-place (ナラティブと生のリズム：スイスの多世代対象複合型生活施設におけるエイジフレンドリー・コミュニティ) を行った (国立民族学博物館第4セミナー室 2017年2月25日)。
 - ・「スイスの高齢者たちが親しんできた地域の癒し文化と養生思想」(みんぱくウィークエンドサロン 研究者と話そう) 国立民族学博物館 (2016年4月10日)。
 - ・「スイスにおける養生文化とエイジフレンドリー・コミュニティ」公益社団法人日本薬学会 (ウェブサイト <http://www.pharm.or.jp/highlight/index.shtml>) を発信した。
 - 2) 各地域の特徴を生かし、様々なアクターが参加し情報交換できるコモンズ (共有地) が活用されてきた多様化する家族への支援に関し、共同研究「リプロダクションと家族のオルタナティブデザイン——文化と歴史の視点から」(研究代表者：松岡悦子) による研究成果を、「『新しい家族』を求めて——スイス・フランス・デンマークの国際養子縁組み」松岡悦子編『子どもを産む・家族をつくる人類学——オルタナティブへの誘い』pp.149-174、勉誠出版、2017年として出版した。
- Ⅲ 平成28年度文化資源プロジェクト「現代アメリカのパッチワークキルトおよび関連資料の収集——アーミッシュキルトを中心に」を実施し、多世代が参加し新たな活動を生み出すモノづくりに関わるコモンズについて考察を深め、エイジ・フレンドリー・コミュニティに関する研究成果の一部として『アーミッシュたちの生き方——エイジ・フレンドリー・コミュニティの探求』(Senri Ethnological Report 141) として出版した (255頁 2017年3月30日)。

◎出版物による業績

[単著]

鈴木七美

2017 『アーミッシュたちの生き方——エイジ・フレンドリー・コミュニティの探求』(国立民族学博物館調査報告141) 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

[論文]

鈴木七美

2016 「高齢認知症者のエイジング・イン・プレイスに向けた包摂的活動——アメリカ合衆国における『ブリッジ』のメモリーケアを中心に」『国立民族学博物館研究報告』41(1): 79-101。[査読有]

2017 「『新しい家族』を求めて——スイス・フランス・デンマークの国際養子縁組み」松岡悦子編『子どもを産む・家族をつくる人類学——オルタナティブへの誘い』pp.149-174, 東京：勉誠出版。

[その他]

鈴木七美

2016 「スイスにおける養生文化とエイジフレンドリー・コミュニティ」公益社団法人日本薬学会ホームページ <http://www.pharm.or.jp/highlight/20160405.shtml>

Suzuki, N.

2017 Exploring Age-friendly Communities: Diverse People Aging in Place, International Symposium, February 25, 2017. *Minpaku Anthropology Newsletter* 44: 13-14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年2月25日 「企画趣旨」および「ナラティヴと生のリズム：スイスの多世代対象複合型生活施設におけるエイジフレンドリー・コミュニティ」国際シンポジウム『エイジフレンドリー・コミュニティ——変わりゆく人生を包みこむまち』科研（基盤B）（2014-2016）JP26310109「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（基盤B）〔特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー〕（代表者：鈴木七美）成果公開、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月2日 'Aging in Place in Japan: the Roles of Anthropologists and Caregivers' Roundtable: Applied Anthropology and Aging SfAA 2016: Society for Applied Anthropology 76th Annual Meeting, The Westin Bayshore, Vancouver Canada

2016年6月15日 'Creating an Age-friendly Community in Japan: A Search for Enduring Ways to Nurture New Commons in a Depopulated Town,' Plenary Symposium: The Age-friendly Community Movement: Inclusion, Small Change, and the Right to the City. 53rd IMCL: International Making Cities Livable Conference 2016, The Pontifical Urbaniana University, Rome Italy

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年4月10日 「スイスの高齢者たちが親しんできた地域の癒し文化と養生思想」第420回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・展示活動

平成28年度文化資源プロジェクト「現代アメリカのパッチワークキルトおよび関連資料の収集——アーミッシュキルトを中心に」

◎調査活動

・海外調査

2016年3月26日～4月5日—カナダ（「多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究」にかかる調査研究）

2016年6月10日～6月27日—イタリア、ドイツ（「多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究」にかかる研究集会に参加及び調査研究）

2016年7月29日～8月30日—アメリカ（多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

Editorial Advisory Board for Anthropology & Aging (A&A: The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology (AAGE)、American Society on Aging (ASA) 2016 Aging in America Conference 発表の査読者 (peer reviewer)、日本文化人類学会学会誌『文化人類学』編集委員会委員、地域研究コンソーシアム理事

樫永真佐夫 [かしなが まさお]——教授

1971年生。【学歴】早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族

学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、総合研究大学院大学教授併任（2016）【学位】学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）【専攻・専門】文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」——村のくらしと恋』東京：雄山閣。

2011 『黒タイ年代記——「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀——家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第6回日本学術振興会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムにおける黒タイ文字と文書／東南アジアにおけるボクシングの文化人類学

・研究の目的、内容

今年度も、ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイの伝統文化の継承に焦点を当てた現地調査と文献調査に基づく民族誌的研究を継続する。黒タイ文字の創成に関する近代史的考察と、および伝統歌謡テキストの分析に基づく黒タイの自文化イメージと自然観を考察する。

また昨年度に引き続き、ボクシングというスポーツの成立と発展の歴史について、日本と東南アジア（ベトナム、タイ、ラオスを中心とする）における展開を中心とした現地調査と文献調査を継続する。

・成果

ベトナムのマイチャウにおける白タイの移住開拓伝承を黒タイの年代記記述との比較から分析し、東南アジア大陸部における平地民と山地民の住み分けに関する研究成果を「第21回ゾミア研究会」（2017年2月3日、京都大学東南アジア研究所）で発表した。

黒タイの村のくらしに関する小論を『毎日小学生新聞』に4回連載した他、『世界の暦文化事典』（2017年11月、丸善より刊行予定）にベトナムの暦文化に関する記事を執筆した。

日本ボクシングの成立と発展に関する小論「『一石四鳥のスポーツ』の会」を『月刊みんぱく』誌上に発表した。

◎出版物による業績

[新聞]

樫永真佐夫

2016 「みんぱく世界の旅 ベトナム（1）アフリカ原産の魚——ベトナムのティラピア」『毎日小学生新聞』5月7日。

2016 「みんぱく世界の旅 ベトナム（2）力もちで働き者——黒タイの水牛」『毎日小学生新聞』5月14日。

2016 「みんぱく世界の旅 ベトナム（3）ネコとネズミの追いかけっこ」『毎日小学生新聞』5月21日。

2016 「みんぱく世界の旅 ベトナム（4）ニワトリがアヒルのお母さん!」『毎日小学生新聞』5月28日。

[その他]

樫永真佐夫

2016 「『一石四鳥のスポーツ』の会」『月刊みんぱく』2016年4月号、8頁

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2016年7月9日 「ベトナム、マイチャウにおけるタイの移住開拓伝承の資源化」『資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から』（代表：長谷川清教授）、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年2月3日 「ベトナム、タイの始祖による盆地開拓の伝承」第21回『ゾミア研究会——ベトナム特集』京都大学東南アジア研究所

・広報・社会連携活動

- 2016年6月11日 「国立民族学博物館とは」 みんぱくミュージアムパートナーズ養成研修、国立民族学博物館
2016年7月18日 「(民博展示ツアー) 電気・ガス・水道のない台所——ベトナム、黒タイ族の村から」 連続講座『みんぱく×ナレッジキャピタル——世界の「台所」』国立民族学博物館
2016年12月17日 「みんぱくにおける来館者サービスの基本方針について」 みんぱくミュージアムパートナーズ研修、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2016年10月2日 「ベトナムの民族観光——マイチャウの白タイ村落」 第439回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

- 2016年12月9日～12月14日—ベトナム（ベトナム、黒タイの暦に関する聞き取り）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

- 2017年2月4日 「ベトナムの多様性について」 神戸親和女子大学共通教育科目「アジア文化研修（ベトナム）」事前指導、国立民族学博物館

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ]——教授

1958年生。【学歴】早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マッギル大学人類学部博士課程中退（1989）【職歴】早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学助教授（1992）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 1）カナダ・イヌイットの社会変化、2）都市在住のイヌイットの民族誌的研究、3）先住民による海洋資源の利用と管理、4）アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨【所属学会】日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族藝術学会

【主要業績】

[単著]

岸上伸啓

- 2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』 京都：世界思想社。

[編著]

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)

- 2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kishigami, N.

- 2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

- 2007 第18回カナダ首相出版賞
1998 第9回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カナダ東部地域および極北地域における諸先住民文化の変化と現状に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、カナダ東部地域および極北地域における諸先住民文化の歴史的変化と現状について比較研究するとともに、同地域における先住民の文化資源資料に関する情報を吟味し、フォーラム型情報ミュージアムのコンテンツを作成することである。具体的には、下記のことを行う。

- (1) カナダ東部地域および極北地域における諸先住民文化の変化と現状について、既存の民族誌や学術論文などの渉猟および現地調査の成果に基づき、比較研究を行う。
- (2) カナダ歴史博物館やマギル大学人類学部サバール研究室、北海道立北方民族博物館ほかと連携しながら、国立民族学博物館や国内の他機関が収蔵している同地域の先住民の文化資源資料に関する情報を吟味し、資料情報の高度化を図る。
- (3) (1)と(2)の研究成果を統合し、フォーラム型情報ミュージアムのコンテンツを作成するとともに、成果の一部を論文で発表する。

なお、本研究は、国立民族学博物館の平成28年度「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトおよび平成28年度基盤研究（A）（一般）「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）の一部として実施する。

・成果

平成28年度には、カナダ東部地域および極北地域における諸先住民文化の変化と現状についての現地調査を、平成28年度「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクト（研究代表者：岸上伸啓）および平成28年度基盤研究（A）（一般）「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）、平成28年度基盤研究（A）（海外調査）「グローバル時代の捕鯨文化に関する人類学的研究」の一部としてカナダで実施し、同地域の諸文化に関する民族誌情報を収集するとともに、カナダの8博物館と研究連携関係を構築した。また、研究成果を総合した研究論文の執筆準備を進めるとともに、国立民族学博物館が収蔵しているカナダ東部地域および極北地域の先住民の文化資源資料に関する情報を高度化し、精緻化・多言語化する調査と作業を進めた。研究成果を、平成29年度秋季企画展「カナダにおける先住民文化の過去、現在、未来」（9月7日～12月5日）として公開するとともに、平成29年末までにフォーラム型情報ミュージアムを媒体として発信するための準備を進めた。

◎出版物による業績

〔著書〕

岸上伸啓

2017 『文化人類学——人類を探究し、新たな人間観を創出する学問』札幌：風土デザイン研究所。

〔編著〕

岸上伸啓編

2016 『贈与論再考——人間はなぜ他者に与えるのか』京都：臨川書店。（共同研究「贈与論再考」の成果）
〔査読有〕

〔論文〕

岸上伸啓

- 2016 「『贈与論』再考——人類社会における贈与、分配、再分配、交換」岸上伸啓編『贈与論再考 人間はなぜ他者に与えるのか』pp.10-39, 京都：臨川書店。（共同研究「贈与論再考」の成果）〔査読有〕
- 2016 「国立民族学博物館におけるフォーラム型情報ミュージアム構想について」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（国立民族学博物館調査報告137）pp.15-23, 大阪：国立民族学博物館。（基幹研究「フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト」の成果）〔査読有〕
- 2017 「捕鯨と動物福祉」『人文論究』58：71-81。〔査読有〕

Kishigami, N.

- 2016 An Info-Forum Museum for Cultural Resources of the World: A new Development at the National Museum of Ethnology. In A. Ito (ed.) *Re-Collection and Sharing Traditional Knowledge, Memories, Information, and Images: Challenges and the Prospects on Creating Collaborative*

Catalog (Senri Ethnological Reports 137), pp.25-33. Osaka: National Museum of Ethnology. (基幹研究「フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト」の成果) [査読有]

[その他]

岸上伸啓

- 2016 「贈与論再考 人類社会における贈与・交換・分配・再分配の検討」日本文化人類学会第50回研究大会準備委員会編『日本文化人類学会 第50回研究大会発表要旨集』p.34, 名古屋：日本文化人類学会第50回研究大会準備委員会（南山大学）。
- 2016 「はじめに」岸上伸啓編『贈与論再考 人間はなぜ他者に与えるのか』pp.5-7, 京都：臨川書店。
- 2016 「おわりに」岸上伸啓編『贈与論再考 人間はなぜ他者に与えるのか』pp.313-314, 京都：臨川書店。
- 2016 「カナダ先住民の生活空間としての都市——ケベック州モンリオールを事例として」『日本カナダ学会第41回年次研究大会プログラム・報告要旨』p.11, 東京：日本カナダ学会第41回年次研究大会実行委員会。
- 2016 「トーテムポール——北西海岸先住民文化の象徴」阿部珠里編『アメリカ先住民を知るための62章』pp.236-240, 東京：明石書店。
- 2016 「ポトラッチ／ギヴ・アウエイ——寛容さの具現化」阿部珠里編『アメリカ先住民を知るための62章』pp.241-245, 東京：明石書店。
- 2016 「トリックスター——聖者か世紀の大ベテン師か」阿部珠里編『アメリカ先住民を知るための62章』pp.299-303, 東京：明石書店。
- 2016 「分配（シェアリング）に関する海外研究動向」『民博通信』154：24。
- 2016 「先住民族を知ろう（Ⅱ）イヌイト」『朝日小学生新聞』10月9日。
- 2016 「アイヌと海外の先住民」『月刊みんぱく』40(11)：8。
- 2016 「現代文明からみた生き物——クジラなどの野生動物の利用と保護をめぐる」『みんぱく公開講演会 スイカで踊る、クジラを祭る 生き物と人 共生の風景』pp.6-8, 大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「国立民族学博物館の収蔵品（6）カナダ・イヌイトの石製彫刻品と版画」『文部科学教育通信』400号, 表紙裏。
- 2016 「コメント（北西海岸先住民の木箱づくり）」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138）p.124, 大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「書評：浜口尚著『先住民生存捕鯨の文化人類学的研究——国際捕鯨委員会の議論とカリブ海ベクウェイ島の事例を中心に』東京：岩田書院、2016年、193頁、3000円（＋税）」『文化人類学』81(3)：539-542。
- 2017 「変貌をとげるカナダ・イヌイト社会」『みんぱく e-news』第187号。
- 2017 「人類社会における自然環境や異文化との共生・共存について——アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨文化を事例として」I-URIC フロンティアコロキウム2016運営委員会編『I-URIC フロンティアコロキウム2016予稿集』p.6, 東京：自然科学研究機構。
- 2017 「北アメリカ・アラスカ地域における現代の先住民捕鯨と気候変動」池谷和信・岸上伸啓編『平成28年度国立民族学博物館特別研究シンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」プログラム・要旨集』p.9, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「民博収蔵の北米北方先住民民族資料の高度情報化と情報発信」『民博通信』156：10-11。

Kishigami, N.

- 2016 Sharing of Bowhead whale meat among the Inupiat in Barrow, Alaska, USA. In D.Friesen and Noa Levi (eds.) *Programme an Abstract of the International Conference "SHARING The Archaeology & Anthropology of Hunter-Gatherers"*, p.17. Cambridge, UK: McDonald Institute for Archaeological Research, University of Cambridge, UK.
- 2016 Book Review: A Tale of Three Villages: Indigenous-Colonial Interactions in Southwestern Alaska, 1740-1950. Liam Frink. Tucson: University of Arizona Press, 2016, 184PP. \$55.00, Cloth. ISBN 978-0-8165-3109-7. *Journal of Anthropological Research* 72(4): 566-567.
- 2016 Comments on "Relocation Redux: Labrador Inuit Population Movements and Inequalities in the Land Claims Era". *Current Anthropology* 57(6): 798.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・特別研究

2017年3月26日 「北アメリカ・アラスカ地域における現代の先住民捕鯨と気候変動」平成28年度国立民族学博物館特別研究シンポジウム『歴史生態学から見た人と生き物の関係』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月29日 「贈与論再考 人類社会における贈与・交換・分配・再分配の検討」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学S棟B会場（S-23）

2016年5月29日 「マルセル・モースの贈与概念と狩猟採集民の分配 アラスカのイヌピアット社会を事例として」日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学S棟B会場（S-23）

2016年9月10日 「カナダ先住民の生活空間としての都市——ケベック州モントリオールを事例として」日本カナダ学会第41回年次研究大会、中央大学後楽園キャンパス5号館

2016年9月20日 'Sharing of Bowhead whale meat among the Inupiat in Barrow, Alaska, USA.' International Conference "SHARING The Archaeology & Anthropology of Hunter-Gatherers", McDonald Institute for Archaeological Research, University of Cambridge, UK

2017年3月2日 「基調講演 人類社会における自然環境や異文化との共生・共存について：アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨文化を事例として」（招待講演）I-URIC フロンティアコロキウム2016、ホテルアソシア静岡

・研究講演

2016年12月20日 「アジア北方・極東地域の食文化——ロシア・カムチャツカ半島の先住民民族コリヤークを中心に」（招待講義）、浙江農林大学茶学院

2016年11月10日 「現代文明からみた生き物——クジラなどの野生動物の利用と保護をめぐる」みんぱく公開講演会『スイカで踊る、クジラを祭る 生き物と人 共生の風景』日経ホール、東京

・広報・社会連携イベント

2016年5月11日 「クジラとともに生きる——アラスカ先住民の現在」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・海外調査等

2016年6月26日～7月18日—カナダ（フォーラム型情報ミュージアム構築のためのカナダ西部地域先住民の民族資料に関する調査及びカナダ東部地域の博物館、大学、先住民団体との連携によるネットワーク型博物館学の創成に関する調査）

2016年9月18日～26日—イギリス（分配に関する学際的国際研究集会での研究発表及び調査）

2016年11月11日～29日—カナダ（カナダ・イヌイットによるシロイルカ猟およびホッキョククジラ猟に関する調査）

2016年12月19日～21日—中華人民共和国（北東アジア地域の先住民社会の食文化に関する比較研究）

2017年3月4日～12日—カナダ（カナダ北西海岸先住民の捕鯨・鯨類利用に関する調査）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

・指導教員

副指導教員（2人）

・大学院ゼミでの活動

比較社会研究特論Ⅱ（前期）、比較社会研究演習Ⅱ（後期）、論文ゼミ

・博士論文審査

博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件数）（総研大に限る）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本学術会議連携会員（地域研究）、日本カナダ学会理事、民族芸術学会理事、澁澤賞選考委員長、ArCS北極域研究推進プロジェクト評議会委員、北極域研究共同推進拠点運営委員会委員（北海道大学北極域研究センター）

西尾哲夫 [にしお てつお] ————— 副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

菅瀬晶子 [すがせ あきこ] ————— 准教授

【学歴】 東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程（アジア第三専攻）修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程（地域文化学専攻）修了（2006）
【職歴】 日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2009）、神奈川大学経営学部非常勤講師（2010）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2010）、共立女子大学国際学部非常勤講師（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）
【学位】 博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（学術）（東京外国語大学大学院 1999）
【専攻・専門】 文化人類学・中東地域研究（パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏）
【所属学会】 日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

[単著]

菅瀬晶子

- 2012 『豊穡と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』（民族紛争の背景に関する地政学的研究19）大阪：大阪大学世界言語研究センター。
- 2010 『イスラームを知る 6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。
- 2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』広島：溪水社。

【受賞歴】

- 2006 長倉研究奨励賞、総研大研究賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

20世紀前半にガリラヤ地方で活躍したアラブ・ナショナリスト、ナジブ・ナッサールの活動について調査し、宗教をこえたナショナル・アイデンティティの創出の過程をあきらかにするとともに、キリスト教徒であった彼自身の宗教的アイデンティティが、彼の執筆活動に与えた影響をさぐる。

・成果

昨年度に引き続き、科研費基盤C「ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考」（課題番号15K01905）の一環として、ナジブ・ナッサールの著作の資料収集と読解を中心におこなった。その結果、判明したのは以下のとおりである。

イスラエル国内およびイギリス、ドイツの所蔵状態

イスラエル国内での調査では、おもにハイファ大学でのマイクロフィルムおよびマイクロフィッシュ、書籍を閲覧し、内容の精読を続行している。イスラエル国内に保存されていない年代のものを入手するため、イギリスのブリティッシュ・ライブラリーに事前に問い合わせ、直接出向いて調査もしたが、資料の老朽化のため閲覧可能リストから外され、現在はその所在すら不明であることが判明した。代わりに訪れたエクセター大学図書館、およびドイツ・ベルリンのベルリン自由大学図書館で、その一部を補うことができた。

1920年代中盤のナッサールの動向および執筆活動の内容

ナッサールはパレスチナがオスマン帝国の支配下にあった1900年代末より、すでにパレスチナ随一のジャーナリストとみなされており、1919年にイギリスの委任統治下に入った後も、著述活動によってパレスチナ・アラブ人市民に対する啓発を続けていた。現在は彼の執筆活動のうち、1908～1912年、1919～1930年に的を絞り、精読を続けている。現時点では、1920年代中盤にすでに彼自身は委任統治下の政治に直接関わることをせず、

ガリラヤ地方～ヨルダン川西岸・東岸各地を訪問し、現地の産業・教育の現状について詳細な記録を残していることがわかった。記述の内容には、ガリラヤ地方の精糖産業など、現在はすでにおこなわれていない産業についての言及も多い。また、女性の政治参加についても多大な関心を寄せているが、女性に対する啓蒙活動は妻のサーズィジュに一任し、カルメル紙上の「女性のページ」を自由に使わせている。むしろ彼女の情報発信のスタイルをまねて、ナッサール自身が「男性のページ」をもうけるというユーモアすらみせており、ナッサールの執筆活動研究には、妻サーズィジュの執筆内容をも精読する必要があることがわかった。現在も精読を続けているが、その内容は今年度中に論文を執筆予定である。

ナジーブ・ナッサールに対する今日の評価・関心についての調査

残念ながら、ナッサールに対する関心は年々薄れており、現在高等教育を受ける世代からも忘れ去られているという現状を確認した。イギリスにおける資料の粗雑な扱いや、ここ数年第一次世界大戦開戦～イギリスによる委任統治開始から100周年という記念の年が続いているにもかかわらず、イスラエルおよびパレスチナ自治区で当時のアラブ・ナショナリストについての研究活動がまったくみられないことに、その事実は如実にあらわれている。しかしながら、彼の執筆活動からは、当時彼の主張がパレスチナ・アラブ人コミュニティに受け入れられていれば、委任統治記イスラエル建国に至るまでの歴史はかなり変わっていたであろうということが推測できる。

その他、発行された研究成果は、以下のとおりである。

菅瀬晶子「第3部 境界線を越えて 第2章 パレスチナ・イスラエルのアラブ人キリスト教徒にみられる食文化の特徴とその影響」、東京工業大学「ぐるなび」食の未来創成寄付講座監修・阿良田麻里子編『文化を食べる 文化を飲む——グローバル化する世界の食とビジネス』、267-278頁、ドメス出版、2017年。

菅瀬晶子「Ⅵ 多文化を生きる 030 もうひとりの息子——『ハイファに戻って』を越えて」、小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子編『ワールド・シネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』、245-254頁、勉誠出版、2016年。

菅瀬晶子「第4章 パレスチナ人は何を食べているのか——オスマン時代から続く伝統的食文化」「第5章 パレスチナのイエと社会——パレスチナ人のアイデンティティ」「第6章 キリスト教徒として生きる人々——多様な宗教文化」白杵陽・鈴木啓之編著『エリア・スタディーズ144 パレスチナを知るための60章』、32-36頁、39-43頁、46-50頁、明石書店、2016年。

◎出版物による業績

〔論文〕

菅瀬晶子

- 2016 「第4章 パレスチナ人は何を食べているのか」白杵陽・鈴木啓之編『エリア・スタディーズ144 パレスチナを知るための60章』 pp.32-36, 東京：山川出版社。
- 2016 「第5章 パレスチナのイエと社会」白杵陽・鈴木啓之編『エリア・スタディーズ144 パレスチナを知るための60章』 pp.39-43, 東京：山川出版社。
- 2016 「第6章キリスト教徒として生きる人々」白杵陽・鈴木啓之編『エリア・スタディーズ144 パレスチナを知るための60章』 pp.46-50, 東京：山川出版社。
- 2016 「Ⅵ多文化を生きる 030もうひとりの息子——『ハイファに戻って』を越えて」小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』 pp.245-252, 東京：勉誠出版。
- 2017 「第3部第2章 パレスチナ・イスラエルのアラブ人キリスト教徒にみられる食文化の特徴とその影響」東京工業大学「ぐるなび」食の未来創成寄付講座監修、阿良田麻里子編『文化を食べる 文化を飲む——グローバル化する世界の食とビジネス』 pp.267-278, 東京：ドメス出版。

◎調査活動

・海外調査

- 2016年8月17日～9月16日—イギリス、イスラエル、パレスチナ自治区（アラブ・ナショナリズム文献調査）
- 2016年10月31日～11月2日—中国（浙江農林大学での講義）
- 2017年3月1日～3月18日—イスラエル、パレスチナ自治区、ドイツ（アラブ・ナショナリズム文献調査のため）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

滋賀県立大学「国際関係論」、神戸女子大学「多文化共生論」

【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1996）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（1999）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位修得満期退学（2005）【職歴】日本学術振興会特別研究員 PD・法政大学（2005）、法政大学社会学部兼任教員（2005）、首都大学東京非常勤講師（2006）、筑波大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2008）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2013）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2006）、修士（社会人類学）（東京都立大学 1999）【専攻・専門】社会人類学、オセアニア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【主要業績】

〔単著〕

丹羽典生

2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。

〔編著〕

丹羽典生編

2016 『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』神奈川：春風社。

〔共編著〕

丹羽典生・石森大知編

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。

【受賞歴】

2010 第9回オセアニア学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

応援の人類学：政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の諸相

・研究の目的、内容

本研究は、〈応援〉という視角から人類の諸文化を通文化的に比較することを通じて、利他性という人間性の根源について文化人類学的に考察することを目的とする。〈応援〉の下位項目として、政治、スポーツ、ファン文化をさしあたり設定し、世界の事例を取り上げ検討する。日本の事例では、大学を中心とする応援団の諸活動を具体的な民族誌的研究の対象とする。調査の遂行に当たっては、科学研究費助成事業への応募も計画している。

・成果

東京、大阪にて聞き取り調査を行った。各種大学図書館や個人に収蔵されている応援団関係資料や新聞資料の収集閲覧とデータベースの作成を行った。成果公開としては、本館の共同研究「応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」を通じて研究会を4回開催した。また、神戸大学にて開催された The Second EAJIS Japan Conference で、パネル発表を行った。

◎出版物による業績

〔論文〕

丹羽典生

2016 「ヴァス論再考——フィジーにおけるある贈与関係の変遷」岸上伸啓編『贈与論再考——人間はなぜ他者に与えるのか』pp.143-160, 京都：臨川書店。

2017 「鯨歯を纏い、豚を屠る」風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.35-54, 京都：ナカニシヤ出版。

[その他]

丹羽典生

2016 「コメント：パフォーマンスを通じた伝統知識の教授——フィジーの「天地創造」劇の活動から見た雑感」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる 国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138）pp.100-101, 大阪：国立民族学博物館。

2017 「編集後記」『月刊みんぱく』41(2)：21。

2017 「編集後記」『月刊みんぱく』41(3)：21。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月29日 「贈与論再考」『日本文化人類学会第50回研究大会』南山大学

2016年9月24日 'Cultivating a self-disciplined, resourceful and respectable leader: how ritualistic behaviors among cheerleading groups in Japanese universities have changed.' "European Association for Japanese Studies Conference", Kobe University

2017年3月27日 「日本人探検家がみた戦前期のオセアニア像——朝枝利男資料のもつ可能性」『日本オセアニア学会』島根県松江市

・展示活動

2016 企画展「ワンロード：現代アボリジニ・アートの世界」実行委員長

◎調査活動

・海外調査

2016年8月19日～8月30日—ニュージーランド（「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」に関する情報収集）

2016年12月12日～12月22日—イギリス（「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」に関する情報収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」研究代表者

南 真木人 [みなみ まきと] ————— 准教授

1961年生。【学歴】弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院修士課程環境科学研究科修了（1989）、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退（1991）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、文化資源研究センター准教授（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2015）【学位】学術修士（筑波大学大学院修士課程環境科学研究科 1989）【専攻・専門】人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

[共編]

南 真木人・石井 溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）東京：明石書店。

Yamashita, S., M. Minami, D. W. Haines and J. S. Eades (eds.)

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77), Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Minami, M.

2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D. N. Gellner and K. Nawa (eds.) *Social Dynamics in Northern South Asia* Vol.1: Nepalis Inside and

【2016年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

ネパール社会の30年間の変化に関する研究Ⅱ——バトゥレチョール村とガンダルバ・カーストを事例に

・研究の目的、内容

本研究の目的は、1982年にネパールにおいて民博が映像取材した家族やコミュニティを再訪し、約30年間に社会や生活、人々の生業、景観等がいかに変化したのかを明らかにすることである。文化資源プロジェクト「ネパール関連のビデオテーク番組の制作」により、昨年度、再び映像に収めたバトゥレチョール村の新旧が比較できる番組を制作する。また、補充の聞き取り調査を実施して村人の世帯更新を再構成し、社会の変化を把握する。

・成果

現地での補充調査を経て、1982年に藤井知昭民博名誉教授らが撮影したビデオテーク番組「ガイネ——ヒマラヤの吟遊詩人」等の映像を用いて導入とし、34年後の村の景観や社会、ガンダルバ（かつてはガイネ、現在は蔑称）の生業やアイデンティティの変容を表した研究用番組「ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在」（製作年2017年、制作監修：南 真木人・寺田吉孝、91分31秒／撮影2016年）を制作した。また、1968～1982年に藤井名誉教授が録音した音源、撮影した写真などを同名誉教授の協力のもと整理し、ガンダルバの人々と共有化することを目指し、人間文化研究機構・南アジア地域研究民博拠点（MINDAS）の「環流する南アジア」ユニットとして「ネパール民族音楽資料の再資源化と共有化」を立ち上げ、2度の研究会を開催した。ポカラ市近郊に位置するバトゥレチョールの場合、80年代頃から清掃職の公務員等に就き、次世代の教育に投資することで、次第に音楽を生業とする生活から離れてきたことが明らかになった。他方、カトマンドゥやポカラの観光地で観光客向けに演奏するのは、他地域出身の別のガンダルバであり、異なる適応の姿が見てとれた。他にも、大学で楽器演奏を指導するなど、音楽家として身を立てるガンダルバも現れており、この30年でいくつかに分類できる、ガンダルバの分化が進んだことが明らかになった。成果の一部は毎日新聞に「映像が持つ力」「ガンダルバの30年」という小文で発表した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

南 真木人

2016 「ネパールのパスポート」陳天璽・大西広之・小森宏美・佐々木てる編『パスポート学』pp.79-84, 札幌：北海道大学出版会。

2017 「移住労働が内包する社会的包摂」名和克郎編『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相——言説政治・社会実践・生活世界』pp.451-483, 東京：三元社。

[その他]

南 真木人

2016 「自ら判断する個人の集合——山岳部」『月刊みんぱく』40(4)：9。

2016 「みんぱくの食の民族誌 考える舌34 ネパールの『グンドゥルック』」『京都新聞』4月6日。

2016 「先住民族を知ろう⑫——焼き畑・水田 森の恵みで農耕」『朝日小学生新聞』12月18日。

2017 「魔除けとしてのジー・ビーズ」池谷和信編『ビーズ——つなぐ かざる みせる』pp.72-73, 大阪：国立民族学博物館。

2017 「旅・いろいろ地球人 ネパールの今昔①——東京オリンピック」『毎日新聞』3月9日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 ネパールの今昔②——1934年の大地震」『毎日新聞』3月16日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 ネパールの今昔③——映像が持つ力」『毎日新聞』3月23日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 ネパールの今昔④——ガンダルバの30年」『毎日新聞』3月30日夕刊。

鈴木七美・信田敏宏・六車由実・南 真木人

2016 「討論」（みんぱく公開講演会「育児の人類学、介護の民俗学」より）『季刊民族学』156：76-81, 大阪：千里文化財団。

◎映像音響メディアによる業績

〔映像制作〕

南 真木人・寺田吉孝 制作監修

2016 『ネパールの婚礼』58分07秒

2016 『ネパールの伝統音楽 パンチャイ・バージャ』16分02秒

2017 『ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在』91分31秒

南 真木人・寺田吉孝 監修

2017 『みんぱく映像民族誌 第22集 ネパールの結婚式』91分

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国立民族学博物館主催のシンポジウムなど

2016年11月30日、12月1日 「『人類学的営みにおける映像』趣旨説明』『みんぱく若手研究者奨励セミナー』国立民族学博物館第6セミナー室

・人間文化研究機構主催のシンポジウムなど

2016年7月22日 「バトゥレチョール村の30年」『MINDAS「ネパール民族音楽資料の再資源化と共有化」第1回研究打ち合わせ』国立民族学博物館第3演習室

2016年10月8日 「ネパールの社会変化とソーシャルモビリティ」『MINDAS第2回合同研究会』国立民族学博物館第4セミナー室

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月13日 「民博ネパール写真データベースとその後の展開」ワークショップ『写真が開く地域研究』科研費・地域研究画像デジタルライブラリ、京都大学稲盛財団記念館3階大会議室

・広報・社会連携活動

2016年5月25日 「閉じられた聖なる空間——ネパールの台所」『みんぱく×ナレッジ・キャピタル「世界の『台所』」第2回』グランフロント大阪 The CAFE The lab.

2016年6月17日 「ネパール社会の現在を捉える①」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館

2016年6月24日 「ネパール社会の現在を捉える②」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館

2016年9月3日 「ネパール、『市民社会』の再編を展望する」第458回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

2016年9月30日 「目と舌で知るネパール——映像鑑賞と国民食『ダル・バート』を手で食べる」第73回国立民族学博物館友の会体験セミナー、東京：インド・ネパール料理店「花菜（Khana）」

2017年1月8日～1月15日 国立民族学博物館友の会・第88回民族学研修の旅・講師「多民族国家ネパールの生活文化にふれる旅——映像がつなぐ人びとを訪ねて」千里文化財団

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年5月16日 「ネパールの楽師ガンダルバ——1982年の映像を手がかりに」第426回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2017年1月28日～2月18日—ネパール（科学研究費補助金による現地調査）

2017年3月7日～3月16日—ネパール（ネパール地震後の社会再編に関する現地調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1名）、副指導教員（1名）

・大学院ゼミでの活動

テーマシリーズ講義「国際移民と移民の送り出しシステム」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（代表者：三尾 稔）研究分担者、科学研究費補助金（特別研究促進費）「2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査」（代表：矢

田部龍一（愛媛大）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究」研究代表者

河合洋尚 [かわい ひろなお] ————— 准教授

1977年生。【学歴】関西学院大学社会学部卒業（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科（修士課程）修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科（博士課程）修了（2009）【職歴】嘉応大学客家研究院講師（2008）、中山大学社会学・人類学学院助理研究員（講師）（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）【専攻・専門】都市人類学、景観人類学、漢族研究【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、中国広東民族学会

【主要業績】

[単著]

河合洋尚

2013 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

[編著]

河合洋尚編

2016 『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』東京：時潮社。

2013 『日本客家研究の視角与方法——百年的軌跡』北京：社会科学文献出版社。

【受賞歴】

2001 安田三郎賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 中国客家地域の都市景観形成にまつわる人類学的研究
- 2) 環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
- 3) 中国の人類学的研究をめぐるレビューと再検討

・研究の目的、内容

- 1) 世界の客家華僑の故郷として知られる梅州市における文化的景観の創造について、景観人類学の視点と方法から整理する。
- 2) 客家（ンガイ人）の国境を超えた文化的ネットワークを明らかにする。また、これまで客家ではなかった人々が客家を名乗るようになる「新客家」の誕生と、そのメカニズムについて検討する。
- 3) 中国の人類学的研究をレビューする作業に着手する。今年度は、特に中国における人類学的フィールドワークについて再検討を加える。

・成果

今年度は主に以下の5つの研究成果を提示した。

- 1) 梅州市をめぐる景観人類学的研究の成果として、論文「景観の競合と相律——『客家の故郷』における一考察」を学会誌『文化人類学』（81巻1号）に掲載した。
- 2) 味覚と景観の間の関係を検討するためにフードスケープという領域に着手し、2016年12月3～5日にかけて立命館大学と主催した国際シンポジウム「食文化の交流——過去・現在・未来」で分科会を組織し、フードスケープに関する発表をおこなった。
- 3) 中国および台湾における歴史の資源化に関する調査と学会発表をおこなった。また、同テーマの論文集『中国における歴史の資源化』を塚田誠之教授と編集し、現在、SERに投稿中である。
- 4) フランス領ポリネシア（タヒチ）へと調査に行き、華人の移住、社会組織、年中行事から食文化まで広範に調査した。タヒチの華人は大半が客家であり、日本におけるタヒチおよびオセアニアの客家研究を開拓する契機をつくることができた。
- 5) 日本における中国の人類学的研究をレビューする一環として、中国における人類学的フィールドワークを

再検討した共編著『フィールドワーク——中国という現場、人類学という実践』（仮）を編集した。

◎出版物による業績

〔論文〕

河合洋尚

2016 「景観の競合と相律——『客家の故郷』における一考察」『文化人類学』（日本文化人類学会）81(1)：26-43。〔査読有〕

河合洋尚・稲澤 努・藤野陽平・田中孝枝

2016 「課題研究懇談会 東アジア公共人類学懇談会」『文化人類学』（日本文化人類学会）81(2)：338-343。〔査読有〕

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年12月4日 「作為視覚的飲食、作為味覚的飲食——広州西関飲食景観の権力性（Foods as Visual Sensation and Foods and Gustation: The Politics of Foodscape in Xiguan, Guangzhou）」第6回アジア食文化会議『食文化の交流——過去・現在・未来』立命館大学草津キャンパス

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年7月28日 「聖地言説と信仰実践——中国梅県の呂帝廟をめぐる『聖地』の複数性」スラブ・ユーラシア研究センタープロジェクト型共同研究、北海道大学

2016年7月30日 「現地適応型フィールドワーク——現代中国における調査実践と社会実践」国際会議『東アジアにおけるフィールドワークの実践と課題』北海道大学

2016年9月11日 「客家“聖地”景観与在地宗教実践——以客家原郷梅城為例」国際シンポジウム『第四届台湾客家研究国際研討会』台湾・交通大学客家研究院。

2016年11月8日 「四川成都城鎮化与客家文化資本」国際シンポジウム『第二届城市发展論壇 城市公共管——理念、組織、政策与实践』蘇州大学

2016年11月12日 「歴史記憶的資源化与文化遺産保護——以粵東的梅城公園建設為例」国際シンポジウム『2016台中客家文化學術研討会』台湾・中興大学

・研究講演

2016年7月23日 「客家研究の最前線——人類学の視点から」ユニティ中国研究会・神戸華僑華人研究会合同開催講演会、中華会館

2016年9月9日 「日本与客家——過去・現在・未来」台湾行政院客家委員会招待講演会、苗栗客家文化園區客家發展中心

2016年11月9日 「日本の客家研究——回顧与現状」中央大学客家文化学院特別講演会、中央大学

2016年11月13日 「日本客家——移民、社会团体、文化活動」桃園新楊梅社区大学特別講演会、新楊梅社区大学

2016年11月26日 「台湾客家の移住と文化——中国との関係より」大阪日台交流協会11月度例会、大阪倶楽部

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年7月17日 「メルボルン中華街の春節」第460回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2016年8月6日～9月6日—中国（歴史の資源化に関する聞き取り調査及び資料収集）

2016年9月8日～9月13日—台湾（苗栗客家文化園區における公園及び国立交通大学におけるシンポジウムでの発表）

2016年11月5日～11月14日—中国、台湾（中国周縁部における歴史の資源化に関する学会への参加及び講演）

2017年2月11日～2月18日—タヒチ（基幹研究プロジェクト「アジアにおけるエコヘルス研究の展開」による調査）

◎大学院教育

・指導教員

特別共同利用研究員（1人）

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

立命館大学博士論文副査

・非常勤講師

流通科学大学総合政策学部「民族文化誌」、大阪経済大学「民俗学」

◎学会の開催

2016年12月3日～12月4日 第6回アジア食文化会議「食文化の交流——過去・現在・未来」立命館大学草津キャンパス。

文化資源研究センター

野林厚志 [のばやし あつし]——センター長（併）教授

1967年生。【学歴】東京大学理学部生物学科卒（1992）、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了（1994）、東京大学大学院理学系研究科博士課程中退（1996）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2000）、総合研究大学院大学先導科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）【学位】博士（学術）（総合研究大学院大学 2003）、修士（理学）（東京大学大学院理学系研究科 1994）【専攻・専門】人類学、民族考古学 1）人間と動物との関係史、2）生業文化論【所属学会】日本台湾学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

[編著]

日本順益台湾原住民研究会編（野林厚志主編）

2014 『台湾原住民研究の射程』台北：順益台湾原住民博物館。

[論文]

野林厚志

2010 「文化資源としての博物館資料——日本統治時代に収集された台湾原住民族の資料が有する現地社会での意義」『国立民族学博物館研究報告』34(4)：623-679。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

台湾原住民族の工芸生産とエスニシティと関係に関わる人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、台湾のオーストロネシア系先住諸民族（「原住民族」）の現在のエスニシティの動態を工芸生産という営みをもって分析し、個人の民族への帰属意識と民族集団のエスニシティとの関係に関する人類学的モデルを引き出すことである。具体的には原住民族の人たちの工芸生産の目的、過程、それらがおよぼす社会的な影響を、現地調査を中心にして明らかにする。そのうえで、工芸生産がエスニシティの形成やそれを利用した諸行動とどのような関係にあるのかについて探究する。

本年度は、若い世代が工芸や原住民族文化の表象にどのように関わっているかについてのフィールド調査、博物館資料の調査を行う予定である。具体的には台湾東部地域のパイワン族のトンボ玉製作ならびに、順益台湾原住民博物館所蔵の「原住民族ポスター」資料を対象とし、それらが創り出される過程や創作したものが台湾社会や当事者にフィードバックしていく様相を明らかにしていく。

なお、本研究は科学研究費基盤研究B「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」による外部資金を用いて実施する。

・成果

本年度は、当初の研究計画にしたがい、特にパイワン族のガラスビーズの製作ならびに、順益台湾原住民博物館所蔵の「原住民族ポスター」資料を対象として調査、研究を行った。

パイワン族のガラスビーズ製作については、台東県太麻里郷におけるビーズ製作の文化産業化の現状とその歴史的背景についてフィールド調査を実施した。1960年代における原住民族の生活改善運動とそれにもなう伝統的文化の破棄、外部からの安価な工芸品の流入、それに抗するようなかたちで工芸品の再興、映画等のメディアの文化産業化への影響といった、ガラスビーズの製作に関わる歴史的背景の詳細に関する知見が得られた。

「原住民族ポスター」資料の分析では、作品の製作された時代的背景と個々の作品の内容との関連性について検討した。政治状況で個々の作品の作風が変化する仕組みはポスター公募のテーマ設定や、ポスターの製作過程で参照する材料（メディア上の情報等）による影響を受けやすいものであること、原住民族の知的財産に関する課題として議論が展開する可能性等が知見として得られた。

これらの成果は台湾で開催された国際ワークショップ等、日本学術振興会の科研費ニューズレター等で発表するとともに、民博の企画展、特別展を通して、一般社会への成果の発信を行っている。なお、本研究のもとになる調査、成果の公開は、科学研究費基盤研究（B・海外）科学研究費基盤研究B「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」による助成を受けている。

◎出版物による業績

〔論文〕

Nobayashi, A.

2016 Rewiring Museum Information: Mobile and Cloud. In N. Sonoda (ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology*, pp.89-96. Singapore: Springer. [査読有]

野林厚志

2016 「原住民族をめぐるイメージ——順益台湾原住民博物館学生ポスター作品を事例として」『第9回台日原住民族研究論壇』pp.187-197。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2017年3月5日 「料理は人間を健康にしてきたのか」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「文明社会における食の布置」成果公開一般講演会、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2016年7月9日 「デザインされる原住民族イメージ——学生創作ポスター展を事例に」『表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年8月4日 「デジタル時代の原住民族イメージ——民博企画展をいとぐちに」順益台湾原住民研究会、国立民族学博物館

2016年11月5日～11月6日 「新人文化の形成——文化・行動変化の文化人類学的モデル」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究『パレオアジア文化史学第1回研究大会』東京大学小柴ホール
「生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究」（野林厚志・丸川雄三）、文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究『パレオアジア文化史学第1回研究大会』東京大学小柴ホール

2016年11月26日 「台湾資訊跨國多語言交流平台」国際会議『台湾資訊跨國多語言交流平台』台湾屏東県原住民族委員會原住民族文化發展中心

2016年12月3日 「鹿野忠雄の学問の展開過程から学ぶ『移動』と帝国日本——台湾から東南アジアまで」国際会議『帝国日本における人とモノの移動と他者像——台湾・朝鮮・沖縄を基点に』東洋大学白山キャンパス

2016年12月3日 'Preference for Sweet Beverages and Changing Values of Health in Taiwan.' The 6th Asian Food Study Conference, 立命館大学草津キャンパス

2017年1月14日 「エスニシティという視点から動物の生命について考える——台湾における動物供犠と狩猟」[招待講演] 京都大学応用哲学・倫理学教育研究センター（CAPE）研究プロジェクト「人と動物の倫理研究会」第3回研究会、キャンパスプラザ京都

2017年2月10日 'Size of hunting area and the techniques of hunter-gatherer groups for hunting games using ethnographic data.' The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University

2017年3月21日 「台湾原住民族のビーズ—ビーズ展資料の解説」第2回順益台湾原住民研究会、国立民族学博物館

・展示

2016 企画展「順益台湾原住民博物館所蔵・学生創作ポスター展 台湾原住民をめぐるイメージ」

◎調査活動

・海外調査

2016年 5月26日～5月30日—台湾（台湾原住民族工芸をめぐる世代間交渉にかかる調査）

2016年 7月21日～7月23日—台湾（情報化時代における台湾原住民族イメージの表象に関する調査）

2016年 8月21日～9月1日—台湾（台湾における味覚と健康との関係に関する資料調査）

2016年10月25日～10月27日—台湾（展示資料の情報化に関する現地博物館との研究会合）

2016年11月24日～11月29日—台湾（フォーラム型情報ミュージアム（台湾関連資料）構築のために現地ワークショップの開催と博物館資料の情報化に関する調査）

2016年12月22日～12月24日—台湾（台湾における学術資料の情報共有化に関する調査）

2017年 3月15日～3月20日—シンガポール、台湾（「東・東南アジアにおけるフードスタディーズの展開」ワークショップ及びエコヘルス準備会合への参加、資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

代表者、広領域連携型基幹研究プロジェクト「文明社会における食の布置」代表者

科学研究費助成事業（新学術領域研究）「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究B）「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」研究代表者

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

順益台湾原住民博物館研究賛助金「台湾原住民族の文化、社会、歴史に関する総合的研究」（研究責任者）

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

奈良県文化財保存・活用会議委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド・サイエンス・コロキウム運営委員

信田敏宏 [のぶた としひろ]—————教授

1968年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1995）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）【職歴】東京都立大学人文学部社会学科助手（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2014）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2014）【学位】社会人類学博士（東京都立大学 2002）【専攻・専門】社会人類学、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

[単著]

信田敏宏

2013 『ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書1）京都：臨川書店。

2004 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

Nobuta, T.

2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia*. Subang-Jaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006 第4回東南アジア史学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

協力行動に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、助け合い、分かち合い、支援といった人間の協力行動について、人類史的観点からアプローチすることを目的とする。具体的には、マレーシアの先住民オラン・アスリに対する支援活動や、障がい者に対する支援活動等の具体的事例に注目しながら、文明化と人間、社会とマイノリティの関係性について考察を進める。

・成果

本年度は、オラン・アスリに対する支援活動を扱った論文（「序論 グローバル支援の人類学」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』京都：昭和堂、pp.1-14.）、障がい児の子育てや就学支援についての論文（「心に寄り添う子育てとは？——遊ぶと学びのすごろくワールド」『季刊民族学』156：62-68. および「親の立場から考える就学支援——インクルーシブ教育に対する提言」『発達障害研究』38(3)：292-301.）を発表した。また、みんなくワールドシネマ「幸せのありか」での映画解説を機会に、障がい者の心についてのこれまでの私見をまとめ、発信することができた。その他、オラン・アスリを事例として、論文や新聞記事等を発表し、講演も実施した。

◎出版物による業績

〔編著〕

信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編

2017 『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』京都：昭和堂。

〔論文〕

信田敏宏

2016 「親の立場から考える就学支援——インクルーシブ教育に対する提言」『発達障害研究』38(3)：292-301。

2017 「人」山本信人監修・宮原暁編『東南アジア地域研究入門 2 社会』pp.123-140, 東京：慶應義塾大学出版会。

2017 「序論 グローバル支援の人類学」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編『グローバル支援の人類学——変貌するNGO・市民活動の現場から』pp.1-14, 京都：昭和堂。

2017 「統治される森の民——マレー半島におけるオラン・アスリと隣人との関係史」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』pp.190-202, 東京：東京大学出版会。

〔その他〕

信田敏宏

2016 「心に寄り添う子育てとは？——遊びと学びのすごろくワールド」『季刊民族学』156：62-68。

2016 「みんなく世界の旅 マレーシア（1）活気あふれる多民族国家」『毎日小学生新聞』10月22日。

2016 「みんなく世界の旅 マレーシア（2）村に暮らす先住民の1日」『毎日小学生新聞』10月29日。

2016 「みんなく世界の旅 マレーシア（3）『森の民』が平和に暮らせる理由」『毎日小学生新聞』11月5日。

2016 「みんなく世界の旅 マレーシア（4）村びと総出で祝う結婚式」『毎日小学生新聞』11月12日。

2016 「先住民族を知ろう（10）オラン・アスリ 樹液ぬった吹き矢で獲物ゲット」『朝日小学生新聞』12月4日。

2016 「タレントタイム 多民族共生への道」小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』pp.69-74, 東京：勉誠出版。

2017 「みんなくワールドシネマ vol.15 『幸せのありか』」『社会科NAVI』（日本文教出版）15：8-9。

2017 「障害者の心」（みんなくワールドシネマ「幸せのありか」映画解説資料）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2016年11月30日 「ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界」カレッジシアター「地球探究紀

行」あべのハルカス近鉄本店

2017年2月11日 「障害者の心」(映画解説) みんなくワールドシネマ『幸せのありか』国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年9月5日～9月16日—タイ、マレーシア(タイにおける金沢大学との共同調査への参加、及びマレーシアにおける「ネットワーク型博物館学の創成」に関わる調査と資料収集)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員(1人)、副指導教員(1人)

特別共同利用研究員(1人)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業(基盤研究(A))「ネットワーク型博物館学の創成」(研究代表:須藤健一)連携研究者

吉田憲司 [よしだ けんじ]————— 副館長(企画調整担当)、文化資源研究センター教授

伊藤敦規 [いとう あつり]————— 准教授

1976年生。【学歴】東京都立大学人文学部卒(社会学学士)(2000)、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了(社会人類学修士)(2003)、国立民族学博物館平成19年度特別共同利用研究員修了(2008)、国立民族学博物館平成20年度特別共同利用研究員修了(2009)、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得満期退学(2009)【職歴】三重大学人文学部非常勤講師(2008)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員(2008)、A:shiwi A:wan Museum and Heritage Center Visiting Researcher(2009)、日本学術振興会特別研究員PD(2009)、立教大学兼任講師(2009)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員(2010)、国立民族学博物館平成22年度文化資源プロジェクト共同研究員(2010)、東北大学東北アジア研究センター共同研究員(2010)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教(2011)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2012)、Museum of Northern Arizona Research Associate(2015)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授(2016)【学位】博士(社会人類学)(東京都立大学 2011)、修士(社会人類学)(東京都立大学 2003)【専攻・専門】社会人類学・米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族芸術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

伊藤敦規編

2017 『国立民族学博物館収蔵「ホビ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』(国立民族学博物館調査報告140)。

[論文]

伊藤敦規

2016 「ホストとして関わる人類学——米国南西部先住民ホビと私のこれまでとこれから」(特集 人類学者の存在論)『社会人類学年報』42: 67-90。

2015 「国立民族学博物館における研究公演の再定義——『ホビの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察」『国立民族学博物館研究報告』39(3): 397-458。

2011 「博物館標本資料の情報と知識の協働管理に向けて——米国南西部先住民ズニによる国立民族学博物館所蔵標本資料へのアプローチ」『国立民族学博物館研究報告』35(3): 471-526。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ南西部先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的、内容

本研究は五年計画（2016～2020年度）で実施する。その目的は、第一に日本国内の博物館等が所蔵するアメリカ先住民資料の来歴、情報管理、保存状況を総合的に把握することである。第二の目的は日本国内での調査結果をソースコミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第三の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映されるだろう協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。

初年度となる本年度は、調査対象機関を、松永はきもの資料館（広島）、柏木博物館（長野）、豊島みみずく資料館（東京）、猪熊源一郎現代美術館（香川）、野外民族博物館リトルワールド（愛知）、天理大学附属天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）とする。また、資料調査対象とする民族集団は、ホビを中心とする。

2016年度の計画として、2014年度に採択された科研プロジェクト（若手A）および民博のフォーラム型情報ミュージアムの開発型プロジェクト、2015年度に採択された科研プロジェクト（国際共同研究強化）と連動させながら、日本国内での調査を進め、ソースコミュニティ（ホビの人びと）を招聘し、資料熟覧を継続して行う。また、米国南西部先住民の保留地に赴き、トライブ政府の文化行政担当者やコミュニティ成員などと調査成果の共有を図り、今後に向けた資料管理の要望などに関する聞き取り調査を実施する。4月と10月に予定している四度目、五度目のホビ招聘では松永はきもの資料館での熟覧と記録化を行う。

・成果

2016年度は、日本国内の博物館（松永はきもの資料館）に4月と10月にホビの人々を招聘し資料熟覧を行うとともに、資料の情報管理のあり方の傾向を把握した。研究出版物や口頭発表について数字にまとめると、招待講演や国際学会等での研究発表（一四本）、二カ国五機関での熟覧調査、三本の短文エッセイの執筆、三本の査読付き論文と編著の出版を行った。

特に二編の編著についてだが、前年度までに実施した民博所蔵ホビ製資料の熟覧コメントをモノグラフとしてまとめ、『SER』に投稿し、出版した（伊藤敦規編2017『国立民族学博物館収蔵「ホビ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』（国立民族学博物館調査報告SER140号）、国立民族学博物館）。また、2013年度に民博で開催した国際ワークショップ（『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』）の成果をまとめ、『SER』に投稿し、出版した（伊藤敦規編2016『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（国立民族学博物館調査報告137号）、国立民族学博物館）。

なお、本研究の実施にあたり、以下の四つの研究助成の一部を使用させて頂いた。①国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト、開発型プロジェクト（「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、研究代表者：伊藤敦規）。②科学研究費助成事業（若手研究（A）「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（JSPS KAKENHI Grant Number-JP26704012）」、研究代表者：伊藤敦規）。③科学研究費助成事業（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（国際共同研究強化）（JSPS KAKENHI Grant Number JP15KK0069）」、研究代表者：伊藤敦規）。④国立民族学博物館共同研究（「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」、研究代表者：伊藤敦規）

◎出版物による業績

〔編著〕

伊藤敦規編

2016 『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（国立民族学博物館調査報告137）。〔査読有〕

伊藤敦規編

2017 『国立民族学博物館収蔵「ホビ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』（国立民族学博物館調査報告140）。〔査読有〕

〔論文〕

伊藤敦規

2016 「はじめに」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協

働カATALOG制作の課題と展望』(国立民族学博物館調査報告137) pp.1-4, 大阪:国立民族学博物館。
[査読有]

2016 「おわりに」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カATALOG制作の課題と展望』(国立民族学博物館調査報告137) pp.131-132, 大阪:国立民族学博物館。[査読有]

2016 「ホストとして関わる人類学——米国南西部先住民ホピと私のこれまでとこれから」(特集 人類学者の存在論)『社会人類学年報』42:67-90。[査読有]

2017 「序」伊藤敦規編『国立民族学博物館収蔵「ホビ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』(国立民族学博物館調査報告140) pp.1-3, 大阪:国立民族学博物館。[査読有]

2017 “Preface” 伊藤敦規編『国立民族学博物館収蔵「ホビ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』(国立民族学博物館調査報告140) pp.4-7, 大阪:国立民族学博物館。[査読有]

[その他]

伊藤敦規

2016 「スネークダンス」阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』pp.231-235, 東京:明石書店。

2016 「カチーナとカチーナ人形」阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』pp.261-265, 東京:明石書店。

2016 「伝統工芸」阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』pp.266-271, 東京:明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月22日 「博物館資料を文化的に蘇生させる——ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査」『リトルワールドカレッジマスターコース 2016、第二回講義』野外民族博物館リトルワールド

2016年7月2日 Robert Breunig, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema, Kelley Hays-Gilpin “History of Hopi Overlay Jewelry: Origins and Continuity”, Museum of Northern Arizona 83rd Hopi Festival, Flagstaff, AZ, USA

2016年7月3日 Robert Breunig, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema, Kelley Hays-Gilpin “History of Hopi Overlay Jewelry: Origins and Continuity”, Museum of Northern Arizona 83rd Hopi Festival, Flagstaff, AZ, USA

2016年8月6日 Gerald Lomaventema and Atsunori Ito “History of Traditional Overlay Jewelry”, Arizona State Parks Homolovi State Park Event “Suvoyuki Day”, Homolovi State Park, Winslow, AZ, USA

2016年8月29日 Kelley Hays-Gilpin and Atsunori Ito “Decolonizing museum catalogs? Collaborative catalogs and archaeological practice”, WAC8 (8th World Archaeology Congress, Kyoto, Japan: 世界考古学会議京都大会), Doshisha University, Kyoto [査読有]

2016年9月12日 “Hopi Collections Review in the US and Japan: Introduction of a Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, History Colorado Center, Denver, CO, USA

2016年9月15日 “Hopi Collections Review in the US and Japan: Introduction of a Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, Denver Museum of Nature & Science, Denver, CO, USA

2016年11月22日 「米国先住民墓地保護・返還法」『資料返還をめぐる先住民と博物館との新たな関係性の構築に関する文化人類学的研究(科学研究費補助金基盤B、出利葉浩司代表)』北海学園大学

2017年1月10日 “Reconnecting Source Community with Museum Collections: Hopi Collections Review in the US and Japan”, Hibben Center for Archaeology Research (HIBB) at University of New Mexico, Albuquerque, NM, USA

2017年1月11日 “Hopi Collections Review in the US and Japan: Introduction of a Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, New Mexico State University Museum, Las Cruces, NM, USA

2017年1月16日 “Hopi Jewelry Collections Review: Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, Lomaventema’s Workshop, Second Mesa, AZ, USA

・ 広報・社会連携活動

2016年5月13日 「アメリカ先住民ホピの文化」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

2016年5月20日 「記憶や思い出を後世に伝える方法を考える——ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

・ みんなくウィークエンド・サロン

2017年2月12日 「博物館資料をソースコミュニティと再会させる」第454回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・ 海外調査

2016年6月26日～8月12日—アメリカ（北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有に関する研究）

2016年9月10日～9月21日—アメリカ（デンバー自然科学博物館所蔵資料にかかる調査研究）

2017年1月6日～2月10日—アメリカ（ソースコミュニティとの協働資料熟覧の成果物に関する公開適正化調査等）

2017年3月10日～3月21日—アメリカ（ワシントン大学附属パーク博物館でのソースコミュニティとの協働資料熟覧）

◎上記以外の研究活動

・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究会「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト『北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有』研究代表者、科学研究費助成事業（若手研究（A））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：26704012）研究代表者、科学研究費助成事業（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：15KK0069）研究代表者、北海道大学アイヌ・先住民研究センター共同研究「先住民民族アートプロジェクト」研究代表者：山崎幸治 共同研究者

上羽陽子 [うえば ようこ] ————— 准教授

1974年生。【学歴】大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程前期修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程後期修了（2002）【職歴】大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）、総合研究大学院大学准教授併任（2014）【学位】博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）【専攻・専門】民族芸術学、染織研究、手工芸研究【所属学会】民族芸術学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

上羽陽子

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

2015 『インド染織の現場——つくり手たちに学ぶ』（フィールドワーク選書12）京都：臨川書店。

[論文]

上羽陽子

2012 「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37(1)：1-51。

【受賞歴】

- 2010 意匠学会作品賞
2007 第4回木村重信民族藝術学会賞

【2016年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的、内容

急激に進む経済成長やグローバル化をうけ、現代インドの手仕事は急速に姿を変えている。本研究の目的は、現代インドにおける手工芸品のつくり手たちが、急速に変化する自然環境や社会環境にどのように対応しながら、伝統的な手工芸技術の生産形態を保持あるいは変容させつつ、現代的な要素をいかに選択しているかを明らかにすることである。

同時に、文化資源である現地の人びとのものづくりに関する知識を、どのように活用することができるか、さらに共同利用や社会還元への可能性を展示やワークショップを通じて実践的研究を行なう。

なお、本研究は、科学研究費（基盤（C）「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」、2014～2017年度）および（基盤（A）「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究（代表：中谷文美）」、2014～2017年度）の課題として実施する。また、現在代表を務めている共同研究「現代「手芸」文化に関する研究」とも連動し、世界の手工芸文化における現代インドの特性についても考察を行う。

・成果

本年度は、2014～2017年度に研究代表として実施する科学研究費（基盤（C））「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」の研究活動の一部として、インド、アフマダバードの女神儀礼用染色布の生産現場の調査を実施した。現地では、コミュニティ内の製作に係る役割分担を明らかにするとともに、道具のイノベーションや新しい染料の導入など、生産から販売までの製作者のローカルとグローバルの市場に対する製作・販売戦略を明らかにすることができた。また、同科研にかかる調査として、大英図書館所蔵の文献渉猟を実施し、19世紀後半の女神儀礼に関する染織布の使用状況や制作状況など詳細な民族誌の情報を得ることができた。さらに、2014～2017年度に研究分担者として実施する基盤（A）「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」の研究活動の一部として、西チモール布生産現場にて調査を実施した。綴織やタテ紺、紋織など染織布の生産現場にて、木綿の手紡糸による制作工程と藍染や多色性染料について聞き取り調査をおこない、さまざまな観光客向け商品を生産するなかで、観光客の嗜好によって生産者が巧みに生産物を変え、価格設定していることが明らかとなった。

そして、本研究の成果の一部として『第58回意匠学会大会』にて研究発表をおこなった。さらに、文化資源である現地の人びとのものづくりに関する知識や文化背景を学校教育においてどのように活用することが可能であるかについて香川県立ミュージアム等でもものづくりワークショップを実施し、手法開発を実践した。

◎出版物による業績

〔編著〕

上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編

2016 『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138）大阪：国立民族学博物館。

〔論文〕

上羽陽子

2016 「はじめに」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138号），pp.1-2，大阪：国立民族学博物館。

2016 「ガイダンス——第1部」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138），p.9，大阪：国立民族学博物館。

2016 「ガイダンス——第2部」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138），pp.57-58，大阪：国立民族学博物館。

- 2016 「『見方』を開発——インドの染織資料が見えてくる」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138），pp.69-76，大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「身体的に自覚すること——自己と他者の理解に向けて」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138），pp.112-113，大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「ガイダンス——第3部」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138号），p.161，大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「おわりに」上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告138），pp.279-280，大阪：国立民族学博物館。

[その他]

上羽陽子

- 2016 「旅・いろいろ地球人 手仕事の今① インドの放牧用袋づくり」『毎日新聞』7月7日。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 手仕事の今② ネパールの敷物づくり」『毎日新聞』7月14日。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 手仕事の今③ 機械か、人か」『毎日新聞』7月21日。
- 2016 「旅・いろいろ地球人 手仕事の今④ つくる行為に意味がある」『毎日新聞』7月28日。
- 2016 「みんなく世界の旅 インドのラクダ1」『毎日小学生新聞』11月19日。
- 2016 「みんなく世界の旅 インドのラクダ2」『毎日小学生新聞』11月26日。
- 2016 「みんなく世界の旅 インドのラクダ3」『毎日小学生新聞』12月3日。
- 2016 「みんなく世界の旅 インドのラクダ4」『毎日小学生新聞』12月10日。
- 2017 「幼児を守るラバーリー社会のビーズワーク」池谷和信編『ビーズ つなぐ かざる みせる』pp.74-75，大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2016年4月9日 「手仕事の省力化と余暇的・趣味的仕事——インド西部カシ・ラバーリーの衣装を事例に」科学研究費補助金基盤研究（A）『アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究』（代表：中谷文美）2016年度第1回研究会、岡山大学津島キャンパス
- 2016年10月31日 「南アジアにおける糸素材および織機の技術民族誌的研究」（金谷美和、中谷文美との共同発表）科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）『人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』（代表：野林厚志）パレオアジア文化史学 B01-B02班合同会議、国立民族学博物館
- 2016年11月5日～11月6日 （パネル発表）「南アジアにおける糸素材および織機の技術民族誌的研究」（金谷美和、中谷文美との共同発表）科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）『人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』（代表：野林厚志）パレオアジア文化史学第1回研究大会、東京大学本郷キャンパス小柴ホール
- 2017年2月4日 「ラバーリーの刺繍と衣装——意匠からみる他者利用」『MINDAS 第4回合同研究会』国立民族学博物館
- 2017年2月12日 「紐と糸をめぐる技術民族誌的研究」（金谷美和、中谷文美との共同発表）科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）『人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』（代表：野林厚志）パレオアジア文化史学第2回研究大会、名古屋大学野依記念学術交流館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年5月14日 「アッサム州とグジャラート州カッチのラバーリーのラック染め」ラック研究会主催『第一回ラック勉強会「2016年1-2月のインドのラック生産と利用」』京都府立大学
- 2016年7月31日 （パネル発表）「物質文化展示の新たな可能性について——国立民族学博物館南アジア展示場を事例に」『第58回意匠学会大会』京都精華大学

・広報・社会連携活動

- 2016年4月27日 「インド染織の現場 つくり手たちに学ぶ」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカ

ス近鉄本店

2017年1月27日、2月3日 「インドの染織文化を考える」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

・ワークショップ

2016年5月31日、6月14日、6月28日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる」(主催：川島テキスタイルスクール) 川島テキスタイルスクール [依頼有]

2016年6月22日 「手織り絨毯の織技術について」(主催：株式会社絨毯ギャラリー) クロス・ウェーブ梅田 [依頼有]

2016年10月23日 「キラキラ☆光の力 インド伝統のミラー刺繍にチャレンジ！」(アシスタント：安達昌代) 特別展『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』関連ワークショップ(主催：香川県立ミュージアム、共催：国立民族学博物館友の会) 香川県立ミュージアム [依頼有]

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

2016 「沖 守弘・インド民族文化資料アーカイブ(制作：三尾 稔)」制作協力

◎調査活動

・海外調査

2016年8月17日～9月2日—インドネシア(科研費(基盤(A))「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」にかかる調査研究)

2016年11月9日～12月2日—インド(科研費(基盤(C))「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」にかかる調査研究)

2017年1月10日～1月20日—イギリス(科研費(基盤(C))「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」にかかる調査研究)

2017年3月3日～2017年3月18日—インド(科研費(新学術領域)「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」にかかる調査研究)

◎社会活動・館外活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金(基盤研究(C))「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」研究代表者、科学研究費補助金(基盤研究(A))「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」(研究代表者：中谷文美)研究分担者、科学研究費補助金(新学術領域研究(研究領域提案型))「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」(代表：野林厚志)研究分担者

・他の機関から委嘱された委員など

民族芸術学会理事(研究例会担当)、意匠学会国際交流委員

・非常勤講師

京都精華大学「文様史1」、「クラフト1」

林 勲男 [はやし いさお]———准教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒(1980)、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了(1983)、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学(1992)【職歴】シドニー大学人類学科客員研究員(1992)、国立民族学博物館第4研究部助手(1994)、国立民族学博物館民族社会研究部助手(1998)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授(1999)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2001)【学位】文学修士(立教大学大学院文学研究科1983)【専攻・専門】社会人類学 1) パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究、2) オセアニア近代史の人類学的研究、3) 自然災害への対応に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会、The International Union of Anthropology and Ethnological Sciences (IUAES)、Japan Anthropology Workshop (JAWS)

【主要業績】

〔編著〕

林 勲男編

2015 『アジア太平洋諸国の災害復興——人道支援／集落移転・防災と文化』東京：明石書店。

2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

〔共編著〕

林 勲男・橋本裕之編

2016 『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害と記憶

・研究の目的、内容

人文社会科学の分野において、「記憶」を取り上げた論考が多くなっている。日本では、とりわけ東日本大震災とそれに続く福島第1原発事故によって、それまでの生活が一変した被災者・被害者の言説を扱う際に、当事者の主観性にアプローチする研究者のスタンスを同時に開示するものとして、「記憶」をキーワードとして前面に押し出した議論が少なからず見受けられる。しかしそれは、この概念の拡大の有効性への疑問も投げかけている。

災害遺構の保存か解体かをめぐっていくつかの行政判断がなされたことを踏まえて、発災以降の記憶だけでなく、ライフヒストリーの中の災害経験と、災害遺構にかかわる災害以前の記憶・思い出等についてのデータの収集と分析をおこなう。情報は公開可能な範囲で災害遺構データベースにアップする。

・成果

東日本大震災被災地における災害遺構の保存をめぐる諸問題に関して、被災地住民の記憶と当該の遺構との関係について考察した論考を、『民博研究報告』41巻4号にMaterializing Memories of Disasters: Individual Experiences in Conflict Concerning Disaster Remains in the Affected Regions of the Great East Japan Earthquake and Tsunamiのタイトルで掲載した。なおこの成果は、科研基盤S「減災の決め手となる行動防災学の構築」の分担者として実施した調査研究の一端を示すものである。

◎出版物による業績

〔論文〕

林 勲男・木村周平・鈴木佑記・高倉浩樹

2016 「課題研究懇談会活動報告『災害の人類学』」『文化人類学』81(2)：338-343。

Hayashi, I.

2017 Materializing Memories of Disasters : Individual Experiences in Conflict Concerning Disaster Remains in the Affected Regions of the Great East Japan Earthquake and Tsunami. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 42(1)：337-391. [査読有]

〔その他〕

林 勲男

2016 「知識はデータを情報化し、適切な判断に導く？」『月刊みんぱく』40(6)：10-11。

2016 「出版物 アジア太平洋諸国の災害復興——人道支援・集落移転・防災と文化」『民博通信』154：22。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2016年11月11日 「災害文化と無形文化遺産の継承」『アジア太平洋地域における無形文化遺産と災害リスクマネジメント』セミナー、東京文化財研究所

・研究公演

2016年5月29日 「黒森神楽×雄勝法印神楽 in みんぱく公演」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年9月4日 「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の来歴をたどる」第437回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

- 2016年5月15日～5月16日—宮城県（震災復興にかかわる市民活動についての調査）
2016年6月18日～6月20日—岩手県大船渡市・釜石市（復興支援現地公開フォーラム準備委員会出席）
2016年7月23日～7月25日—福井県（原子力発電所PR施設の視察調査）
2016年8月8日～8月9日—岩手県大船渡市（郷土芸能復興支援メッセ打ち合わせ）
2016年8月23日～8月25日—福島県双葉郡川内村・田村郡三春町・白河市（福島原発事故に関する展示の視察）
2016年12月4日～12月5日—岩手県立図書館（岩手県沿岸部を襲った過去の津波災害に関する歴史資料調査）
2016年12月24日～12月25日—宮城県仙台市（「震災と暮らし——震災遺産と人びとの記録からふりかえる」の見学とトークプログラムへの参加）
2017年1月20日～1月21日—東北大学災害科学国際研究所（東日本大震災アーカイブ国際シンポジウムへの参加）
2017年1月26日—千葉（国立歴史民俗博物館、国際展示「台湾と日本——震災史とともにたどる近現代」の視察）
2017年3月11日～3月14日—宮城県石巻市・南三陸町・仙台市（高台移転と津波避難サイン計画に関する調査）

◎大学院教育

・論文審査

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
科学研究費補助金（基盤研究（S））「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表：京都大学・林春男）
研究分担者、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業「効果的・持続的な災害伝承を目的にした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」（研究代表者：東北大学・佐藤翔輔）研究分担者

日高真吾 [ひだか しんご] ————— 准教授

1971年生。【学歴】東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1994）【職歴】財団法人元興寺文化財研究所研究員（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】文学博士（東海大学 2005）【専攻・専門】保存科学、保存修復【所属学会】文化財保存修復学会、文化財科学会、日本民具学会、近畿民具学会

【主要業績】

[単著]

日高真吾

- 2015 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』大阪：千里文化財団。
2008 『女乗物——その発生経緯と装飾性』神奈川：東海大学出版会。

[編著]

日高真吾編

- 2012 『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

園田直子・日高真吾共編

- 2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』東京：三好企画。

【受賞歴】

- 2016 文化財保存修復学会 業績賞
2009 日本文化財科学会第4回ポスター賞
2008 文化財保存修復学会第2回奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築

・研究の目的、内容

本研究では、グローバル化や災害を原因として大きな変貌を遂げている地域社会において、どのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかについて調査・研究をおこなう。さらに、地域社会の動向に対して人間文化研究がいかに貢献しうるかを考察することを研究の主眼とする。

この研究からは、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示、②博物館を積極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを節目で感じることができるプログラムの策定、③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築、④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す。

なお、本研究を進めるにあたっては、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表 日高真吾）および、科学研究費補助金基盤B「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（代表 日高真吾 15H02954）の研究プロジェクトと関連付けながら実施する。

・成果

本研究では、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表 日高真吾）および、科学研究費補助金基盤B「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（代表 日高真吾 15H02954）の研究プロジェクトと連携し、平成28年度は、大学教育と地域文化の再発見を連結させる活動として、京都造形芸術大学、別府大学の活動の調査をおこなった。また、地域主体の地域文化の活用について台湾、石川県穴水町、宮城県石巻市の活動、宮城資料ネットワークによる古文書調査の活動のフィールド調査をおこなった。また、枚方市旧田中家鋳物資料館および気仙沼市教育委員会、村上市教育委員会、京都市教育委員会所蔵の民俗資料を対象として、小学校の授業で使用可能な展示パックの制作に向けた調査、準備をおこなった。次に、大学間連携体制を整えるため、神戸大学との協定を結ぶとともに、次年度に京都造形芸術大学、東北大学、大妻女子大学との協定締結に向けた話し合いを進めた。社会への研究成果の公開としては、台北芸術大学と共催した国際研究フォーラム「地域文化の発見、保存、活用」を台湾桃園市で開催した。また、竹沢尚一郎教授とともに企画展「津波を越えて生きる：大槌町奮闘の記録」を実現させた。

◎出版物による業績

〔編著書〕

日高真吾監修

2017 『日本と世界の暮らし——どこが同じ？どこが違う？ 住』東京：汐文社。

〔論文〕

日高真吾

2016 「日本の文化展示場における資料情報の活用に向けて」『民博通信』15：12-13。

2017 「三陸は芸能の宝庫」『月刊みんぱく』41(2)：5-6。

2017 「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」小池淳一・木部陽子・日高真吾・渡辺浩一・窪田順平編『新しい地域文化の可能性を求めて』pp.22-31, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」。

2017 「釧路市立博物館所蔵アイヌ木綿衣について」佐々木史郎・吉本忍・齋藤玲子・津田命子・日高真吾・和高智美・右代啓視・戸田恭司『釧路市立博物館紀要』37：17-18。

2017 「衣服の収納——和箆笥と洋箆笥」上羽陽子監修『日本と世界の暮らし——どこが同じ？どこが違う？ 衣』pp.18-21, 東京：汐文社。

2017 「床材——畳とカーペット」日高真吾監修『日本と世界の暮らし——どこが同じ？どこが違う？ 住』pp.10-13, 東京：汐文社。

2017 「木造の家と石造りの家」日高真吾監修『日本と世界の暮らし——どこが同じ？どこが違う？ 住』pp.6-9, 東京：汐文社。

日高真吾、橋本沙知

2017 「金属製作と権力」關 雄二編『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』pp.191-221, 京

都：臨川書店。

Hidaka, S.

2016 Conservation Science Research at the Museum: Development of Carbon Dioxide Treatment for Museum Collection. In N. Sonoda(ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology*, pp.131-141. Singapore: Springer.

Sonoda, N. and S. Hidaka and K. Suemori

2016 Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control for large and complex objects containing new materials. Saving the Now: Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works, The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC) 2016 Los Angeles Congress Preprints. *Studies in Conservation* 61(2): 329-331.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月25日 「石川県水町の文化遺産を保存する——保存修復の観点から」国際フォーラム『地域文化の発見、保存、活用』台湾大溪多目的文化体育館

・機構の連携研究会での報告

2017年1月31日 「国立民族学博物館におけるアイヌの文化展示場の失火対応について」国立歴史民俗博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月1日～6月2日 (ポスター発表)「狭帯域LED光源を用いた偏光撮影による彩色材料光学情報の可視化」(末森薫・園田直子・日高真吾・和高智美・河村友佳子・橋本沙知)『日本文化財科学会第33回大会』奈良大学

2016年6月25日 「二酸化炭素処理による発泡体の形状変化について」二俣賢(日本液炭)・日高真吾・末森 薫(国立民族学博物館)・和高智美(文化創造工芸)・河村友佳子・橋本沙知(元興寺文化財研究所)・吉村健治(日本液炭)『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』東海大学、神奈川県

2016年6月25日 「国立民族学博物館における展示証明のLED化——民俗資料の展示を想定した照明実験」園田直子・日高真吾・末森薫・村田忠繁・奥村泰之(国立民族学博物館)・河村友佳子・橋本沙知(元興寺文化財研究所)・和高智美(文化創造工芸)『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』東海大学、神奈川県

2016年6月25日 「太陽光を利用した高温殺虫処理システム開発——殺虫処理条件を満たすための処理空間の創出を目指した試験について」日高真吾・園田直子・末森薫・西澤昌樹・松田万緒(国立民族学博物館)・河村友佳子・橋本沙知(元興寺文化財研究所)・和高智美(文化創造工芸)・木川りか(九州国立博物館)・川越和四(環境文化創造研究所)『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』東海大学、神奈川県

2016年6月25日～6月26日 「災害対策調査部会日活動について——2015年度報告」日高真吾・中村晋也・米村祥央・和田浩・加藤和歳・田井東浩平・間渕創・内田俊秀『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』東海大学、神奈川県

2016年9月13日～9月15日 “25 years of implementation and development of IPM at the National Museum of Ethnology, Japan”(Sonoda, K., S. HIDAKA and K. SUEMORI)IPM 2016, 3rd international IPM Conference in Museums, Archives, Libraries and Historic Buildings, Auditorium du Louvre, France

2016年9月12日～9月16日 “Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control for large and complex objects containing new materials”(Sonoda, N., S. Hidaka and K. Suemori) International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC), 2016 Los Angeles Congress(Saving the Now: Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works)Millennium Biltmore Hotel Los Angeles, USA

・みんなくゼミナール

2016年4月16日 「夷酋列像を考える」(右代啓視、内田順子と共同発表)第455回みんなくゼミナール

・研究講演

2016年5月21日 「東日本大震災と文化財レスキュー」北方民族博物館

- 2016年7月11日 「地域文化の見せ方、捉え方」 追手門学院大学・国立民族学博物館共同研究『地域文化の継承と創造』 追手門学院大学
- 2016年12月16日 「日本における文化財レスキューについて」 国際コンソーシアムシンポジウム『エクアドル地震による文化財被害状況報告』 東京国立博物館
- 2016年8月6日 「被災文化財の支援から考える 地域文化の保存と活用」『「記憶の劇場」 大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座』 国立民族学博物館
- 2017年2月1日 「国立民族学博物館の露出展示を支える展示手法の現状と課題」『みんなでまもる文化財みんなをまもるミュージアム』 事業第2回研修会、熊本市現代美術館

・研究公演

- 2017年3月19日 研究公演「城山虎舞 in みんぱく」 国立民族学博物館

・展示

- 特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」 実行委員長
- 企画展「津波を越えて生きる——大槌町奮闘の記録」 プロジェクトメンバー

・広報・社会連携活動

- 2016年12月21日 「展示キュレーションの誘惑——新しい日本の文化展示ができるまで」 連続講座『みんぱく×ナレッジキャピタル 展示キュレーションの誘惑——新しいみんぱくの展示ができるまで』 グランフロント大阪ナレッジキャピタル1階

◎調査活動

・国内調査

- 2016年5月26日～5月28日 一大分県（地域文化を対象とした別府大学の教育プログラムに関する調査）
- 2016年6月3日 一新潟県村上市（旧荃太小学校収蔵庫にて資料保管状況の調査および所蔵資料を活用した教育キットを用いた資料活用に関する資料調査）
- 2016年6月4日 一新潟県（十日町市立博物館にて、藕糸織りの保存状態の観察と活用に関する打ち合わせおよび中越地震で被災した蕪木家文書の赤外線撮影を中心とした詳細調査）
- 2016年6月6日 一北海道平取（萱野茂二風谷アイヌ資料館にてチセの建築技術を活用した民博所蔵のチセの葺き替えに関する調査）
- 2016年7月9日 一徳島県徳島市（津波碑の所在調査）
- 2016年7月13日 一宮城県気仙沼市（所蔵資料を活用した教育パックに関する打ち合わせ）
- 2016年7月22日 一京都市左京区（所蔵資料を活用した教育パックに関する調査）
- 2016年7月26日 一石川県（金沢美術工芸大学所蔵の百工比照の調査）
- 2016年7月27日 一石川県（穴水町教育委員会による地域文化を活用したワークショップの調査）
- 2016年7月29日 一新潟県村上市（村上市関連民俗資料を活用した教育キット「地域文化宝箱パック——村上」に関する研究会）および旧荃太小学校収蔵庫の環境調査）
- 2016年7月30日～7月31日 一新潟県十日町市十日町情報館（中越地震で被災した蕪木家文書の赤外線撮影を中心とした詳細調査）
- 2016年8月16日 一広島大学総合博物館・広島県広島市安佐北区（広島大学総合博物館の展示に関する調査及び2014年豪雨で被災した安佐地区の現状調査）
- 2016年9月23日 一新潟県村上市（旧荃太小学校収蔵庫にて資料の虫害状況の調査）
- 2016年9月27日 一大阪府枚方市（枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館にて、枚方資料を活用した教育キット「地域文化宝箱パック——枚方」に関する調査）
- 2016年9月28日 一岩手県大槌町（大槌町教育委員会にて、企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」に関する調査）
- 2016年10月16日 一宮城県（宮城県せんだい3.11メモリアル交流館にて展示内容の調査）
- 2016年12月16日 一宮城県東北歴史博物館（特別展「工芸継承」のキュレーションの状況の調査）
- 2017年3月4日～3月5日 一大分県別府大学（別府大学における世界農業遺産支援の取り組みについての調査）
- ・海外調査
- 2016年6月9日～6月12日 一台湾（基幹研究主催の国際シンポジウム及び周辺博物館の調査研究）
- 2016年9月10日～9月17日 一アメリカ（国際文化財保存学会ロサンゼルス大会に参加及び保存科学の動向についての情報収集）
- 2016年11月23日～11月28日 一台湾（国際フォーラム「地域文化の発見、保存と活用」の参加と発表）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

人間文化研究機構災害時歴史文化資料保全システム検討チーム委員、文化財保存修復学会理事、文化遺産防災ネットワーク推進事業有識者会議委員、米原市曳山修理委員会委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西学院大学「博物館資料保存論」非常勤講師（集中講義）

福岡正太 [ふくおか しょうた] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京藝術大学音楽学部楽理科卒（1986）、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了（1991）、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）【学位】芸術学修士（東京藝術大学大学院 1991）【専攻・専門】民族音楽学、東南アジアとくにインドネシア西ジャワのスダ伝統音楽についての研究【所属学会】東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

[論文]

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」端 信行編『民族の二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9）pp.144-160, 東京：ドメス出版。

2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究——民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28(2)：257-295。

Fukuoka, S.

2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J. S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp.95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究

・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、学術的な記録および分析の手段として、音楽芸能研究において一定の役割を果たしてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの影響を抜きにして論じることはいかならない。一方、20世紀を通じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、手軽なビデオ撮影機器の普及により、音楽芸能の伝承や創造、研究の過程において、関係者が自ら映像を作成して発表するようになり、映像は音楽芸能にかかわる活動に不可欠なものとして組み込まれつつある。こうした状況の中、研究機関等にとって、映像音響資料をいかに活用可能な形でアーカイブ化するのが大きな課題となってきた。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、①20世紀前半から半ばの日本とインドネシアにおいて、レコードやラジオなどのメディアの登場が音楽にもたらした変化を明らかにする研究に取り組む。②鹿児島県徳之島の芸能を例として、芸能の映像記録を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像記録が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。③楽器資料に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築を通じて、標本資料と映像音響資料のデータを効果的に結びつけ、資料に関わる多様な知識を交換し共有することを目指す。

・成果

①について、共同研究「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」（代表者：福岡まどか）の成果として刊行予定の論文集のための論文執筆を進めた。1930年代から40年代初頭のオランダ領東インドにおけるラジオ放送について、近年、研究が進みつつある。それらを参考としつつ、ラジオ

で放送された西ジャワの伝統音楽について検討した。現在「伝統音楽」とされる音楽も、西洋芸術音楽や流行音楽の影響を積極的に受け入れ「モダンな」レパートリーを生み出していたことが明らかになった。②について、フォーラム型情報ミュージアムの成果として、「徳之島の唄と踊り」を構築し、登録ユーザーへの公開をおこなった。今後、徳之島において公開をおこない、民俗芸能の伝承における映像資料の活用の可能性を実践的に明らかにすることが課題である。③について、ホルンボステル＝ザックスによる楽器分類コードを付与した楽器資料のデータベースの構築を進めた。このシステムは、多くの研究者と楽器資料の情報を共有し、情報の充実をはかることを目的としている。このシステムを使用して楽器資料に情報を付与する実験として、2つの個人蔵楽器コレクションを取り上げてデータを作成していくこととし、その準備を進めた。これらの資料については、データ作成後、民博で寄贈受入をおこなう予定である。

◎出版物による業績

〔論文〕

福岡正太

- 2016 「書評：トマス・トゥリノ著、野澤豊一・西島千尋訳『ミュージック・アズ・ソーシャル・ライフ——歌い踊ることをめぐる政治』」『ポピュラー音楽研究』20：74-79。
- 2016 「民族誌的知見の形成と共有の場としてのフォーラム型情報ミュージアム（コメント）」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』（国立民族学博物館調査報告137）pp.101-104、大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「無形文化遺産としての音楽」徳丸吉彦監修・増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.74-84、東京：音楽之友社。
- 2016 「資料としての楽器」徳丸吉彦監修・増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.85-87、東京：音楽之友社。

〔その他〕

福岡正太

- 2017 「国立民族学博物館の収蔵品10 東南アジアにおけるゴング」『文部科学教育通信』404：2。

◎映像音響メディアによる業績

・マルチメディア番組

吉田ゆか子構成・制作監修、福岡正太制作監修

- 2017 『息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽』大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年11月19日 「コミュニティを支える芸能」無形文化遺産国際シンポジウム『技と心を受け継ぐ』アジア太平洋無形文化遺産研究センター・堺市・文化庁主催、サンスクエア堺

・研究講演

- 2016年10月22日 「バンドゥンからの音便り」インドネシア・スンダ地方の伝統音楽レクチャー&コンサート『楽園から届いた音・懐かしさと癒しの時間——バンドゥンからの音便り』静岡文化芸術大学

・広報・社会連携活動

- 2016年9月1日 講義「フォーラム型情報ミュージアムによる映像記録の公開——徳之島の芸能を例に」東京藝術大学音楽学部楽理科研究旅行、国立民族学博物館
- 2016年9月2日 「世界のリズムの多様性（1）ジャワ島のガムラン——おしりで合わせるリズム」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館
- 2016年9月9日 「世界のリズムの多様性（2）足し算のリズム」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」大阪府社会福祉会館

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1名）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」代表者

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

大谷大学「民族誌講義」「社会学研究」、広島市立大学「音楽人類学Ⅰ」「音楽人類学Ⅱ」（集中講義）

山本泰則 [やまもと やすのり] ————— 准教授

【学歴】大阪大学基礎工学部生物工学科卒（1978）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了（1980）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程退学（1983）【職歴】国立民族学博物館第5研究部助手（1983）、国立民族学博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）【学位】工学修士（大阪大学大学院基礎工学研究科 1980）【専攻・専門】博物館情報学【所属学会】情報処理学会、電子情報通信学会、情報知識学会

【主要業績】

[論文]

山本泰則

2011 「国立国会図書館PORTAと人間文化研究機構 統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』2：53-68。

Yamamoto, Y., F. Adachi and K. Hachimura

2013 Common Metadata to Search for Non-digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases. *Proceedings of the International Conference on Culture and Computing 2013*, pp.225-224. IEEE Computer Society (CD-ROM) [査読有].

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-266。[査読有]

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

標本資料名と資料情報に関する研究

・研究の目的、内容

民博が所蔵する標本資料には、受入時になんらかの名称が付与される。しかし、民族誌資料には自然史標本の学名のような世界共通の命名ルールがあるわけではなく、また館内で用語を統制していないため命名は収集者や資料管理者に任されている。そのため資料名には、資料のもつ属性はもちろん、収集者の視点が色濃く反映されているはずである。本研究では、標本資料名を分析し、名称と標本資料の属性情報の関連性について研究を行う。

今年度は、民博が所蔵する台湾関連資料（旧文部省資料館資料、旧東大人類学教室資料、瀬川コレクション）を対象にし、資料名から見た各コレクションの構成、コレクション間の命名法の特徴、コレクションを越えた共通性などについて分析を行う。

・成果

上記の目的で用いられる統計処理手法をはじめとする各種分析手法について文献調査をおこなうとともに、データ処理環境をPC上に整備した。また、比較対照とするため、民博の所蔵標本資料全体について、基本的な分析をおこなった。標本資料目録データベースおよび標本資料詳細情報データベースに収録されている情報をコアメタデータに変換することにより構造を共通化かつ単純化し、エレメントごとの値の分布、レコードごとのとりうる値の組合せを分析することにより、情報の特性に関する基本データを得た。

◎出版物による業績

[その他]

山本泰則

2016 「『ラフラン諸島』ってどこ？」『月刊みんぱく』40(12)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんなくウィークエンド・サロン

2016年11月6日 「アンケートが語るビデオトークとみんなく電子ガイド」第444回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

川瀬 慈 [かわせ いつし] ————— 助教

1977年生。【学歴】立命館大学文学部卒（2001）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）【職歴】日本学術振興会PD（2007）、マンチェスター大学グラナダ映像人類学センター研究員（2010）、ベルギー SoundImageCulture 客員講師（2011）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2012）、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所 Hiob Ludolf 客員教授（2013）、ブレーメン大学人類学・文化調査学部客員教授（2014）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 2007）【専攻・専門】アフリカ研究、映像人類学、民族誌映画制作【所属学会】英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[共編]

鈴木裕之・川瀬 慈編

2015 『アフリカン・ポップス！——文化人類学からみる魅惑の音楽世界』東京：明石書店。

[論文]

川瀬 慈

2016 「エチオピアの音楽職能集団アズマリの職能機能についての考察」『国立民族学博物館研究報告』41(1)：37-78。

2015 「コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画——エチオピアの音楽職能集団と子供たちを対象とした映画制作と公開の事例より」『文化人類学』80(1)：6-19。

【受賞歴】

2013 第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞

2008 最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovativo イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、自身の映画制作や上映活動を事例に、コミュニケーションによって生成する人類学的な映像実践を示すことにある。報告者は、撮影者の存在や行動を前量化し、撮影の過程でかわされる撮影者・被写体間の議論を映像の中であえて開示し、撮影プロセスを明示する方法論を発展させてきた。民族誌映画においては、観察型、解説型の映画様式が重視され、制作中の撮影者・被写体間の相互作用や、映画を視聴する幅広いアクターの役割が軽視される傾向にあった。そのようななか本研究では、民族誌映画を固定的で完結した表象としてではなく、視聴する人々とのたえまない相互作用のなかに位置づける。さらにその相互作用が、研究の新たな展開を生成させる創発的な営みであることを自身の民族誌映画制作の実践や映画公開の活動を基軸に提示する。

・研究成果

平成28年度は、本研究課題の成果を、ブレーメン大学（6月）、ゲーテ大学フロベニウス研究所（7月）、さらに、中国、山東大学（12月）、エチオピア、メケレ大学（1月）、韓国、木浦大学（2月）、韓国外国語大学（2月）のセミナーや国際シンポジウムにおいて、報告者の研究映像の上映とともに行った。そこでは、撮影者・被写体間の相互作用を前提とする民族誌映画の制作方法論、さらに作品の公開をめぐる視聴者との議論を通して生まれる、研究者と調査対象の人々との関係性の変化についての考察を発表し各機関の研究者と議論を積み重ねた。11月には民博において開催された台湾文化光点計画上映会・シンポジウム『民族誌映画にみる文化へ

の視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より』の企画にかかわり、台湾原住民やその他の人類学者とともに、被写体の社会との協働や、映像の公開を積み重ねることによって創出される研究者の新たな社会関係をテーマに議論を行うことができた。

科研費若手B『アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用』の研究のため、1月にエチオピア連邦民主共和国において調査を行った。本調査では、エチオピア北部の地域社会において音楽を担う職能集団の活動を対象に報告者が制作した民族誌映画を被写体と視聴するなかで、インフォーマントとともに、映像を通じた自文化表象の理想について議論を交わすことができた。以上の調査で得られたデータを整理し、今後まとめ、フロベニウス研究所が発行する学術雑誌 *Studien zur Kulturkunde* や映像人類学系の雑誌に発表する。

◎出版物による業績

[論文]

川瀬 慈

2016 「エチオピアの音楽職能集団アズマリの職能機能についての考察」『国立民族学博物館研究報告』41 (1) : 37-78。

[共著]

坂本龍一・塚田健一・分藤大翼・川瀬 慈ほか

2016 『Traditiona Museic in Africa. Commons: Schola vol.11 (Kenichi Tsukada & Ryuichi Sakamoto Selections)』Commons Schola Kindle 版, 東京: エイベックス・ミュージック・クリエイティヴ。

◎映像音響メディアによる業績

・映像作品制作

川瀬 慈

2016 『僕らの時代は (エチオピアの音楽職能集団アズマリ)』(日本語)。

2017 『めばえる歌——民謡の伝承と創造』(日本語)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年7月11日 ‘Ethnographic Filmmaking in Ethiopia.’ 国際会議 “Vortrag im Rahmen des Colloquiums von Professor Kohl und der Vorlesungsreihe ‘Frankfurter Südäthiopien Forschung- Eine Retrospektive.’” Frobenius-Institut der Johann Wolfgang Goethe-Universität, ドイツ

2016年6月24日～6月27日 ‘New Horizon of Anthropological Filmmaking in Japan.’ 国際会議 “2016 AAS-in-ASIA – Association for Asian Studies.” 同志社大学

2016年7月4日 ‘Current Trends in Japanese Anthropological Filmmaking.’ 国際会議 “Current Trends in Japanese Anthropological Filmmaking.” Institut für Ethnologie und Kulturwissenschaft, Uni Bremen, ドイツ

2016年12月14日 ‘The New Horizon of Anthropological Filmmaking in the Era of Sensory Turn.’ “The Visual Anthropology Seminar.” 山東大学、中国

2017年2月8日 「日本とエチオピアの門付芸能の映像人類学視点からの比較研究」『日・韓 多島海の島の人々の生活と民俗』木浦大学 木浦 CAMPUS、韓国

2017年2月9日 「Visual Anthropological Approaches to the Study of Africa —— Cases from Recent Ethnographic Films from Japan」韓国外国語大学アフリカ研究所セミナー、“韓国外国語大学アフリカ研究所 (IAS) Global (Yongin) Campus

◎調査活動

・海外調査

2016年6月29日～7月19日—ドイツ (ドイツの映像人類学研究の動向調査)

2017年1月4日～1月18日—エチオピア (エチオピア北部における音楽職能集団を対象にした映像人類学研究)

2017年2月7日～2月11日—韓国 (「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と製作: 韓国国立民俗博物館との交流事業 (映像資料収集))

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

プレーメン大学人類学・文化調査学部客員教授 (集中講義 “Theory and Practice of Visual Anthropology” 担当)、ゲーテ大学・フロベニウス研究所客員教授、山東大学哲学と社会発展学院人類学系客員教授 (集中講義 “Theory and Practice of Visual Anthropology” 担当)、メケレ大学社会科学・言語研究科・音楽ビジュアルア

ーツ専攻修士学位論文審査（集中講義担当 “The Art of Audiovisual Storytelling” 担当）

寺村裕史 [てらむら ひろふみ] 助教

1977年生。【学歴】岡山大学文学部歴史文化学科（考古学履修コース）卒（2000）、岡山大学大学院文学研究科歴史文化学専攻修了（2002）、岡山大学大学院文化科学研究科人間社会文化学専攻修了（2005）【職歴】同志社大学文化情報学部実習助手（2005）、総合地球環境学研究所研究部プロジェクト研究員（2007）、国際日本文化研究センター研究部機関研究員（2011）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室特任准教授（2013）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2015）【学位】博士（文学）（岡山大学大学院 2005）、修士（文学）（岡山大学大学院 2002）【専攻・専門】情報考古学、文化情報学【所属学会】考古学研究会、地理情報システム学会、日本情報考古学会

【主要業績】

[単著]

寺村裕史

2014 『景観考古学の方法と実践』東京：同成社。

[論文]

寺村裕史

2009 「古墳のデジタル測量と空間データ処理——岡山市造山古墳のデジタル測量の成果から」『考古学研究』56(3)：92-101, 岡山：考古学研究会。

2006 「古墳築造場所の選択と眺望分析」宇野隆夫編著『実践 考古学 GIS ——先端技術で歴史空間を読む』pp.204-223, 東京：NTT 出版。

【受賞歴】

2007年 日本情報考古学会優秀賞（日本情報考古学会）

【2016年度の活動報告】

・研究課題

墳墓から見たインダス文明期の社会景観

・研究の目的、内容

本研究は、インダス文明期の社会構造理解を深化するために、インダス文明期の墓に焦点を当て、その形状・立地場所や埋葬形態などを、GIS（地理情報システム）を分析に援用しながら当時の社会構造と関連付けて説明することを目的とする。

今年度は、3年計画の最終年度にあたるため、インド・グジャラート州において昨年度までに実施してきた、墓地遺跡であるダネッティ遺跡での地中レーダー（GPR）探査結果の解析ならびに地形測量の成果をまとめるとともに、カーンメル遺跡での2年間（2シーズン）の発掘調査成果を、『発掘調査概要報告書』として、刊行する予定である。

また、上記成果の公開に向けてデータ分析を進めるとともに、結果の検証ならびに、学会誌への投稿の準備なども並行しておこなう。

なお、本研究は、科学研究費助成事業（一部基金）[基盤研究（B）・海外学術調査]、課題名：「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」（研究代表者：寺村裕史、H.26-H.28）にともなう研究の一部である。

・成果

本年度は、科研費[基盤研究（B）・「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」]の研究活動の一部として、研究協力者であるアジットブラサード教授と共同発表という形で、7月にイギリスで開催された23rd EASAA [European Association for South Asian Archaeology and Art] Conference (2016, Cardiff, England) において、これまでのダネッティ遺跡での調査成果を中心に“Cenotaphs of Dhaneti, Kachchh, and their Cultural Context”という題目で研究発表をおこなった。

また、ダネッティ遺跡での地中レーダー（GPR）探査結果をもとに、アジットブラサード教授を中心とする M.S. University of Baroda のチームが、2017年1月～2月にかけてダネッティ遺跡の発掘調査を実施し、その調査に参加すると共に、土坑墓の3次元計測など出土遺構のデータ記録作業を実施した。

ダネッティ遺跡における墓の形態としては、当該時期のある程度一般的な特徴を持つといえるが、出土した

土器は、カッチ地方やグジャラート州北部で報告されている土器とは様相が異なる。そうした盛期ハラッパー文化期よりも少し古い時期の埋葬形態や副葬品としての土器に関する貴重な情報を得ることができたことは、本研究課題にとっても有用な成果であり、今後論文等にまとめ、発表していきたいと考えている。

なお、本研究は、科学研究費助成事業（一部基金）[基盤研究（B）・海外学術調査]、課題名：「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」（研究代表者：寺村裕史、H.26-H.28）にともなう研究の一部として実施した。

◎出版物による業績

[論文]

寺村裕史

2016 「古墳の三次元計測におけるデータ処理方法とその課題」城倉正祥・平原信崇・渡邊玲編『3D考古学の挑戦——考古遺物・遺構の三次元計測における研究の現状と課題』pp.33-37, 東京：早稲田大学総合人文科学研究センター。

Begmatov, A., T. Uno, A. Berdimuradov, G. Bogomolov, H. Teramura and T. Usami

2016 Excavations of the Uzbek-Japanese Expedition on the Site of Kafirkala. *Archaeology of Uzbekistan during the years of the independence: Progress and Perspectives*, pp.116-118. Samarkand: Institute of Archaeology Academy of Sciences Republic of Uzbekistan.

[その他]

寺村裕史

2016 「オアシス都市の暮らし」『月刊みんぱく』40(7)：4。

2016 「ウズベキスタンの都市遺跡発掘現場より」『季刊民族学』158：61-74, 大阪：千里文化財団。

2017 「顔・手などを拭く——手ぬぐいとタオル」上羽陽子監修『教科書に出てくる「くらしの中の和と洋」[衣]』（日本と世界のくらし どこが同じ？どこがちがう？）pp.42-45, 東京：汐文社。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

寺村裕史

2016 電子ガイドNo.552「ウズベキスタンの民家の台所」（「Kitchen from a Home in Uzbekistan」）（日本語・英語）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月26日 「三次元データの将来」国際ワークショップ『台湾資訊跨國多語言交流平台（台湾資料の国際多言語交流プラットフォーム）』行政院台湾原住民文化發展中心、屏東、台湾

2017年3月26日 「インダス文明期の遺跡分布の時系列動態と環境変化」平成29年度特別研究シンポジウム『歴史生態学から見た人と生き物の関係』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2016年6月26日 「考古学とオープンサイエンス——フィールドで取得したデータをどのように扱うのか」『考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年7月9日 'Cenotaphs of Dhaneti, Kachchh, and their Cultural Context' (Potentavida Ajithprasad, Yadubirsingh Rawat, Hirofumi Teramura and Toru Kishida) "EASAA: European Association for South Asian Archaeology and Art, 23th biennial conference." Welsh School of Architecture, Cardiff University. Cardiff, Wales, UK.

2016年9月14日 'Excavations of the Uzbek-Japanese Expedition on the Site of Kafirkala' (Alisher Begmatov, Takao Uno, Tomomi Murakami, Amridin Berdimuradov, Gennadiy Bogomolov, Hirofumi Teramura and Tomoyuki Usami) "Archaeology of Uzbekistan during the years of the independence: Progress and Perspectives." Institute of Archaeology Academy of Sciences Republic of Uzbekistan, Samarkand.

2016年9月17日 'Cuneiform Documents in the National Museum of Iran – Application of 3D Modelling and Photographs to Cuneiform Sources.' (Wakaha Mori, Hirofumi Teramura and Shunsuke Watanabe) "Japan-Iran Symposium of Advanced Technology for Documentation of Cultural Heritage" National Museum of Iran, Tehran.

2016年10月16日 「古墳の三次元計測におけるデータ処理方法とその課題」2016年度「早稲田文化芸術週間シン

ポジウム』『3D考古学の挑戦——考古遺物・遺構の三次元計測における研究の現状と課題』
早稲田大学

・展示

2016年本館展示新構築「中央・北アジア」

2016 「トピックス 中央・北アジア『都市遺跡の発掘調査』』『国立民族学博物館展示ガイド』

・広報・社会連携活動

2016年8月5日 「大阪フィールドワーク・夏休みの自由研究、探究活動の課題設定・解決にむけて」京都市立堀川高等学校（依頼講義）、国立民族学博物館

2017年2月10日 「シルクロードの古代都市遺跡の発掘調査現場より」けやきの森市民大学・国立民族学博物館提携講座、高槻市生涯学習センター

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年7月24日 「ウズベキスタンの人々の暮らしと食文化——遺跡の発掘調査から探る」第431回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2017年3月10日～3月12日ー岡山県岡山市北区（佐古田山古墳・津倉古墳の三次元計測ならびに発掘調査）

・海外調査

2016年8月28日～9月17日ーウズベキスタン（都市遺跡における埋葬形態に関する比較調査研究、及び資料収集）

2016年11月25日～11月29日ー台湾（フォーラム型情報ミュージアム（台湾関連資料）構築のために現地ワークショップの開催と博物館資料の情報化に関する調査）

2017年2月13日～2月25日ーインド（インダス文明期の墓地遺跡における発掘調査、及び墳墓に関する情報・資料の収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（一部基金）（基盤研究（B）・海外学術調査）「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「前方後円墳の三次元計測とそれにもとづく設計原理の検討」（研究代表者：新納泉）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

奈良大学文学部文化財学科「文化財情報学Ⅱ」

国際学術交流室

西尾哲夫 [にしお てつお]————— 室長（併）、副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

印東道子 [いんとう みちこ]————— 兼：民族社会研究部教授

韓 敏 [ハン ミン]————— 兼：民族社会研究部教授

齋藤 晃 [さいとう あきら]————— 兼：先端人類学研究部教授

Matthews, Peter, Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]————— 兼：民族社会研究部教授

山中由里子 [やまなか ゆりこ]————— 兼：民族文化研究部准教授

梅棹資料室

吉田憲司 [よしだ けんじ] ————— 室長（併）、副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

機関研究員

内田吉哉 [うちだ よしや] ————— 研究員

1971年生。【学歴】 関西大学文学部史学地理学科卒業（1996）、関西大学大学院文学研究科史学専攻博士課程前期課程修了（1999）、関西大学大学院文学研究科史学専攻博士課程後期課程修了（2008）【職歴】 関西大学第一高等学校非常勤講師（1999-2001）、箕面市文化財総合調査団調査員（2000-2002）、財団法人八尾市文化財調査研究会調査員（2002）、吹田市立吹田南小学校教員補助員（2003-2004）、上宮高等学校非常勤講師（2004-2005）、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターリサーチ・アシスタント（2005-2008）、関西大学非常勤講師（2008-現在）、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター特別任用研究員（2008-2010）、関西大学大阪都市遺産研究センター特別任用研究員（2010-2015）、大阪商業大学非常勤講師（2012-2014）、関西大学研究推進部非常勤研究員（2015-2016）、京都市立堀川高等学校非常勤講師（2015-2016）、国立民族学博物館機関研究員（2016）【学位】 修士（文学）（関西大学1999）、博士（文学）（関西大学2008）【専攻・専門】 歴史学、文化遺産学、大阪地域研究、デジタル人文学【所属学会】 情報処理学会（人文科学とコンピュータ研究会）、日本民俗学会、大阪歴史学会、関西大学史学地理学会

【主要業績】

〔著書〕

内田吉哉

2015 『「豊臣期大坂図屏風」の謎を解く』（大阪都市遺産研究叢書別集10）大阪：関西大学大阪都市遺産研究センター。

林 武文・内田吉哉

2014 『「牧村史陽氏旧蔵写真」目録』（大阪都市遺産研究叢書別集6）大阪：関西大学大阪都市遺産研究センター。

高橋隆弘・イサベル 田中 ファン ダーレン・内田吉哉

2010 『新発見 豊臣期大坂図屏風』大阪：清文堂出版。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人文社会科学分野の学術コンテンツの作成と公開に関する実証的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人文社会科学分野で活用される研究資料、とりわけ写真や絵画等の非文字資料について、そのデータ整理の手法および、非文字資料を用いた学術研究の成果を学校教育、社会教育に還元するためのコンテンツ手法を開発することを目的とする。

本研究の特徴は、非文字資料の中でも印画紙に焼き付けされた、いわゆる「紙焼き写真」を研究の対象とする点にある。ネガ・ポジ・スライドとして残された写真資料の場合とは異なり、紙焼き写真の取り扱い、これまであまり顧みられることがなかった。本研究では、紙焼き写真資料のデジタルアーカイブ化の手法および、原資料（紙焼き写真）の保管手法、さらにデジタル化された写真資料を活用するためのデジタルコンテンツ手法についての実証的研究を行う。

・成果

2016年度は、大阪市史編纂所が所蔵する写真資料の調査およびデジタルアーカイブ化の実証的研究を行った。大阪市史編纂所には、昭和前期～中期の大阪の史跡・名所等を撮影した写真資料が保管されている。これらは、大阪地域の郷土史研究家が撮影したもので、すべて「紙焼き写真」として残されている。これらの写真資料について、以下の調査・研究成果を残した。

- 1) 資料目録の作成とデジタルアーカイブ化を実施した。紙焼き写真はネガ・ポジ・スライド等の形態の資料とは異なり、印画紙裏面にも研究情報が残されているケースが多い。そこで印画紙の表裏両面のデータをデジタルスキャンとして記録した。また今回の調査では、デジタルスキャンに際して、印画紙そのものを「モノ資料」と捉えることを新たに提唱し、印画紙の物理的な全容をスキャン範囲に含める手法を取った。これにより、スキャンされたデジタルデータを元に所蔵写真の印画紙サイズをPC上で精密に計測することが可能になった。これらの新たに獲得が可能になったデータは、資料目録に反映し、資料の所蔵者である大阪市史編纂所に提供することとなった。
- 2) 原資料（紙焼き写真）の整理および保管作業を実施した。紙焼き写真の保管手法については、かつて関西大学における写真資料の調査研究の際に確立した、市販の「工事用アルバム」を活用する方法を用いた。この方法による利点として、接着剤等を使用せずにアルバム形式に固定することができるため原資料を損傷・劣化させることが少ないこと、市販の資材を用いて安価に整理が可能となること、散逸しやすい紙焼き写真を効率的に保管できることが挙げられる。資料の所蔵者である大阪市史編纂所において、これまで古文書等の文字資料の保管については体系化された手法が既に確立されていたが、写真資料の整理・保管は確立されておらず、今回の調査を通じて写真資料の保管手法に関する提言を行った。
- 3) 資料を活用するためのデジタルコンテンツを試作し、資料の所蔵者である大阪市史編纂所に提供した。写真等の画像資料では、資料点数が多い場合にはデータベースを構築することが望ましいが、今回の調査では、大阪市史編纂所に所蔵される写真資料の点数が120点程度と比較的少ないため、より一覧性に優れた方式として、HTML技術によるデジタルアルバム形式でのコンテンツ化を行った。この方式によるコンテンツ制作の利点として、データベースを構築する場合に比べて環境に依存せず汎用性が高いこと、資料所蔵者のインターネット環境によっては、そのままウェブ上で公開できるコンテンツとして転用できることが挙げられる。

これらの写真資料の調査・研究成果については、2017年度に大阪市史編纂所が刊行する出版物『大阪の歴史』に論文を投稿し、2018年度に掲載される予定となっている。

◎出版物による業績

〔論文〕

内田吉哉

2017 「寝具 布団とベッド」日高真吾監修『教科書に出てくる「くらしの中の和と洋」住編』（日本と世界のくらし どこが同じ？どこがちがう？）pp.26-29, 東京：汐文社。

〔その他〕

内田吉哉

2016 「土地に名を刻む」『月刊みんぱく』40(11)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2016年8月10日 「写真資料のデジタル化とその地域研究における活用——昭和中期の大阪を撮影した写真資料による事例」第273回民博研究懇談会

・展示

2016年度文化資源計画事業 年末年始展示イベント「とり」展示監修、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2016年6月19日 音楽の祭日 実行委員会メンバー、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2016年8月9日～2017年1月31日—大阪（大阪市史編纂所が所蔵する写真資料の調査及びデジタルアーカイブ化）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学非常勤講師、「日本の文化と人間を考える」（全学共通教養科目）、大学コンソーシアム大阪センター科目「大阪の都市と文化」

1980年生。【学歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒業（2004）、筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻修了（2006）、筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻単位取得満期退学（2009）【職歴】東京文化財研究所客員研究員（2009-2010）、国際協力機構専門家（2010-2014）【学位】修士（学術）（筑波大学大学院 2006）【専攻・専門】文化財保存科学、中国仏教美術史、文化遺産学【所属学会】文化財保存修復学会、日本中国考古学会、日本文化財科学科、東アジア文化遺産保存学会、国際文化財保存学会（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）

【主要業績】

[論文]

末森 薫

2016 「敦煌莫高窟早期窟千仏図の規則的描写法——第二五四窟の空間設計における千仏図の機能」佛教藝術学会編『佛教藝術』347：9-37，東京：毎日新聞出版。

2017 「敦煌莫高窟の西魏代における石窟空間構成——千仏図の描写設計を中心として」『国立民族学博物館研究報告』41(2)：127-193。

[共著]

麦積山石窟芸術研究所・筑波大学世界遺産専攻編

2011 『麦積山石窟環境と保護調査報告書』北京：文物出版社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国立民族学博物館における文化資源の保存・管理システムの構築に関わる実証的研究

・研究の目的、内容

本研究では、国立民族学博物館に展示・収蔵される30万点以上の資料を安定的かつ長期的に保存・活用するための恒常的な管理システムを構築することを目的に、システム構築に係る基礎実験や各種の科学的手法を用いた調査により、資料の保存・管理に関する実証的な検証を行う。2016年度は主に下記4点について、調査・研究を実施した。

- 1) 環境管理や有害生物対策、収蔵改善等による博物館資料の恒久的保存システムの構築に係る実践的研究活動
- 2) 光学撮影法を応用した博物館資料等の調査
- 3) 各種分析機器を用いた博物館資料等の材質調査
- 4) 発光ダイオード(LED)光源による展示空間照明の検証調査

・成果

- 1) 国立民族学博物館が有する有形資料の恒久的な保存・管理システムの構築を目的として、展示場や収蔵庫における温湿度等の環境管理、博物館資料に損傷を与える虫やカビ等の有害生物のモニタリングおよび対策、博物館資料の収蔵改善の試み等に携わり、有形資料の保存・管理に必要となるデータを蓄積した。本研究成果の一部について、2017年9月にデンマーク・コペンハーゲンで開催された第18回国際博物館会議・保存国際委員会(ICOM-CC)にて共同で発表。
- 2) 偏光光源や近紫外・可視光・近赤外領域の狭域帯LED光源、受光の特性や波長域を制御する各種の光学フィルターを用いた光学撮影を応用し、民俗資料や民族資料、絵画資料を対象とした各種の調査を実施した。本研究成果について、2016年6月に東北芸術工科大学（山形県山形市）で開催された日本文化財科学会第34回大会、2016年7月に金沢歌劇座（石川県金沢市）で開催された文化財保存修復学会第39回大会、そして2017年8月に復旦大学（中国上海市）で開催された2017上海国際文化遺産シンポジウム（第6回東アジア文化遺産シンポジウム）にて発表。
- 3) 国立民族学博物館が所有する各種の分析機器（ガスクロマトグラフ質量分析計(GC/MS)、フーリエ変換赤外分光光度計(FR-IR)、蛍光X線分析装置(XRF)、分光測定器等)を用いて、資料や資料収蔵に用いる資材、資料に付着した未知物質等の材質分析を行い、物性の同定や推定を行った。本研究の成果の一部について、2016年7月に金沢歌劇座（石川県金沢市）で開催された文化財保存修復学会第39回大会にて

共同で発表。

- 4) 2015年度に国立民族学博物館の展示場に導入されたLED照明が、展示空間においてどのような特性を有するか検証することを目的として、照度分布図や画像として記録した。

◎出版物による業績

[論文]

末森 薫

- 2016 「敦煌莫高窟早期窟千仏図の規則的描写法——第二五四窟の空間設計における千仏図の機能」 佛教藝術学会編『佛教藝術』347: 9-37, 東京: 毎日新聞出版。[査読有]
- 2016 「敦煌莫高窟北朝前期における石窟造営の展開——千仏図の描写設計を中心として」 日本中国考古学会編『中国考古学』16: 279-301。[査読有]
- 2017 「敦煌莫高窟の西魏代における石窟空間構成——千仏図の描写設計を中心として」『国立民族学博物館研究報告』41(2): 127-193。[査読有]

Sonoda, N., S. Hidaka and K. Suemori

- 2016 Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control for large and complex objects containing new materials. *Saving the Now: Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works, The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC) 2016 Los Angeles Congress Preprints. Studies in Conservation* 61(2): 329-331. [査読有]

[その他]

末森 薫

- 2016 「敦煌莫高窟を彩る千仏壁画」『季刊民族学』158: 50-60。
- 2016 「ほとけの名前」『月刊みんぱく』40(5): 20。
- 2016 「考える舌36 ナツメヤシの果実」『京都新聞』4月20日。
- 2016 「カナダの博物館の事例にみる予防保存の実践的な活動と資料保存の課題」『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』pp.74-75。
- 2017 「仏教美術にあらわされたビーズ装飾」『特別展「ビーズ」図録』p.54, 大阪: 国立民族学博物館。

末森 薫・園田直子・日高真吾・和高智美・河村友佳子・橋本沙知

- 2016 「狭帯域LED光源を用いた偏光撮影による彩色材料光学情報の可視化」『日本文化財科学会第33回大会 研究発表要旨集』pp.290-291。

園田直子・日高真吾・末森 薫・村田忠繁・奥村泰之・河村友佳子・橋本沙知・和高智美

- 2016 「国立民族学博物館における展示照明のLED化——民族資料の展示を想定した照明実験」『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』pp.114-115。

日高真吾・園田直子・末森 薫・西澤昌樹・松田万緒・河村友佳子・橋本沙知・和高智美・木川りか・川越和四・富岡康浩

- 2016 「太陽光を利用した高温処理システム開発——殺虫条件を満たすための処理空間の創出を目指した試験について」『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』pp.134-135。

二俣 賢・日高真吾・末森 薫・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・芳村健治

- 2016 「二酸化炭素処理による発泡体の形状変化について」『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.26-27。

松田泰典・原田 怜・末森 薫・山内和也

- 2016 大エジプト博物館保存修復センター (GEM-CC) における人材育成を目的とした国際協力プロジェクト——戦略的マネジメントプランの活用と技術移転効果の評価」『文化財保存修復学会第38回大会研究発表要旨集』pp.42-43。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2016年11月25日 コメンテーター「セッション2 地域文化を保存する」国際フォーラム『地域文化の発見、保存、活用』台湾大溪多目的文化体育館

・共同研究会での報告

- 2016年10月10日 「中国仏教壁画に描かれたビーズ」共同研究一般「世界のビーズをめぐる人類学的研究」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月4日～6月5日（ポスター発表）「狭帯域LED光源を用いた偏光撮影による彩色材料光学情報の可視化」日本文化財科学会第33回大会、奈良大学、奈良県

2016年6月25日「カナダの博物館の事例にみる予防保存の実践的な活動と資料保存の課題」文化財保存修復学会第38回大会、東海大学、神奈川県

2016年9月12日～9月16日“Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control for large and complex objects containing new materials” 国際文化財保存学会（IIC）ロサンゼルス大会、ロサンゼルス

2016年9月13日～9月15日“25 years of implementation and development of IPM at the National Museum of Ethnology, Japan” 3rd international IPM Conference in Museums, Archives, Libraries and Historic Buildings, Auditorium du Louvre, France

・展示

文化資源プロジェクト2016年度年末年始展示イベント「とり」プロジェクトメンバー

◎調査活動

・国内調査

2016年5月20日～5月22日—北海道網走市（平成28年度・北海道立北方民族博物館講座「国際博物館の日」記念事業「東日本大震災と文化財レスキュー」への参加及び意見交換）

2016年7月12日～7月13日—宮城県気仙沼市（被災文化財一時保管場所の環境調査及び意見交換）

2016年7月28日～7月31日—新潟県村上市・十日町市（村上市における収蔵施設における生物生息調査および山村生産用具の活用に関する打ち合わせ、十日町市における中越地震で被災した古文書資料の状況調査）

2016年8月6日—京都府京都市（京都大学で開催された中国中世寫本研究2016 夏期大会への参加および情報収集）

2016年8月31日～9月3日—新潟県十日町市（中越地震で被災した古文書資料の調査結果の報告および同資料の追加調査）

2016年1月14日—東京都新宿区（平成28年度・東洋美術学校卒業研究発表会における紙資料保存関連の情報収集）

・海外調査

2016年8月10日～8月23日—中国（河西回廊沿いの石窟寺院等における調査研究）

2016年9月10日～9月17日—アメリカ（国際文化財保存学会ロサンゼルス大会に参加及び海外における保存修復・保存科学の研究動向についての情報収集）

2016年10月20日～10月28日—中国（麦積山石窟（甘肅省天水）における科研に係る調査）

2016年11月24日～11月27日—台湾（国際フォーラム「地域文化の発見、保存と活用」の参加と発表）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究（A））「中国甘肅仏教石窟壁画の制作技法に関する多面的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B）（一般））「セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への影響」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B）（一般））「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（研究代表者：日高真吾）研究分担者、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（研究代表者：日高真吾）研究メンバー、国立民族学博物館共同研究一般「世界のビーズをめぐる人類学的研究」（研究代表者：池谷和信）研究メンバー、国立民族学博物館共同研究若手「高等教育機関を対象とした博物館資料の活用に関する研究」（研究代表者：呉屋淳子）研究メンバー

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

筑波大学大学院「世界遺産論」講師（2016年5月25日）

・他の機関から委嘱された委員など

国際協力機構大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト専門家

戸田美佳子 [とだ みかこ] ————— 研究員

【学歴】神戸大学理学部物理学科卒（2006）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科五年一貫制博士課程満期認定退学（2011）【職歴】日本学術振興会 特別研究員（DC1）（2008）、京都大学アフリカ地域研究資料センター 特任研究員（産官学連携）（2011）、日本学術振興会 特別研究員（PD）（2012）、成安造形大学非常勤講師（2014）、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員（2015）【学位】修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2010）、博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2013）【専攻・専門】生態人類学、アフリカ地域研究（中部アフリカ）【所属学会】日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際開発学会、障害学会

【主要業績】

[単著]

戸田美佳子

2015 『越境する障害者——アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』東京：明石書店。

[論文]

戸田美佳子

2016 「国境をまたぐ障害者——コンゴ川の障害者ビジネスと国家」森壮也編『アフリカの「障害と開発」——SDGsに向けて』（研究双書No.622）pp.153-193, 千葉：日本貿易振興機構アジア経済研究所。

2014 Peoples and Social Organizations in Gribé, Southeastern Cameroon. *African Study Monographs Supplementary Issue* 49: 139-168, Kyoto: Research Committee for African Area Studies.

【受賞歴】

2016 生存学奨励賞「審査員特別賞」

【2016年の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) アフリカにおける障害者の生活基盤に関する地域研究
- 2) アフリカ熱帯雨林における森林資源の利用と住民組織に関する実践的研究

・研究の目的、内容

- 1) 本研究の目的は、サブサハラアフリカを対象に、異なる生活基盤のなかで生計を維持する障害者に焦点を当て、彼ら障害者に関わる資源を地図化することで、それがどのように地域的な広がりをもっているのか、もしくは変容しているのかを可視化し、その地域特性を描くことにある。調査は、科学研究費基金（若手研究（B））「アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究」（研究代表者：戸田美佳子）により実施する。
- 2) 果実や葉、樹皮、野生動物などの非木材森林産物（Non-Timber Forest Products, NTFPs）が近年、木材伐採に替わる森林資源の持続的利用法として森林保全の文脈で注目を集めている。とくに非木材森林産物は、カカオなどの商品作物を栽培していない狩猟採集民や農耕民女性にとって現金稼得の重要な機会となっており、地域住民の生活向上を目指す上でも期待が高まっている。本研究は、カメルーン熱帯雨林地域における非木材森林資源の利用に関する住民参加型の現地共同研究に参加しながら、住民の社会関係と在来の住民組織の働きから、森林資源の持続的利用を可能にする社会システムの構築を目指すことを目的としている。調査は、主にJST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力事業（SATREPS）プロジェクト「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」（研究代表者：京都大学・荒木茂）により実施する。

・成果

- 1) 2016年度は、前年度のコンゴ共和国ブラザヴィル市およびコンゴ民主共和国キンシャサ市における現地調査で得られたデータや資料を検討し、国家の統制や規制の強化が進む両国のコンゴ川の国境ビジネスから、障害者と国家の関係について分析を加えた。また本年度は8月と12月に各2週間、コンゴ共和国の首都ブラザヴィル市とカメルーン共和国の首都ヤウンデ市においての現地調査を実施し、障害者の資源マッピングに必要なデータを収集した。また、日本アフリカ学会第53回学術大会においての口頭発表や論文などをととして、研究成果を発信した。

- 2) 非木材森林産物 (NTFPs) の持続的利用のためには、資源採取をめぐる過度な競争をさけるとともに、NTFPs から得られる収入のバランスがとれていることが肝要である。そこでプロジェクト最終年度となる2016年度は、プロジェクトサイトのグリベ (Gribe) 村住民にとって生計・家計の両面から重要な資源である *Irvingia gabonensis* ナッツに注目し、狩猟採集民・農耕民・定住商人といったアクターで構成される協働組合を形成し、売上増加を試みた。その際、狩猟採集民の労働強化にならないような方策、ナッツの加工方法の改善による付加価値の増大、さらに労働量に見合った分業による「公平な」収入を目指した住民の組織化に配慮した。これらの研究成果は、SATREPS プロジェクト「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」終了報告書としてまとめた。

◎出版物による業績

〔論文〕

戸田美佳子

- 2017 「作業療法を深める⑤ アフリカの障害者——カメルーン熱帯雨林に暮らす障害者からの学び」『作業療法ジャーナル』51(3)：231-234。

〔その他〕

戸田美佳子

- 2016 「考える舌37 アフリカン・マンゴー」『京都新聞』5月4日。
- 2016 「学界通信 狩猟採集民研究50年目の再注目——第11回国際狩猟採集社会会議（2015年9月7日～11日、於：ウィーン大学）参加報告」『アフリカ研究』89：47-49。
- 2016 「先住民族を知ろう⑥ ピグミー」『朝日小学生新聞』11月6日。
- 2016 「海外研究動向 障害研究の世界的展開」『民博通信』155：24。
- 2017 「書評リプライ 戸田美佳子著『越境する障害者——アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』『障害学研究』12：174-183。
- 2017 「王国のビーズとピグミーのビーズ」『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』pp.70-71, 大阪：国立民族学博物館。〔共同研究成果〕
- 2017 「【活動 2-7】NTFPsの持続的利用にむけた社会システムの構築」『地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) 「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」終了報告書』pp.58-61。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2016年5月15日 「相互行為としてのケアを描く——カメルーン熱帯林の障害者を例に」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に』
- 2016年12月11日 「狩猟採集民ジェマの一生——ケアの形成範囲への一考察」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年6月4日 「コンゴ川の国境ビジネスからみる障害者と国家の関係」フォーラム「アフリカの『障害と開発』」日本アフリカ学会第53回学術大会、日本大学、神奈川
- 2016年7月9日 (ポスター発表) 「カメルーン熱帯雨林地域の森林保全と農業開発の融合モデル」(荒木茂・市川光雄・舟川晋也・塩谷暁代・Papa Saliou SARR・戸田美佳子・平井将公) 2016年度・海外学術調査フェスタ、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京

・展示解説

- 2016 「『サプール』世界一お洒落なコンゴの男たち」国立民族学博物館アフリカ展示『アフリカの今』セクション展示解説。
- 2016 「コンゴ発りサイクル・アート『ブベル』」国立民族学博物館アフリカ展示『アフリカの今』セクション展示解説。
- 2016 「3000kmを旅するウシの大群」国立民族学博物館アフリカ展示『アフリカの今』セクション展示解説。
- 2016 「カメルーンの健康食『ンドレ』」国立民族学博物館アフリカ展示『アフリカの料理』。

・展示

- 2016年度文化資源計画事業 年末年始展示イベント「とり」展示監修、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2016年6月17日 音楽の祭日 実行委員会メンバー、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2016年6月5日～6月16日—カメルーン共和国（アフリカ熱帯雨林における森林資源の利用と住民組織に関する実践的研究にかかる調査研究）

2016年12月16日～2017年1月9日—カメルーン共和国（カメルーン共和国における現地調査、および情報・資料の収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究（B））「アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究B）『アフリカ熱帯雨林における在来知＝科学知融合型の狩猟動物モニタリング手法の確立』（研究代表者：京都大学・安岡宏和）・連携研究者、科学研究費・新学術領域研究（研究領域提案型）「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：国立民族学博物館・野林厚志）研究協力者、科学研究費・基盤研究S『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服——人類の未来を展望する総合的地域研究」（研究代表者：京都大学・松田素二）研究協力者、JST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」（研究代表者：京都大学・荒木茂）研究協力者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

障害学会第7期理事、NPO 法人アフリックアフリカ事務局

・非常勤講師

成安造形大学「文化人類学」（集中講義）、九州大学大学院芸術工学研究院「インクルーシブデザイン」ゲスト講師（2016年11月17日）、天理大学国際学部「アフリカ地域研究入門」および「4回生ゼミ」ゲスト講師（2016年7月7日）

永田貴聖 [ながた あつまさ] ————— 研究員

1974年生。【学歴】京都学園大学法学部法学科卒業（1997）、立命館大学大学院文学研究科史学専攻地域文化領域博士前期課程修了（2004）、立命館大学大学院先端総合学術研究科先端総合学術専攻共生領域博士課程修了（2008）【職歴】立命館大学第一号助手（2005-2006）、日本学術振興会特別研究員DC・立命館大学（2007-2008）、日本学術振興会PD・京都大学（2008-2009）、立命館大学衣笠総合研究機構ポスドクフェロー・GCOE 生存学担当（2009-2010）、立命館大学先端総合学術研究科研究指導助手（2010-2012）、立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員（2012-2015）、京都学園大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員（2015）【学位】博士（学術）（立命館大学大学院、2008）【専攻・専門】文化人類学・移民研究（日本・韓国におけるフィリピン人移民と他の移民グループとの社会関係形成に関する研究）【所属学会】日本文化人類学会、日本移民学会、社会学研究会、関西社会学会

【主要業績】

[著書]

永田貴聖

2011 『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』京都：ナカニシヤ出版。

[論文]

永田貴聖

2016 「日本・韓国のフィリピン人たちによる複数の国家・国民とかかわる実践」黒木雅子・李恩子編『「国家」を超えるとは——民族・ジェンダー・宗教』pp.151-199, 東京：新幹社。

2007 「フィリピン人は境界線を越える——トランスナショナル実践と国家権力の狭間で」『現代思想』35(7)：116-130。

【2016年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

日本・韓国におけるフィリピン人移民と他の移民グループの社会関係形成に関する研究

・研究目的・内容

本研究の目的は、世界有数の移民・移住労働者送り出し国であるフィリピンから移動してきた人びとが形成する社会関係、中でも結婚による女性の移住が多い東アジア（本研究では日本と韓国）に注目し、1）フィリピン人移住者がカトリック教会などを拠点として、自助・同国人グループを組織し、フィリピン人同士の関係を形成していること、2）フィリピン人同士の関係を媒介にして、日本人や他国出身の移住者たちとも強いつながりを構築すること、3）「フィリピン」が共通項となる空間を一時的につくりだし、そこに集まるさまざまな人びとと関係することを明らかにすることである。

・成果

2016年度は、主に、京都市にあるカトリック教会を拠点として活動するフィリピン人グループや活動その周囲の関係する人びとの活動、中でも、カトリック系の社会福祉法人が運営する京都市地域・多文化交流ネットワークサロンでの活動に注目してきた。この施設の周辺地域は在日コリアン住民の割合が多く、フィリピン人移住者たちがこの施設の利用を開始して以降、在日フィリピン人、在日コリアン、日本人住民の交流も拡大しつつある。永田はフィリピン人の側からこの3つの属性の関係形成を、主に、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンの活動、フィリピン人移住者たちが在日コリアンの民族芸能文化を活用した地域活動である「マダン」に演奏者として参加することなどへの考察を行った。日本において複数の「エスニシティ・ナショナルイティ」集団が関係を形成する過程を記述している。これらの活動をもとにして、永田は研究代表として「京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学」（日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究C）を申請した。

◎出版物による業績

[その他]

永田貴聖

2016 「在日コリアンと在日フィリピン人たちが集う——京都」『みんぱく e-NEWS』2016年5月1日号、
<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/179>

2016 「イロイロ めくもりの記憶——シンガポールのフィリピン人家事労働者について」小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子編『ワールドシネマ・スタディーズ——世界の「いま」を映画から考えよう』pp.271-278, 東京：勉誠出版。

2016 「日比10万人時代——二つのルーツを活かす」大野拓司・鈴木伸隆・日下渉編『フィリピンを知るための64章』pp.370-374, 東京：明石書店。

2017 「韓国・ソウル近郊に住むフィリピン人移住者たちの社会空間」立命館大学生存学研究センター監修・渡辺克典編『知のフロンティア——生存をめぐる研究の現場』pp.88-89, 東京：ハーベスト社。

◎調査活動

・海外調査

2016年10月20日～10月27日—韓国（済州島におけるフィリピン人移住者の社会関係に関するフィールド調査とソウル首都圏での関連情報収集）

2016年11月17日～11月21日—韓国（韓国・釜山市東西大学校における日本研究と日本植民地期の建物と記憶を活用した観光実践研究についての動向調査）

2017年2月8日～2月15日—韓国（韓国における在外韓人研究としての在日コリアン研究と韓国国立民俗博物館多文化パッケージ製作過程に関する研究動向調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

立命館大学生存学研究センター・研究プロジェクト現代社会エスノグラフィ研究会 課題「生の技法の人文社会学——『当事者』から多角的に広がる関係へ」（代表：渡辺克典 立命館大学生存学研究センター特別招聘准教授）分担者（実務担当）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

大阪大学「東南アジア社会文化演習」、大阪国際大学「国際社会学」、京都学園大学「質的社会調査法」、立命館大学「文化人類学」、龍谷大学「人権論」、京都外国語大学「現代アジア地域事情」

深川宏樹 [ふかがわ ひろき] ————— 研究員

1981年生。【学歴】筑波大学第一学群人文学類卒業（2004）、筑波大学大学院人文社会科学研究科一貫制博士課程歴史・人類学専攻修了（2013）【職歴】筑波大学人文・文化学群非常勤講師（2013-2015）、京都大学大学院人間・環境学研究科研究員（2013-2015）、滋賀大学経済学部非常勤講師（2014）、京都大学国際高等教育院非常勤講師（2015）、京都大学大学院人間・環境学研究科研究員（2015-2016）、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員（2016）【学位】博士（文学）（筑波大学大学院人文社会科学研究科 2013）【専攻・専門】文化人類学、オセアニア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、早稲田文化人類学会

【主要業績】

[論文]

深川宏樹

- 2016 「敵と結婚する社会——ニューギニア高地における紛争の拡大と収束の論理」 丹羽典生編『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』pp.137-170, 神奈川：春風社。
- 2016 「身体に内在する社会性と『人格の拡大』——ニューギニア高地エンガ州サカ谷における血縁者の死の重み」『文化人類学』81(1)：5-25。
- 2017 「狂気に突き動かされる社会——ニューギニア高地エンガ州における交換と『賭けられた生』」 風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.267-297, 京都：ナカニシヤ出版。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

バプアニューギニアの紛争とその処理における感情の動態に関する研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、文化人類学の紛争論と感情論を交差させ、発展させることにある。従来の紛争研究では、いかに紛争で怒りが生じ、鎮静化するかを解明することは最も重大な課題とされてきたが、未だ研究が蓄積されていないのが現状である。近年、南アフリカ等で注目される真実和平委員会も、大規模紛争下で法が機能不全に陥った後に、過去の「真実」に折りあいをつけることで、鬱積した怨恨を緩和する試みと捉えられる。しかしながら、そこでの感情を体系的に分析する枠組みが用意されてきたとは言いがたい。それに対して本研究は、バプアニューギニアの高地に位置するエンガ州村落の事例から、紛争処理を「感情の調停」という独自の視点から考察することで新たな理論を提示することを目的とする。また、これと並行して、文化人類学の古典と最新理論をつなぐ親族研究、贈与交換論、植民地主義とキリスト教研究、人間概念と社会概念の歴史的・文化的な多様性と普遍性の研究も行った。

・成果

深川宏樹

- 2016 「身体に内在する社会性と『人格の拡大』——ニューギニア高地エンガ州サカ谷における血縁者の死の重み」『文化人類学』81(1)：5-25。[査読有]
- 2017 「『母親』の声を耳にすると、お前の胸は痛むだろう——ニューギニア高地における豚肉の贈与の拒絶と血縁関係」 櫻田涼子・稲澤努・三浦哲也編『食をめぐる人類学——飲食実践が紡ぐ社会関係』pp.194-226, 京都：昭和堂。
- 2017 「狂気に突き動かされる社会——ニューギニア高地エンガ州における交換と『賭けられた生』」 風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.267-297, 京都：ナカニシヤ出版。

◎出版物による業績

[論文]

深川宏樹

- 2016 「身体に内在する社会性と『人格の拡大』——ニューギニア高地エンガ州サカ谷における血縁者の死の重み」『文化人類学』81(1):5-25。[査読有]
- 2017 「『母親』の声を耳にすると、お前の胸は痛むだろう——ニューギニア高地における豚肉の贈与の拒絶と血縁関係」櫻田涼子・稲澤努・三浦哲也編『食をめぐる人類学——飲食実践が紡ぐ社会関係』pp.194-226, 京都:昭和堂。
- 2017 「狂気に突き動かされる社会——ニューギニア高地エンガ州における交換と『賭けられた生』」風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.267-297, 京都:ナカニシヤ出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2016年6月4日 「血が否定される時——ニューギニア高地におけるサブスタンス紐帯とその切断」『グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年7月9日 「『戦争の仮面』論再考——ニューギニア高地における敵対・同盟関係の前景化と後景化」大阪大学大学院人間科学研究科教育改革推進室・日本文化人類学会近畿地区研究懇談会共催公開シンポジウム『在来紛争処理をめぐる比較民族誌——アフリカ・オセアニア・ラテンアメリカの事例から』大阪大学

2017年2月17日 「民族誌から生-誌へ——ニューギニア高地エンガ州における交換と狂気」、『『マイノリティと主流社会の共存』研究会』京都大学

◎調査活動

・海外調査

2017年2月6日～2月14日—アメリカ（オセアニア社会人類学会（Association for Social Anthropology in Oceania）の第50回研究大会に参加）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

奈良県立大学地域創造学部「多文化コミュニティ論」、「女性と子供とコミュニティ」
筑波大学大学院人文社会科学研究科「文化人類学特講ⅢA」

八木百合子 [やぎ ゆりこ]————— 研究員

1977年生。【学歴】天理大学国際文化学部イスパニア学科卒（2001）、三重大学大学院人文社会科学研究科修了（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科単位取得満期退学（2011）【職歴】在ペルー日本国大使館専門調査員（2012-2014）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2015）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学2012）、修士（人文科学）（三重大学2004）【専攻・専門】文化人類学、アンデス民族学、ラテンアメリカ地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

八木百合子

2015 『アンデスの聖人信仰——人の移動が織りなす文化のダイナミズム』京都:臨川書店。

[論文]

八木百合子

- 2012 「聖女に捧げられた大聖堂——近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト」染田秀藤・關 雄二・網野徹哉編『アンデス世界——交渉と創造の力学』pp.243-267, 京都:世界思想社。
- 2009 「サンタ・ロサ信仰の形成と発展——20世紀ペルー社会における展開を中心に」『総研大文化科学研究』5:5-28。

【2016年の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モノを通して見る現代ペルーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究

・研究の目的・内容

本研究は、宗教的なモノの生産と流通に焦点をあて、現代ペルーにおける聖人信仰の発展について人類学的に追究するものである。その際、聖像というモノを分析の中心に据え、モノと人々が作り出す多様な実践を捉えることで、教会や宣教師の活動に力点をおく従来の見方を越え、宗教現象の新たな理解をはかることを目的とする。より具体的には、(1) 現代の聖像の生産がいかなる人々によりどのようにして行われ、(2) どのような人々の手を介して聖像が流通し、(3) それが各地の村落においてどのように受容され、聖性をもった存在となるかという点について明らかにしていく。なお、上記調査の遂行にあたっては科学研究費補助金（研究スタート支援）をあてる。

・成果

本年度はペルーにおける聖像の流通ネットワークの解明を目的に以下の調査研究をおこなった。

- (1) ペルーにおける聖像流通の一大拠点であるナサレナス教会（リマの旧市街地）周辺の聖具店街の成り立ちについて明らかにするために、主として18～19世紀の周辺の様子や市内で活動する職業集団に関する文献調査を行った。その結果、リマの職業集団や小売店の登記情報からは、聖像の販売や制作を担っていた店や職人がナサレナス教会周辺に出現するのは、19世紀末から20世紀初頭あたりからである点が判明した。また、古くから聖具店街周辺で商いを営んでいる人物への聞き取りからは、当時は多くが露天商で、その後の市政との関わりで露天商から店舗へと移った経緯も判明し、現在の聖具店街の形成過程を知るうえで重要な情報を得た。
- (2) リマの聖具店街の各店の成立時期や仕入先となる工房の情報を入手したほか、聖具店を訪れる客へのインタビュー調査からは、工房や店舗の関係者以外に聖像の流通に関わる複数のアクターの存在を把握した。これにより聖像をとりまく生産・流通の大枠を掴むことができた。
このほか、本課題にかかる成果の一部を国立民族学博物館の共同研究会において発表した。
今後は、これまでの調査結果をもとに、20世紀のペルーにおける聖像流通の発展と聖人信仰の展開との関連性について分析を行い、成果論文として発表を行う予定である。

◎出版物による業績

〔論文〕

八木百合子

- 2016 「ティティカカ湖の浮島の生活——アンデス高原地帯の暮らし」藤木庸介編『住まいがつかえる世界の暮らし——今日の居住文化誌』pp.133-145, 京都：世界思想社。

〔その他〕

八木百合子

- 2016 「アンデスのキヌア みんなく食の民族誌——考える舌」『京都新聞』5月11日。
2016 「海外研究動向——スペインにおける人類学研究の展開 地方主義を超えて」『民博通信』153：25。
2016 「著者による新刊書紹介」『ラテンアメリカ・カリブ研究』23：76-78。
2016 「モコピ族の神話」「ジェ族の神話」「終末」篠田知和基・丸山顯徳編『世界神話伝説大事典』pp.382-383, pp.383-384, pp.365-366, 東京：勉誠出版。
2016 「ペルー風ドーナツ ピカロン」『月刊みんなく』40(12)：14-15。
2017 「危機にさらされる世界遺産——登録30年が経過したクスコの今」『月刊みんなく』41(3)：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2016年10月30日 「聖なるものの継承——聖像を通じてみる人・モノ・信仰」『演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年7月9日 「ペルーの社会状況と南高地における人類学調査」平成28年度海外学術調査フォーラム、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究センター
2016年6月19日 「現代アンデスの聖母崇拝にみる古代文明の資源化——奉納品の分析を通じて」文部科学省科学研究費新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」第3回研究者全体集会、キャンパス・

イノベーションセンター東京.

・ 広報・社会連携活動

2017年1月25日 「アンデスの聖地をめぐる」カレッジシアター「地球探究紀行」産経新聞社あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・ 海外調査

2016年8月9日～9月21日—ペルー（ペルーにおける聖像の生産・消費および奉納品に関する調査）

2017年2月2日～2月13日—メキシコ（メキシコにおけるカトリシズムに関する研究動向調査）

2017年2月18日～3月21日—ペルー（クスコ市の教会堂の奉納品の保存状況および聖像の所有に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「モノを通してみる現代ペルーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（新学術領域研究）「古代アメリカの比較文明論」（研究代表：青山和夫）連携研究者

◎社会活動・館外活動等

・ 非常勤講師

神戸市外国語大学「中南米文化史1」、「中南米文化史2」、「ラテンアメリカ文化特殊講義1」、「ラテンアメリカ文化特殊講義2」

プロジェクト研究員

馬場幸栄 [ばば ゆきえ] ————— 研究員

【学歴】国際基督教大学教養学部社会科学科卒（1994）、東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学専攻修士課程修了（2008）、お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2015）【職歴】お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任講師（2015）、国立民族学博物館文化資源研究センタープロジェクト研究員（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部プロジェクト研究員（2017）、一橋大学附属図書館研究開発室助教（2017）【学位】修士（文学）（東京大学大学院人文社会系研究科 2008）【専攻・専門】文化資源学、デジタルアーカイブ、書物史、科学史【所属学会】全日本博物館学会、アート・ドキュメンテーション学会、日本アーカイブズ学会、日本科学史学会、日本天文学会、岩手民俗の会

【主要業績】

[論文]

馬場幸栄

2017 「臨時緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会——天文学者・木村栄による宝生流謡曲サークル創設の経緯と背景」『比較日本学教育研究センター研究年報』13：123-126。

Baba, Y. and T. Ishikawa

2016 Nearly 120 Years of Science History in Danger: The Collections in the National Astronomical Observatory of Japan, Mizusawa. *Astronomy Museums and Related Activities: Proceedings of the International Symposium on the NAOJ Museum*, pp.27-29. Tokyo: National Astronomical Observatory of Japan.

Baba, Y. and N. McLynn

2005 On Confession: A Cistercian Treatise in Keio University Library. *Essays on Western Manuscripts and Early Printed Books in Keio University Library*, pp.31-68. Tokyo: Keio University Press.

【受賞歴】

2016 図書館総合展ポスターセッション運営委員会特別賞

2009 グッドデザイン賞ネットワーク領域デジタルコンテンツ

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

緯度観測所の歴史と地域文化への影響

・研究の目的・内容

明治32年から昭和63年まで岩手県の水沢に存在した国立の研究機関「緯度観測所」は、創設以来水沢の市民らと密接な関係を築いて、水沢の地域文化に大きな影響を与えてきた。しかし、閉鎖から約30年経った現在では緯度観測所を直接に知る元所員たちの数も少なくなり、同観測所の歴史や地域文化への影響は水沢の人々たちのあいだでも忘れられつつある。本研究は、国立天文台水沢 VLBI 観測所が所蔵する未公開の緯度観測所関連資料の調査と水沢に暮らす元所員らへの聴き取り調査を通して、人々の記憶から失われつつある緯度観測所の歴史を再構築し、さらに、同観測所が水沢の地域文化に与えた影響を詳らかにしてゆくものである。

・成果

科研費基盤研究（C）「国立天文台水沢収蔵資料から読み解く緯度観測所120周年」（2016年度～2019年度）の研究代表者として、国立天文台水沢 VLBI 観測所が収蔵する緯度観測所関連資料を用いて（1）緯度観測所所員の在職期間一覧の作成、（2）明治大正期の敷地・建造物図面のデジタル化、（3）一部ガラス乾板写真のデジタル化、（4）緯度観測所元所員への聴き取り調査を実施した。

これらの調査により、緯度観測所は早い時期から水沢の高等小学校や高等女学校の出身者を積極的に雇用していたこと、緯度観測所初代所長・木村栄是水沢宝生会という謡曲同好会を創設して水沢の郷土たちと交流を深めていたこと、などが明らかになった。

また、明治大正期の緯度観測所における敷地・建造物の写真や図面を整理し、それらについての聴き取り調査を元所員らに行ったことで、明治大正期における各建造物の特徴・機能が明らかになった。その結果、現存する緯度観測所建造物を国の登録有形文化財として申請するための文化庁現地調査もスムーズに行われた。

これらの研究成果を国際日本学コンソーシアム、日本測地学会特別展示、奥州宇宙遊学館特別写真展、同館講演会、『国立天文台ニュース』などで発表したところ、水沢の市民やメディアから大きな反響があった。また、本研究の成果を知った元所員やそのご家族からは聴き取り調査への協力の申し出や個人収蔵の緯度観測所関連資料に関する情報提供が相次いでおり、現在その対応に追われている。今後は国立天文台収蔵資料だけでなく個人蔵の緯度観測所収蔵資料も調査対象として、本研究をいっそう発展させてゆく予定である。

◎出版物による業績

〔論文〕

馬場幸栄

2017 「臨時緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会——天文学者・木村栄による宝生流謡曲サークル創設の経緯と背景」『比較日本学教育研究センター研究年報』13：123-126。

〔その他〕

馬場幸栄

2016 「緯度観測事業120周年に向けて——水沢における歴史資料の整理と公開」『国立天文台ニュース』281：30。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年11月8日～11月10日 「小規模図書館でもできるガラス乾板写真の保存と活用」（共同発表 石川利昭）第18回図書館総合展ポスターセッション、パシフィコ横浜

2016年12月13日 「緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会」第11回国際日本学コンソーシアム「はたらく／あそぶ」日本文化部会、お茶の水女子大学

・研究講演

2017年3月4日 「ガラス乾板写真とともに語り継ぐ 緯度観測所を支えた人々」科研費「国立天文台水沢収蔵資料から読み解く緯度観測所120周年」奥州宇宙遊学館

・展示

2016年10月19日～10月21日 「緯度観測所乾板写真展」日本測地学会、奥州市民文化会館

2017年3月4日～3月5日 「ガラス乾板写真とともに語り継ぐ 緯度観測所を支えた人々」科研費「国立天文台水沢収蔵資料から読み解く緯度観測所120周年」奥州宇宙遊学館

◎調査活動

・国内調査

2016年11月4日～11月7日—国立天文台水沢 VLBI 観測所（緯度観測所の資料調査）
2017年1月6日～1月9日—国立天文台水沢 VLBI 観測所（緯度観測所の資料撮影）
2017年2月28日～3月6日—国立天文台水沢 VLBI 観測所（緯度観測所の資料調査、聴き取り調査）
2017年3月17日～21日—国立天文台水沢 VLBI 観測所（緯度観測所の資料調査、聴き取り調査）
2017年3月30日～3月31日—京都大学宇宙物理学教室（緯度観測所関連資料の撮影）

・海外調査

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

自然科学研究機構国立天文台平成28年度客員研究員、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター平成28年度研究協力員

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

白百合女子大学「キリスト教と英米文化」「グローバル文化研究J」

児玉茂昭 [こだま しげあき] ————— 研究員

【学歴】 京都大学文学部卒（1994）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1997）、東京大学大学院文学研究科博士課程単位取得（2000）【職歴】 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤研究員（2002）、日本学術振興会特別研究員（2003）、長岡技術科学大学産学官連携研究員（2006）、アジア太平洋無形文化遺産研究センターアソシエイトフェロー（2011）、国立民族学博物館外来研究員（2016）、同プロジェクト研究員（2016）【学位】 博士（文学）（京都大学2003）【専攻・専門】 言語学【所属学会】 日本言語学会、日本歴史言語学会

【主要業績】

[論文]

児玉茂昭

2006 「文字を持たない言語と計算機」塩原朝子・児玉茂昭編『表記の習慣のない言語の表記』pp.303-320, 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

2013 『『やさしい日本語』作成支援システムとコーパス検索システム』庵功雄ほか編『『やさしい日本語』は何を目指すか——多文化共生社会を実現するために』pp.157-175, 東京：ココ出版。

Kodama, S.

2013 Latin Metals. *Tokyo University Linguistics Papers (TULIP)* 33: 133-138.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「日本財団助成手話言語学研究部門（みんぱく手話部門）」を事例とした学術研究事業の運営手法の研究

・研究の目的・内容

本研究では、「日本財団助成手話言語学研究部門（みんぱく手話部門）」を事例とし、その中で、手話言語に対する研究者によるアプローチの変遷、手話言語研究への手話話者の関わり方の音声言語話者一般との類似点と相違点等を観察し、それによって、特に、手話を媒介とした文化の調査研究に従事するときに必要な研究倫理や方法について考察することを目的とした。

このために、2016年9月に開催されたRA協議会第2回年次大会に参加して、研究コーディネート全般に関する最新の動向を収集するとともに、同月に開催された「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2016」の準備に携わり、また終了後は、2017年度に実施される同フェスタの準備と、これまでみんぱく手話部門で開催された諸会合の情報発信の準備を行った。

・成果

上記活動を通じて研究コーディネート全般についての認識を深めるとともに、みんぱく手話部門における研究

成果を広く発信するための準備を整えた。

彭 宇潔 [ほう うけつ] ————— 研究員

【学歴】北京外国語大学日本語学部卒業（2008）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻5年一貫制博士課程修了（2016）【職歴】京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員（2016-）、国立民族学博物館学術資源研究開発センタープロジェクト研究員（2017-）【学位】修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2012）、博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2016）【専攻・専門】文化人類学、狩猟採集民研究、アフリカ地域研究【所属学会】日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際狩猟採集民学会、英国王立人類学協会、国際民族生物学会

【主要業績】

[単著]

彭 宇潔

2017 *Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter-Gatherers in Southeastern Cameroon*. Kyoto: Shokado.

[著書]

彭 宇潔

2016 Transmission of Body Decoration among the Baka Hunter-Gatherers. In H. Terashima and Barry S. Hewlett (eds.) *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives*, pp.83-93. Tokyo: Springer.

[論文]

彭 宇潔

2016 The Evidence of Proximity: Tattoo Practices of the Baka in Southeastern Cameroon. *Hunter Gatherer Research* 2(1): 63-95.

【受賞歴】

2012 英国王立人類学協会主催 Body Canvas Photography Competition「Runner-up 賞」

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) アフリカ熱帯雨林地域の狩猟採集民の身体装飾に関する相互行為論的分析
- 2) アフリカ狩猟採集民における道探索に関する人類学的研究

・研究の目的・内容

- 1) バカはアフリカのコンゴ盆地熱帯雨林に暮らすピグミー系狩猟採集集団の一つであり、非階層的な社会としてよく知られている。彼らの皮膚には数多くの傷跡が見られる。それらは伝統的な治療や日常的な怪れによって残された傷跡のほか、装飾のために残した刺青もある。本研究では、バカたちに見られる刺青実践に関する民族誌的な記述を提供して、施術の場面に見られるバカの相互行為を分析し、刺青実践がバカ社会における社会文化的意味を明らかにする。
- 2) 本研究において、バカにおいて彼らの生業活動にかかわる「森を歩くこと」に対する参与観察といった現地調査と並行して、文献資料の調査も実施する。アフリカ南部のカラハリ砂漠に暮らす狩猟採集民サンとも比較しながら、バカの「森を歩くこと」にまつわる環境の知覚と利用の特徴を、相互行為論的・行動学的な分析と歴史的なアプローチを通じて明らかにする。

・成果

- 1) 聞き取り調査やバカの人々との日常会話によると、彼らは常に、刺青はおしゃれのためのものだと主張し、さらにそれは「女性のファッション」だと説明する。しかし、彼らの行動を分析した結果、彼らが語る施術の動機と、施術（後）実践に見られる不一致は、刺青の象徴的な意味がバカの施術時の言動と必ずしも連関していないことを示している。したがって、バカ社会における刺青の施術は、結果としての刺青の模様の統一よりも、個々人の施術への参加が重要だと考えられる。そうした刺青の施術過程によって、身体

に刻み込まれた刺青は、バカ社会における個人間の親密性を反映する証拠となる。

- 2) カラハリ砂漠と比べて、カメルーン東南部は樹木や草などの障害物が多いため、バカ・ピグミーたちは森を歩くときに、坂や水場などの地形をランドマークとして利用していることがわかった。また、集団行動時に屡々個々人が分散して行動するが、互いの位置や状態を確認するために常に音声を利用していることが明らかになった。

◎出版物による業績

[単著]

彭 宇潔

- 2017 *Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter-Gatherers in Southeastern Cameroon*. Kyoto: Shokado.

[著書]

彭 宇潔

- 2016 Transmission of Body Decoration among the Baka Hunter-Gatherers. In H. Terashima and Barry S. Hewlett (eds.) *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives*, pp.83-93. Tokyo: Springer.

[論文]

彭 宇潔

- 2016 「Multimodal interaction among the African hunter-gatherers: the case of tattooing.」『電子情報通信学会技術研究報告（ヒューマンコミュニケーション基礎）』116(185)：1-5。
2016 The Evidence of Proximity: Tattoo Practices of the Baka in Southeastern Cameroon. *Hunter Gatherer Research* 2(1): 63-95. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年5月8日 「Body modification and indigenous discrimination: the case of Baka Pygmies in southeastern Cameroon」IUAES 2016 Inter-Congress, Dubrovnik, Croatia
2016年6月4日 「カメルーン東南部に暮らす狩猟採集民バカの刺青実践——施術場面に見られる相互行為に注目して」日本アフリカ学会第53回学術大会、日本大学、静岡
2016年8月2日 「The fashionable tattoo among the Baka hunter-gatherers」15th International Society of Ethnobiology, Makerere University, Kampala, Uganda
2016年8月19日 「Multimodal interaction among the African hunter-gatherers: the case of tattooing」ヒューマンコミュニケーション基礎研究会（HCS）、立命館大学朱雀キャンパス、京都
2016年11月14日 「バカ・ピグミーの集団採集活動にみられる音での相互行為」コミュニケーションの自然誌例会、京都大学、京都

・広報・社会連携活動

- 2016年11月22日 『遂夢他郷重慶人（Chongqing Flyers）』第359回、重慶市テレビ局

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける景観形成の自然誌」（研究代表：京都大学・高田明）研究協力者、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）「パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」（領域代表者：東京大学・西秋良宏）計画研究B01「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：国立民族学博物館・野林厚志）研究協力者

拠点研究員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

辛嶋博善 [からしま ひろよし] ————— 研究員

1974年生。【学歴】慶應義塾大学文学部史学科民族学考古学専攻卒業（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程アジア第一専攻地域研究コース修了（2001）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2008）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー（2008-2013）、北海道大学スラブ研究センター非常勤研究員（2013-2014）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員（2014-2015）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター地域比較共同研究員（2015- ）【学位】博士（学術）（東京外国語大学 2011）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、生き物文化誌学会、IUAES（International Union of Anthropological and Ethnological Sciences）

【主要業績】

[博士論文]

辛嶋博善

2011 『衝突する未来——ポスト社会主義期におけるモンゴル国ヘンティール県ムルン郡の牧畜社会を事例として』東京外国語大学大学院地域文化研究科提出博士学位申請論文。

[論文]

辛嶋博善

2016 「拡張する柔軟性——モンゴル国現代牧畜社会における居住単位のサイズと構成の変遷」『文化人類学』81(1)：44-61。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴル国における牧畜社会の変化に関する研究

・研究の目的、内容

本研究はモンゴル国の牧畜社会がどのように変化しているのかを明らかにすることが目的である。これまでの研究は特にモンゴルにおける社会主義体制の崩壊後の混乱、停滞から牧畜社会が市場経済と接合してきたかに着目してきたが、現在では特に世代交代のような長期的なサイクルによる変化を視野に入れて行っている。

・成果

成果として、①居住単位の変化に関する研究、②牧夫たちのステータスの変化に関する研究が挙げられる。

①モンゴル国の現代の牧畜社会において、居住単位が家畜の増加などによって分裂していくことはよく知られているが、個々の居住単位が縮小するとともに、世帯の構成員が減少した過程を観察するとともに、分裂した個々の居住単位の成員が相互の関係を維持して協業を行っていることを明らかにした。また、こうした協業が旧来の居住単位で行われていた隣家間の協業を少なくとも部分的に代替していると分析した。

②社会主義体制の崩壊後の市場経済への混乱期に、牧畜社会に流入した少年たちが牧夫として草原に流入し、やがて各自の家庭を持つに至った過程を、企業家論を援用しながら分析を行った。

◎出版物による業績

[論文]

辛嶋博善

2016 「拡張する柔軟性——モンゴル国現代牧畜社会における居住単位のサイズと構成の変遷」『文化人類学』81(1)：44-61。

[その他]

辛嶋博善

2016 「モンゴルの記憶の起点となる料理——ヤギのボードク」『月刊みんぱく』40(11)：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2016年6月27日 「モンゴル研究から北東アジア地域研究への『接合』——牧畜民社会の研究を軸として」第2回北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点（月例会）、国立民族学博物館
- 2017年2月17日 （趣旨説明）「モンゴル牧畜社会の持続可能性」人間文化研究機構北東アジア地域研究推進事業国立民族学博物館拠点 第2回国際公開セミナー、国立民族学博物館
- 2017年2月25日 「世界史の中のモンゴル牧畜民——カシミヤの生産と流通」第9回北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点（月例会）、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年8月16日 ‘Collision and “The point of compromise” in a Mongolian pastoralists’ society.’ The 11th International Congress of Mongolists, Ulaanbaatar, Mongolia.
- 2016年9月26日 ‘Collision and “The point of compromise” in a Mongolian pastoralists’ society.’ Around the Changbai mountains: A seminar on the narratives of the ethnic groups in Northeast Asia, Vladivostok, Russia.
- 2016年10月29日 「『遊』動する暮らし」平成28年度武庫川女子大学生活美学研究所第2回（通算156回）定例研究会、武庫川女子大学、兵庫
- 2017年2月16日 （趣旨説明）‘Mongol ba “entrepreneurship”」（『モンゴルとアントレプレナーシップ』）、『モンゴル国におけるアントレプレナーシップ』勉強会、国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点拠点構成員、科学研究費補助金（基盤研究（C））「ポスト社会主義国における経営主体のアントレプレナーシップに関する文化人類学的研究」（研究代表者：後藤正憲）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

群馬大学非常勤講師、「文化人類学」、前橋工科大学非常勤講師、「文化人類学」

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点

黒田賢治 [くろだ けんじ]——— 研究員

1982年生。【学歴】北海道大学文学部人文科学科卒（2005）、北海道大学文学研究科退学（2006）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科修了（2011）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC）（2008-2011）、京都大学科学研究員（2011-2012）、京都大学東南アジア研究所特別研究員（2011-2012）、カリフォルニア大学中近東研究所客員研究員（2011-2012）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2012-2015）、広島大学総合科学研究科研究員（2015-2016）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員（2016）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院 2011）【専攻・専門】中東地域研究、イスラーム研究【所属学会】宗教と社会学会、日本文化人類学会、日本中東学会、IUAES

【主要業績】

[単著]

黒田賢治

2015 『イランにおける宗教と国家——現代シーア派の実相』京都：ナカニシヤ出版。

[論文]

黒田賢治

2010 「ハーメネーイ指導体制下における法学界支配の構造——ハウゼの運営組織改革と奨学金制度を中心に」『日本中東学会年報』26：75-97。

[学位論文]

黒田賢治

2011 『現代イランにおけるイスラーム国家と法学界の研究』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科。

【2016年度の活動報告】

◎出版物による業績

[その他]

黒田賢治

2016 「ブックレビュー 小杉泰著『9.11以後のイスラーム政治』」『宗教と社会』22:157。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月27日 「中東・イスラームをめぐる人類学的研究と動向調査の課題」第1回「現代中東・イスラームの人類学」研究会、国立民族学博物館

2016年12月17日 'Praying to God and Playing Karate: A Study on Indigenization of Japanese Sports in Contemporary Iran.' Workshop "Global Flow of Cultural Knowledge and their Afterlives: Between Japan and the Middle East. National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年9月16日 'Towse'e-ye Ertebātāt-e Tārikhī beyn-e Īrān va Jāpon dar Avāyel-e Dowre-ye Modern: Īrānshenāsī dar Jāpon.' Jalase-ye Mo'affal-e Elmī beyn al-Melali-ye Anjomān-e 'Elmī-ye Dāneshgāh-e Eṣfahān, Dāneshgāh-e Eṣfahān

2016年11月19日 「イランにおける殉教文化の新展開——聖地防衛としてのシリア紛争」『第2班「イスラーム中道派研究班」研究会「現代中東の地殻変動とその眺望：政治・社会・思想の動態的連関を考察する」』京都大学

◎調査活動

・海外調査

2016年9月9日～10月1日—イラン、イスラーム共和国（テヘラン市、エスファハーン市における空手とヨーガの調査及び文化資源研究プロジェクト経費による資料収集）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

立命館大学国際関係学部非常勤講師「中東研究Ⅱ-R」

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

竹村嘉晃 [たけむら よしあき]———研究員

【学歴】日本大学芸術学部演劇学科卒（1995）、沖縄県立芸術大学大学院音楽芸術研究科音楽学専攻修士課程修了（2001）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2012）【職歴】独立行政法人日本学術振興会特別研究員（DC2）（2005）、大阪大学国際企画推進本部特任研究員（2008）、和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師（2009-2013）、国立民族学博物館外来研究員（2010-2014）、奈良大学社会学部非常勤講師（2011-2012）、国立民族学博物館共同研究員（2011-2014）、関西大学文学部非常勤講師（2012-）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（2014）【学位】博士（人間科学）（大阪大学大学院 2012）、修士（人間科学）（大阪大学大学院 2003）、修士（音楽学）（沖縄県立芸術大学大学院2001）【専攻・専門】芸能人類学、南アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、舞踊学会、民族藝術学会、日本スポーツ人類学会、東洋音楽学会、The Congress on Research in Dance

【主要業績】

[単著]

竹村嘉晃

2015 『神霊を生きること、その世界——南インド・ケーララ社会における「不可触民」の芸能民族誌』東京：

風響社。

[論文]

竹村嘉晃

- 2015 「踊る現代インド——グローバル化の中で躍動するインドの舞踊文化」三尾稔・杉本良男編『現代インド 6 環流するインドの文化と宗教』pp.159-179, 東京:東京大学出版会。
- 2014 「インド・ケーララ州出身者たちの神霊を介した故地とのつながり」細田尚美編『湾岸アラブ諸国における移民労働者——「多外国人国家」の出現と生活実態』pp.229-250, 東京:明石書店。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

南インド社会における身体文化とその担い手たちの社会的世界の変容に関する研究及びダンス・エスノグラフィーに関する理論的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、南インドのケーララ州北部に伝わるテイヤム祭儀を伝統的職業として担う不可触民の実践者たちを照射し、現代社会の動態や祭儀を取り巻く巨視的な位相と、彼らの生計活動や社会とのつながりといった微視的な要素がいかに実践レベルと関係し、影響を与えているのかを彼らの生活世界に足場をおく民族誌的記述から解明することにある。同時に人類学的視点と舞踊・芸能研究的観点を融合させた方法論のもとで、市場経済原理に対する実践者たちの適応戦略の実態を調査し、彼らが芸芸や社会的形態を維持しながらもその実践を創発・変容させていく過程を実践レベルから捉える芸能民族誌の新たな方法論を提示することも試みる。また、舞踊関連の科目を有する欧米の高等教育機関において一定の地位を確立しているダンス・エスノグラフィー（舞踊民族誌）という方法論を対象に、近年の研究動向を整理しながらその有益性を検討し、南アジアの芸能に関する人類学及び芸能研究への援用の可能性を探る

・成果

シンガポールのインド系コミュニティにおいて、インドの音楽・芸能がどのような歴史的背景のもとで発展してきたのか、その動態に関する考察を文献研究と現地調査から進めた。とりわけ、シンガポールのインド系移民の子女たちの間で古典舞踊のバラタナーティヤムが受容されていく過程において、各種芸術団体や教育機関が果たした役割の把握と、シンガポールに流入したインド映画の受容動向とその影響について着目した。2度の現地調査をシンガポールで実施し、1960年代から70年代にかけて南インドのチェンナイで製作されたタミル語映画がシンガポールでも同時代的に上映公開されており、かつ70年代以降にはそれらの作品がテレビで再放送されていたことが明らかになった。また、インタビュー調査を通じて、こうした作品の中にみられた舞踊シーン（バラタナーティヤム）が当時のインド系移民の子女たちが舞踊を習うきっかけとして大きく影響を及ぼしていたことが明らかになった。

◎出版物による業績

[論文]

Takemura, Y.

- 2017 Good Life and Traditional Occupations: Gulf Money, Social Mobility, and ritual Practices in Kerala, South India. 2015 RINDAS International Conference, Rethinking Religion, Ethics and Political Economy in India and Sri Lanka: Critical Perspectives from Japan, pp.15-25.

[その他]

竹村嘉晃

- 2016 「コーヒーに恋し始めた『チャイの国インド』」『Vesta 食の文化誌』103: 28-29。
- 2016 「フィールドとの距離——甥っ子の『晴れ舞台』と電子メディア（カンヌール）」『インド通信』454: 1-2。
- 2016 「芸能のグローバルな伝播・発展に関する研究動向」『民博通信』155: 25。
- 2017 「書評: 吉田ゆか子『バリ島仮面舞踊劇の人類学——人とモノが織りなす芸能』」『舞踊学』39: 29-31。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年8月6日 「神霊祭祀が具現化するインド民俗学の視座」現代民俗学会第32回研究会『フォーク・メディ

- アとフォーク・コミュニケーション——〈いくつもの民俗学〉と現代民俗学』神戸大学
 2016年12月10日 「テクノロジーと芸能——シンガポールのインド舞踊をめぐるメディア・技術・メディアと芸能」 科研 H28年度第2回研究会、京都市男女共同参画センター
 2017年1月25日 'The Transmission and Development of Indian Dance in Singapore in the 20th Century.' South Asian Studies Programme Seminar Series, Faculty of Arts & Social Sciences, National University of Singapore

◎社会活動・館外活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業 現代インド地域研究国立民族学博物館拠点 拠点構成員、国立民族学博物館、若手共同研究「演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」（代表者：吉田ゆか子）共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（B））「現代インドにおけるポスト開発：媒介と協同性のポリティクス」（研究代表者：池亀彩）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・非常勤講師

立命館大学産業社会学部非常勤講師、「スポーツ人類学」「スポーツ方法実習」、関西大学文学部非常勤講師、「南アジア・内陸アジア論1・2」

中川加奈子 [なかがわ かなこ] ————— 研究員

【学歴】 関西学院大学社会学研究科博士課程修了（2007）【職歴】 外務省在ネパール日本国大使館 専門調査員（2007-2010）、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科日本学術振興会特別研究員（2014-2016）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター国立民族学博物館南アジア研究拠点拠点研究員（2016）【学位】 博士（社会学）（関西学院大学）【専攻・専門】 文化人類学、南アジア地域研究、肉食の比較民族誌【所属学会】 日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本社会学会、環境社会学会

【主要業績】

〔単著〕

中川加奈子

2016 『ネパールでカーストを生きぬく——供犠と肉売りを担う人びとの民族誌』 京都：世界思想社。

【2016年度の活動報告】

◎出版物による業績

〔論文〕

中川加奈子

2017 「国家的変動への下からの接続——カドギのカースト表象の展開から」（第3章分担執筆）名和克郎編『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相——言説政治、社会実践、生活世界』 pp.131-163, 東京：三元社。〔査読有〕

〔その他〕

中川加奈子

2016 「ネパールで水牛肉を加工し、売り、食する」『月刊みんぱく』40(9)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月28日 「アイデンティティの狭間からの『カースト』再創造——ネパールで肉売りを担う人びとをめぐる動態」日本文化人類学会第50回大会、南山大学名古屋キャンパス〔査読有〕。

2016年7月27日～7月29日 'Shifts in the Strategy of Caste-Representation: Links between Commercial Negotiations in the Meat Markets and Identity Politics', The 5th Annual Kathmandu Conference organized by Social Science Baha, Association for Nepal and Himalayan Studies, Britain-Nepal Academic Council, Centre for Himalayan Studies-CNRS & Nepal Academic Network (Japan), Hotel Shankar〔査読有〕

2016年10月8日 「食肉をめぐる価値の混交とソーシャルモビリティ——カトマンズの食肉加工業者を事例に」
MINDAS2016年度第2回合同研究会、国立民族学博物館

2017年2月3日 'The Social Mobility Mediated by Meat Market: Struggles of Caste Ordained Butchers in Nepal' 2016年度 RINDAS 国際会議「南アジアにおけるダリト問題」(科研(B)「ローカル・リーダーの登場と下層民の台頭からみる現代インド社会の変容」共催) 龍谷大学深草キャンパス

◎社会活動・館外活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業南アジア地域研究国立民族学博物館拠点構成員

客員教員

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

Narum, Paul [ネルム、ポール]———准教授

【学歴】プリンストン大学卒(1982)、東京大学卒(1985)、【職歴】Newsweek Japan 編集顧問(1985)、横浜市立大学非常勤職員(1994)、東京工業大学非常勤職員(2009)、獨協大学非常勤職員(2010)、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員准教授(2015)【学位】M. A.(東京大学 1985)

■先端人類科学研究部・日本財団助成手話言語学研究部門(附置)

原 大介 [はら だいすけ]———教授

1965年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒業(1989)、国際基督教大学大学院教育学研究科修了(1991)、シカゴ大学大学院言語学科修了(2003)【職歴】愛知医科大学看護学部専任講師(2000)、愛知医科大学看護学部助教授(2004)、愛知医科大学看護学部教授(2007)、豊田工業大学工学部教授(2010)【学位】博士(言語学)(シカゴ大学大学院、2003)【専攻・専門】音韻論、形態論、手話言語学【所属学会】日本言語学会、日本手話学会、電子情報通信学会

【主要業績】

[論文]

Hara, D.

2016 An information-based approach to the syllable formation of Japanese Sign Language. In M. Minami (ed.) *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, pp.457-482. Boston, MA: GRUYTER MOUTON.

原 大介

2010 「手話言語研究はどうあるべきか——捨象と抽象」『手話学研究』19: 29-41。

2009 「手話」中島平三監修・今井邦彦編『言語学の領域II(シリーズ朝倉「言語の可能性」2)』, pp.72-98, 東京: 朝倉書店。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語における音節構造の成り立ちとその適格性条件に関する研究

・研究の目的、内容

日本手話では、「手型」、「手の位置」、「手の動き」の3つのカテゴリに属する要素とその他いくつかのマイナーな要素が音素として機能する。各カテゴリにはそれぞれ有限個の音素が存在するが、カテゴリ間の音素結合は自由ではなく数学的に可能な組み合わせの多くが不適格な音節と判定される。本研究では、どのような音素結

合が適格な日本手話音節形成を可能にするのか（すなわち日本手話の音素配列論）を研究することを目的とする。日本手話の音素配列を論じるには、日本手話において認可されている音素同士の結合であるにもかかわらず不適格であると判断される音節をできるだけ多く収集する必要がある。当該の研究期間中に、日本手話母語話者に研究協力を依頼し、不適格音節の収集を行い、それらを音節構成要素に分解した後、記号化して記録する（コーディング作業）ところまで行う計画である。

・成果

日本手話母語話者約20名に、全日本ろうあ連盟が出版する「わたしたちの手話 あたらしい手話」シリーズに掲載されている約2,500音節に関して適格性の判定を依頼した。その結果、約600音節が不適格音節候補としてリストアップされた。これらの音節を手型、位置、動き、掌の方向、接触位置等の構成要素に分解し、記号化してエクセルファイルに記録した（コーディング作業）。ついで、これらの音節の適格性／不適格性を確定させるため、日本手話母語話者1名の協力を得て動画撮影を行い、その動画を、日本手話母語話者10名に見てもらい、音節の適格性判定を行った。その結果、約200音節を不適格音節と認定した。

これらの研究の一部は以下の研究費の助成を受けている。

1. 文部科学省科学研究費（基盤研究（C））2015年度～2017年度（予定）「機械学習を援用した日本手話音節の適格性の解明」 研究代表者：原大介（課題番号：15K02536）
2. 財団法人大幸財団 第5回人文・社会科学系学術研究助成、2016年9月～2018年3月（予定）「日本手話音節の適格性条件の解明——言語学と言語情報処理からのアプローチ」 研究代表者：原大介
3. 豊田工業大学研究促進費 A 2016年7月～2017年3月「機械学習を援用した日本手話音節適格性解明の研究に用いるデータ収集およびデータの記号化」 研究代表者：原大介
4. 文部科学省科学研究費（基盤研究（B））2016年度～2018年度（予定）「学術手話通訳養成システムの開発——認知・言語的アセスメントに基づいたアプローチ」 研究代表者：中野聡子（課題番号：16H03813）
5. 文部科学省科学研究費（挑戦的萌芽研究）2015年度～2016年度「コミュニティ通訳者を対象とした学術手話通訳者養成プログラムの開発」 研究代表者：中野聡子（課題番号：15K13252）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2016年7月8日～7月9日（八幡悟史・原大介・三輪 誠）「能動学習による効率的な日本手話音節の適格性の解明」電子情報通信学会リアルタイムコミュニケーション言語（LARC）時限研究専門委員会第1回研究会、ホテルリゾーピア熱海
- 2016年9月17日～9月19日（中野聡子・原大介・金澤貴之ほか）「ろう通訳の訳出表現に関する予備的検討——国語の授業における聴覚特別支援学校教員の手話表現との比較」日本特殊教育学会第54回大会、新潟コンベンションセンター・新潟日報メディアシップ
- 2016年12月11日～12月12日「日本手話の語（音節）の適格性調査のためのデータ・コーディング方法について」電子情報通信学会リアルタイムコミュニケーション言語（LARC）時限研究専門委員会 第2回研究会、豊田工業大学

・広報・社会連携活動

- 2016年10月22日「手話言語学の始まり」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！』』国立民族学博物館
- 2016年10月29日「手話言語の音素とその組み合わせ」「手話言語の形態素とその組み合わせ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！』』国立民族学博物館
- 2016年11月5日「手話言語の動詞の種類とその成り立ち」「手話言語の文のつくり&まとめ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！』』国立民族学博物館
- 2016年12月22日「手話失語症」手話言語特別講座、大阪教育大学
- 2017年2月24日「手話失語症」手話言語特別講座、大阪教育大学

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（C））「機械学習を援用した日本手話音節の適格性の解明」研究代表者、財団法人大幸財団第5回人文・社会科学系学術研究助成「日本手話音節の適格性条件の解明——言語学と言語情報処理からのアプローチ」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「学術手話通訳養成システムの開発——認知・言語的アセスメントに基づいたアプローチ」（代表者：中野聡子）研究分担者、科学研究費助成事

業（挑戦的萌芽研究）「日本手話と台湾手話の歴史変化の解明——歴史社会言語学の方法論の確立に向けて」（代表者：相良啓子）研究分担者、科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「コミュニティ通訳者を対象とした学術手話通訳者養成プログラムの開発」（代表者：中野聡子）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

東京外国語大学「言語学特殊研究」（集中講義）、東北大学「手話の世界と世界の手話言語☆入門」（東北大学全学教育リレー講義）、関西学院大学「手話言語学基礎」、岐阜聖徳学園大学「日本手話」（集中講義）

■文化資源研究センター

宇陀則彦 [うだ のりひこ] ————— 准教授

【学歴】図書館情報大学図書館情報学部卒（1989）、図書館情報大学大学院図書館情報学研究科修士課程修了（1991）、筑波大学大学院博士後期課程工学研究科修了（1994）【職歴】図書館情報大学図書館情報学部助手（1994）、図書館情報大学総合情報処理センター講師（1999）、図書館情報大学図書館情報学部助教授（2001）、筑波大学図書館情報学系助教授（2002）、筑波大学図書館情報メディア系准教授（2011）【学位】博士（工学）（筑波大学 1994）【専攻・専門】図書館情報学・知識情報学【所属学会】情報処理学会、情報知識学会

【主要業績】

[共著]

宇陀則彦・三森弘

2015 「ワークプレイスとしてのラーニング・コモンズ」溝上智恵子編著『世界のラーニング・コモンズ 大学教育と「学び」の空間モデル』pp.39-57, 東京：樹村房。

[論文]

常川真央・松村敦・宇陀則彦

2013 「日本十進分類法を用いた類似読者発見手法」『情報メディア研究』12(1)：42-51。

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-265。

【受賞歴】

2007 情報知識学会論文賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化資源の人文社会情報学的研究——高度情報化とデータベースの連携

・研究の目的、内容

民博のもつファクトデータベースと研究成果としてのリポジトリならびに図書雑誌目録を有機的に統合した「みんなく探検システム」の設計を行う。また、健聴者、障害者、高齢者など、ターゲットを絞った「みんなく学習プログラム」の設計を行う。これらは人間文化研究機構内の情報資源の利用も視野に入れる。「みんなく探検システム」については、まずはデータベースの内容分析を行い、知識の連携可能性を探索。次に、メタデータレベルでデータの照合を行い、データベース全体の構造分析を行う。最後に図書館におけるディスカバリサービスの考え方をもとに、「みんなく探検システム」の機能設計を行う。「みんなく学習プログラム」については、筑波大学で実施している文献探索ゲームを博物館に应用することを考える。また、展示場を利用者視点でビデオ撮影し、そのビデオを様々な利用者層（若年、高齢者、障害者等）に見てもらうことで、展示の意図どおりに見えているどうかを検証する。

・成果

民博が公開しているデータベースについて分析を行い、関連する情報を Linked Open Data (LOD) で記述することによりデータベース間の知識連携が行える可能性を指摘した。また、平成23年度に民博で開発された広報用 PC アプリケーションソフト「みんなく標本コレクター」を参考に、「みんなく探検システム」と「みんなく

学習プログラム」を実空間に展開する提案を行った。具体的には、博物館資料と図書館資料の両方が充実している民博の特長を活かし、モノ中心の展示ではなく、ドキュメント中心に展示を行う新しい展示手法「ドキュメント展示」の確立である。ドキュメント展示とは、図書、雑誌、ポスター、パンフレット、図録、データベース等、モノに関して記述した様々なドキュメントをモノと組み合わせて展示することである。ドキュメント展示によって博物館資料への理解を深める効果が期待できるとともに、ドキュメント自体を展示物としてみなすという新しい視点を博物館と図書館の両方にもたらすことができる。

◎出版物による業績

[論文]

李 奎皇・三森 弘・宇陀則彦

2016 「グループ知的活動の生産性と満足度の評価——立位と座位の比較」『図書館情報メディア研究』13(2):15-22。

[その他]

Uda, N.

2016 Development of a new information literacy education: A bibliographic search game. *2016 ALIEP Proceedings of the 7th International Conference on Asia-Pacific Library and Information Education and Practice*, pp.434-446.

鈴木啓史・松村敦・宇陀則彦

2016 「図書館における資料探索行動に着目したセレンディピティのある情報推薦システムの提案」『第8回 Web インテリジェンスとインタラクション研究会』pp.27-28。

青山優里彩・松村敦・宇陀則彦

2016 「メタ認知と感情に着目した対話による情報検索支援」『情報知識学会』26(2):233-238。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」連携研究員及び国立歴史民俗博物館共同研究員

特別客員教員

■先端人類科学研究部・社会環境研究部門

縄田浩志 [なわた ひろし] ————— 教授

【学歴】早稲田大学第一文学部史学科東洋史学専攻卒業（1992）、ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所民俗学科ディプロマ課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻博士課程修了（2003）【職歴】鳥取大学乾燥地研究センター講師（2004）、国立民族学博物館特別客員准教授（2007）、総合地球環境学研究所客員准教授（2007）、鳥取大学乾燥地研究センター准教授（2007）、総合地球環境学研究所准教授（2008）、秋田大学新学部創設準備担当教授（2013）、秋田大学国際資源学部教授（2014）、秋田大学大学院国際資源学研究科教授（2016）【学位】人間・環境学博士（京都大学 2003）【専攻・専門】資源管理学、文化人類学、社会生態学、地域研究（中東・アフリカ）、乾燥地研究、環境影響評価、村落開発、人間・家畜関係論【所属学会】日本沙漠学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本中東学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[共編著]

縄田浩志・篠田謙一

2014 『砂漠誌——人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』神奈川：東海大学出版部。

[編著]

Nawata, H. (ed.)

2013 *Dryland Mangroves: Frontier Research and Conservation*. (Arab Subsistence Monograph Series 2) Kyoto: Shokado.

2015 *Human Resources and Engineering in the Post-oil Era: A Search for Viable Future Societies in Japan and Oil-rich Countries of the Middle East* (Arab Subsistence Monograph Series 3) Kyoto: Shokado.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東における自然資源の管理と物質文化の変容に関する研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、アラビア半島の沙漠のオアシスでおよそ半世紀前に片倉もとこ（文化人類学者／地理学者、本館名誉教授）が実施・収集した（1968-2008）現地調査資料（写真・地図・スケッチを含む）のデータベース作成による学術情報基盤形成の作業を通じたデータの再検証を軸として、中東の5つの異なるオアシス（アラビア半島、サハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、イラン）を比較検討することにより、自然資源の管理方法と物質文化の変容の動態を明らかにすることにある。

現代の土地利用、生業形態、水管理と比較しつつ、グローバル化後の生活空間の変動を具体的に追って行くことにより、特に中東地域においてドラスティックな現象として観察される生活様式や資源利用形態の「世代間ギャップ」を浮き彫りにしつつ、未来世代にとっての研究資料としての活用を地域住民との共同作業により行い、文化資源と知識資源の共有が可能となる。

なお、現地調査と共同研究、また研究成果の発信に関しては、以下の関連プロジェクトと連携しながら推進する。

- (1) 人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究「現代中東地域研究推進事業」(国立民族学博物館中心拠点代表者：西尾哲夫、秋田大学国際資源学部拠点研究代表者：縄田浩志、H28～H33（予定）)
- (2) 科学研究費助成事業基盤研究（B）(海外学術調査)「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」(研究代表者：縄田浩志、H28～H31（予定）)
- (3) 片倉もとこ記念沙漠文化財団「アラムコ・片倉沙漠文化協賛金」(評議委員会議長：片倉邦雄、H27～H31)
- (4) 国立民族学博物館共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」(申請者：縄田浩志、H28～H31（予定）)

・成果

①片倉もとこ記念沙漠文化財団所蔵資料を財団と協力してデータベース化を進め、最終的には民博の片倉もとこ収集資料データベースと統合し、現地社会や海外研究者との情報共有化を図るために、民博の所蔵品の実見を開始した。②H31年度における国立民族学博物館企画展ならびに巡回展の準備として、片倉もとこ記念沙漠文化財団また横浜ユーラシア文化館との共催の方向性を定めた。

また新たに以下の関連プロジェクトの連携を開始することができた。

- (1) 国立民族学博物館共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」(申請者：縄田浩志、H28～H31（予定）)
- (2) 【今年度継続申請予定】新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」(課題番号16H06281、中核機関：国立民族学博物館)の支援による資料整理「地域研究画像デジタルライブラリ（略称 DiPLAS）」

◎出版物による業績

[論文]

Nawata, H.

2016 Indigenous beliefs and divine conceptions of Red Sea black coral: A case study of the traditional fishery, Sinai Peninsula, Egypt. *Proceedings of the 13th International Coral Reef Symposium*, pp.422-439. Honolulu: International Society for Reef Studies. [査読有]

Matsuo, N., R. Banjo, T. Teraminami, A. Afele, A. El-Shaffai, A. Nakashima, H. Nawata and K. Yoshikawa.

2016 Branch Morphology of a Mangrove (*Avicennia marina* (Forsk.) Vierh) Growing in a Per-Arid

Area on the Egyptian Red Sea Coast Regulates Water Use of Its Leaves. *Journal of Arid Land Studies* 26(3): 91-94. [査読有]

◎口頭発表展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月25日 「紅海産黒サンゴのお数珠としての利用」国際シンポジウム『エジプト海辺の資源利用と物質文化——地中海沿岸と紅海沿岸の比較から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月19日 'Indigenous Classification and Utilization of the Red Sea Black Coral.' 13th International Coral Reef Symposium, Honolulu, Hawaii USA.

2016年9月13日 「国際資源学としての教育研究の試み：地域研究、文化人類学、村落開発の立場から」2016資源・素材学会秋季大会、岩手大学

中生勝美 [なかお かつみ] ————— 教授

1956年生。【学歴】中央大学法学部法律学科卒（1979）、明治大学法学研究科博士前期課程修了（1981）、上智大学文学研究科博士後期課程満期退学（1989）【職歴】外務省嘱託専門調査員（在香港日本国総領事館）（1987）、日本学術振興会特別研究員（1989）、宮城学院女子大学・短期大学助教授（1992）、和光大学人間関係学部助教授（1995）、大阪市立大学文学研究科助教授（2002）、東洋英和女学院大学教授（2005）、桜美林大学教授（2007）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2016）【学位】論文博士（京都大学人間・環境研究科 2014）【専攻・専門】社会人類学、中国地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、アジア政経学会、現代中国学会、比較家族史学会

【主要業績】

[単著]

中生勝美

2016 『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』東京：風響社。

1990 『中国村落の権力構造と社会変化』東京：アジア政経学会。

[編著]

中生勝美編

2000 『植民地人類学の展望』東京：風響社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「民族学研究アーカイブズ」に基づく日本人類学史の研究

・研究の目的、内容

人類学史の研究のため、長年、年配の研究者からヒヤリングをおこない、必要に応じて個人的な文書やフィールドノートなどを見せてもらっていた。特に、梅棹忠夫初代館長からは、モンゴルのファイルとフィールドノートを見せてもらったが、梅棹館長の没後、アーカイブに整理されて公開された。国立民族学博物館には、研究者の貴重な個人文書が収蔵され、近年「民族学研究アーカイブズ」として公開された。そこで、梅棹文書をはじめとして、幅広く国立民族学博物館に収集されたアーカイブを活用しながら、日本の人類学史を研究したいと考えている。

・成果

本年度のアーカイブ調査は、鹿野忠雄、青木文教の全部と、泉靖一の戦前の調査の部分を終了し、コメントを付けた。また土方久功文書に関して、土方日記の編集にかかわった清水久夫（元世田谷美術館学芸員、土方久功展の責任者）からヒヤリングを行った。また篠田統の著作権者と民博の連絡の仲介を行った。

梅棹資料室の状況について現状調査を行った。以前閲覧したのは、梅棹館長が存命中に、個人的にみせてもらったのだが、その整理状況、公刊物、継続した資料収集の状況などを視察した。

◎出版物による業績

[論文]

Nakao, K.

2016 Clyde Kluckhohn: Political Position and His Tactics for Applied Anthropology in USA. In H. Ishikawa, J. Kreiner, K. Sasaki and T. Yoshimura (eds.) *Origins of Oka Masao's Anthropological Scholarship*. (*JapanArchiv Vol. 12*), pp.125-141, Bonn: Bier'sche Verlagsanstalt.

中生勝美

2017 「戦時中のアメリカにおける対日戦略と日本研究——ミシガン大学ロバート・ホールを中心に」『桜美林論叢人文研究』7: 99-110。[査読有]

◎口頭発表展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年10月23日 「台湾離島の核廃棄物貯蔵場とタオ族の民族運動」第33回日本環境会議沖縄大会、沖縄国際大学

2016年10月28日 「戦中・占領期における日本民俗学の社会的役割——日独民俗学の戦争責任をめぐる比較」日本民俗学会・ドイツ民俗学会共催国際シンポジウム、ドイツ・ミュンヘン

2016年12月15日 「历史人类学的复权: Emmanuel Todd 的家族人类学与反全球化」跨世界、流動与区域社会 Circulation, network, and interregional social systems study 国際学術研討会、中央民族大学、北京

◎調査活動

・海外調査

2016年8月26日～9月4日—台湾台東県、蘭嶼島（「台湾南部の津波とセーフティネットの基礎研究」基盤研究（C）（一般））

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（C）（一般））「台湾南部の津波とセーフティネットの基礎研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

広島大学国際協力研究科大学院「比較アジア文化」、国際日本研究センター客員教授

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

山田孝子 [やまだ たかこ]——教授

【学歴】京都大学理学部数学科卒（1970）、京都大学大学院理学研究科動物学専攻博士課程単位修得退学（1977）【職歴】京都大学総合人間学部助教授（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科教授（2003）、京都大学名誉教授（2012）、金沢星稜大学教養教育部特任教授（2015）、金沢星稜大学人文学部教授（2016）【学位】博士（理学）（京都大学 1983）【専攻・専門】文化人類学、認識人類学、シャマニズム研究【所属学会】日本文化人類学会、日本人類学会、American Anthropological Association、International Association for Academic Shamanistic Research

【主要業績】

[単著]

山田孝子

2012 『南島の自然誌——変わりゆく人—植物関係』京都：昭和堂。

2009 『ラダック——西チベットにおける病いと治療の民族誌』京都：京都大学学術出版会。

1993 『アイヌの世界観——「ことば」から読む自然と宇宙』（講談社選書メチエ）東京：講談社。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

多文化空間におけるミクロ・リージョナル共同性構築・維持

・研究の目的、内容

これまでの研究により、1990年代以降の社会状況は、文化的同質性をもたらすとされた近代化やグローバル化の予想に反し、ローカルな文化の価値の見直しと、それにもとづく共同性とコミュニティの再構築に特徴があるという知見を得てきた。これを踏まえ、本研究は、チベット難民をはじめとする故地を離れ越境した人々に焦点をあて、ホスト社会の多文化空間のなかで、どのように自分たちのコミュニティを作り出していくのか、共同性構築と維持の原理を解明することを目的とする。

今年度は、前年度と同様に、科学研究費助成事業（基盤研究（C）「在日チベット人におけるネットワーク形成と共同性の再構築・維持」、平成27年度～平成29年度、研究代表者：山田孝子）との連携により、在日チベット人における共同性の再構築も視野に入れながら比較の視点から調査を進め、ミクロ・リージョナルな共同性構築・維持の原理について、考察をさらに深化させる。

・成果

基盤研究（C）との連携により、在日チベット人コミュニティの共同性再構築を解明する上で重要な意味をもつ日－蔵関係の歴史的進展について、マス・メディアの報道をもとに分析した。その研究成果の一部を、2016年6月19-25日の日程でノルウェー、ベルゲン大学において開催された第14回国際チベット学会セミナー（International Association for Tibetan Studies, IATS, 14th Seminar June 2016）において、“Japanese mass media’s role in disseminating information on Tibetan issues and culture”の演題で研究発表した。2016年12月には、「日本のマス・メディアにみる1945-64年のチベット報道：チベット問題発生にいかに対処したのか」（『金沢星稜大学人文学研究』1(1)：11-40）という題目の論文にまとめた。

また、2016年8月には、共編著書 *Migration and the Remaking of Ethnic/ Micro-Regional Connectedness*, Senri Ethnological Studies, No.93 [Yamada, T. & T. Fujimoto (eds.)] として、平成26年12月に開催した国際ワークショップの成果を出版した。藤本透子と共著で「Introduction」(pp.1-11)を執筆するとともに、トロント在住チベット人の事例をもとに、多文化空間におけるミクロ・リージョナルな共同性構築・維持において、コミュニティ内におけるリーダーシップと共感性が重要となることを明らかにした (pp.241-273)。この出版をとおして、多文化空間における共同性再構築・維持にあたっては、歴史性、ネットワーク構築、教育や「伝統」の問題、文脈化、宗教、リーダーシップの存在、ホスト社会との緊密な連携などが重要なファクターとなることを明らかにした。

さらに、2016年10月15-16日の日程で北海道大学において開催された East Asian Anthropological Association 2016 Annual Meeting において、分科会「Creating a Trans-Boundary Network and Shared Communication in the Changing Landscape of Asian Societies」を組織し、基盤研究（C）の成果の一部を、“Creating Networks and Sharing Communications through Digital Media: A Survival Strategy of Tibetans in Japan”の演題で発表した。各地に分散して暮らす在日チベット人コミュニティの事例から、デジタル・メディアという近年のテクノロジーの活用という側面も多文化空間における共同性構築・維持における見逃せないファクターとなることを明らかにした。

◎出版物による業績

[編著書]

Yamada, T. and T. Fujimoto (eds.)

2016 *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93) Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[論文]

Yamada, T.

2016 Introduction (by T. Yamada and T. Fujimoto). In T. Yamada and T. Fujimoto (eds.) *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93) pp.1-11. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

2016 Leadership and Empathy in the Remaking of Communal Connectedness among Tibetans in Toronto. In T. Yamada and T. Fujimoto (eds.) *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93) pp.241-273. Osaka: National Museum of

Ethnology. [査読有]

山田孝子

2016 「日本のマス・メディアにみる1945-64年のチベット報道——チベット問題発生にいかに対処したのか」『金沢星稜大学人文学研究』1(1): 11-40。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月17日～6月27日 'Japanese mass media's role in disseminating information on Tibetan issues and culture'. 14th Seminar of the IATS(International Association for Tibetan Studies), University of Bergen, Norway

2016年10月15日～10月16日 'Creating Networks and Sharing Communications through Digital Media: A Survival Strategy of Tibetans in Japan' East Asian Anthropological Association 2016 Annual Meeting, Hokkaido University

Panel Organizer: "Creating a Trans-Boundary Network and Shared Communication in the Changing Landscape of Asian Societies" East Asian Anthropological Association 2016 Annual Meeting, Hokkaido University

2016年11月17日～11月18日 コメンテーター「プロジェクト企画：ながたんフィールドサイエンス座談会」平成28年度富山大学学生によるCOC＋地域連携研究「フィールドサイエンスと地域創成」大長谷ふるさとセンター

2017年1月27日～1月28日 「コミュニティ維持装置としての『寄り合い』とリーダーシップ——トロント在住チベット人コミュニティの事例から考える」琉球大学国際沖縄研究所共同研究「島嶼・中山地・農村地域の集落コミュニティ維持機能——アジア国際比較による地域研究対話」平成28年度地域研究対話集会、琉球大学国際沖縄研究所

陳 天璽 [チェン ティエンシ]—————教授

1971年生。【学歴】筑波大学第三学群国際関係学類卒（1994）、香港中文大学国際交流計画学部修了（1995）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士前期課程修了（1996）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士後期課程修了（2000）【職歴】ハーバード大学フェアバンクセンター東アジア研究所客員研究員（1997）、筑波大学社会科学系日本学術振興会特別研究員（1999）、ハーバード大学法学部東アジア法律研究所客員研究員（1999）、東京大学総合文化研究科日本学術振興会特別研究員（2001）、杏林大学社会学科非常勤講師（2001）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究員（2002-）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科 嘱託講師（2009-）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2010）、早稲田大学国際学術院准教授（2013）、早稲田大学国際学術院教授（2016.4-）【学位】国際政治経済学博士（筑波大学大学院博士課程国際政治経済学研究科 2000）【専攻・専門】文化人類学、移民・移動者研究【所属学会】移民政策学会、日本華僑華人学会、American Anthropology Association、日本文化人類学会、アジア政経学会

【主要業績】

[単著]

陳 天璽

2011 『無国籍』（新潮文庫）東京：新潮文庫。

[編著]

陳 天璽・大西広之・小森宏美・佐々木てる編

2016 『パスポート学』札幌：北海道大学出版会。

陳 天璽編

2010 『忘れられた人々——日本の「無国籍」者』東京：明石書店。

【受賞歴】

2002 第1回井植記念「アジア太平洋研究奨励賞」

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アジアにおける移民と文化

・研究の目的、内容

本研究は主に、アジアにおける移民とディアスポラ、そして彼らの文化とアイデンティティに注目する。なかでも特に、華僑華人、そして日本におけるインドシナ難民やビルマ難民の2世に注目している。彼らの国籍、そして身分証明のあり方、アイデンティフィケーションとアイデンティティの齟齬について情報収集、インタビュー調査を行う。また、アジアにおける移民の子どもたちの国籍の推移、教育環境、アイデンティティについても情報収集、研究調査を行う。

・成果

個人の研究課題そして科研の調査として、日本におけるインドシナ難民やビルマ系難民の2世にインタビューを行った。特に東京・高田馬場に「リトルヤンゴン」と呼ばれるビルマコミュニティがあるが、そこを拠点に調査を進めた。また、2016年12月には、ミャンマー・ヤンゴンにて、かつて日本に留学した「今泉奨学生」を対象にインタビューを行った。2017年2月には、当該奨学金の創設者である今泉氏にもインタビューを行い、日緬間の人の移動、国籍、アイデンティティについて調査を行った。

また、民博での共同研究「国籍とパスポートの人類学」及び「人の移動と身分証明の人類学」の共同研究会メンバーと連絡を取り、両研究会の成果物として、『パスポート学』を北海道大学出版会から2016年11月に出版した。

他にも、本各個研究に関連する以下の論文の出版、学会報告を行った。

陳 天璽 「華僑華人——マルチ・エスニック・ジャパンへの希望の芽」『マルチ・エスニック・ジャパニーズ——〇〇系日本人の変革力』移民ディアスポラ研究5、明石書店、2016年5月。

陳 天璽 「無国籍の人はナニジンですか」『国際社会学入門』ナカニシヤ出版、2017年3月。
(学会報告)

陳 天璽 「国籍・パスポート・人間」日本平和学会、明星大学、2016年10月23日。

CHEN TIENSHI Trans-Border and Interdisciplinary Collaboration on Statelessness in Japan and Thailand, Association for Asian Studies, Tronto, March 17, 2017.

◎出版物による業績

〔著書〕

陳 天璽

2016 『無国籍——我、和那些被國家遺忘的人們』馮秋玉譯，台北：八旗文化出版社。

〔編著〕

陳 天璽・大西広之・小森宏美・佐々木てる編

2016 『パスポート学』札幌：北海道大学出版会。

〔論文〕

陳 天璽

2016 「華僑華人——マルチ・エスニック・ジャパンへの希望の芽」駒井洋監修・佐々木てる編『マルチ・エスニック・ジャパニーズ——〇〇系日本人の変革力』（移民ディアスポラ研究5）pp.130-149，東京：明石書店。

2016 「『パスポート学』が解き明かす国家と個人の関係」『読売オンライン「深読みチャンネル」』11月26日。
<http://www.yomiuri.co.jp/fukayomi/ichiran/20161122-OYT8T50036.html>

2017 「無国籍の人はナニジンですか——国境を越える人、国の枠組みを越えられない権利」『国際社会学入門』pp.33-42，京都：ナカニシヤ出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年10月23日 「国籍・パスポート・人間」日本平和学会、明星大学

2017年3月17日 “Trans-Border and Interdisciplinary Collaboration on Statelessness in Japan and Thailand”, Association for Asian Studies, Tronto

・研究講演

2016年8月31日 “Human Rights of Stateless People and the Rule of Law,” 国連グローバルセミナー、かな

がわ国際交流財団、湘南国際村センター

2016年9月13日 “Statelessness in Japan and the Network to support Stateless people,” Thammasat University, Thailand

<http://www.thaiforrefugees.org/core-program/statelessness-program/>

2016年9月21日 「無国籍——ワタシの国はどこですか」 国際基督教大学平和研究所

2016年10月1日 「グローバルに生きるということ」『グローバルキャリア講座』 玉川学園

<http://sgh.tamagawa.ed.jp/1842>

2016年10月10日 「無国籍——ワタシの国はどこですか」『11th UNHCR 難民映画祭 2016』 国連難民高等弁務官駐日事務所／国連 UNHCR 協会、イタリア会館

<http://unhcr.refugeefilm.org/2016/stateless/>

2016年10月26日 「無国籍——ワタシの国はどこですか」『スーパーグローバル・ハイスクール・プロジェクト (SGH)』 玉川学園

<http://sgh.tamagawa.ed.jp/category/event/page/2>

2016年11月1日 「“無国籍者” どの国にも属さない人たちを支援するために」 品川区主催「人権啓発・社会同和教育講座Ⅰ 心のバリアフリーをめざして」 品川中小企業センター

2016年12月17日 「無国籍と生きる」シンポジウム『移民・難民・無国籍とつくる多文化共生社会』 大東文化大学外国語学部

2017年3月8日 「無国籍者と日本社会」シンポジウム『多文化共生社会の実現に向けて——大学と地域の連携を考える』 横浜国立大学

[ラジオ]

2017年3月3日 「JAM THE WORLD」、J-WAVE (81.3MHz) 生放送、ナビゲーター 青木理 (ジャーナリスト) と対談、番組 HP … <http://www.j-wave.co.jp/original/jamtheworld/>

◎上記以外の研究活動

- ・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- ・ 社会活動・館外活動等

移民／難民のシティズンシップ——国家からの包摂と排除をめぐる制度と実践（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究科）、NPO 法人無国籍ネットワーク代表、APPRN（アジア太平洋難民権利ネットワーク）無国籍ワーキンググループ代表、日本華僑華人学会理事、移民政策学会理事

北原次郎太 [きたはら じろうた] ————— 准教授

【学歴】 千葉大学修士課程ユーラシア言語文化論講座修了（2002）、千葉大学博士課程社会文化科学研究科修了（2007）【職歴】 財団法人アイヌ民族博物館（2005）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授（2010）【学位】 学術博士（千葉大学）【専攻・専門】 アイヌ民族の宗教文化、物質文化、口承文学【所属学会】 文化人類学会、口承文芸学会

【主要業績】

[著書]

北原次郎太・今石みぎわ

2015 『花とイナウ——世界の中のアイヌ文化』 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

北原次郎太

2014 『アイヌの祭具 イナウの研究』 札幌：北海道大学出版会。

[論文]

北原次郎太

2017 「アイヌ口承文芸に見るシャマン儀礼の再検討」『口承文芸研究』 40：36-49。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化と日本およびその周辺諸文化の比較研究

・研究の目的、内容

アイヌ民族の文化と、日本国および周辺諸国の文化、とくに宗教文化と音楽文化について比較研究を行う。民博に蓄積された資料を元に、これらの文化における祭具類・楽器類の製作技法および使用法の比較を通じ、アジアにおけるアイヌ文化の位置付けを検討し、当該文化の形成過程や周囲との類似性・独自性について考察する。

・成果

民博が所蔵するアイヌ民族の儀礼具のうち、特にイクパスイ（捧酒具）、イナウ、墓標やシャマンの太鼓などを調査し、その形態的特徴について詳細に検討した。それらの成果も踏まえつつ、民博のアイヌ民族展示のリニューアルに協力し、助言をした。また、その際の考察を「精神文化・儀礼を展示すること」という短文にまとめ、月刊みんぱく2016年11月号に寄稿した。また、民博の第455回ウィークエンド・サロン「アイヌの信仰・儀礼」において一般来場者に解説した。

◎出版物による業績

[論文]

北原次郎太

2017 「アイヌ口承文芸に見るシャマン儀礼の再検討」『口承文芸研究』40: 36-49。[査読有]

◎映像音響メディアによる業績

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

北原次郎太 監修・出演

2016 「今よみがえるアイヌの言霊——100枚のレコードに込められた思い」(NHK ETV 特集) NHK、2016年12月17日放送。

■先端人類科学研究部・応用民族学部門

関本照夫 [せきもと てるお] ————— 教授

1947年生。【学歴】東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1976）【職歴】国立民族学博物館第五研究部助手（1976）、一橋大学社会学部講師（1981）、同学部助教授（1983）、東京大学東洋文化研究所助教授（1987）、同研究所教授（1991）、同研究所長（2006-2009）、東京大学を定年退職（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任教授（2010-2013）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2013）【学位】社会学修士（東京大学 1974）【専攻・専門】仕事の人類学、布、工芸、物質文化、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、Association for Asian Studies

【主要業績】

[編著]

Sekimoto, T. (ed.)

2000 *Handicrafts and Industrial Development in Southeast Asia* (Toyota Foundation Research Grant Report). Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.

[共編著]

関本照夫・船曳建夫編

1994 『国民文化が生れる時——アジア・太平洋の現代とその伝統』東京：リプロポート。

Sekimoto, T., Semiarto Aji Purwanto and Hanantiwi Adityasari (eds.)

2003 *Handicrafts in the Age of Global Economy: Indonesia and Japan*. Depok: Center for Japanese Studies, University of Indonesia.

【受賞歴】

1983 第14回澁澤賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

布と人間の人類学的研究

・研究の目的、内容

- 1) 2011年1月～2013年3月の間に実施した機関研究・マテリアリティの人間学のプロジェクト「布と人間の人類学的研究」成果刊行のため、必要な作業を行う。
- 2) インドネシアのバティック染物業の研究を軸に、物質性の人類学、布と人間の人類学について研究。

・成果

作業を継続している。

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

財団法人東洋文庫研究員、国立大学法人教育研究評価委員会委員

林 史樹 [はやし ふみき]——教授

1968年生。【学歴】同志社大学文学部社会学科卒業（1992）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了（1997）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程修了（2001）【職歴】神田外語大学外国語学部専任講師（2003）、神田外語大学外国語学部准教授（2007）、神田外語大学外国語学部教授（2013）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2001）【専攻・専門】文化人類学、韓国研究、移動研究【所属学会】日本文化人類学会、韓国・朝鮮文化研究会、社会学研究会

【主要業績】

[単著]

林 史樹

2007 『韓国サーカスの生活誌——移動の人類学への招待』東京：風響社。

2004 『韓国のある薬草商人のライフヒストリー——「移動」に生きる人々からみた社会変化』東京：御茶の水書房。

[共著]

朝倉敏夫・林 史樹・守屋亜記子

2015 『韓国食文化読本』大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2006 旅の文化研究奨励賞

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国食文化の人類学的研究

・研究の目的、内容

戦前・戦後にかけてみられる人の移動に伴う食の伝播に関する研究である。日本統治時代は朝鮮半島にとって負の歴史と語られるばかりか、東アジア全般に侵略の時代として記憶される。負の側面は負として調査を通じて記録されるべきであるが、人々の移動という視点から眺めたとき、そこに多くの文化が往来し、生活が多様化していった痕跡がみられる。食に限ってみれば、大きなことは和食、中華、洋食の導入であった。中華は粉食を中心に、洋食は日本式洋食の伝播、植民地化は肯定されるべきではないが、負の側面だけで捉えられがちな時代にも今日の豊かな生活につながる文化・食文化の変容を明らかにした。

・成果

今年度は、これまでの研究の1つの成果発表の場として12月3日に東洋大学白山キャンパスで開かれた国際シンポジウム「帝国日本における人とモノの移動と他者像」と、12月4日に立命館大学びわこキャンパスで開かれた国際シンポジウム「第6回アジア食文化会議（亜州食学論壇）」において、それぞれ異なる研究成果を公表

した。国外（韓国）においては朝鮮半島に流入にした洋食に関する調査を行っている。

本研究と関連して提出した成果は以下の通りである。

2016.4 「朝鮮半島における“薬食同源”」『Vesta 食とからだ・こころ』102, pp.30-33。

2016.5 「大韓民国」神田外語大学編『環太平洋の言語と文化』神田外語大学出版局, pp.132-141。

口頭発表

2016.12a 「「戦前・戦後期にみられた東アジアにおける‘中華’の拡散：日韓両地域での粉食定着を中心に」『帝国日本における人とモノの移動と他者像——台湾・朝鮮・沖縄を基点に』東洋大学（東京）。

2016.12b 「日本統治下の朝鮮における洋食の導入と普及に関する一考察」『第6回アジア食文化会議（亜州食学論壇）』立命館大学（草津）。

◎出版物による業績

〔その他〕

林 史樹

2016 「朝鮮半島における“薬食同源”」『Vesta 食とからだ・こころ』102：30-33。

2016 「大韓民国」神田外語大学編『環太平洋の言語と文化』pp.132-141, 千葉：神田外語大学出版局。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年12月3日 「戦前・戦後期にみられた東アジアにおける‘中華’の拡散——日韓両地域での粉食定着を中心に」国際シンポジウム『帝国日本における人とモノの移動と他者像——台湾・朝鮮・沖縄を基点に』東洋大学、東京

2016年12月4日 「日本統治下の朝鮮における洋食の導入と普及に関する一考察」国際シンポジウム『第6回アジア食文化会議（亜州食学論壇）』立命館大学（草津）、滋賀

◎調査活動

・海外調査

2016年10月12日～10月16日—韓国（西洋料理に関する資料購入とソウル、仁川、光州、大田にて洋食店に対するインタビュー）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究A）「帝国日本のモノと人の移動に関する人類学的研究——台湾・朝鮮・沖縄の他者像とその現在」（代表：植野弘子）研究協力者

高城 玲 [たかぎ りょう]—————教授

1969年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部卒（1992）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位取得退学（2000）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2000）、国立民族学博物館機関研究員（2006）、神奈川大学経営学部助教（2007）、神奈川大学経営学部准教授（2009）、神奈川大学日本常民文化研究所所員（2009）、神奈川大学アジア研究センター所員（2013）神奈川大学経営学部教授（2016）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（国際学）（東京外国語大学 1994）【専攻・専門】文化人類学、東南アジア（タイ）研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会

【主要業績】

〔単著〕

高城 玲

2014 『秩序のミクロロジー——タイ農村における相互行為の民族誌』横浜：神奈川大学出版会。

〔共編著〕

宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城 玲共編

2016 『DVDブック 甦る民俗映像——渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』東京：岩波書店。

[論文]

高城 玲

2012 「国家統治の過程とコミュニティ——タイの国王誕生日と村民スカウト研修の相互行為」平井京之介編『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』pp.187-217, 京都: 京都大学学術出版会。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

タイにおける社会運動の相互行為に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、現在変動の中にあるタイ社会の動態を、主に社会運動に着目し、鳥瞰図的なマクロな視点のみではなく、人々が不断に繰りひろげる相互行為の過程というミクロな視点から人類学的に記述し探求することを目的とする。特に、タイ北部チェンマイ県や中部ナコンサワン県、バンコクなどにおいて、都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査と資料収集を行い、分析を進める。

・成果

平成28年度は、タイ北部チェンマイ県やバンコクなどにおける都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査・資料収集を継続するとともにその分析をすすめた。特に、2016（平成28）年8月にタイで行われた新憲法草案への国民投票や10月の国王の死去など、政治社会的な環境が変動する中で、政治・社会的運動がどのような状況に置かれているのかに関して、相互行為や言説などのミクロな視点に着目した現地調査と資料収集を継続し、それらの分析を進めた。

また、神奈川大学の共同研究奨励助成によって開催されたフィリピン大学アジア研究センターとの共同シンポジウムにおいてこれまでの成果の一部を口頭で発表したほか、東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動を主題とする英語論文集の書評を学会誌に掲載した。

◎出版物による業績

[編著書]

高城 玲

2017 『大学生のための異文化・国際理解——差異と多様性への誘い』東京: 丸善出版。(高城玲「異文化・国際理解への招待」pp.2-16、高城玲「表象／消費される異文化——日本のメディアで生みだされる東南アジアへのまなざし」pp.89-99を収録)

[その他]

高城 玲

2016 「書評: Shigeharu Tanabe (ed.) *Communities of Potential: Social Assemblages in Thailand and Beyond*, Chiang Mai, Silkworm Books, 2016」『文化人類学』81(3): 550-553。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年11月23日 “Discursive Space of Political/Social Movement in Thailand: Some Background to the Conflict” presented at Joint Symposium: Kanagawa University and the University of the Philippines “*Empire and Nationalism: Comparative Analysis on Asia*”, Asian Center, University of the Philippines.

◎調査活動

・海外調査

2017年3月4日～3月14日—タイ王国チェンマイ県およびバンコク（タイ農村部と都市部における社会運動にかかわる現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

神奈川大学共同研究「帝国とナショナリズムの言説空間——国際比較と相互連携の総合的研究」共同研究者
神奈川大学日本常民文化研究所共同研究「日本常民文化研究所所蔵資料からみるフィールド・サイエンスの史的展開」共同研究者
神奈川大学アジア研究センター共同研究「アジアの水に関する総合的研究」共同研究者

高野明彦 [たかの あきひこ] 教授

1956年生【学歴】東京大学理学部数学科卒（1980）【職歴】（株）日立製作所入社（1980）、東京大学大学院理学系研究科非常勤講師（1996）、国立情報学研究所ソフトウェア研究系教授（2001）、東京大学大学院情報理工学系研究科教授（2002-）、国立情報学研究所情報学資源研究センター長（2005）、特定非営利活動法人連想出版理事長（2005-）、国立情報学研究所コンテンツ科学研究系教授（2006-）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター長（2006）、立命館大学アトリサーチセンター客員教授（2012-2016）、（株）出版デジタル機構最高技術顧問（2012-2014）、（一社）タイムマップ理事（2015-）【学位】博士（理学）（東京大学大学院理学系研究科2000）【専攻・専門】連想情報学、関数プログラミング、プログラム変換【所属学会】ACM、デジタルアーカイブ学会、日本ソフトウェア科学会、情報処理学会、言語処理学会

【主要業績】主要業績

[監修・共著]

高野明彦

2015 『検索の新地平』（角川インターネット講座第8巻）（監修・共著）カドカワ。

高野明彦・吉見俊哉・三浦伸也

2012 『311情報学——メディアは何をどう伝えたか』東京：岩波書店。

高野明彦・太田光・田中裕二

2008 『検索エンジンは脳の夢を見る——連想情報学』東京：講談社。

【受賞歴】

2011 科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）「連想情報技術による自発的学びのための情報理解増進」

2013 岩瀬弥助記念書物文化賞「デジタル技術による書物文化の開発」

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

フォーラム型情報ミュージアムにおける情報の統合と発信に関する研究

・研究の目的、内容

フォーラム型情報ミュージアムの実現へ向けて、収蔵資料に関する情報を研究者からだけでなく、他のミュージアムやソースコミュニティからも収集して、多様な視点からの分析を可能にする情報システムが備えるべき基本機能について検討する。

・成果

北米や欧州における民族学博物館とソースコミュニティの熟覧による情報の獲得と得られた知識のオンライン発信システムの構築について、基本情報の構成法について検討した。また、「地域研究画像デジタルライブラリ」プラットフォーム委員会に参加して、研究コミュニティにとって有意義で持続性のあるデジタルライブラリの構築法について検討した。

◎出版物による業績

[論文]

矢野桂司・今村 聡・高野明彦・阿辺川武

2017 「『平安京オーバーレイマップ』の開発と拡張に関する一考察」『立命館文学』649：196-208。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年6月26日 「文化遺産オンラインと国立国会図書館サーチとの連携が意味するところ」全国美術館会議情報・資料研究部会研究集会『収蔵品デジタルアーカイブの最新動向——文化遺産オンラインと国立国会図書館サーチの連携は美術館に何をもたらすのか——そして、著作権法はどのように展開するのか』国立西洋美術館

2016年11月10日 「文化遺産オンラインの現状と今後の展望」第18回図書館総合展フォーラム『我が国におけるデジタルアーカイブ連携の未来』

2016年11月12日～13日 「吉田財団新アーカイブスの内容と活動事例」第53回消費者行動研究コンファレンス、専修大学

・ホームページ

2017年2月 「日本アニメーション映画クラシックス (<https://animation.filmarchives.jp/>)」公開

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

内閣官房知的財産戦略本部デジタルアーカイブの連携に関する実務者協議会委員（座長）、観光庁・文化庁文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議委員（座長）、内閣府大規模災害情報の収集・保存・活用方策に関する検討会（座長：御厨貴）委員、東京文化資源会議文化資源連携ビジョン策定委員会委員

飯高伸五 [いいたか しんご] ————— 准教授

1974年生。【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1998）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学（2008）【職歴】神奈川県立平塚看護専門学校非常勤講師（2005-2008）、専修大学法学部兼任講師（2007-2008）、日本学術振興会特別研究員PD（筑波大学）（2008-2011）、ハワイ大学マノア校訪問研究員（2010）、高知県立大学文化学部講師（2011）、首都大学東京非常勤講師（2011）、国立民族学博物館客員教員（2014）高知県立大学文化学部准教授（2016）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学、2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学、2001）【専攻・専門】社会人類学、オセアニア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania

【主要業績】

[論文]

Iitaka, S.

2015 Remembering Nanyō from Okinawa: Deconstructing the Former Empire of Japan through Memorial Practices. *History and Memory* 27(2): 126-151.

飯高伸五

2016 「『ニッケイ』の包摂と排除——ある日本出自パラオ人の埋葬をめぐる論争から」『文化人類学』81(2): 228-246.

2017 「帝国の記憶を通じた共生——ミクロネシアにおける沖縄人の慰霊活動から」風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.241-265, 京都：ナカニシヤ出版。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録に関する歴史人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、研究従事者が旧南洋群島（ミクロネシア）のパラオで収集してきた、現地人の日本統治経験に関する民族誌的データとともに、国立民族学博物館の民族学アーカイブズの史資料を精査することによって、日本統治経験の記録と記憶を歴史人類学的に検討していくことである。具体的には（1）日本の民族学者がパラオ社会に対して向けたまなざしを検討しつつ、かれらが記録した当該社会の変動を検討すること、（2）ポスト植民地期のパラオ社会における植民地期の史資料の活用可能性や日本統治期の記憶のありようを検討することである。事例の検討によって、アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録の比較研究に向けた基盤を提供することも視野に入れている。

本研究はアーカイブズとフィールドを往復しながら実施するが、パラオでの現地調査は、科研費基盤研究（C）ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究（2015年4月1日～2018年3月31日（予定）、課題番号15K03049）の研究代表者として実施する。

（1）民族学アーカイブズの精査を通じた旧南洋群島の社会変動の検討

民族学アーカイブズのうち、とりわけ土方久功アーカイブと杉浦健一アーカイブを重点的に精査する。資料、手記、ノートなどの原資料を精査することで、当時の民族学者が旧南洋群島に向けた視線、当時のミクロネシアの社会変化の実態を、研究従事者のフィールドデータも随時参照しながら検討していく。土方

久功著作集や国立民族学博物館調査報告（Senri Ethnological Reports）などに原資料の一部が所収されているが、本研究ではノート類など他の資料との関連性に留意し、改めて原資料を精査する。

アーカイブズを検討する際には、(a) 土方久功が自身の民族学的記述から捨象した当時のパラオの社会変化——とりわけ都市部における日本人移住者と現地社会とのコンタクト——に関する記述の検討、(b) 杉浦健一がパラオ及びボナペを対象に行った伝統的土地権の調査およびその民族誌的記述が生産されたコンテキストの検討を中心に検討する。

(2) 現地社会における日本統治期の史資料の意義に関する検討

ポスト植民地期および独立国家形成期のミクロネシア地域では、変化の只中にある当該社会の歴史や文化を再構成するうえで、19世紀末以降のドイツ、日本、アメリカによる継続的統治下で残された行政文書や民族誌的記述の重要性が再認識されている。植民地期の記録は、統治者による記録としての限界はあるものの、同地域の過去を知るための重要な情報源となり、現地の博物館展示などにも重用されている。アメリカ信託統治期ミクロネシアの文書を扱ってきたアーキビストは、アーカイブ化は「現地社会に歴史を返す」試みであると位置づけ、植民地文書の利活用の可能性を検討している。

本研究では、民族学アーカイブズが現在の現地社会にとって持つ意味を念頭におき、研究を進める。土方はパラオ芸術の発展に寄与した著名な芸術家として現在でもよく知られている。また、土地を巡る訴訟の頻発が深刻な社会問題となっている現地社会において、杉浦が実施した土地権に関する人類学的研究の意義は改めて検討するに値する。これらの諸点に留意し、現地社会の関連各機関とも連携をとりながら、日本統治期の史資料の意義や活用可能性を検討していく。

・成果

本年度は民族学アーカイブズの検討は十分にできなかったが、国際学会への参加、パラオでの現地調査の実施、学術誌や専門書への寄稿を中心に研究活動を実施した。現地調査の実施および国際学会への参加は、科研費基盤研究(C)「ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究」(2015年4月1日～2018年3月31日(予定)、課題番号15K03049)の一環として実施した。

2016年5月には第22回太平洋史学会(22nd Pacific History Association Biennial Conference 2016, May 21, 2016)に参加して“Conflicting Legacies of the Pacific War: Misinterpretation between Japanese Ireidan (Spirit-Consoling Tour Group) and Local Micronesians”の演題で口頭発表を行い、ポスト日本統治期のミクロネシア地域において、旧移住者および現地人の間でいかに戦争の記憶が想起されているかを検討した。国内では2016年9月と2017年3月にこれに関連した口頭発表「パラオ諸島における鉱山採掘と村落景観の再創造」(2016年度第2回景観史研究会、慶應義塾大学、2016年9月19日)および「パラオにおける戦跡観光の展開」(日本オセアニア学会第34回研究大会、すてんかく、島根、2017年3月27日)を実施した。

2017年2月には、パラオ共和国のペリリュー島およびバベルダオブ島において太平洋戦争の戦跡観光の現状に関する現地調査を実施し、近年のペリリュー戦跡観光への参加者数の増大、現地関係機関による戦跡の積極的活用などの現状を一部把握することができた。また、慶應義塾大学東アジア研究所「歴史生態学と歴史人類学の節合による景観史研究の拡張——アジア太平洋のフィールドワークから発想する」(代表＝山口徹)の分担者として、同研究所で実施された研究会に参加し、他地域との比較や歴史人類学的視点からパラオの景観史を検討した。

パラオにおける日本統治期の記憶や現地に誕生した「混血」をめぐる問題に関する研究成果は「『ニッケイ』の包摂と排除——ある日本出自パラオ人の埋葬をめぐる論争から」『文化人類学』81(2): 228-246、日本文化人類学会、2016年9月)、「パラオ・サクラカイ——「ニッケイ」と親日言説に関する考察」(三尾裕子・遠藤央・植野弘子(編)『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』pp.213-232、慶應義塾大学出版会、2016年10月)、「帝国後の「混血」のゆくえ——日本出自のパラオ人の越境経験」(『文化人類学研究』17: 8-25、2016年12月)、「帝国の記憶を通した共生——ミクロネシアにおける沖縄人の慰霊活動から」(風間計博(編)『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.241-265、ナカニシヤ出版、2017年3月)を通じて発表した。

◎出版物による業績

[論文]

飯高伸五

2016 「『ニッケイ』の包摂と排除——ある日本出自パラオ人の埋葬をめぐる論争から」『文化人類学』81(2): 228-246。[査読有]

2016 「パラオ・サクラカイ——『ニッケイ』と親日言説に関する考察」三尾裕子・遠藤 央・植野弘子編

『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』 pp.213-232, 東京：慶應義塾大学出版会。

2016 「帝国後の『混血』のゆくえ——日本出自のパラオ人の越境経験」『文化人類学研究』17：8-25。[査読有]

2017 「帝国の記憶を通じた共生——ミクロネシアにおける沖縄人の慰霊活動から」風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』 pp.241-265, 京都：ナカニシヤ出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年5月21日 “Conflicting Legacies of the Pacific War: Misinterpretation between Japanese Ireidan (Spirit-Consoling Tour Group) and Local Micronesians.” 22nd Pacific History Association Biennial Conference 2016, Hyatt Regency Guam, Tumon, Guam

2016年9月19日 「パラオ諸島における鉱山採掘と村落景観の再創造」2016年度第2回景観史研究会、慶應義塾大学三田キャンパス

2017年3月27日 「パラオにおける戦跡観光の展開」日本オセアニア学会第34回研究大会、すいてんかく、島根

◎調査活動

・国内調査

2016年9月～2017年3月—高知県土佐郡大川村（村史編纂のための現地調査）

・海外調査

2016年5月22日～5月23日—グアム（太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する調査および資料収集）

2017年2月12日～2月18日—パラオ（太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する調査および資料収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（C）「ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究」研究代表者、慶應義塾大学東アジア研究所2015年度プロジェクト「歴史生態学と歴史人類学の節合による景観史研究の拡張——アジア太平洋のフィールドワークから発想する」（研究代表者：山口徹）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事・評議員、NPO 法人地域文化資源ネットワーク理事、高知県土佐郡大川村村史編纂アドバイザー

・他大学の客員、非常勤講師

高知大学「文化人類学入門」、土佐リハビリテーションカレッジ「人間科学概論」

田森雅一 [たもり まさかず] ————— 准教授

1958年生。【学歴】東京大学大学院総合文化研究科後期博士課程・単位取得満了（2005）【職歴】東洋英和女学院大学非常勤講師（1999）、埼玉大学非常勤講師（2000）、慶應義塾大学非常勤講師（2012-2015）、千葉大学非常勤講師（2012-2014）、東洋大学非常勤講師（2014）、埼玉学園大学非常勤講師（2014）、東京外国語大学非常勤講師（2015）、東京大学大学院総合文化研究科・学術研究員（2012）、国立民族学博物館特別客員准教授（2016）【学位】博士（学術）（東京大学大学院総合文化研究科 2011）【専攻・専門】社会人類学・比較文化論・南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本口承文藝学会、東洋音楽学会

【主要業績】

[単著]

田森雅一

2015 『近代インドにおける古典音楽の社会的世界とその変容——“音楽すること”の人類学的研究』東京：三元社。

[論文]

田森雅一

2008 The Transformation of Sarod *Gharānā*: Transmitting Musical Property in Hindustani Music. In Y. Terada (ed.) *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71), pp.169-202. Osaka: National Museum of Ethnology.

1998 「都市ヒンドゥー命名儀礼における主体構築と命名慣習の変容」『民族学研究』63(3): 302-325。

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバル化と南アジア音楽文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、グローバル化された“地続きの世界”における南アジアと欧米・日本という、より拡大された空間における「音楽・文化と宗教・社会」の動態について検討することにある。より具体的には、ヒンドゥーとイスラームが共生する南アジア社会、特にインドとパキスタンの国境の砂漠地帯で、「ジプシー」の発祥地としても注目を集めるラージャスターンをルーツとする音楽芸能カーストのローカルな社会組織と音楽家たちのトランス・ローカルな活動・ネットワーク形成を調査・検討することで、近代における伝統音楽の再生産とグローバル化のあり方について明らかにしてみたい。

・成果

ラージャスターン地方の村落に生活の基盤を置き、支配カーストの人生儀礼や村落の祭礼において音楽演奏を生業としてきた世襲音楽家たちは、インド独立にともなう藩王制度の廃止とともにパトロンとの間に築き上げてきた持続的な関係を失った。彼らの多くは演奏機会を求めて都市に移住し、その技芸を存続させてきたが、音楽教師やラジオ局付音楽家といった職業のポストは限られ、一回限りのコンサートやホテルでの観光客相手のイベントへの出演で安定した生計を立てるのは困難であった。そのような状況が変化したのは、1980年代からのインドの経済開放というグローバル化の流れのなか、個人的なネットワークを頼って海外に演奏機会を求める者たちが増加してからである。

本研究ではこのような実態をとらえるために、ラージャスターン州の州都ジャイプルからフランスに渡って成功をおさめた一族をインフォーマントとして調査を行った。本調査は、「南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点」の資金援助によって行われた2014年からの一連のもので、複数のインフォーマントへのインタビューにより、インドのグローバル化の流れの中で、彼らがどのようなネットワークを築き上げ、音楽演奏の機会を見だしてインドとヨーロッパを往来して今日に至っているのかという、マクロ（社会の動向）とミクロ（個人の動向）との関係の一端を明らかにすることができた。本研究の成果の一部は、『日本南アジア学会第29回全国大会』の個人発表において「“再帰的グローカル化”と適応戦略—ラージャスターンにおける世襲音楽家一族の近代」（於：神戸市外国語大学、2016年9月25日）として発表した。また、世襲音楽家の特に若い世代は、新たな演奏機会と自らの認知度を向上させるため、『インディアン・アイドル』など、衛星放送の音楽オーディション番組に出演するようになって来ている。このようなインドにおける新たなメディア状況と新世代の生存戦略ともいえる動向について、「インドにおける衛星放送のグローカル化—音楽リアリティ番組の新世代音楽家へのインパクト」と題した論文（『埼玉大学紀要』25(1): 151-162, 2016）にまとめた。

〈論文〉

田森雅一（単著）「インドにおける衛星放送のグローカル化—音楽リアリティ番組の新世代音楽家へのインパクト」『埼玉大学紀要』25(1): 151-162, 2016

〈学会発表〉

田森雅一『日本南アジア学会第29回全国大会』個人発表

「“再帰的グローカル化”と適応戦略—ラージャスターンにおける世襲音楽家一族の近代」

（於：神戸市外国語大学、2016年9月25日）

〈海外調査〉

調査テーマ：「フランスにおけるインド音楽の動向、およびラージャスターン出身インド音楽家の活動と社会関係・グローバル・ネットワークに関する追跡調査

調査地域：フランス・パリ市、調査期間：2016年9月9日～18日

調査資金：南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点（MINDAS 拠点代表：三尾稔）

◎出版物による業績

[論文]

田森雅一

2016 「インドにおける衛星放送のグローバル化——音楽リアリティ番組の新世代世襲音楽家へのインパクト」『埼玉大学教養学部紀要』52(1): 139-150。

2016 「インド音楽のグローバル化と21世紀」『現代インドフォーラム』28: 17-24、公益社団法人日印協会。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年9月25日 「“再帰的グローバル化”と音楽伝統の再生産——インド・ラージャスターンにおける世襲音楽家一族の100年」日本南アジア学会・第29回研究大会、神戸市外国語大学

◎調査活動

・海外調査

2016年9月9日～9月18日—フランス（フランスに滞在するインド系世襲音楽家の動態とネットワークに関する現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点（MINDAS）共同研究員、国立民族学博物館文化資源プロジェクト「インドの古典音楽楽器と民俗絵画カリガートの購入」共同研究員

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

東京外国語大学言語文化部「総合文化研究」、東洋大学文学部「東洋芸術文化特講」、埼玉大学教育機構「宗教と出会う」、東洋英和女学院大学「宗教音楽論（集中）」「フィールドワーク・芸術分野（集中）」、埼玉学園大学人間学部「宗教学」

■先端人類科学研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

市田泰弘 [いちだ やすひろ]——教授

1962年生。【学歴】立教大学文学部教育学科卒（1986）、立教大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了（1989）

【職歴】名古屋文化学園言語訓練専門職員養成学校専任教員（1989）、国立身体障害者リハビリテーションセンター更生訓練所生活訓練専門職（1991）、国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官（1996）、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科主任教官（2010）【学位】文学修士（立教大学 1989）【専攻・専門】手話言語学【所属学会】日本言語学会、日本手話学会、日本認知言語学会、日本通訳翻訳学会

【主要業績】

[共著]

木村晴美・市田泰弘

2014 『改訂新版・はじめての手話』東京：生活書院。

[論文]

Ichida, Y.

2010 Introduction to Japanese Sign Language: Iconicity in Language. *Studies in Language Sciences* 9: 9-32. Sakai, K., Y. Tatsuno, K. Suzuki, H. Kimura, and Y. Ichida

2005 Sign and Speech: Amodal Commonality in Left Hemisphere Dominance for Comprehension of Sentences. *Brain* 128(6): 1407-1417.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話の特徴をふまえた手話言語学教授法に関する研究

・研究の目的、内容

現在、大学および大学院レベルで手話言語学の講義を行うための日本語による教科書は存在しない。また、国内の大学において手話言語学を導入するにあたっては、日本手話の言語事実を取り込むのが適当であると考えが、その教授法はまだ確立していない。近年の手話言語学に対する関心の高まりなどから、各単年度の講義の教授法を踏まえたシラバスの内容の検討が急務となっている。本研究では、複数の大学において実施する手話言語学の講義を通して、シラバス案の策定とその実効性の検証を行い、その結果を長期的には、日本語による手話言語学講義のための教科書執筆という形に反映させることを目的とする。具体的な内容としては、シラバスの検討においては受講学生の一般言語学の基礎知識の程度に合わせた内容および用例の選択を中心に、実効性の検証については主として受講学生の評価の集計によって行う。

・成果

東京大学にて外国語科目「日本手話（1）」「日本手話（2）」の講義の一部を担当、シラバス案を策定し実践した。社会言語学的背景について扱う導入は従来通りだが、言語学に関するメインの部分では昨年度までの反省をふまえ、手話言語と音声言語の共通性を十分に強調した上で、手話言語特有の媒体的特徴である「頭の動き」「顔の表情」「身体・手指・空間」が、日本手話の文法的システムに与える影響について特に取り上げる形で進めた。その理解にあたって言語学的知識が前提となる側面はあえて強調せず、取り上げる文法項目についても学習文法レベルで実技習得に直接役立つものを選択するよう心がけた。受講学生からの評価はおおむね好評であった。この成果を大学外国語科目における手話言語学教授用の教科書執筆につなげたい。

そのほか、大学・大学院のための手話言語学出張講義で、東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」と、大阪教育大学「手話言語特別講座」の文法に関する概論部分を担当し、ダイジェスト版の授業計画を作成し実践した。受講学生のアンケートによればこちらもおおむね好評であった。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・手話言語学出張講義

2016年通年講義 「日本手話（1）、（2）」、東京大学

2016年10月11日 「手話言語学入門：音声言語と手話言語、日本語と日本手話」東北大学全学教育リレー講義
「手話の世界と世界の手話言語☆入門」東北大学

2016年11月25日、2月3日 「手話言語特別講座」全学特別講座、大阪教育大学

■文化資源研究センター

平井康之 [ひらい やすゆき] ————— 教授

1961年生。【学歴】京都市立芸術大学デザインコース卒（1983）、英国王立芸術大学院修士課程修了（1992）【職歴】コクヨ株式会社本社設計部（1983）、コクヨ株式会社家具事業本部オフィス家具部商品開発課（1988）、コクヨ株式会社人事部人材開発課付（1990）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品開発室主任（1992）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長補佐（1995）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長（1997）、IDEO Product Development Senior Designer（1997）、IDEO Product Development Grand Rapids Studio（米国）Senior Designer（1998）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（2000）、九州大学大学院芸術工学研究院助教授（2003）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（2007）【学位】修士（英国王立芸術大学院 1992）、博士（芸術工学）（九州大学 2016）【専攻・専門】デザイン専攻【所属学会】日本インテリア学会、日本デザイン学会、芸術工学会

【主要業績】

[共著]

ジュリア・カセム・平井康之・塩瀬隆之・森下静香・水野大二郎・小島清樹・荒井利春・岡崎智美・梅田亜由美・

小池 禎・田邊友香・木下洋二郎・家成俊勝・桑原あきら

2014 『インクルーシブデザイン』京都：学芸出版社。

平井康之・藤 智亮・野林厚志・真鍋 徹・川窪伸光・三島美佐子

2014 『知覚を刺激するミュージアム——見て、触って、感じる博物館のつくりかた』東京：学芸出版社。

朝廣和夫・尾方義人・古賀 徹・近藤加代子・谷 正和・田上健一・富板 崇・平井康之

2012 『デザイン教育のススメ——体験・実践型コミュニケーションを学ぶ』東京：花書院。

【受賞歴】

2014 2014年度グッドデザイン賞（研究活動・研究手法カテゴリー）

2014 第8回キッズデザイン賞（子ども視点の安全安心デザイン 子ども部門）

2013 「ユニバーサル都市・福岡賞 みんなにやさしい部門」最優秀賞（こども×くすり×デザイン実行委員会）

2013 The Include Asia Conference Awards「Champion of Inclusive Design」賞

2013 IAUD アワード2013 入賞「みんなの美術的プロジェクト」

2010 第4回キッズデザイン賞（ソーシャルキッズサポート部門）

2009 2009年度グッドデザイン賞（パブリックコミュニケーションデザイン部門）

2009 第3回キッズデザイン賞（コミュニケーションデザイン部門）

2008 2008年度グッドデザイン賞（子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）

2008 第2回キッズデザイン賞（リサーチ部門、子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）

2003 三菱オスラム LED デザインコンテスト審査員奨励賞

2002 富山プロダクトデザインコンペティション入選

2002 2002年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Full Metal Jacket Chair）

1996 1996年度グッドデザイン賞（シナジアシリーズ）

1996 海南デザインコンペティション大賞（健康器具バンボレオ）

1996 1996年度レッド・ドット賞〈ドイツ・エッセンデザインセンター〉（インタープレイスシリーズ）

1994 1994年度グッドデザイン賞（インタープレイスシリーズ）

1993 第2回旭川国際家具デザインコンペティション入選（インタープレイスシリーズ）

1993 コクヨ株式会社功労賞（インタープレイスシリーズ）

1992 1992年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Perch Chair, Stacking Table）

1991 1991 Office Design Competition, EIMU, Milano, Italy 入選

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ユニバーサルミュージアム構築の理論と実践

・研究の目的、内容

本研究では、民博が目指すユニバーサルミュージアム構築にむけて、障がい者をはじめ、外国人や高齢者、その他鑑賞が難しい多様な来館者を対象に、サイン計画をはじめとする展示空間のアクセスに関わる情報計画の実践的研究を行う。また、昨年度に開発した展示空間における知覚鑑賞を可能にする展示デザイン評価項目を用いた実践的研究も継続し行うこととする。

・成果

展示空間のアクセスに関わる情報計画の実践的研究を行った。サイン計画については、展示空間までのパブリックスペースにおけるサイン計画へのアドバイスをを行い、三月末に実際のサインが設置された。また展示空間では、展示デザイン評価項目研究の項目をまとめたところまで研究が進んだ。さらに昨年度から継続の iBeacon を用いたアクセス研究については試作を製作し、三月に被験者4人による評価実験を行った。

◎上記以外の研究活動

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

九州大学グローバルイノベーション人材育成エコシステム形成事業（EDGE プログラム）、共同研究『デザイン思考を用いたサイエンスコミュニケーションに関する共同研究』、共同研究『介護施設における人材育成、及び入居者とのコミュニケーション』、共同研究『商業施設における居心地の良い空間に関する共同研究』、受託研究『イノベーションスタジオ福岡プロジェクト4の企画及び運営等の業務委託』、社会連携『福岡市動物園 い

のちの大切さをコミュニケーションする社会プロジェクト』、社会連携『ユニバーサル都市 福岡デザインワークショップ2016』

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など
福岡市地下鉄デザイン委員会委員
- ・他大学の客員、非常勤講師
明石工業高等専門学校「インクルーシブデザイン概論」

下道基行 [したみち もとゆき] ————— 准教授

【学歴】武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業（2001）、東京総合写真専門学校研究科（2003）【職歴】テレビ番組制作リサーチ会社オフィス HIT（2001-2007）、美術研究所アトリエフラン裸婦絵画コース／陶芸コース講師（2001-2005）、東北芸術東北芸術工科大学ゲスト講師（2012-2016）【学位】学士【専攻・専門】写真映像、平面表現、現代美術

【受賞】

- 2015年 さがみはら写真新人奨励賞
- 2014年 第1回鉄犬ヘテロトピア文学賞
- 2013年 第6回岡山県新進美術家育成『I氏賞』大賞
- 2012年 韓国・光州ビエンナーレ2012 NOON 芸術賞（新人賞）

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

写真、動画資料の創造的な活用とアーカイブに関する研究

・研究の目的、内容

本館が所蔵するスチール写真や動画資料、さらに、それらのアーカイブにおける管理の在り方や活用の現状に関して調査を行う。それを踏まえ、本館における写真、動画資料の創造的な活用、さらに本館が目指す、情報生成型のマルチメディア・データベース構築にむけて美術家／写真家の立場から、本館の研究者と意見交換を重ね、具体的な協働の在り方を検討する。

・成果

本館教員とともに研究課題に関わる研究会やセミナーを企画し、本館教員、並びに総研大院生や関西を拠点にする文化人類学者たちと研究交流を積み重ねた。例えば、6月7日には本館教員の廣瀬准教授や川瀬助教とともに現代美術と人類学のフィールドワークの比較をテーマにした研究会をコーディネートした。本会では廣瀬、川瀬による研究発表のほか、4名の現代美術作家（田村友一郎、宮永亮、佐々木愛、オル太）による口頭発表が行われた。また、12月18日には、川瀬助教とともに、映像人類学研究会 Anthro-film Lab を企画し、芸術人類学者で映画監督の Lisa Spilliaert 氏（ベルギー）や映像作家でサウンドアーティストのオクノマモル氏（オランダ、日本）を招へいし、両者の制作過程の記録映画のブラッシュアップをめぐる議論を行った。さらに、川瀬助教が制作する、みんぱく映像民族誌『めばえる歌——民謡の伝承と創造——』（平成29年度後半に館内の映画会で発表予定）の編集過程における、静止画資料やテレビ番組（四国放送）からの抜粋動画の使用、活用に関して複数の段階において提言し、作品のブラッシュアップに協力した。

以上より、写真や動画資料を用いる人類学研究の調査法と現代美術の技法の比較検討を通し、本館の研究者を含む、人類学者との研究課題に関する建設的な対話を積み重ねることができた。今後、さらにこの流れをすすめる、館内の写真、動画資料を活用したワークショップの積極的な提案や本館展示への協力をおこなっていく予定である。

◎出版物による業績

[カタログ]

下道基行

2017 『風景に耳を澄ますこと』（個展カタログ）、愛知：Michi Laboratory。

[新聞など]

下道基行

2016 「14歳と世界と境」『山陽新聞』連載全10回。

2016 「みんなの路地裏探訪」『月刊みんな』40(10)：5-6。

◎口頭発表展示・その他の業績

・ワークショップ

2016年10月29日 ワークショップ「見えない風景——葉山編」神奈川県立美術館

2016年8月21日 ワークショップ「太古の風景に耳をすますこと」黒部市美術館

2016年7月 ワークショップ「14歳と世界と境」岡山市立富山中学校

2017年1月 ワークショップ「14歳と世界と境」マレーシアクアラルンプール市内の中学校

・研究講演

2017年1月28日 「現代美術館におけるアーカイブ」国立新美術館開館10周年記念シンポジウム『「アーカイブ」再考——現代美術と美術館の新たな動向』国立晋美術館

・展示

2016年8月 個展「風景に耳をすますこと」黒部市美術館、富山

2016年9月 企画展「アッセンブリッジ・ナゴヤ 2016」港まちポットラックビル、愛知

2016年9月 《新しい骨董》企画展「さいたまトリエンナーレ2016」

2016年10月 企画展「岡山芸術交流2016」後楽館高校跡、岡山

2016年11月 企画展「美づくりの里・旅するアート2016」津山文化センター、岡山

2016年 企画展「Soil and Stones, Souls and Songs」Museum of Contemporary Art、フィリピン

2017年2月 企画展「ESCAPE from the SEA」マレーシア国立美術館、マレーシア

◎調査活動

・国内調査

宮古島八重山諸島のフィールドワークによる「津波石」調査と撮影記録

外国人研究員 客員

■研究戦略センター・超領域研究部門

BUCHOWSKI, Michał [ブホフスキ ミハル]——教授

任期：2016年12月1日～2017年9月30日

研究課題：日本の関西地方における移民に関する文化人類学的研究

1955年生。【学歴】 アダム・ミツキエヴィチ大学（AMU Poznań）修士課程（民族学）修了（1979）、アダム・ミツキエヴィチ大学（AMU Poznań）博士課程（人類学）修了（1983）、アダム・ミツキエヴィチ大学（AMU Poznań）Doctorus Habilitatus（社会学・哲学）取得（1990）【学位】 修士（アダム・ミツキエヴィチ大学 1979）、博士（アダム・ミツキエヴィチ大学 1983）、Doctorus Habilitatus（アダム・ミツキエヴィチ大学 1990）【専攻・専門】 移民、差別、移動の社会人類学、ヨーロッパ地域研究【所属学会】 ヨーロッパ社会人類学会、ポーランド人類学会

【主要業績】

[単著]

Buchowski, M.

2001 *Rethinking Transformation: An Anthropological Perspective on Postsocialism*. Poznań: Humaniora.

2004 *Zrozumieć Innego. Antropologia racjonalności* (To understand the Other: an anthropology of rationality). Kraków: Jagiellonian University Press.

2012 *Etnologia polska. Dzieje i powinowactwa* (Polish ethnology: history and intellectual relationships). Poznań: Nauka i Innowacje 2012.

【受賞歴】

1994 ブロンズクロス賞（ポーランド大統領賞）

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の関西地方における移民に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

経済のグローバル化と世界各地の紛争の影響で、多数の人びとが移民や難民として欧米諸国などに移動しつつある。ヨーロッパや日本において、移民問題は、特に受け入れ国にとって政治的、経済的、社会的、文化的な問題となっている。ヨーロッパにおける移民研究を行ってきたが、本プロジェクトでは日本の関西地域における移民の実態に関して調査研究を行い、移民に関する比較研究を行いたい。

民博滞在中に、次の3つの互いに関連するテーマの研究を行う予定である。

a) 移民に対する国家政策と政府の姿勢

国家の移民政策については、政府の公式文書やプレスリリースの調査および政府関係者へのインタビュー調査を実施し、データを収集する。

b) 日本国民の移民への意見や態度

関西地区在住の日本国民が、移民について、また社会における移民の存在と役割をどのように考え、移民に対してどのような態度や行動をとっているかについて、インタビュー調査や参与観察調査を行う。

c) 日本での移民の生活状況と生活

移民が日本においてどのような生活を送っているかについて、インタビューと参与観察調査を行う。また、日本社会の「もてなしのこころ」について、移民がどう認識しているかについても調査を行う。

以上の調査を踏まえて、ヨーロッパの移民との比較研究を行う。

◎出版物による業績

[論文]

Buchowski, M.

2016 Tolerancja po polsku. Etnologiczna rozprawa z mitem (Tolerance, Polish-style. An ethnological tussle with the myth). In A. Gulczyński (ed.), *Uniwersyteckie Wykłady na Zamku: Uniwersalne wartości w uniwersyteckim dyskursie*, pp.51-67. Poznań: Adam Mickiewicz University Press. (in Polish)

2016 Nauka jako pole (samo)kolonizacji. Przykład antropologii społeczno-kulturowej (Science as a field of self-colonisation). In w: red. Jan Kieniewicz (ed.), *Perspektywy postkolonializmu w Polsce, Polska w perspektywie postkolonialnej*, pp.21-37. Warszawa: Wydział „Artes Liberales” Uniwersytetu Warszawskiego. (in Polish)

2016 Making anthropology matter in the heyday of islamophobia and the ‘refugee crisis’: The case of Poland, *Český lid: etnologický časopis* 103(1): 51-67. (in English)

2016 Význam antropologie v době vzestupu islamofobie a ‘uprchlické krize’: případ Polska. *Český lid: etnologický časopis* 103(1): 69-84. (in Czech)

2016 Mutual encounters. *Lud* 100: 47-60. (in English)

2017 Antropologia kultury a antropologia kulturowa. Kilka refleksji na marginesie książki Grzegorza Godlewskiego. *Filo-sofija* 36: 213-228. (in Polish)

2017 Moieties, lineages and clans in Polish Anthropology before and after 1989. In A. Barrera, M. Heintz and A. Horolets (eds.), *European Anthropologies*, pp.187-210. Oxford-New York: Berghahn Publishers. (in English)

[書評]

Buchowski, M.

2016 *Nowa Huta: Generations of Change in a Model Socialist Town* by Kinga Pozniak, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2014, 240 pp. *American Anthropologist* 118(3): 688-689 (DOI 10.1111/aman.12614) [review].

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月7日 *Nieobecni “Obcy”: o tzw. kryzysie uchodźczym i islamofobii oraz polskiej (nie-)tolerancji* (Absent Others): Ośrodek Teatralny Kana, Szczecin (Poland).

- 2016年 4 月 2 日～ 4 月14日 *Romowie- wyzwania dla Europy* (Roma- a challenge to Europe), panel chair, 26th „Days of French Culture: Roma's France”; Poznań (Poland).
- 2016年 4 月20日 *Migranci w Poznaniu – nowe możliwości czy problemy* (Migrants in Poznań), with Agata Kochaniewicz, Poznań (Poland).
- 2016年 5 月 8 日 *Postsocialist anthropology from within*. IUAES Intercongress“World Anthropologies and privatisation of knowledge: engaging anthropology in public”, Dubrovnik (Croatia).
- 2016年 5 月 4 日～ 5 月 8 日 *Anthropology and anthropologists in Poland*. “World Council of Anthropological Associations Panel Stream: Global Survey of Anthropological Practice”IUAES Intercongress – World Anthropologies and privatisation of knowledge: engaging anthropology in public; Dubrovnik (Croatia).
- 2016年 7 月12日～ 7 月15日 *The Invention of Refugee Studies*, panel discussion. Conference: “Rethinking Forced Migration and Displacement: Theory, Policy and Praxis”. International Association for the Study of Forced Migration (IASFM), Poznań (Poland).
- 2016年 7 月20日～ 7 月23日 *“Refugee crisis”, European reactions and the role of anthropology* – panel co-organizer. Conference: “Anthropological Legacies and Human Futures”, European Association of Social Anthropologists Biannual Conference, Milan (Italy).
- 2016年 7 月20日～ 7 月23日 *What was postsocialism? At least for anthropology*. Conference: “Anthropological Legacies and Human Futures”. European Association of Social Anthropologists Biannual Conference, Milan (Italy), 20-23.07.2016.
- 2016年 9 月14日～ 9 月17日 *Dialektyka świeckiego i sakralnego w kulturze a quasi-religijne hierarchizowanie ludzi* (Dialectics of profane and sacred). 16th Nationwide Sociological Congress. Polish Sociological Society, Gdańsk (Poland).
- 2016年 9 月22日～ 9 月23日 *Nietolerancja jako zaprzeczenie europejskości* (Intolerance as a denial of Europeaness). Conference: „Jaka refleksja o kulturze jest dzisiaj potrzebna Europie?”(What reflexion on culture is needed in Europe). Polish Ethnological Society Annual Conference, Wrocław (Poland).
- 2016年 9 月26日～ 9 月28日 *Migrantofobia a sekurytyzacja: wprowadzenie do tematu* (Migrant-phobia and securitisation). Conference: „Europa w obliczu wielkich migracji”(Europe facing big migrations). Poznań (Poland).
- 2016年10月16日 *CieŜar pamięci: Polacy - Niemcy - Żydzi*, panel discussion (Burden of memory: Poles – Jews – Germans). National Museum in Poznań (Poland).
- 2016年10月23日～10月24日 *Phantom Islamophobia in Poland: Anthropological Interpretation of Hate Against an Absent Other*. Conference“Islamophobia in the East of the European Union”. University of Toronto & Czech Academy of Sciences; Prague (Czech Republic).
- 2016年 6 月10日～ 6 月11日 *What spaces for political anthropology?* panel member. Conference: “Spaces of the political”. Institute of Ethnology and Cultural Anthropology, University of Warsaw, Poland.
- 2016年10月 4 日 *From quasi-religious communism to post-communist religious fundamentalism to refugees-phobia in Central Europe*. Series: Professorial Lectures Series; Faculty of Social and Economic Sciences, Komensky University, Bratislava (Slovakia).
- 2016年11月16日 *New European Orientalism* – panel discussant. Institut für die Wissenschaften dem Menschen. Wien (Austria).

蔡 志祥 [チャイ チャーチョン] ————— 教授

任期：2016年8月1日～2017年7月27日

研究課題：東南アジア華人における集団祭祀の変遷

【学歴】 国立台湾大學卒（1978）、香港中文大學大學院歴史學専攻碩士課程修了（1981）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了（1989）【職歴】 香港中文大學人類學系助手（1979）、香港歴史博物館研究助理（1984）、香港政府档案局助理档案主任（1988）、マカオ東亜大學社会科學院助教授（1989）、マカオ大學社会科學院助教授（1990）、香港科技大學人文學系講師（1991）、香港科技大學人文學系准教授（1997）、香港中文大學歴史學系教授（2006）【学位】 文学博士【専攻・専門】 社会史学、商業史、華僑史、歴史人類学【所属学会】 皇家亞洲學會香港分會、華南研究會

【主要業績】

[編著]

蔡志祥・黃永豪・謝曉輝編

2017 『邊陲社會與國家建構』 臺北：稻鄉出版社（中国語）。

蔡志祥・韋錦新編

2014 『延續與變遷——香港社區建醮傳統的民族志』 香港：香港中文大學出版社（中国語）。

[単著]

蔡志祥

2000 『打醮——香港的節日與地域社會』 香港：三聯書店（中国語）。

[論文]

CHOI, Chi-cheung

2014 Rice, treaty ports and the Chaozhou Chinese Lianhao Associate companies: construction of a South China-Hong Kong-Southeast Asia commodity network 1850s-1930s. In Y. Lin and M. Zelin (eds.) *Merchant Communities in Asia, 1600-1980*, pp.53-77. London: Pickering & Chatto Publishers Ltd.

CHOI, Chi-cheung

2010 Stepping out? Women in the Chaoshan Emigrant Communities, 1850-1950. In H. F. Siu (ed.) *Merchants' Daughters: Women, Commerce, and Regional Culture in South China*.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア華人における集団祭祀の変遷

・研究の目的、内容

神戸の華人の盆行事（救贖儀礼）の変遷について研究を進めると同時に、東南アジア地域の華人が1941-45年の日本占領期に救贖儀礼などの集団祭祀をいかに行っていたかを、日本に収蔵されている歴史資料を入手して進める。占領期の研究は従来、ほとんど解明されていないが、系統だった調査をすれば、必要な史料を入手し得る可能性が、シンガポールでの同じテーマの調査の経験から示唆される。

また、お盆行事に関して、これまで各地の華人に関して研究してきた成果をまとめて、シンポジウムで発表するとともに、植民地政府の文化的・宗教的政策、戦中および戦後に日本にいた中国人が、如何に死と祖先に相対していたかについても調査研究を進める。

・成果

神戸の華人の盆行事（救贖儀礼）ならびに東南アジアの華人の救贖儀礼については、2017年3月4日ならびに5日に国立民族学博物館で開催された国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」にて研究報告をおこなった。その成果は論文として執筆し、中国語ならびに日本語で刊行するために、編集作業を進めている。

◎出版物による業績

[編著]

蔡志祥・黃永豪・謝曉輝編

2017 『邊陲社會與國家建構』 臺北：稻鄉出版社（中国語）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

2016年10月22日 「総合討論コメント」国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」国立民族学博物館

2017年3月4日 「鎮魂劇から歌舞台へ——中元普渡の娯楽、パフォーマンス、儀礼」国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年12月16日 「歴史人類学におけるフィールドワーク教育と推進——香港の経験」山口県立大学

2017年2月18日 “On Religion and Transnational Identity”, Plenary speech, Asian Diasporas: Transnational & Regional Cultural Heritages, organized by Culture Academy, Ministry of Culture Community and Youth, Singapore, at Ngee Ann Auditorium, Asian Civilizations Museum, Singapore (in English)

COPEMAN, Jacob [コープマン、ジェイコブ]——准教授

任期：2016年9月1日～12月28日

研究課題：南アジアにおける献血運動とグル（宗教リーダー）に関する人類学的研究

【学歴】ランカスター大学英文学部卒（2001）、ケンブリッジ大学修士課程社会人類学修士号（トート・ディグリー）（2002）、ケンブリッジ大学修士課程社会人類学修士号（リサーチ・ディグリー）（2003）、ケンブリッジ大学博士課程社会人類学博士号取得（2008）【職歴】ケンブリッジ大学ジーザスカレッジジュニア・リサーチ・フェロー（2006）、エディンバラ大学政治社会学研究科社会人類学分野シニア・レクチャラー（2009）【学位】博士（社会人類学）（ケンブリッジ大学 2008）【専攻・専門】社会人類学

【主要業績】

[単著]

Copeman, J.

2009 *Veins of Devotion: Blood Donation and Religious Experience in North India*. Rutgers University Press.

[編著書]

Copeman, J. and A. Ikegame (eds.)

2012 *The Guru in South Asia: New Interdisciplinary Perspectives*. Oxon: Routledge.

[論文]

Copeman, J.

2015 ‘Secularism’s Names: Commitment to Confusion and the Pedagogy of the Name.’ *South Asia Multidisciplinary Academic Journal* (SAMAJ) 12: 2-22.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

南アジアにおける献血運動とグル（宗教リーダー）に関する人類学的研究

・研究の目的

民博はエディンバラ大学とMemorandum of Understandingを交わしており、学生・教員の積極的な交流が期待されている。コープマン准教授は、この協定をさらに進展させ、現代南アジア地域研究センター（MINDS）とエディンバラ大学南アジア研究センターのネットワーク構築にむけて活動を行う。研究課題である、南アジアにおけるグル（宗教リーダー）による献血運動は、受け入れ教員である松尾准教授が行っているサブスタンス研究に直接関連する研究であり、共同研究を行う。特に定期的な輸血を必要とするセラセミア（先天性の溶血性貧血）に着目した研究を行い、共同研究の成果論集に貢献する。

・成果

民博の教員との連携と将来の研究計画の推進を主に行った。11月に現代南アジア地域研究・民博拠点（MINDAS）のセミナーで、‘Anti-sacrifice: Blood Donation and the “Philanthropic Share”’と題する講演を行った。この講

演会を通じ、研究者や学生との交流をさらに推進し民博の教員とエディンバラ大学南アジア研究センターの関係がより強固になるよう議論した。

また、エディンバラ大学社会人類学分野と密接な関係にあるスコットランド博物館と民博の専門性を活用し、サブスタンスをテーマとした連携展示を将来行う計画を受け入れ教員の松尾瑞穂准教授と共に考案した。さらに、松尾准教授が代表を務める身体サブスタンスの共同研究の成果論集に寄稿した。民博とエディンバラ大学の更なる連携強化のため、松尾瑞穂准教授の研究プロジェクトの最終年度にエディンバラ大学のワークショップ計画を共同で作成した。

他の研究発表としては、民博の研究懇談会で“The Social Life of Blood Donation in India: Devotion, Asceticism and the Guru”（インドにおける献血運動に関する社会生活：信仰心、禁欲主義とグル）、および、東京大学東洋文化研究所において“Ungiven: Bodily Philanthropy as Partonomic Critique”と題する講演を実施した。また、神戸で開催された日本南アジア学会の全国大会にも参加を行っている。

以上の活動を通じて、日本の南アジア専門の研究者と将来性あるネットワークを構築し、民博とエディンバラ大学の学術交流を進展させた。さらに、近刊予定の単著である献血とグルに関する研究を勧め、中心にあたる3章半を執筆した。

◎出版物による業績

[その他]

Copeman, J. and Madeleine Reeves

2016 Tod Hartman, 1978-2016 Obituaries. (<http://www.therai.org.uk/archives-and-manuscripts/obituaries/tod-hartman>) Royal Anthropological Institute.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年11月21日 「Bodily Philanthropy as Partonomic Critique」MINDAS第1回セミナー、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年11月25日 「Anti-sacrifice: Blood Donation and the 'Philanthropic Share」東文研セミナー／日本南アジア学会第68回月例懇話会、東京大学

2017年3月1日 'Names in the scene of instruction', Centre for Political Studies, Jawaharlal Nehru University, New Delhi, India

・民博研究懇談会

2016年10月26日 「The Social Life of Blood Donation in India: Devotion, Asceticism and the Guru」第275回民博研究懇談会、国立民族学博物館

ENGBERG-PEDERSEN, Elisabeth [エンゲベルグ・ペデルセン、エリザベト]———教授

任期：2016年7月19日～2017年1月30日

研究課題：日本手話とデンマーク手話におけるモダリティ表現（特に認識様態モダリティと証拠性）の記述と音声言語との比較に基づく分析

1952年生。【学歴・学位】BA in Danish, University of Copenhagen (1971)、BA in linguistics, University of Copenhagen (1976)、MA in linguistics, University of Copenhagen (1979)、PhD with a thesis on Danish Sign Language, University of Copenhagen (1993) 【職歴】Research assistant, University of Copenhagen, and teaching and research positions at The Centre for Sign Language, Copenhagen (1980-1982)、Research grant, Department of Applied and Mathematical Linguistics, University of Copenhagen (1982-1985)、Assistant professor of the psychology of language, Department of General and Applied Linguistics, University of Copenhagen (not tenure-tracked) (1985-1989)、Research coordinator, The Centre for Sign Language, Copenhagen (1989-1992)、Post-doc position, Department of General and Applied Linguistics, University of Copenhagen (1992-1993)、Associate professor of linguistics, Department of Nordic Studies and Linguistics, University of Copenhagen (1994-2009)、Professor of applied linguistics, Department of Nordic Studies and Linguistics, University of Copenhagen (2009-) 【専攻・専門】The syntax and semantics of sign languages, Language and autism, Functional-cognitive grammar 【所属学会】Lingvistikredsen i København (The Linguistic Circle of Copenhagen), Scandinavian Association for Language & Cognition, International Cognitive Linguistics Association

【主要業績】

[単著]

ENGBERG-PEDERSEN, E.

1993 *Space in Danish Sign Language: the semantics and morphosyntax of the use of space in a visual language*. Hamburg, Germany: Signum Press.

[論文]

ENGBERG-PEDERSEN, E.

2015 Perspective in signed discourse: the privileged status of the signer's locus and gaze. *Open Linguistics* 1, pp.411-431.

ENGBERG-PEDERSEN, E., and R. V. Christensen

2017 Mental states and activities in Danish narratives: children with autism and children with language impairment. *Journal of Child Language*, 44(5): 1192-1217.

【受賞歴】

2017 The Deaf Foundation, The Augustinus Foundation

2016 Oticon Foundation

2011 Language and Cognition – Perspectives from Impairment, Independent Research Fund Denmark

2011 Elected member of the Royal Danish Academy of Sciences and Letters

2002 Lundbeck Foundation, grant for technical equipment

1994 The Castberg prize

1992 Danish Research Council for the Humanities and Lillian and Dan Fink's Foundation, support for the publication

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話とデンマーク手話におけるモダリティ表現（特に認識様態モダリティと証拠性）の記述と音声言語との比較に基づく分析

Describing modality expressions in Danish Sign Language and Japanese Sign Language with a special focus on epistemic modality and evidentiality) and a comparison with spoken languages

◎出版物による業績

[論文]

ENGBERG-PEDERSEN, E. and Ditte Boeg Thomsen

2016 The socio-cognitive foundation of Danish perspective-mixing dialogue particles. In B. Dancygier, W.-I. Lu, and A. Verhagen (eds.) *Linguistic manifestations of mixed points of view in narratives*, pp.125-142. Berlin, Germany: de Gruyter Mouton.

Boye, Kasper and E. Engberg-Pedersen

2016 Substance and structure in linguistics: Workshop at the University of Copenhagen, February 27-28, 2015. *Acta Linguistica Hafniensia* 48(1): 5-6.

ENGBERG-PEDERSEN, E. and Rikke Vang Christensen

2017 Mental states and activities in Danish narratives: children with autism and children with language impairment. *Journal of Child Language* 44: 1192-1217.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年11月8日 'Why do languages sound or look the way they do?' University of Tohoku, Sendai

2017年3月30日～3月31日 'The open hand supine as an expression of modality in Danish Sign Language.' Workshop: Connecting discourse in speech and gesture. Lund University, Sweden.

・研究講演

2016年12月12日 'Deaf children in Denmark 2016', Meisei Gakuen.

・民博研究懇談会

2017年1月25日 「手話言語における（不）確実性表現」第276回民博研究懇談会

ORBELYAN, Gevorg [オルベイアン、ゲヴォルグ]———准教授

任期：2015年12月14日～2016年11月24日

研究課題：博物館とコミュニティのあり方に関する博物館人類学的研究

【学歴】 エレヴァン国立教育大学卒・エレヴァン国立教育大学大学院修士課程一貫修了（2005）【職歴】 エレヴァン歴史博物館古代中世部上級専門官（2005）、モスクワ LUDING 株式会社 ウェブサイト専任翻訳者兼通訳者（2006）、エレヴァン歴史博物館古代中世部上級専門官（2007）、エレヴァン歴史博物館展示デザイン部門長（2008）、エレヴァン市観光開発投資部門、観光促進プログラム（2011）、エレヴァン市立博物館副館長（2012-）【学位】 修士（エレヴァン国立教育大学文化学部大学院修士課程）【専攻・専門】 文化学

【主要業績】

〔著書〕

Orbelyan, G.

2011 *Welcome to Yerevan*. Yerevan: Yerevan History Museum.

〔論文〕

Orbelyan, G.

2011 Tourism Development Perspectives and Current Status In Yerevan, *Museum* 3: 266-70.2011 Exhibition Making in Museums, *Museum* 2: 207-15.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

博物館とコミュニティのあり方に関する博物館人類学的研究

これまで博物館活動の現場で実績を挙げたかわら、「18世紀のエレヴァンを訪れた外国人」に関する歴史的研究、「エレヴァンの博物館を訪れる人々の実態についての研究」、「エレヴァン市における広場と公園の歴史」、「博物館における展示作成の実務」について考察、「エレヴァンにおける観光開発の展望と現状」、「世代間の対話フォーラムとしての博物館と展示」の役割に関する構想など、理論面でも研究を重ねてきたが、今年度は、これらの研究を発展させると同時に、日本における各種博物館の展示と公共空間の利用法及びコミュニティとの連携などの比較研究を行った。

・成果

今年度は、本館客員准教授として、①国立民族学博物館の機関研究「文化遺産の人類学」、②機構本部基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる事前調査」、③追手門学院大学との協定に基づく共同研究「地域文化の継承と創造」などに参加して、国内の博物館と地域コミュニティについての実地調査を行うとともに研究会などで報告発表を行った。また来日日程が今年度の国際研修「博物館学コース」の期間に少し重なるため、その期間中に研修に積極的に関与すると同時に、研修後のコース改良についても助言を行った。

◎出版物による業績

〔その他〕

Orbelyan, G.

2016 Armenia: The Holly Land. *Kikan Minzokugaku* (『季刊民族学』) No.157, pp.61-92, 大阪：千里文化財団。2016 Yerevan: the oldest city which is 2800 years old. *Kikan Minzokugaku* (『季刊民族学』) No.158, pp.26-35, 大阪：千里文化財団。2016 Armenian traditional Weddings in the city life. *Kikan Minzokugaku* (『季刊民族学』) No.158, pp.36-48, 大阪：千里文化財団。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年4月24日～4月26日 'Localization process indicators of sustainable tourism development of rural

areas in Armenia.' International Symposium "Gathering to Share Hiroshima's Desire for Peace", Hiroshima

2016年7月3日～7月9日 'Marketplace of Exhibitions and Ideas.' The second International Conference "Museums and Cultural Landscape: Communicating, Connecting and Innovating with Style", Milan, Italy

・広報・社会連携活動

2016年5月7日 「Yerevan: the garden city」吹田市博物館ギャラリートーク

2016年10月9日 「ハチュカル——拓本づくりでまなぶアルメニア十字架 Making Taku-Hon through Armenian Khachkar」ワークショップ、国立民族学博物館

アルメニア：

<https://armenpress.am/arm/news/862052/tchaponiayum-hayastani-ankakhutyan-25-amyakin-nvirvats-cucah-andes.html>

<http://yhm.am/archives/8500>

・展示

2016年10月11日～10月29日 イベント企画「ハチュカル——アルメニアの十字架石碑をめぐる物語」

・民博研究懇談会

2016年9月14日 「博物館の活性化 Animating Museums」第274回民博研究懇談会

・その他

2016年12月15日 エレヴァン歴史博物館職員への特別講義（JICA 普及プログラム）「国立民族学博物館（日本）における経験と研究活動について」

2016年9月26日～11月24日（研修は12月17日までだが招聘終了により帰国）JICA 課題別研修コース「博物館とコミュニティ開発 Museums and communities」へのオブザーバー参加

SAM, Sam-Ang [サム サムアン]—————教授

任期：2015年8月3日～2016年7月29日

研究課題：無形文化遺産保護における学術的映像資料の活用についての研究

【学歴】カンボジア王立芸術大学ディプロム・エス・アール修了（1970）、カンボジア王立芸術大学バカロレア・エス・アール修了（1973）フィリピン大学音楽院作曲科卒（1977）コネチカット大学卒（1983）コネチカット大学修士課程修了（1985）ウェスリヤン大学博士課程修了（1988）【職歴】コネチカット大学講師（1980）、コーニッシュ芸術大学音楽部講師（1988）、ワシントン大学音楽部講師（1989）、カンボジア・ネットワーク評議会（アメリカ合衆国）ディレクター（1992）、カンボジア王立芸術大学教授（1992）、ザルツブルグ研究所（ドイツ）客員教授（1999）、国立民族学博物館外国人研究員（2001）、クメール文化協会（アメリカ合衆国）会長（2003）、パンニャシャストラ大学（カンボジア）教授・学部長（2004-）、パンニャシャストラ・インターナショナルスクール（カンボジア）校長（2005）、カンボジア共和国文化芸術省顧問（2008-）、国立民族学博物館外国人研究員（2009）【学位】博士（ウェスリヤン大学 1988）、修士（コネチカット大学 1985）【専攻・専門】民族音楽学

【主要業績】

Pich Tum Kravel and Sam-Ang Sam

2014 *History of Khmer Kings*. Phnom Penh: Pich Tum Kravel & Sam-Ang Sam.

Sam, Sam-Ang

2010 *Music in the Lives of the Indigenous Ethnic Groups in Northeast Cambodia*. Phnom Penh: PUC University Press.

2002 *Musical Instruments of Cambodia*. Osaka: National Museum of Ethnology.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

無形文化遺産保護における学術的映像資料の活用についての研究

・研究の目的、内容

ユネスコの無形文化遺産保護条約等により、各国の文化政策において無形文化遺産の保護が占める位置が大きくなってきている。サム教授は、長年、研究者および演奏家として、カンボジアの伝統芸能に携わる一方、近年は文化芸術省の顧問としてカンボジアの文化政策にも深くかかわっている。また、民博は、サム教授の協力により、1999年度にカンボジアの古典芸能の諸ジャンル、および、2005年度に北東部少数民族のゴング音楽を映像で記録した。特に、1999年度の映像取材においては、後にユネスコ無形文化遺産代表リストに記載された古典舞踊と影絵芝居スバエク・トムの映像記録もおこなっている。そこでこれらの映像を事例として取り上げ、無形文化遺産保護において民博製作の映像資料を活用する方法とその問題点について研究を進める。

・成果

第1の成果として、スバエク・トム全7エピソードの英語字幕版の映像が完成した。これにより、より広く記録映像を活用する可能性が生まれた。一方、民博が記録した約14時間に及ぶスバエク・トムの全レパートリーの詳細な学術的記録映像は貴重な資料であるが、30分程度の紹介映像に比べ、目に見える活用が進まないのも事実である。これは、文字資料と異なり、任意の箇所をピンポイントで参照しにくい映像の特質を反映していると考えられる。この研究では、さらに関連する文字資料等の充実をはかり、相互に対照できる資料群を形成して、長時間に及ぶ記録映像の参照性を高めることをめざした。その成果として、スバエク・トムの全レパートリーのテキストを中心とした書籍の草稿をほぼ完成させた。この草稿は、SESとして出版することを目指し、出版委員会に提出する予定である。

これらの成果により、民博が制作したスバエク・トムの映像記録の活用をさらに高めることができると考えられる。今後、サム教授との協力関係をさらに発展させ、カンボジアにおける映像上映会の開催、文化芸術省映像局や映画監督リティ・パン氏が設立したボバナ映像音響資料センター等、しかるべき機関における映像の公開などをおこない、カンボジアの無形文化遺産保護において映像記録が果たしうる役割について、さらに共同研究を進めたい。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 1: Preah Ream Constructing the Causeway*. (英語版、142分13秒), National Museum of Ethnology.

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 2: Bunhakay*. (英語版、136分12秒), National Museum of Ethnology.

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 3: Sar Neakabah: Magically Produced Naga Arrows*. (英語版、107分42秒), National Museum of Ethnology.

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 4: Battle of Kampann and Hanuman*. (英語版、100分21秒), National Museum of Ethnology.

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 6: Will of Sukkachar*. (英語版、160分8秒), National Museum of Ethnology.

Terada Yoshitaka, Fukuoka Shota, Samang Sam (Supervision)

2016 *Sbaek Thomm Episode 7: Will of Inthochitt*. (英語版、178分16秒), National Museum of Ethnology.

蔡 素娟 [ツァイ ジューン・スーチュアン] ————— 教授

任期：2016年4月13日～7月12日

研究課題：台湾手話と日本手話の語彙におけるバリエーションを歴史的観点から分析する

【学歴・学位】 B.A. Chinese Literature, National Taiwan University, Taiwan, R.O.C (1975)、Ph.D. in Linguistics, University of Arizona, Tucson, USA (1994) 【職歴】 Postdoctoral Research Fellow, Departments of Psychology, Linguistics, and Communicative Disorders and Sciences, State University of New York at Buffalo, USA (1993-1995)、Associate Professor, Graduate Institute of Linguistics National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C. (1995-2004)、Director, Graduate Institute of Linguistics National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C. (2001-2007)、Professor, Graduate Institute of Linguistics National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C.

(2004-)、Acting Dean, College of Humanities National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C. (2005)、Acting Dean, College of Humanities National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C. (2009)、Dean, College of Humanities National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C. (2010-2016) 【専攻・専門】 Theoretical Phonology、Laboratory Phonology、Experimental Phonetics、Child Language Acquisition、Child Language Corpus、Corpus Linguistics、Chinese Dialectology、Sign Language Linguistics

【主要業績】

[論文]

TSAY, J.

2014 A Phonological Corpus of L1 Acquisition of Taiwan Southern Min. In J. Durand (ed.), *the Oxford Handbook of Corpus Phonology*, pp.576-587. UK: Oxford University Press.

TAI, J. H.-Y. and J. Tsay

2015 Taiwan Sign Language. In J. B. Jepsen, G. de Clerck, S. L. Kiingi and W. B. McGregor (eds.), *Sign Languages of The World*, pp.771-809. Germany: De Gruyter Mouton.

[共著]

TSAY, J., J. H.-Y. Tai and Y. Chen

2015 *Taiwan Sign Language Online Dictionary. 3rd Edition*. Institute of Linguistics, National Chung Cheng University, Taiwan. <http://tsl.ccu.edu.tw/> (electronic publication)

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

Dialectal Variation in the Lexicon of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language: A Historical Perspective

・研究の目的、内容

Taiwan Sign Language (TSL) and Japanese Sign Language (JSL) are historically related. During the Japanese occupation of Taiwan (1895-1945), Japanese deaf educators brought JSL to Taiwan and JSL became the official sign language used in deaf schools in Taiwan. It has been reported that, roughly speaking, deaf educators from the Osaka area went to the south area of Taiwan, and deaf educators from the Tokyo area went to the north. Therefore, some lexical items in TSL show dialectal variations between the south and the north. After Japanese teachers left Taiwan in 1945, TSL has developed independently (except for the language contact with Chinese Sign Language after Chinese deaf educators started to come to Taiwan after 1949). The goal of this study is to find the JSL origin of TSL words with reference to dialectal differences when relevant. During the three months (April 13 to July 12, 2016) when I was at Minpaku, videos of JSL signers from the Osaka area were collected using two wordlists. Each word was analyzed in four phonological features (handshape, location, movement, orientation) and was compared with the south and north varieties of TSL. The Osaka JSL data were also compared with the Tokyo JSL data which I had collected before I came to Minpaku.

・成果

There were two wordlists used for the comparison of TSL and JSL. List 1 contains 50 words which show dialectal (North-TSL vs. South-TSL) variations. List 2 is a subset of the 207-word Swadesh list (words for basic concepts for historical-comparative linguistics). Based on the 741 tokens from Word List 1 and 241 tokens from Word List 2, the preliminary results show that: (1) There were more variations than we expected among the six JSL signers (3 recorded in Tokyo and 3 recorded in Osaka). For example, the word ENOUGH had 10 variants. This might lead to yet another line of research with the focus of JSL dialectal distribution. (2) Among the 50 words on List 1, 21 words were either same or similar between TSL and JSL, while 29 were different. (3) Among the 45 words in List 2, 21 were either same or similar between TSL and JSL, while 24 were different. (4) The same/similar words might have their JSL origin, but they don't necessarily match the North TSL-Tokyo JSL vs. South TSL-Osaka JSL as generally assumed based on the early history of TSL. (5) The overlapping in the lexicon between TSL and JSL

might not be as large as we anticipated. This could be due to the language contact with Chinese Sign Language (CSL) which was brought to Taiwan by deaf educators from Nanjing and Shanghai, China, since 1949. This is another historical stratum of TSL that will be explored in future research. (6) After taking iconicity into consideration, there should be a more precise picture about TSL lexicon with respect to their JSL origin. (7) After the more detailed analysis is completed based on the current data, there should be interesting implications for various issues in historical linguistics. The support from Minpaku is highly appreciated. Minpaku will be acknowledged whenever the data collected during this period of time are used or cited.

◎出版物による業績

[論文]

TAI, J. H.-Y. and J. Tsay

2017 Sign Languages: Taiwan. In R. Sybesma, W. Behr, Y. Gu, Z. Handel, C.-T. J. Huang and J. Myers (eds.) *Encyclopedia of Chinese Language and Linguistics IV*, pp.92-99. Leiden & Boston: Brill Academic Publishers.

TSAY, J.

2017 Acquisition of Taiwanese, L1. In R. Sybesma, W. Behr, Y. Gu, Z. Handel, C.-T. J. Huang and J. Myers (eds.) *Encyclopedia of Chinese Language and Linguistics I*, pp.82-86. Leiden & Boston: Brill Academic Publishers.

2017 Acquisition of Tone, L1. In R. Sybesma, W. Behr, Y. Gu, Z. Handel, C.-T. J. Huang and J. Myers (eds.) *Encyclopedia of Chinese Language and Linguistics I*, pp.86-92. Leiden & Boston: Brill Academic Publishers.

◎映像音響メディアによる業績

[オンライン辞書]

TSAY, J., J. H.-Y. Tai and R.-H. Hwang

2016 *Taiwan Sign Language Online Dictionary App*. Institute of Linguistics, National Chung Cheng University, Taiwan.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年9月25日 'Communicative Efficiency in Sign and Speech: A Longitudinal Study.' The 5th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics. National Museum of Ethnology, Japan.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年3月10日～3月12日 'The Role of Markedness in Hearing L2 Users of Taiwan Sign Language.' (Paper presented) The International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics. The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong.

・民博研究懇談会

2016年6月29日 「止まるべきか止まらざるべきか——音声言語と手話言語の韻律的特徴の比較」第272回民博研究懇談会

◎調査活動

・国内調査

2016年4月13日～7月12日—大阪 (Field work in the Osaka area on lexical comparison of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language. Taking videos of JSL signers signing testing wordlists)

VUCINIC-NESKOVIC, Vesna [ヴチニッチ-ネスコヴィッチ、ヴェスナ]——教授

【学歴】ベオグラード大学哲学大学院 (1994) 【職歴】ベオグラード大学教授 【学位】人類学博士 (ベオグラード大学哲学大学院 1994) 【専攻・専門】文化人類学 【所属学会】国際人類学東南ヨーロッパ学会 (InASEA)、人類学会世界協議会 (WCAA)

【主要業績】

[単著]

B. Вучинић Нешковић (Vucinic- Neskovic Vesna)

- 1999 *Просторно понашање у Дубровнику: антрополошка студија града са ортогоналном структуром* [*Spatial Behavior in Dubrovnik: An Anthropological Study of a City with Orthogonal Structure*]. Одељење за етнологију и антропологију Филозофског факултета Универзитета у Београду, Београд. [Dept. of Ethnology and Anthropology, School of Philosophy of University of Belgrade, Belgrade].
- 2008 *Божих у Боки Которској: антрополошки есеји о јавном налагању бадњака у доба постсоцијализма* [*Christmas in the Bay of Kotor: Anthropological Essays on the Public Burning of Yule Logs in the Time of Postsocialism*]. Филозофски факултет Универзитета у Београду и Чигоја штампа, Београд. [School of Philosophy of University of Belgrade, Belgrade and Cigoja Press, Belgrade].
- 2013 *Методологија теренског истраживања у антропологији: од нормативног до искуственог* [*Methodology of Anthropological Fieldwork: From the Normative to the Experiential*]. Српски генеалогички центар и Филозофски факултет Универзитета у Београду, Београд. [Serbian Genealogical Centre and School of Philosophy of University of Belgrade, Belgrade].

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国都市の公共的空間における日常生活——日本との比較

・研究の目的、内容

中国の都市部の公共的空間における多様な利用に関するこれまでの研究の延長として、公園、広場および街角の利用に関する市民が果たす役割を研究すると同時に、日本の都市空間における市民の日常的活動と比較することで両者のそれぞれの特徴を明らかにする。その目的は、二つがある。まず、中国の公共空間は、東南ヨーロッパ都市の公共的空間のように、社会表象になるかそれとも個々人の自己表象になるのかを検証するところにある。もうひとつの目的は、都市住民のジェンダー、年齢、婚姻状況、民族、国籍などの要素が、公共的空間における行為の規則性に影響するかどうかを検証する。

・成果

英語を中心とした関連文献を収集し、日本と中国などの世界他の地域の公共的空間における市民の日常的活動について、教員や院生の中で聞き取り調査を行い、また、大阪、京都、奈良、神戸と東京で参与観察も行った。これまでに東南ヨーロッパの都市部の公共的空間の研究で使用された諸概念：露天的公共空間、イベント・儀礼空間、社会活動の空間を日本の研究に導入した結果、日本の公共的空間で観察された多様な活動は、ヨーロッパや他の東アジア諸国（中国など）には見られないほど、実に賑やか多様であることがわかった。今後、上記の本館滞在中で得られたデータを分析し、さらなる考察と資料を加えた上で論文を執筆する予定である。地域と民族を超えた本研究の成果は、新しくできた超域フィールド科学研究部の研究活動の模索と展開に重要な示唆を与えたと言える。また、JASCAの活動や国際人類学・民族学の国際組織（IUAES）（WCAA）とのつながりを生かし、本館の教員や日本文化人類学会の先生との交流を行ったことにより、国際的研究ネットワークの拡大に重要な契機になった。

王向華 [ウォン ヒョンワ]————— 教授

任期：2016年1月13日～2017年1月11日

研究課題：台湾における文化政策とナショナル・アイデンティティ

【学歴】香港中文大学社会科学部人類学科卒業（1986）、オックスフォード大学社会科学部人類学科修了（1997）【職歴】香港大学日本研究学部リサーチアシスタント（1995）、香港大学日本研究学部講師（1995）、香港大学日本研究学部助教授（1996）、香港大学日本研究学部准教授（1999）、国立民族学博物館客員准教授（2001）、香港大学文学部アソシエイト学群長（2006）、香港大学現代言語・現代文化代理学部長（2006）、香港大学現代言語・現代文化学部長（2008）、日本大学経済学部客員教授（2008）、同志社大学社会学部・大学院社会学研究科客員教授（2012）、香港大学現代言語・現代文化学部グローバルクリエイティブ産業プログラム主任（2012）【学位】人類学博士（オックスフォード大学 1997年）

【主要業績】

[単著]

王向華

2004 『友情と私利——香港一日系スーパーの人類学的研究』(Friendship and Self Interests: An Anthropological Study of a Japanese Supermarket in Hong Kong) 東京：風響社。

Wong, H. W.

1999 *Japanese Bosses, Chinese Workers: Power and Control in a Hong Kong Megastore*. London: Curzon Press & Hawaii, USA: The University of Hawaii Press.

[編著]

Wong, H. W.

2015 *Dang riben A-pian yushang huaren yuwang: xingbie, xingxiang, seqingpin de wenhua lilun* (『當日本A片遇上華人慾望：性別、性相、色情品的文化理論』)(When Japanese Adult Videos Meet the Chinese Sexual Desires: the cultural theories of gender, sexuality and pornography). Taipei: Airiti Press (in Chinese).

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

台湾における文化政策とナショナル・アイデンティティ

・研究の目的、内容

民博に滞在した1年間、以下の調査活動をおこなった。

- A) 日本台湾総督府の文化政策について日本語の資料を包括的にレビューした。
- B) 日本台湾総督府の文化政策が現代台湾のアイデンティティ形成に及ぼした影響について包括的にレビューした。
- C) 台湾のマイノリティ集団がいかに日本総督府の文化政策に応じてきたのか、また、そうした反応がいかに現代台湾の台湾アイデンティティの形成に関係してきたのかを知るために、植民地期台湾の教育、ジェンダー、社会運動、知識人についての日本語文献に着目した。
- D) 明治期の政治サークルの間でなされた植民地政策に関する議論をレビューし、こうした議論が台湾の植民地統治にどのように影響したのかを調べた。
- E) 明治時代の日本の近代化、日本の家制度、および日本の植民地政策と関連する他の制度についての日本語文献を包括的にレビューした。
- F) 日本の学者がいかに台湾を学んできた／でいるのかを理解するために、私がおこなっているテーマについて日本の学者と洞察に満ちた議論をおこなった。

・成果

- 1) 台湾と香港における文化／植民地政策を比較研究した本を執筆した。この原稿は、2017年の半ばにRoutledge社から出版される。
- 2) 『再ナショナリズム化する台湾、脱政治化する香港』(仮題目)という日本語の本を2017年に東京の旭書店から出版する。
- 3) 香港のファミリー・ビジネスに関する中国語の本を2016年冬に刊行した。
- 4) 香港における中国人商人の企業に関する英語の本を、2017年の半ばにRoutledge社から出版する。
- 5) 日本の文化産業についての英語の本を2017年の半ばにRoutledge社から出版する。
- 6) 香港アイデンティティと大衆文化の形成についての英語の本を2017年後半にRoutledge社から出版する。
- 7) 大陸中国における日本のスーパーマーケットについての英語の本を2017年末にRoutledge社から出版する。
- 8) 人類学と管理科学の創造的結合についての英語の本を2017年にBerghahn Booksより出版する。
- 9) 中国の家族、エスニシティ、国家についての編著(韓敏教授、河合准教授との共編)を2017年前半にBridge21社から出版する。
- 10) 浙江大学出版社より刊行している中国語の学術雑誌『人類学研究』にて企業人類学についての特集を掲載する。
- 11) その他、民博の河合が組織していた日本文化人類学会課題研究懇談会「東アジア公共人類学懇談会」でディスカッサントとして貢献した。

SAVELLE, James Michael [サベール、ジェイムズ マイケル]——教授

任期：2017年1月10日～6月30日

研究課題：過去と現在の捕鯨文化に関する人類学的研究

1950年生。【学歴】オタワ大学地質学部（1973）、オタワ大学大学院地質学部修士課程（1976）、アーカンソー大学大学院人類学部修士課程（1979）、アルバータ大学大学院人類学部博士課程（1985）【職歴】ケンブリッジ大学（ウルフソン・カレッジとスコット・ポラー研究所）客員研究員（1985）、マニトバ大学人類学部助教授（1987）、マギル大学人類学部助教授（1988）、マギル大学人類学部准教授（1994）【学位】Ph.D.（アルバータ大学 1986）、修士（人類学）（アーカンソー大学 1981）、修士（地質学）（オタワ大学 1979）【専攻・専門】民族考古学【所属学会】アメリカ考古学会、カナダ考古学会

【主要業績】

[単著]

Savelle, J. M.

1987 *Collectors and Foragers: Subsistence -Settlement System Change in the Central Canadian Arctic, AD 1000-1960*. London: British Archaeological Reports.

[編著]

Savelle, J. M., N. Kishigami and H. Hamaguchi (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling*. (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology, Japan.

[論文]

Savelle, J. M. and A. S. Dyke

2014 Paleoeskimo occupation history of Foxe Basin: Implications for the core-area model and for Dorset origins. *American Antiquity* 79(2): 249-276.

【2016年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

過去と現在の捕鯨文化に関する人類学的研究

・研究の目的

これまでカナダ極北高緯度地域における捕鯨文化について動物考古学的研究を行い、カナダ地域でのイヌイト文化の形成と拡散、変化において捕鯨がもっとも重要な要因であることを実証してきた。現在は、これまでに現地調査を行った500年～800年前のチューレ文化イヌイトの捕鯨跡から出土した遺物（6千点）と動物遺存体（5万点）を分析し、外部から流入してきた物質の分布やセトルメントパターン、社会組織の復元、情報ネットワーク、クジラに関する儀礼等につての研究を進めてきた。この研究を継続するとともに、次の2つのプロジェクトを実施する。

国立民族学博物館には、小谷凱宣が収集したアラスカ考古学資料およびビルケット・スミスが岡正雄と交換したグリーンランド考古学資料が所蔵されている。資料情報によるとこれらは捕鯨文化の担い手であるチューレ・イヌイトの製作・使用物と考えられているが、これまで十分な調査や分析がされていない。このため第1に、これらの標本資料について岸上伸啓らと共同研究し、考古学的情報を付加したい。その成果は、現在、実施中のフォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト「北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に」（代表者：岸上伸啓、平成28年1月～平成29年8月）に追加する。

第2は、捕鯨文化に関するSESの編集・出版およびテキストの執筆である。これまで岸上伸啓や浜口尚らと進めてきた共同研究・CHAGS11シンポジウムの成果を出版するための編集作業を協働しながら進める。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会もしくは館外のシンポジウムでの発表

2016年8月28日～9月2日 Subsistence Resiliency and Climate Change: The Development and Collapse of Canadian Arctic Thule Whaling Societies. Paper presented at the 8th World Archaeology Congress, Kyoto, Japan.

- 2016年 9 月 Development and Collapse of Canadian Arctic Thule Whaling Societies. Paper presented at a workshop entitled 'Long-term Sustainability through Place-Based, Small-scale Economies: Approaches from Historical Ecology.', Research Institute for Humanities and Nature, Kyoto, Japan.
- 2016年 5 月15日～ 5 月19日 (M-H. Julian, T.C.A. Royale, P. Szpak, J.M. Savelle and D.Y. Yang) Assessing the impacts of historic whaling on beluga whales (*Delphinapterus leucas*) in the Canadian Arctic through ancient DNA analysis. Paper presented at the Canadian Archaeological Association 46th Annual Meeting, Whitehorse, Yukon, Canada.
- 2017年 3 月29日～ 4 月 2 日 Prehistoric Thule Whaling in the Canadian Arctic: Ritual, Symbolism and Ideology. Paper presented at the Society for American Archaeology, 82nd Annual Meeting, Vancouver, Canada.
- 2017年 3 月29日～ 4 月 2 日 (K. Kotar, J.M. Savelle and A.S. Dyke) Preliminary Results of New Excavations on Jens Munk Island, Foxe Basin, Arctic Canada. Paper presented at the Society for American Archaeology, 82nd Annual Meeting, Vancouver, Canada.
- ・ 特別研究
- 2017年 3 月26日 'Of Inuit and Whales in Canadian Arctic Prehistory'. Paper presented at the Symposium 'Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives from Historical Ecology' National Museum of Ethnology, Osaka.
- ・ 研究懇談会
- 2017年 2 月22日 「Paleoeskimo Demographic History (ca. 4800-800 B.P.) in the Canadian Arctic and its Relationship to Mid-Late Holocene Climate Variability」 第277回民博研究懇談会

SMIDT, Wolbert G. C. [シュミット ヴォルバート G C] ————— 准教授

任期：2017年 1 月24日～ 5 月16日

研究課題：写真・動画資料の分析と活用を通じたエチオピア近代史の研究

【学歴】 ベルリン自由大学法律学科・哲学科卒（1992）、ベルリン自由大学歴史人文学科修士課程修了（1998）、ハンブルグ大学社会科学科博士課程修了（2005）【職歴】 ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所研究員、メケレ大学歴史文化学部准教授【学位】 博士（ハンブルグ大学）【専攻・専門】 歴史人類学

【主要業績】

[単著]

SMIDT, Wolbert G. C.

2015 *Photos as Historical Witnesses: The First Ethiopians in Germany and the First Germans in Ethiopia, the History of a Complex Relationship*. Münster: Lit-Verlag (Afrika Visuell).

[編著]

SMIDT, Wolbert G. C., and S. Thubauville (eds.)

2015 *Cultural Research in Northeastern Africa, German Histories and Stories*. Frankfurt/Main: Frobenius-Institut-Goethe-Institut-Mekelle University (Publication of the Frobenius Institute).

FICQUET, É., Wolbert G. C. Smidt (eds.)

2014 *The Life and Times of Lij Iyasu of Ethiopia: New Insights* (Northeast African History, Orality and Heritage 3). Münster: Lit-Verlag.

【2016年度の活動報告】

◎各個研究

・ 研究課題

写真・動画資料の分析と活用を通じたエチオピア近代史の研究

・ 成果

Smidt 氏は、国内の学術大会やシンポジウムに参加し、エチオピア近代史研究の観点から積極的に研究発表を

行い、数多くの研究者と交流を行った。民博においては、受け入れ教官の川瀬がエチオピア北部地域で収集した映像音響資料の分析を、計画通り進めると同時に、川瀬とともにエチオピア近代史や、アーカイブ写真・動画の創造的な活用をテーマにしたセミナーを定期的に開催した。第278回民博研究懇談会においては当時民博で開催中であった特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」に関連する研究報告『The cowrie in Ethiopia and Eritrea: an ethnohistorical study of a traditional protective charm and object of value and beauty』を行った。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年4月15日 「Hidden and Official “Traditional Rituals” in Tigray, Ethiopia」日本ナイルエチオピア学会第26回学術大会、富山大学

2017年4月24日 「Conflict Management and Resolution: Case of Ethio-Eritrean Conflict」国際シンポジウム『Resource Management and Conflict Resolution: Cases from Muslim Societies in North-east Africa』秋田大学

・民博研究懇談会

2017年5月17日 「The cowrie in Ethiopia and Eritrea: an ethnohistorical study of a traditional protective charm and object of value and beauty」第278回民博研究懇談会

